

どうせ転生するなら更識姉妹と仲良くしたい

ibura

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

転生したんでとりあえず神様から貰った能力で無双しようと思う。
そして刀奈とイチヤイチヤしようと思う。

本編

目次

2 2	2 1	2 0	1 9	1 8	刀 奈 の 想 い	1 7	1 6	1 5	1 4	1 3	1 2	1 1	1 0	9	8	7	6	5	4	3	2	1
173	165	159	152	145	135	128	120	113	104	97	89	81	73	65	55	48	40	30	23	14	7	1

平凡な日常																			
	3	3	3	3	3	3	刀奈の想い2	刀奈の想い2	3	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
	6	5	4	3	2	1	後編	前編	0	9	8	7	6	5	4	4	3		
303	295	288	282	274	266	258	251	243	236	227	220	212	204	196	188	180			

本編

1

「なんか知らないけど俺のミスでお前が死んじゃったみたいだわ」

「……はい?」

朝目が覚めたら俺は背景が真っ白な世界に炬燵だけが置いてあるよく分からない空間にいた。

あれ?俺昨日ちやんと自分の部屋で寝たよな?あ、昨日飲み会だったから変なところで寝たのか?

困惑していたらいつの間にか炬燵に入ってた自称神様っていうおっさんに「お前は死んだ」って言われました。

え、いつの間に死んだの?

てか神様こんなてきとーな感じでいいの?

混乱していた俺に説明した神様曰く、俺が寝てたアパートの隣の部屋が火事になってなぜか俺の部屋の火災報知器だけが作動せず、たまたま俺が目覚まさずにそのままお陀仏……だそう。そうだった理由は神様が部下たちと麻雀やってて負けた腹いせだとか……

「おいこらふざけんな!」

「いやー悪い、まさか人が死ぬとは思わなくてさ」

「そういう問題じゃないだろ!!」

自分がムカついたからって関係ない人間を不幸にするなよ。てか神様って麻雀するんだ。「神様が」って考えたらおかしいけど「目の前のおっさんが」って考えたら何ら不思議じゃない。そこらへんにいそうなおっさんだもん。

「悪かったって、だからこうしてここに呼んだんじゃん」

「……ここに来たからって何かあるのかよ」

「麻雀ができる」

おっさんがそう言った瞬間、炬燵が全自動麻雀卓に変わった。

「ふざけるなよ!」

何でこんなよく分からない空間に来てまで麻雀しなくちゃいけない

いんだよ。いや、麻雀は好きだよ？でも普通この展開って、「お前の好きな世界へ転生させてやろう」とかそういう流れになるだろう。てか面子足りてないじゃん。

「心配しなくてももうちよつとしたらあと2人来るから」

「準備万端かよ!?!てか誰が来るんだよ」

「営業課長と経理部長」

「……………」

「……この世界観が全く分からない。

「お疲れ様です」

「神様来たぞー」

「おお来たか!!」

「来ちゃったよ」

「外回り行くなって言ってくるからさっさと始めようぜ」

スーツ姿のおっさん2人が何も無いところから急に現れた。さつき言ってた営業課長と経理部長なんだろう。……この人達会社員なの？

なんかよく分からないけどとりあえず一局だけ打とう。

「ツモ!!」

そう言っておっさん（神様）は牌を倒す。

「九蓮宝燈、役満だ」

「また役満かよ」

「お前いい加減力使ってイカサマするのやめろよ」

「だって負けたくないんだもーん」

「……………」

駄目だこいつ。こんな奴が神様でこの世界って大丈夫なのか?? さつきから神様の力とかなんかでイカサマしまくってあがりまくっ

てるんだが……。営業課長も経理部長ももうお手上げだって顔してるし。てか何でこんななにかサマして昨日負けたんだよ。

「さあさあ次つぐべえらあああ」

次の対局に進もうとしていたおっさんが急に吹っ飛んでいった。何が起きたか分からなかったが、おっさんが吹っ飛んだ逆の方を見るとスーツを着こなしたサラリーマン風の男性が立っていた。いかにも仕事ができる敏腕サラリーマンのようなその人がおっさんを思いつきりぶん殴ったようだ。

「また仕事をほつたらかして麻雀していたんですか!!昨日あれほど言っただしょうが!!」

「い、いやあ、ちよつとぐらいいいかなって」

「あなたはちよつとつて言いながら何時間もやるでしように!!そして何故連れてきた人にまで麻雀させてるんですか。早く転生させてあげてください。次が控えてるんですから」

「いやだつてさ、たまたま麻雀分かるやつだったからさ……」

急に目の前で説教が始まった。しかも神様が説教されている。普通神様って最も偉い存在じゃないの?いや、でもこのおっさんが一番偉いっていうのは無いな。てか次って俺以外にも死なせたのかこのおっさん……

「申し訳ありません、この馬鹿が無能なあまり」

「い、いえ」

「申し遅れました、私そこにいるゴミグズの秘書をしている者です」

「あ、はい……よろしくお願いします」

しばらくおっさんが説教されているのを見ていたら、敏腕サラリーマン改め秘書さんが俺に声をかけてきた。一応の上司であるはずの神様をボロクソに言ってるのは気にしないでおこう。

「どこまで説明を受けていらつしやるのか分からないのですが、あなたにはこれから別の世界へと転生させてもらいます。この説明はお聞きになられたでしょうか?」

「……まだ死んだつてこととその原因だけしか」

「……………」

無言でおっさんを睨む秘書さん。おっさん正座してるよ。

「あまり時間に余裕が無いので手短かに説明させていただきます。これから転生していただく世界と、貴方に付加される能力等は基本的には自由に決めることができます。ですが先ほどお伝えしたように時間に余裕がありませんので、それらの設定を早急に決めていただく必要があります」

ここで俺は困った。転生したい世界の候補がありすぎる。あと秘書さん曰く麻雀してたせいで転生可能な制限時間まであと僅かだそう。ほんとおっさん何やってんだよ。

俺がうんうん唸って悩んでいると秘書さんが紙を数枚とペンを取り出して渡してきた。

「もし候補がありすぎて決めきれないようでしたら、この紙にそれぞれ条件を書いて頂いて、シャッフルして神がランダムに選んだ世界へと転生してもらおうという形はいかがでしょうか？」

「ああじゃあそれで」

ということであんなに急いで転生したい世界とそこでの自分の能力や状況などを書いていった。

「じゃあこれで」

「では今からあなたは転生します。目の前が真っ白になり意識を無くすと思いますが、次に目が覚めたときは転生後の世界となっています」

「いよいよ転生らしい。」

説明してもらってる秘書さんの後ろでは、神様が俺を転生させるために目を瞑って集中している。転生するのがどの世界になるのかはこの後分かるらしい。神様が俺が書いた紙の中から1枚を選んでその内容を俺に見せた瞬間に転生が始まるのだとか。

正直この神様に自分の今後を任せるのは不安しかないが仕方がない。

「じゃあお願いします」

俺の言葉を聞いた神様が紙に手を伸ばす。

「ああ最後に私から一言。転生後の世界ではこの馬鹿神のやる気と調子によって幸不幸が左右されますのでお気をつけください」

「え、なにそれ聞いてな……」

俺が言い終わる前に目の前が真っ白になっていき、そのまま意識は無くなった。

意識が無くなる直前に見えた、神様が手に持っていた紙にはこう書いてあった。

インフィニット・ストラトス

目を開けたら知らない天井が目に入った。どうやら転生は成功したようだ。ゆっくりと起き上がり周りの状況を確認する。

まず、自分の体。転生前20代だった俺の体はおそらく小学校低学年当たりまで縮んでいた。

某名探偵の「目が覚めたら体が縮んでしまっていた!？」をまさか自分が体験するとは思わなかった。まあ世界から変わってるんだけど。

次に今いる場所。見渡した限りどこかの家の和室の布団で寝かされていたようだ。辺りを見渡しながら、さてどうしようかと考えていると、部屋の襖が開き人が入ってきた。

「あら、目が覚めたのね」

「よかった」

部屋に入ってきたのは水色の髪の2人の少女だった。そしてその少女達は見覚えがあった。記憶している2人より幼いが見間違うわけがない。

「正門の前で倒れているのを見つけた時はほんと驚いたわ」

「でも、何ともなさそうで良かった」

目の前にいるのはどう見ても更識姉妹だ。しかもロリバージョン、いや別にロリコンってわけじゃないけど、凄いレアなものを見た気分になる。

俺がこの世界に転生するのに付いてくる条件の1つが”更識姉妹と面識を持つ”ということだったが、まさか目が覚めて初めに出会うのがこの2人だとは思わなかった。あのおっさんも何だかんだでちゃんとした神様だったんだな。

「ところで、貴方名前は？」

「どうして倒れていたの？」

楯無——あ、この時はまだ刀奈か——と簪からそれぞれ質問される。

ここで俺は困った。どう説明すればいいのだろうか。

名前は自分の名前を言えば良いけど、倒れていた理由をどう説明するか……。馬鹿正直に、転生してきましたなんて言えば精神科に連れて行かれるだろう。

さてどう説明しようかと考えていた俺は、とりあえずこう答えることにした。

「名前は上代翔平^{かみしろしょうへい}。倒れてたのは……どうしてなんだろう？」

「え？」

とりあえず記憶喪失でこの場をしのぐことにした。

更識邸で目を覚ました後、俺は記憶喪失という事で病院に連れて行かれて検査を受けた。当然どこにも異常は見られず、医者は精神的なものではないかという結論を出した。

それを小学生のふりをしながら聞いていた俺は、某名探偵の苦労を実感した。小学生のふりしながら生活とかキツすぎる。

そうこうしながら検査が終わり、ひとまず俺は再び更識邸に連れて行かれる事になった。

しかし、俺はある事に気がついた。

更識家なら1人の子供の個人情報などを朝飯前なんじゃないか。……俺の個人情報あるのだろうか？

転生後の条件として、赤ん坊からやり直すのは面倒なのである程度成長している状態がいいとは紙に書いたが、それ以前の設定など全く書かなかった。というか書く時間がなかった。全てはあの自称神様のせいだ。

どうなっているのだろうと考えていたら、更識姉妹の父親で現楯無の人に、君のことが分かったぞと言われた。さすが更識、仕事が早い。

小学生状態の俺にも分かるように説明してくれた楯無さん曰く、俺は兄弟姉妹はいなくて両親は事故で他界し、近い親戚も病気などで既に他界していて遠い親戚とは疎遠状態で俺は施設に預けられたらしい……所謂天涯孤独という状況のようだ。

そうそうこんな状況になるとは思えないけど、あのおっさんの能力でこうなったのであろう。

施設に預けられた数日後に突然姿を消し、その次の日に更識家の正門前で倒れているところを刀奈と簪に見つけられたとのことだった。俺が記憶喪失（という事になっている）という事で何故施設を抜け出したかは分からないことになった。しかし、大人達はどうかやら記憶喪失の原因が分かっているらしく、小声で話している会話に聞き耳をたててみると、どうやら人体実験やらなんやらを裏で行っていた施設だったらしく、俺の個人情報を調べる過程でそのことが更識家にバ

レ、今はもう既に施設もそのデータも職員もこの世には存在していないようだ。さすが更識、仕事が早くて容赦無い。

そういった状況の中で、俺の事をどうするかという話し合いが行われた。当初は別の施設に預けるといふ意見が出ていたが、それに待ったをかけたのは刀奈と簪の姉妹にその母親の京子きょうこさんだった。

施設に預けるなんて可哀想、うちで引き取ろう!!

という話を楯無さんに話した。楯無さんは初めは「だが…」とか「しかしだな…」だとか渋っていたが、女性陣の有無も言わさぬ雰囲気には最後は根負けした。さすが現楯無、よくあんなに粘れたと思う。楯無さんに詰め寄る3人の威圧感は凄まじかった。俺が精神年齢も小学生なら泣いていただろう。

こうして俺は更識家に居候することとなった。

「翔平くーん、朝よー」

「ん、…おはようございます、京子さん」

「はい、おはよう。朝ご飯出来てるから顔洗ってきなさい」

「分かりました」

更識邸で暮らし始めた俺の朝は、京子さんに起こされることよって始まる。顔を洗い、目を覚まして居間に向かう。ちなみに更識邸は本当に広い。初日に家の中を案内してもらったが、正直暮らし始めて一月たった今でも、未だに気を抜けば迷いそうである。刀奈や簪からは慣れるしか無いと言われたが慣れでどうにかなるものだろうか。自分の生活に必要な部屋だけは覚えられたが、それ以外は微妙である。

居間に到着すると、既に楯無さんが着席していた。

「おはようございます、楯無さん、虚さん」

「おはよう、翔平君」

「おはようございます、翔平君」

楯無さん、更識家に仕えている布仏家の人間で刀奈の従者の布仏虚に朝の挨拶をする。楯無さんは新聞を読みながら、虚さんは朝食の準備を手伝いながらそれぞれ挨拶を返してくれた。そのタイミングで、刀奈と簪も居間へと入ってきた。

「おはよう刀奈、簪」

「おはよう翔平」

「おはよう、翔平」

簪の従者である本音はまだ来ていない。俺がこの家に来てからは、本音が最も起きるのが遅いのは毎日のことである。従者がそれでないのだろうか。

ちなみに更識の調べによると俺は刀奈と同じ小学3年生となるらしく先週から通っている小学校でも同じクラスとなっている。

「「「「いつてきます」」」」

「はい、いつてらっしゃい」

朝食を食べ終え、学校に行く準備を整えて刀奈、簪、虚、本音と共に更識邸を出て小学校へと向かう。本音は毎日起きてくるのは遅いが何だかんだで準備は間に合っている。

「「この問題は……じゃあ上代君、お願いします」

「はい」

先生に当てられたので前に出て問題を答える。間違えたら恥ずかしいレベルの問題を…。

「はい、正解です」

見た目小学生で中身成人の俺にとっては全く勉強する必要も無い内容だった。見た目だけ真面目に授業を受けつつ、先生の授業を勝手に採点しながら退屈に授業を受けていた。

「次、上代君、更識さん」

「はい」

退屈な授業で溜まったストレスを発散できるのは、体育の授業だった。転生の特典能力で身体能力を上げてもらってる俺は、体育の授業

でも3位以下を大きく離してクラス1位の成績を出していた。

「今日は負けないんだから」

「今日も勝たせてもらおうよ」

俺は隣にいるクラス2位の刀奈といつも無駄にいい勝負をしていた。

今日の勝負は50m走、計測は出席番号順なので俺達と一緒に走ることは無かったはずが、毎回の授業で名勝負を繰り広げる俺達を、授業のトリトリとして、計測されることになった。

「いちについて」

さすがに小学生でクラウチングスタートはしないので普通に構える。

「よーい」

横目で隣の刀奈を見ると真剣な表情で目の前を見ていた。

ピッ!!

笛の合図で俺達はスタートした。

お互いにスタートダッシュを成功させ、ぐんぐんスピードに乗って行く。最後は振り切り、俺の勝利となった。ちなみに俺のタイムは8秒フラットだった。

「また負けたー、悔しい!!」

俺に負けて悔しがる刀奈だが、神様からチート能力もらってる俺といい勝負している時点で、化け物じみた身体能力だと思う。

そう思いながら刀奈と勝負後の握手を交わし、辺りから惜しみない拍手が送られた。

「翔平って何でもできるよね」

「そうか?」

授業が終わり学校から帰る最中に刀奈から言われた言葉。実は20歳超えててチート能力貰ってます!!：などと言えるわけもなくうやむやに言葉を返す。

「勉強も運動も出来るし、1週間でもうクラスの人気者だし」

「お姉ちゃんが負けたって聞いた時は、驚いた」

最初の体育で刀奈との一騎打ちを制した事を簪に伝えた時、本当に驚かれた。でもな、俺も驚いたんだよ。ぶっちぎりの1位と思つてたら僅差だからね。俺いなかったら刀奈がぶっちぎりのクラス1位じゃん、しかも女子で…。クラスの男子は女子に負けてそれで良いのか？でもあいつら…俺と刀奈の勝負の時はほとんどが刀奈の応援なんだよなあ……。

「勉強で言えば2人の方が凄いだろ？もう中学の範囲入ってるじゃん」

刀奈も簪も更識家の人間という事で、小学校低学年で既に6年生までの内容を習得している。学校とは別で、自宅で京子さんに教えて貰っているらしい。ちなみに俺も京子さんに教えて貰っている。

「それはそうだけど……」

「ウチに来てまだ一月なのに、もう小学校の内容終わった翔平に言われても……」

刀奈と簪は俺を見て複雑な顔をする。ごめんな2人とも、俺これでも大学生だから。まあ復習しないと忘れてるところは多々あるだろうけど……どうせなら天才的な頭脳とかも貰えば良かったな。

「お父さんに武術とかも教えて貰ってるでしょ？」

「翔平は筋がいいってお父さん褒めてたよ」

更識の人間という事で刀奈と簪も楯無さんから剣術やら槍術やら武術を教わっている。興味本位でそれを見学していた俺だったが、体育の授業での出来事を刀奈が楯無さんに話したところ、俺も試しにやってみないかと聞かれたので、チート能力がどんなものかを試したくて楯無さんの提案を受け入れた。そうしてやってみた楯無さんとの稽古では、俺は驚きの連続だった。自分の身体に対して……。

自分の身体とは思えないほど動くんだよ。転生前はごく平凡な大学生だった俺からしたら、このデタラメな身体能力はこれはこれで慣れが必要だった。楯無さんも俺の動きは予想外だったのだろう、驚いた表情をしていた。しかし、次の瞬間にはとても良い笑顔で俺を見ていた。あれは……面白い玩具を見つけた様な顔だった。

結局それからは刀奈と簪に混じって、俺も稽古をつけてもらうこと

となった。まあ将来ISに乗るんだから、教えてもらえることは教えてもらっておこう。ちなみに転生前、ちゃんと俺がISに乗れるという設定を書いておいた。この世界に来てISに乗れないのは、あまりにもつまらない。自殺してもう一度選び直したいレベルだ。

「「ただいまー」」

色々と話していると、更識邸に帰って来た。……ここ正門から玄関までの距離も意外とあるんだよなあ。ほんと、立派な建物がだよ。ちなみに更識家が特殊な家系であることは、居候することが決まった時に教えてもらった。といっても小学生に対暗部用暗部なんて説明しなくてもちんぷんかんぷんだろうから、本当に簡単に説明された。

「今日は翔平君は小学校の範囲の認定テストね」

帰ってきてから夕食までの間、勉強か修行を日替りで行う。今日は勉強の日であった。そして、俺は昨日小学校の範囲を全て学び終えたため、今日は中学の範囲に入るための認定試験を受けることになった。この試験を作ったのも、普段家で勉強を教えてくれるのも全て京子さん1人である。この人そこらへんの教師よりも教えるのが上手い。性格が原作の刀奈そっくりだから、作るテストも絶妙な引っかけ問題とか混ぜてきて気が抜けない。さすが親子だ。

無事にテストも合格し、一息ついたところで夕食。今日は楯無さんは仕事でいないため、刀奈と簪、虚、本音、京子さんに俺という男1人の食卓となったが、この状況にも慣れてきた。初めの頃はガールズトークが繰り広げられる中で本当に居づらかった……。

夕食を食べ終えてからの時間は今日は自由時間。夕方が稽古の日だった場合は夕食後に勉強となる。

とりあえず学校の宿題を終わらせてから、特にやる事も無いので貸してもらっているノートパソコンでテキトーにネットサーフィンでこの世界の情報を集める。テキトーにポチポチしてたら刀奈と簪が部屋にやってきて、一緒にテレビを見ようという事でそちらに合流。そうこうしているといい時間になるので、風呂に入って歯を磨いて寝る。

大学生で21時就寝はキツイと思っていたけど、身体は子供だから普通に寝れました。

こんな生活を送っていたある日、更識家に重大事件が発生した。

京子さんが倒れた。

「あら、いらっしやい」

「お母さんお見舞いに来たよ」

「こんにちは、京子さん」

ある日の放課後、俺は刀奈と簪と共に入院している京子さんのお見舞いに来ていた。

京子さんが倒れてから約1年が経ち、俺と刀奈は小学6年生となった。京子さんが入院している病院へは、週に1回程度でお見舞いに来ている。初めはもう少し頻度が多かったのだが、「あなた達こんなに頻繁にここに来て、他にやることはないの？」と京子さんに言われてからは、週に1回にしている。京子さんは怒ると本当に怖い。中身成人の俺でも泣きそうになるほどに怖い。なので京子さんは怒らせないようにしている。

家での生活では、勉強面は中学の範囲は半分ほど習い終わっている。予定では俺と刀奈が15歳、世間一般で言う中学卒業までに高校の範囲を習い終わるらしい。ちなみに更識邸に来ておおよそ2ヶ月で刀奈、簪に追いついた。そのまま先に進んでも良かったのだが、1人で勉強するのもつまらないので2人のペースに合わせることにした。といってもこの2人も異常なペースで勉強を進めている。やっぱり更識家の人間は普通じゃない。

武術の面に関しては、自主練が多くなっている。ISが世界に広まったことで更識家の仕事も多くなり、さらには最近行われた第二回モンド・グロツソで、織斑一夏が誘拐されたことへの対応などもあり、楯無さんも多忙となっている。そのため、楯無さんが家にいないことも少なくなく、いたとしても仕事で忙しい日が続いているので、必然的に自主練が多くなったが、たまに更識家の実働部隊の人が教えに来てくれている。この数年で俺も成長した、というか自分の身体について理解が深まった。楯無さんとの組手もだいぶ戦えるようになってきた。ちなみに俺は槍よりも剣のほうが才能があるらしい。隠れてスターバースト部屋の練習を試みた。……調子に乗り過ぎ

て足をねん挫しました。

刀奈は小学校を卒業すれば、ISの訓練も始めるそう。原作では知らなかったが、更識家はISを開発しているある企業と提携していた。そこでISの訓練を行うとのことである。今度試しに付いていってみよう。そしてどさくさに紛れてISに触れてみよう。それで動かなかつたら自称神様は本当にただの自称であったということになる。最近はおのっさんのことを見直しているのだ、期待は裏切らないでほしい。

そんなことを考えながら、この1週間の学校や家での出来事を京子さんに話している刀奈と簪を見ていた。すると、京子さんが何かを思い出したようで、俺たちに言ってきた。

「あ、そう。冷蔵庫の飲み物が無くなりそうだったんだわ。悪いけど、刀奈と簪で下の売店で買ってきてくれる？」

「うん、いいよ」

「けど、翔平は？」

京子さんのお願いを刀奈は承諾したが、簪は俺の名前が入っていないことに疑問を感じて聞き返した。確かに俺も疑問に感じた。

「翔平君はここに残って、少しお話ししましょうか」

笑顔でそんなことを言ってくる京子さん。

……俺なんか悪いことしたっけ？京子さんの雰囲気はどこか怒っているように感じられて俺は冷や汗を流す。

「じ、じゃあ行ってくるね」

「あ、これお金。お釣りは後で返してね」

「はーい」

俺と同じく京子さんの雰囲気を感じ取った刀奈と簪は、お金を預かりそそくさと退散していった。

そうして病室には俺と京子さんの2人が残されることになった。

俺がここ1週間で京子さんに怒られるようなことをしでかしてないか必死に思い返していると、京子さんは急にクスクスと笑い始めた。

「そんな身構えなくてもいいわよ、別に翔平君は何もしてないし私も怒ってないから」

「へ？」

京子さんに言われて気が抜けたのか、間抜けな声を出してしまっ
た。

え？じゃあなんであんな怒ってるような雰囲気出してたの？

「本当に、ただ2人でお話しただけよ。あの2人もああした
ら素直に出て行ったでしょ？」

「ああ、なるほど」

理由は分かったが、今度からは別の方法にしてほしい。心臓に悪
い。

しかし、そうまでして俺と2人で話したいとは、どういった内容な
んだろうか？

「それで…、どういった話なんですか？」

「簡単なことよ………翔平君、あなた本当は小学生じゃないでしょ？」

「………へ？」

「だからあなた、本当は小学生じゃなくて大人なんじゃない？」

いやいやいやいやいやいやいやいやいやいや

え、急に何を言っているのこの人。何で俺が中身20代って見抜い
てんの？いやね、そのうち誰かにバレるかもっていうのは覚悟してた
けど、もうちよつと先の話だと思ってたんだけど…。しかも今すごく
普通に言っただけど、普通に考えたらあり得ない話じゃん。え？え？え
？

そんな感じで冷や汗流しながら内心パニックっている俺を京子さん
はニコニコしながら見ていた。

「凄い動揺ね。その分だと私の予想は当たっているのかしら？」

「え、いや、急に何言ってるんですか京子さん。俺はただの小学6年生ですよ」

「そんな反応しちゃったらバレバレよ。それに……」

「……それに？」

妙に間を開ける京子さん。その間が俺にとってはとても嫌なもので、嫌な予感がした。

「私、もうすぐ死んじゃうから」

「っ!？」

京子さんの口から放たれた言葉、それは俺はある程度予測していたものだった。京子さんの病状が悪化している事は感じていたし、俺たちの前では無理して元気な姿を見せようとしている事も俺は気づいていた。病気が癌だつてことを聞いたが、京子さんは手術を受けてないので、手の施しようがない、所謂末期の状態で見つかったのだろうという事も分かっていた。

「やっぱり、そうなんですか……」

「あら、気づいていたの？」

「何となくですけどね」

俺が気づいている事がわかった京子さんは、無理して元気な姿を見せることをやめた。途端に表情は苦しそうなものとなり、さっきまで刀奈や簪と楽しそうに会話していたのが嘘のように苦しいものとなった。

「ほんとはね、今こうやって話すこともいっぱいいいの」

そう言いながら苦笑する京子さん。その姿を見て、先ほどの言葉が本当なのだと理解できてしまった。

「だから、あなたが本当は何者なのか、教えてくれないかしら？」

「俺は……」

「大丈夫よ、別に他の誰かに言ったりしないから」

京子さんにそう言われ、俺は俺自身について起きたことを話した。

「……そんなこと、実際にあり得るのね。死ぬ前に面白い話が聞けたわ」

「信じてくれるんですか？こんな突拍子もない話」

俺は、自分が転生したこと、すでに成人していることなど、自分自身について全てを京子さんに話した。

話し終えた後、京子さんは驚くほどすんなりと俺の話を信じてくれた。

「あり得ない話だけど、でも、今の話を聞いていろいろと納得がいったわ」

まあ確かに、勉強面からして俺のハイスペックを一番近くで感じていたのはある意味京子さんだったのかもしれない。それにしても、バレルは思わなかったが。

「今、まさかバレルとは思わなかったと思ってるでしょ」

「あ、……はい」

見事にいい当てられてしまった。京子さんは時折こうして他人の心を読んでくる。俺もこれまでに何度も読まれた経験がある。最近では刀奈も、それができるようになってきている。家で考え事もできなくなるから勘弁してほしい。

「私、人を見る目はあると思ってるのよ。これでも更識家当主の妻なんだから」

「……そうでしたね」

「あの人は、有能な人が自然と付いてきてくれるからね。私もその一人よ」

京子さんの言うあの人は、楯無さんのことであろう。

「あなたもその一人よ」

「買い被りすぎですよ」

「神様から凄い身体能力もらっておいで？」

「……………」

それを言われたら、何も言い返せない。たしかに自分でもずるいと思っっている。

「でも、そんな能力がなくても、私はあなたは信頼できると思うわ」

「え？」

「これは私の勘よ」

そう言った京子さんは、なぜか説得力があると感じた。

「それにしても、気をつけなさいよ。私があなただのこと気づいたんだから、刀奈もいつかきつとあなたの正体を見破るわよ」

「…………考えたくないですね」

「あの子は私に似たからね。人を見る目は私譲りよ」

確かに、刀奈は京子さんに似ている。性格もそうだし、先ほど京子さんが言ったように人を見る目もある。小学校でクラスの学級委員をやっていたが、そのカリスマ性を活かしてクラス委員をほぼ独断で決めていた。しかもそれが、それぞれの特性に合った選出だったため、誰も文句を言わなかった。

簪はどちらかというと楯無さんに似ていると思う。自然と有能な人が周りに集まってくる、そんな気がする。

「あとね、1つ伝えておかなければいけないことがあるの」

「何ですか？」

まだ何かぶち込んでくるのであろうか、この人は。もうすでに驚き過ぎて疲れてきているのだけど…………。

「良くないことは立て続けに起きるものでね…。実は、現更識家当主…………私の主人も病気なの」

「……………」

なんだか驚き過ぎて、一周周って冷静になってきた気がする。え、今京子さんは楯無さんが病気って言ったよね。それって一大事じゃ

ん。

「幸い、私みたいに命に関わるものではないから、治療をすれば完治するみたい。でも治療するにしても、今の楯無としての仕事をこなすことはできない。今はなんとか騙し騙しやってるみたいだけど、もう少しすればドクターストップでしょうね」

「……ということは」

「ええ、……刀奈が楯無の名を継がなければならぬわ」

いくら何でも早すぎると思う。刀奈はまだ小学生だ。いくらハイスペックと言えど、精神はまだ成長段階だから、楯無襲名など、荷が重すぎると思う。

「それは……大丈夫なんですか？」

「二応、刀奈が中学生になるまでは待つわ。そして、翔平君、あなたに一つお願いがあるの」

「何ですか？」

「あの子を、刀奈を支えてあげて」

日本を陰から支える更識家。その更識家をこれまで支えてきた人からの、とても責任のあるお願いだった。しかし――

「分かりました」

俺に断るという選択肢はなかった。

それから1週間後、家族に看取られながら京子さんは息を引き取った。

さらに1ヶ月後、楯無さんの療養と刀奈の楯無襲名が正式に公表された。

そして、俺達が中学生になった日、刀奈の17代目楯無襲名式が更識邸の大広間で執り行われた。

今は式が終わり、酒を呑みながら盛り上がっているお偉いさんのおっさん連中に、虚を引き連れた刀奈が挨拶にまわっている。

その姿を見ながら俺も酒呑みたいなあと思っていたら後ろから近づいてくる人がいた。

「お、思ったより様になってるじゃねえか」

「仁さん、帰ってたんですね」

「さつき帰ってきた」

五十嵐仁——更識家実働部隊の部隊長を務めている。といっても実働部隊は個人で動くことが多いので、形式上での扱いである。16代目、前楯無の槍一郎せういちろうさんの信頼も高く、更識家の中でも危険な任務や難しい問題は基本的に仁さんに任されている。俺にとつては武術面の現在の師匠でもある。この人、面倒見がいいから本当に頼りになる。

「京子さんの葬式は、任務で帰ってこれなかったから……。せめてその娘の晴れ舞台は見ておこうと思つてな」

「……そうですか」

悲しそうに、寂しそうにそう呟いた仁さん。京子さんの死は多くの人の心に影響を与え、仁さんもその一人だった。更識家の人間だけあった、みんなすぐに切り替えていたが、やはり京子さんは更識家の母だったのだと実感した。

「お前も結局は中学に行かないで、こつちを手伝ってくれるんだろ?」
「まあ勉強面は家でどうとでもなりますしね。少しでも力になれるんなら俺も手伝いますよ」

刀奈は楯無を襲名したということで、中学に通わないことに決まった。俺も1人で通うのはつまらないので、更識の仕事を手伝うことにした。何よりも、京子さんから託された願いを全うするためである。「支えてやれよ、しっかりと」

「分かってますよ。京子さんと約束しましたから」

ある意味、俺のほうが荷が重いかもしれないと感じながらも、しつ

かりやっつていこうと決意を固めた。

「俺がいない間に何があった……」

全く言葉を交わさないうで夕食を食べ続ける刀奈と簪。というか、簪が一方的に話しかけるなオーラを出している。それを見て俺は何があったのかと首をかしげる。まあ大体の予想はついてるけど。虚と本音も2人を見て困惑しているとか苦笑いしてる。

刀奈の楯無襲名式から1週間後、俺は昨日から仁さんの手伝いで家を離れていた。そして、さつき帰ってきたらこの状況だったのだ。もしかしなくても、原作ではこの状況がこのまま3年以上続いていくのだろうか……。

「で、何があったか分かる？」

夕食後、俺は虚と本音を部屋に呼んで事情を聴くことにした。

「私達もその場にいたわけではないので詳しくは分からないのですが」

「お嬢様がかんちゃんに余計なことを言っちゃったみたい」

俺の予想通り、刀奈が簪に余計なことを言ったようだった。簪が完璧超人の刀奈にコンプレックスを抱いているのは知っていたし、一緒に暮らしていてそんな感じはしていた。

しかし、この世界は原作と違い俺がいる。完璧超人をチート能力で超えたチーター野郎の俺がいるのだ。その影響かは分からないが、簪は思っていたよりも刀奈と仲良くやっていた。俺に対する愚痴をよく話しているようだ。俺は俺で元が普通の人間だから普段から暮らしててボロが出る。これまでも恥ずかしいところを何度か2人に見られたことがある。そして2人はこれ見よがしにそれをネタにして話す。……2人が仲良くするのは嬉しいけど、俺への精神攻撃はやめてもらいたい。

俺の努力？もあって刀奈と簪に俺を含めた3人の関係性は良好な状態を保っていたが、それが今少し崩れてしまっている状態だ。まあ刀奈も楯無になったばかりで精神的にキツイんだろう。それは分

かっている。

ひとまず、とつとと仲直りさせよう。こんな状態を放置でもすれば、京子さんに呪われてしまう。そういえばさつき、食べた夕食の中のシシトウに当たりがあつてとても辛かった。……たまたまだよね？

善は急げと、早速刀奈と話すために彼女の部屋に向かう。

「刀奈、今ちよつといいか？」

「……なに？」

部屋の前で声をかけると、中から返答があつて刀奈が部屋から出てきてくれた。

ちなみに、刀奈が楯無になつてからも俺は”刀奈”と呼び続けている。もちろん家の外では”楯無”と呼んでいるが、家の中では変えていない。

「ちよつと話があるんだけど、とりあえず部屋入っていい？」

「ええ……」

ひとまず、部屋には入れてもらえた。しかし、返答を聞いても分かるほど落ち込んでいる。まあ大好きな妹とあんな状態では仕方がないだろう。

「単刀直入に聞くぞ？ 簪に何言つた？」

「っ!」

俺の質問に、刀奈に分かりやすく動揺した。

この反応から察するに、自分がやらかしてしまったのは自覚しているようだ。

「俺に言えないことか？」

しばらく俯いていた刀奈だったが、俺の言葉に対して首をよこにふり、ぽつりぽつりと話し始めた。しばらくの間、その話を俺は黙って聞いていたが、要約すると「簪ちゃんは何もしなくてもいい。お姉ちゃんにすべて任せてくれたらいい」といった内容を簪に言ったようだった。

それを聞いて俺がまず思ったのは、「まあ簪のあの態度は仕方ない

よね」というものだった。原作よりはマシとはいえ、簪が刀奈にコンプレックスを感じているのは確かだ。そんな中で自分が頼ってもらえないのなら、怒って当たり前だ、俺だってキレル。

刀奈は話し終えて俯いているのは変わらないが、時折チラチラと俺の表情を伺っている。そんな中で俺は口を開いた。

「もしさ、俺が仁さんの手伝いで何か危険な仕事を任されたとしてさ、俺が刀奈に何もしなくていいって言ったたら、どう思う?」

「……………怒るわ」

「だろ?それと一緒だよ。お前が妹が大好きなように、簪も姉が大好きなんだ。そんな姉に必要とされなかったのは、辛いと思うぞ?」

俺の最後の一言に、刀奈は肩を震わせる。

「……………私」

「それに、京子さんの言葉をもう忘れたのか?」

「……………」

『人は1人では生きていけない。貴方達1人の力なんてちつぽけなものよ。だからこそ周りの人からの助けが必要になる。自分1人じゃどうしようもない時は必ずある。その時は必ず周りに助けてもらう、そして助けを必要とする仲間がいれば必ず助けなさい。それが家族なら尚更ね。これは私からの最後のお願いよ』

京子さんが亡くなる前日に、俺と刀奈、簪、虚、本音の5人に向けて言った言葉だった。

そして京子さんは俺にだけ追加で言った言葉があった。

『きつと、刀奈にはこの言葉が必要になると思うわ。楯無を襲名した後、翔平君からもう一度さっきの言葉を言ってあげてちょうだい』

おそらく、京子さんにはこうなることが予測できていたのだろう。つくづく、すごい人だと思う。

俺の言葉を聞いた刀奈は顔を上げ、驚いたような、目が覚めたような、そんな表情で俺を見て、目には涙を溜めている。

「私……………私……………」

「分かってるよ、刀奈もキツかったんだろ」

そう言つて俺は刀奈の頭をそつと撫でた。

「っ!?!……ちよつと、胸借りるわね」

「いよよ」

刀奈はそのまま額を俺の胸に当てて、静かに泣き始めた。

刀奈は刀奈で楯無を襲名してから1週間の間、慣れないことも多くある中で必死にやってきていた。俺としても何とか支えようとはしていたが、精神的な疲れは溜まっていたのだろう。

簪とどういった会話の流れで言ってしまったのかは分からないが、きつといつもの刀奈ならこんな状況にはならなかっただろう。楯無としての責任と、簪が大好きな気持ちの結果的に空回りしてしまった。まあそれは簪も分かっているだろう。今ちゃんと話し合えば、長期間姉妹関係がギクシヤクすることは免れるはずだ。

「ありがとう、もう大丈夫よ」

時間にして10分ほど経った時、刀奈はゆっくりと顔を上げた。目は赤くなって涙や鼻水で凄いいことになってるが、どこかスッキリしたような表情の刀奈がそこにはいた。これなら大丈夫だろう。

「じゃあとつとと簪のところに行って仲直りしてこい。あ、でもその前にまず顔洗えよ」

「わ、分かってるわよ」

冷静になつて恥ずかしくなったのか、顔を赤くしながら洗面所に向かう刀奈。俺も服がビショビショなので、風呂でも入ろうかと思つて部屋から出ると、廊下で刀奈が待っていた。

「翔平」

「どうした?」

「ありがとう」

綺麗な笑顔でそんな事を言つて、刀奈は洗面所に向かった。

……不意打ちでそれは卑怯だろう。

赤くなつた顔を誰かに見られないようにしながら、俺も風呂場に向

かった。道中に遭遇した虚と本音に、普通に見られてしまったが。

更識姉妹喧嘩事件は、その後の話し合いでしつかりと仲直りできたように、姉妹関係はむしろ事件前より良くなった。

ちなみに、簪はこの頃から俺のことを「お兄ちゃん」と呼ぶようになった。まあ確かに、俺にとっても簪は妹みたいな存在だったから別に気にしないが……。突然話があると呼び出されて、そんな話をされたらさすがに驚いた。その場にいた刀奈は、顔を真っ赤にしなう言う簪とポカンとした表情の俺を見て爆笑していた。その直後の簪の「あ、お義兄さんって意味じゃないから」という発言で俺も刀奈も顔を真っ赤にすることになったが。

俺は刀奈が好きだ。そりやもうこの世界に転生したいと思った一番の理由なぐらい。更識家支えるとか日本支えるとか、そんなのはついでに過ぎない。俺はただ、刀奈を支えていきたい。

刀奈が俺の気持ちに気づいてるかは分からないが、簪はうすうす気づいているようだ。だからお兄ちゃん事件の時も、あんなことを言つて盛大に俺たちを慌てさせてくれた。……刀奈も慌ててたから脈ありと考えていいのだろうか？

仁さんからはとつとと告つちまえとよく言われる。

結局、元がヘタレな俺は何もできずに関係は進展なしのまま、刀奈の楯無襲名や喧嘩事件から約2年が経過した。俺と刀奈が世間一般で中学3年になる年、新たな事件が発生した。

「……ねえ、翔平」

「……どうした、刀奈」

「……あなた、女子じゃないわよね？」

「……俺は男だよ」

「……じゃあ何で、IS起動させてるの？」

「……俺は男だよ」

俺がISを起動させました。

まあある意味俺の計画通りなだけどさ。

楯無となつてロシア国籍を取得した刀奈は、自身の手で製作した専用機霧纏ミス・テリアス・レイディの淑女を伴つてロシアの代表候補生にまで上り詰めていた。ちなみに原作と違って専用機の開発は俺と簪も協力して行われた。

前世でプログラミングとか大学で習つてたから何とか力になることができたし、使う機会もあるだろうというところで、刀奈と簪と一緒に俺もISに関する勉強はしていた。めちやくちや難しいけど……。

そんな刀奈が休日、ISの訓練をするということで、俺もたまたまオフだったこともあり、付いて行つた。もちろん簪も一緒に。

訓練機で模擬戦をやつたりしている刀奈と簪を見ていたが、暇になつてきたので、施設内を散策することに。

何度か来たこともあつて地理は把握しているし、施設内の職員の人現楯無は更識の関係者なので当然俺のことも知つている。刀奈前楯無に槍一郎実働部隊のトップ、仁さんが揃つて期待しているということ、更識に関わっている人の中では俺は意外と有名だったりする。

そんな俺が、たまたま整備のために置かれていた打鉄に触れた。この施設に来るたびに、施設内を徘徊して、ISに触れるチャンスを虎視眈々と狙っていたが、この日ようやくそのチャンスが訪れた。

置いてある打鉄を指差して、研究員の人に「触つてみていいですか？」と問いかけてみると、何も起こるわけがないと思つたその研究員は苦笑しながら「何も起きないと思うけどね」と言いながら了承してくれた。そうして、満を辞して俺はISに触れた。内心凄いだキドキしながら。

そして、ISは見事に起動した。その時の研究員の顔を、俺は忘れないだろう。凄い顔だった……。

その後、施設内にいた関係者が集められ、事の次第が伝えられた。刀奈も簪も、何故かいた仁さんも、技術者も、研究員も、整備士も、職員も、みんな揃つてポカンとしていた。

なんかごめんね。

こうして、さつきの刀奈とのやり取りに戻る。

「何で翔平（お兄ちゃん）がIS起動させてるの?!?!」

頭の中がパニックになったらしい刀奈と簪は、そう叫んだ。

俺がISを動かしたことは、その場にいた人達と更識家の一部の人間以外には極秘扱いになった。幸い、施設の人も更識家関連の人なので、そこは大丈夫だった。これは刀奈と槍一郎さん、俺の3人で話し合った結果である。

”せっかく俺がISを動かしたのだから、更識家として有効活用しよう。あ、でも世間に公表したら色々と面倒だよな？ならもう黙つとこう。どうせ裏社会で動くんだし、フルスキンのIS乗るか、まあ最悪女装したら大丈夫でしょ。日本政府？口止めしとけ”

ということになった。

……女装は嫌だから是非ともフルスキンにしてもらいたい。

といつても、知識はあつても実技に関しては全くの素人の俺がいきなり任務につくはずもなく、当分は訓練機でひたすら操縦や武装の扱いに慣れることになった。

何でも刀奈と簪を教えていた人が、マンツーマンで教えてくれるらしい。そのことを知った2人が俺の肩に手を置いて、「無事に…生きて帰ってきてね」と言ってきた。

え、何それ凄い怖いんだけど。

この日から約1年間は俺にとって地獄の日々だった。

俺のIS起動時間から1年後、俺と刀奈が世間一般で高校生となるこの年、俺は当然高校は通わないが、刀奈はIS学園に入学した。虚も去年IS学園に入学している。

したがって、家に残ってるのは俺と簪と本音だけだった。簪と本音もIS学園に入るらしいので、来年には俺1人になってしまう。……別に寂しくないし。

でもやっぱり、刀奈がいないのは寂しかった。

「もう、だからお姉ちゃんが学園に行く前に告白しちやえつて言った

のに」

「いや、分かってたけどさー」

俺が刀奈が好きということとは完全に簪にバレていた。

刀奈が学園に向かう1週間前に、簪から突然「お兄ちゃん、このままでいいの？お姉ちゃんのこと好きなんでしょ？」と言われた時は驚いた。バレてるかもとはうすうす感じていたが、面と向かって言われるとは思わなかった。

ちなみに今この場には俺と簪の2人がいる。場所は居間で、夕食食べた後の時間だ。本音は皿洗い当番なので今はいない。

京子さんが亡くなってからは、自分達で当番を決めて食事を用意していた。今日は俺が作る担当で、本音が片付け担当である。

俺は前世で一人暮らししていたので、ある程度料理ができる。刀奈達も、料理に関しては京子さんという鬼教官がいたので、かなりのレベルとなっている。

俺と簪で話していると、洗い物を終えた本音も戻ってきた。

「お兄ちゃんは、ほんとお姉ちゃんとのそーいう話になったらダメになる」

はあつと、このヘタレは…とでも言いたげに溜息を吐く簪。

「まあ、しょうちゃんはヘタレだもんねー」

本音はどストレートに言ってくる。

この2人と話していると、簪が心を抉り、本音が確実にトドメを刺してくる。昔から一緒なだけあって、会話での連携も完璧だ。無駄に殺傷能力が高い。

俺は致命傷を受けて何も言い返せなかった。

「お、ここにいたか翔平」

「あ、仁さん」

俺は助けを求めて、仁さんとの会話に逃げる。

「明後日の俺の任務、ちよつと手伝ってくれ」

「明後日ってそんなハードでしたっけ？」

「規模が規模だから、IS使っちゃまおうって話になった。楯無と姉上

「からも了承は得た」

「うわあ、容赦ねえ」

「それが仕事だからな。あ、そういうええさつき姉上が探してたぞ」

「ええ……」

逃げた先にも地雷があった。

仁さんの言う姉上とは、五十嵐葵^{あおい}——更識家IS特別顧問であり、刀奈と簪のISの師匠、そして俺にとってトラウマとなっている地獄の1年間の元凶である。仁さんの呼び方や苗字で分かるように、仁さんの実の姉でもある。この人、もともとは凄腕のIS操縦者だったらしく、あの織斑千冬と互角かそれ以上の実力を持っていたと噂されている。つまり、実質的なブリュンヒルデということになる。しかし、第一回モンド・グロツソが行われる前に、訓練中の事故で大怪我を負った影響で選手として引退した。

教官としての厳しさとか、普段の口調とか性格とかいろいろひっくるめて、原作で知っている織斑千冬にそっくりである。出席簿持っていないから普通に拳骨してくるが、これがめっちゃくちや痛い。

そんな葵さんからの呼び出しは、俺にとって恐ろしいものだった。この前の任務の戦闘ログを昨日提出したから、多分それに関するダメだだろう。……正直行きたくない。しかし、無視したら後で殺されるのは分かっているのだから、行くしかない。

「仕方ないか……」

「頑張って」

「ふあいとー」

ため息をつきながら立ち上がると、さつきまで俺に精神攻撃を仕掛けてきていた簪と本音がサムズアップしながら声をかけてくれる。…俺は今から戦場にでも行くのだろうか？…行くんだらうな。

居間を出た俺は葵さんの部屋に向かう。その道中に、明後日の任務に関する軽い打ち合わせをしようと思ったが、仁さんは煙草片手に外に行ってしまった。仁さんはかなりのヘビースモーカーである。任務の前後や、なんなら任務中でも隙を見ては吸っている。前に一度、家の中で吸っているのを京子さんに見つかって、かなり怒られてい

た。

正座させられてさらに足の上に重石を置かれるという半ば拷問のようなお仕置きを受けていた仁さんを思い出していると、葵さんの部屋の前に到着した。

「葵さん、翔平です」

「入れ」

「失礼します」

中から許可をもらってから入室する。仁さんが一度、何も言わずに入ったら葵さんがちようど着替え途中だったということがあつたらしい。仁さんは鼻の骨を折ったのと前歯が折れただけで済んだ。

「明後日の件は聞いたか？」

「はい」

「そういうことだから、後で愚弟と打ち合わせをしておけよ。あと、昨日提出したログを見させてもらった」

葵さんの言葉に、俺は体を強張らせる。

「そう、身構えるな。今回は特にミスもなかったようだし、まあ合格点だ」

「……へ？」

俺は体から力が抜けていくような気がした。……この力が抜けた時に出る間抜けな“へ”は、恥ずかしいからやめたいと思っているが、癖なので中々消えてくれない。

「なんだ？ そんなにダメ出ししてもらいたかったか？」

「い、いえ!!……そういうわけじゃ」

慌てて答える俺を見てフフツと笑う葵さん。何か今日はいつもより機嫌がいい。

「ああ、そうだ。さつき出雲から連絡がきたぞ。整備が終わったらしい」

「分かりました。明日取りに行きます」

出雲いずも技研は、更識家と提携している企業であり、俺がISを始めて動

かしたり、地獄の1年間を過ごした施設でもある。そこまで規模は大きくなく、公式では倉持技研の子会社という扱いになっている。

しかしここは少数精鋭で、凄腕の技術者が2人いるのと、所長のマネジメント能力が異様に高い。多分、その気になれば世界進出も余裕だと思うが、更識家のサポートというのが企業としての運営方針なので、そこまで目立たないようにしてくれている。こちらとしてはありがたいが、ちよつと申し訳ない。

そのことをこの前、所長の出雲藤丸ふじまるさんに聞いてみたことがある。『僕たちがそうしたいからやっているのだから、君が気にする必要は皆無だよ。それに、僕たちは京子さんや楯無、ああ今はもう槍一郎君だったね、あの2人に助けられているんだ。だから僕たちは恩返しのためにここにいる。多分、ここで働いている人はみんな同じ考えだと思うよ』

藤丸さんにそう言われて、俺は納得した。やはりここでも京子さんが話に出てくるのだ。もう頭が上がらない。今度京子さんが好きだった柏餅をお供えしておこう。

俺の専用機も出雲で作ってもらった。俺や刀奈や簪も開発は手伝った。

簪の専用機もそろそろ開発を始めるらしい。コアのストックがなかったので、扱いは倉持での開発ということになるが、簪が自分で作りたいと言い出したので、倉持と出雲の技術者に見てもらいながら開発を進めることになった。この時俺は少し心配していたが、俺と刀奈に協力してほしいと言ってきたので安心することができた。

結局、俺たち3人の専用機は、全て3人が開発に携わったということになった。まあ俺の専用機だけは時間に余裕がなかったということもあって、出雲の人達に任せただ。

ちなみに藤丸さんと葵さんは昔からの付き合いらしい。本人たちは腐れ縁だと言っていた。そのことについて、出雲の技術者トップ2である、楠華くすのきはなさんと楠彩あやさんの双子姉妹と議論したことがある。白熱した討論の結果、”昔付き合ってた、元恋人同士”という案が採用された。事実かどうかは知らないけど。

「そういえば翔平、うちの愚弟を見なかったか？」

「煙草片手に外行きましたよ」

「……そうか」

葵さんから連絡事項を聞いた俺は自室に戻ろうと部屋を出ようとしたとき、葵さんに仁さんの居場所を聞かれた。ここで変に誤魔化しても、とぼつちりを喰らうだけなので正直に答える。すると、さつきまで良かった機嫌がいつきに氷点下まで落ちていくのを感じた。これはやばい……。

「あの馬鹿め、翔平を呼んだら話があるからお前も一緒に来いと言つたはずなのに……」

完全に、仁さんのミスだった。俺は知らない。

「見つけたら言っておきます。それじゃお休みなさい、葵さん」

「ああお休み、藤丸によろしく言っておいてくれ」

「分かりました」

この部屋の空気に耐え切れなくなった俺は、早く逃げることにした。その後、ボロボロになった仁さんが発見されたのは言うまでもない。

次の日、俺は簪とともに出雲技研に向かっていた。

俺は定期メンテに出していた専用機の受け取り、簪は自身の専用機、”打鉄式”の開発についてダブル楠博士に質問をするためである。

「式式はどんな感じだ？」

「去年、お姉ちゃんのを手伝ってたのが大きいかな。今のところは順調だと思う」

簪に専用機を自分で作ってみないかと提案したのは俺である。倉持の仕事を奪ってしまったのは申し訳ないと思っている。

理由は、一夏との因縁が起ころないようにするためである。初めから、自分で開発を始めておけば一夏の白式開発の影響を受けることもないし、一夏のことを嫌うこともなくなる。簪が一夏のことを好きになるのかもしれないと考えると、兄として少し複雑ではあるが。

出雲技研に到着し、施設内に入る俺と簪。もはや顔パスでオツケーなので受付のお姉さんも警備員の人も、挨拶をかわすだけで通してくれる。

その後も、すれ違う人々と挨拶を交わしながら施設内の奥へと進んでいく。目指すのは第一研究室。

「やあ来たね」

「こんにちは華さん、彩さん」

「こんにちは」

「はいはい、こんにちは」

無駄にシンクロ率を披露する双子の挨拶を聞きながら、俺と簪も挨拶を返す。

この2人、双子なだけあって見た目も声も本当に似ている。俺や刀奈、簪はもう何度も会っているから見分けがつくが、初見ならまず間違いないからだろう。

「とりあえず、翔平君は専用機返すね。特に問題もなしだから大丈夫だよ」

「ありがとうございます」

俺は華さんから専用機を受け取る。俺の専用機は待機形態が眼鏡になっている。別に眼が悪いわけではない。簪が携帯用のディスプレイとして眼鏡を使っているのを見て便利だと思って、待機形態は眼鏡にしてもらった。専用機の待機形態ではあるが、ディスプレイとしても使えるので非常に便利である。

「簪ちゃんは式式についてだったよね」

「はー」

簪が自身の専用機について話すのを、俺も横で聞く。が、刀奈や簪

ほど詳しくないので、話している内容は半分ほどしか理解できない。

暇だなあと思っていたら、彩さんが声をかけてきた。

「あ、そうだ翔平君。所長が話したいことがあるって言ってたからそっち先に行ってきちゃって。終わったらまた戻ってきてね。武装に関して相談があるから」

「分かりました」

楠姉妹はそれぞれ技術者としてかなりの実力を持っているが、それぞれ専門がある。華さんが機体本体の専門で、彩さんが武装全般の専門となっている。といってもあくまで専門であって、2人とも両方が一般水準をはるかに超えるレベルとなっている。

簪の話はまだまだ続きそうだったので、彩さんに言われた通り先に藤丸さんのところへ向かうことにした。

「藤丸さん、翔平です」

『ああいらっしやい、入っていいよ』

「失礼します」

所長室の前に到着して、扉の脇にあるパネルを操作して中にいる藤丸さんに挨拶をする。すると返答があったので一言言って入室する。

「やあわざわざ来てもらってすまないね」

「いいですよ、ちょうど暇してたんで」

「そうかい」

微笑みながら立ち上がった藤丸さんは部屋の隅に移動して、コーヒーか紅茶かと聞かれたのでコーヒーと答えていただくことにした。この人の淹れるコーヒーと紅茶はとても美味しいので、この部屋に来るときは必ず貰うようにしている。俺は両方とも好きなのでその日の気分でコーヒーと紅茶を変えている。以前、藤丸さんの紅茶を飲んだ虚が衝撃を受けて、しばらくの間弟子入りしていた。

「それで、今日はどうしたんですか?」

淹れてもらったコーヒーを飲みながら、藤丸さんに本題を聞く。

「まあ大した話じゃないけどね。君は君がIS操縦者であるということ世間に公開することがあると思うかい?」

「……何とも言えないですね」

現状では、俺がISを動かすことができるということとは更識家の中で極秘事項となっている。他に知っているのは、日本政府のごく一部ぐらいである。

しかしこれはあくまで現状であって、これからの状況によっては変わってくる可能性もある。簡単に言えば、他に男性操縦者が現われた場合、その対応として俺を使う可能性もあるということである。俺としては、そのうち一夏がISを起動させることを知っているのですが、俺のことも公表されるだろうと予想している。しかし、それは今現在では当然誰も知らない話である。

そんな中で目の前に座っている、いつもニコニコしている男は公表の可能性を聞いてきた。それがなぜか、俺は何となく分かってしまった。

「夢でも見ましたか?」

「そうなんだよ」

適当に言っているように聞こえるが、俺はある程度確信をもって言った言葉である。

この出雲藤丸という男は、時折正夢を見るのだという。普段は生活の中のどうでもいいところの夢なのだが、たまに世間でも重大なニュースとなる出来事を夢で見るのだ。

「君がIS学園に入学している姿を、今朝の夢で見てね。これが正夢になるのなら凄いことだと思っただよ」

「そりゃ、大変なことになりますね」

未来を知っている俺からしたら、あんたの夢の方が凄いことだよと思っただ。口には出さなかったが。

「君の予想では、僕のこの夢は正夢になると思うかい?」

「……何とも言えないですね」

俺はそう返すしかなかった。

しかしその数か月後、藤丸さんの見た夢は正夢だったということが分かる。

織斑一夏がISを起動させた。

世界で初めての男性操縦者（正確には2番目だがそれを知る人はごく僅かである）が発見されたというニュースは瞬く間に世界へと拡散された。

そんなニュースを見て俺が思ったこと、それは――

あ、ようやく原作始まるんだ。

「とりあえず、学園に入学してもらえるかな？」

「やっぱり、そうなりますよね」

織斑一夏という、ISを動かすことができる男性が発見されてから1週間経った。俺は今IS学園の理事長室にいる。この場にいるのは、俺と刀奈、IS学園の理事長である轡木十蔵、教員を代表して織斑千冬の4人である。まだ正式には発表されていないが、”織斑一夏はIS学園に入学させる”という方向で話が進んでいる。そんな中で俺が呼ばれた理由は簡単で、俺も男性操縦者であるということ正式に公表してIS学園に入学する。裏の目的としては、更識の人間として織斑一夏の護衛を務めるということである。

この場にいる、轡木は元々俺がISを動かせるということを知っている数少ない人間のうちの1人だった。刀奈とも話し合った結果として、こういう話になったのだろう。

しかし、織斑千冬に関しては全くの初耳と言っていい。ゆえに今とても驚いて話についていけないでいる。

「ちよっと待ってくれ。そこの男もISを動かせるのか!？」

「ええそうですよ」

織斑千冬が驚いて言った言葉に、轡木さんは笑顔で答える。まあ、驚いて当然だろう。弟がいきなりISを動かして、その対策を決めるためにと呼ばれた場で、また別の男性操縦者が登場したのだ。頭の中はパニックになっても仕方がない。しかし、そこはブリュンヒルデ、しばらく黙り込んで頭を整理したのち、「分かりました」と言って落ち着いた。すさまじい状況適応能力だと思う。俺なら当分は頭の中がパニックってどうしようもないと思う。

「学園に入学させることは分かった。だが、そいつに一夏の護衛が務まるのか?！」

「そこに関しては、私が保証します」

織斑千冬の当然の疑問に返答したのは、刀奈だった。

「彼は更識の中でも特に戦闘能力が高い人材です。ISについても訓練は積んでいて、任務でISを使用していることもあります。技量と実力、人柄、全て更識楯無として保証します」

好きな人にそう言ってもらえると、こちらとしても嬉しい。バレないように喜んでいたが、轡木さんがニコニコしながらこっちを見てきたので、どうやらバレているようだ。

「私としても、彼の実力は保証しますよ」

「……分かりました」

轡木さんの援護もあり、織斑千冬はしぶしぶ納得したようだった。

「それでは、話を進めましょうか。いろいろと決めないといけないことがありますがからね」

そのあと、数時間にわたって話し合い、書面上での契約等が行われ、俺は正式にIS学園に入学することが決定された。

「どうやら僕の見た夢は正夢になったみたいだね」

「……みたいですね」

IS学園入学が決まった翌日、俺は出雲に来て藤丸さんに報告をしていた。ドヤ顔で言ってくるのがとてもムカつく。隣に座っている刀奈もうわあ……っていうのが顔に出ている。葵さんがこの場にいるら殴ってくれただろうが、残念ながらこの場にはいない。今度殴つていってもらおう。

「それで、君が学園に入学するということで専用機持っていることをどうしようかって話だっけ？」

「はい」

藤丸さんの質問に答えたのは俺ではなく刀奈だった。刀奈は楯無としてこの場に同席している。というか更識と出雲の話し合いであって、俺は本人だからということと同席しているだけである。

「昨日、正式に上代君が更識の任務としてIS学園に入学することが決まりました。したがって、彼が男性操縦者であることを公表することになったのですが、織斑一夏ならびに全生徒の護衛という任務を遂行するのに専用機は必要となります」

「そこで、うちの企業所属のテストパイロットという形にしちやいたってわけだね」

さすが藤丸さん、状況の飲み込みが早い。この人は商談とかの交渉ごとは天賦の才能を持っているからこういう話し合いもすんなりと進む。

「まあうちとしては現楯無の依頼って言われたら断ることはできないし、断るつもりもないよ」

「ありがとうございます」

「ただ、いいのかい？世間から見たらうちは小さな企業だよ」

「そこは大丈夫です。どうやらもう1人の男性操縦者である織斑一夏君の専用機を倉持の方で開発が予定されているようなので」

更識で作った話としては、織斑一夏の専用機開発で手一杯になった倉持が傘下の企業の中で最も技術力のある出雲に俺の専用機開発を依頼、出雲がそれを承諾した。日本政府としてもその案に賛同、全力でバックアップする。といった内容だった。

俺はここ数年で仁さんについてまわったり、たまに個人としての任務をこなしていくうちに、日本政府のお偉いさん方からの信頼を得、同時にそのお偉いさんの弱みも少々握った。結果的に、お偉いさん方は基本的に俺や更識に協力的になっている。

まあ普通はこんなに上手くいかないと思うけど、転生の好影響なのか、物事が思ったように進んでくれる。

ともかく、これで無事に専用機を所持したまま入学することができる。やっぱり訓練機だけでは色々と限界があると思うし。

その後簡単に書類上での手続きを済まして、俺と刀奈は所長室を出た。

「まさか翔平とまた学校生活を一緒にできるとは思わなかったわ」

「半分任務だけだな。学年も違うし……」

俺は年齢的には2年になるが、一夏の護衛ということもあって1年として入学することになった。刀奈と同じクラスになれないのは残念だが、そこは仕方ない。

「もお、それは言わないの。いいじゃない、これでまた毎日顔を合わせることができるんだから。私、学園に入学してから結構寂しかったのよ」

刀奈の言葉にドキツとする俺。意図して言っているのかは知らないが、刀奈はこうして俺をよく動揺させてくる。その後は大抵2人揃って顔を赤くしてちよつと気まぎれになる。今もそんな感じだ。

「ま、まあでも。何だかんだで俺も高校生活っていうのを経験してみたいって思ってたから。今回のことはラッキーだと思うかな」

「あら、そうなの？結構楽しいものよ、学園での生活も。ある程度のことなら私の思い通りにできるしね」

……それはあんただけでしょうが。

やはりというかなんというか、生徒会長権限は健在らしい。

「ひとまず、私は学園に戻るわ。翔平はISのマニユアルなんて知らないし、昨日渡した書類とかで学園内の校則とかだけ確認しといて」「了解」

あの参考書を短時間で覚えなくてもよかったのは、俺としては有り難かった。古い電話帳と間違えて捨ててしまう彼には申し訳ないが。まあ自業自得なので気にしないことにする。

学園に戻る刀奈と出雲の前で別れ、俺も家に帰った。

結局、今日も告白できなかったことに関して簪にボロクソに言われました。

こうして、俺は晴れてIS学園に入学した。

予定通り織斑千冬——織斑先生が担任を務める1組に振り分けられた。クラス分けは基本的に原作と同じで、本音が同じ1組、簪が4組となった。

そして、現在はホームルームの時間で、それぞれ生徒が自己紹介を行なっている。

……のだから、この状況は思ってたよりもキツかった。

俺の席は1番後ろなので、1番前でクラスの多くの女子からの視線を受けている一夏よりはマシだが、俺にも視線は注がれる。隣の席の本音には、「しようちゃん人気者だねえ」と言ってきた。そういうのではないと思う。

自己紹介何話そうかなあと考えていると、一夏の番となった。そして、原作通り名前を名乗るだけの自己紹介をして、織斑先生に記念すべき初出席簿アタックを喰らっていた。生で初めて見たが、あれは喰らいたくない。生徒が織斑先生の指示、というか命令を守るのも領ける。でも、確かにこう見ると関羽に見えなくもないような……。

「おい、上代。お前も喰らっておくか?」

「いえ、遠慮しておきます」

「次はないぞ」

出席簿を見せつけながら睨まれた。凄く怖い。あの人に対する悪口を心の中で言ったら、心を読まれるというのは本当だったようだ。

そして、織斑先生が自己紹介をする。それが終わると同時に俺は、予め用意しておいた耳栓を取り出して装着する。本音に目を向けると、俺の行動でこの後に起こることを悟ったのか目線で助けを求めたので、仕方がないと予備の耳栓を投げて渡す。

「「「キヤアアアアアア!!!」」」」

その直後に発生する!、音響兵器。これって防御なしで喰らったら結構なダメージをもらうだろう。現に一番前に座っている一夏は耳を押さえてピクピクしている。

耳栓を外して一息つくくと、自己紹介が俺の番に回ってきた。

「じゃあ次上代君、お願いします」

「はい」

山田先生に言われたので立ち上がり自己紹介を始める。

「上代翔平です。趣味は、まあ特にはないけど強いて言えば体を動かすこと。年齢的にはみんなより一つ上だけど、そこは気にしないで気軽に話しかけてくれたら嬉しいかな。よろしく」

クラスメイトから「よろしくー」と言われ、山田先生も次の人に順番を回そうと名簿に目をやる。その前に、俺は最後の一言言うておくことにした。

「あと、女子生徒に一言。俺には好きな人がいるから狙うんなら織斑一夏くんをおすすめするよ」

「「「「……………え?」」」」

休み時間、俺は耳を抑えながら唸っていた。

「ああ、まだ耳がおかしい」

「しようちゃんがあんなカミングアウトするからだよ」

俺のカミングアウトを聞いたクラスは、再び音響兵器を発動させた。「きゃ」の音よりかは幾分かは殺傷力がましであった「え」だが、破壊力はあった。

「まさかあんなこと言うとは思わなかったな。なんでクラスメイトには言えて、お嬢様本人には言えないの?」

「…何でなんだろうな」

俺は刀奈の前ではヘタレであるが、それ以外では別にヘタレというわけではない。さっきのカミングアウトができるぐらいである。まあ初めから公言しておいたほうがいいかと思って言ったただけだ。俺はどこぞのラノベの主人公ほど器用じゃないのでハーレムは別にいらぬ。刀奈だけで充分である。

本音からまたボロクソに言われると思っていたら、一番前の席から一夏がやってきた。

「ちよつといいか」

「おいしいぞ、むしろナイスタイミングだ」
「？」

俺の言葉に一夏は首をかしげる。本音は俺に逃げられてむくれているが、気にしないでおこう。

「男同士これからよろしくな。えつと…」

「よろしく、俺のことは翔平で良いぞ」

「じゃあ俺も一夏でいいぞ」

お互いとりあえず挨拶して呼び方も決める。

「そういや、さっきの自己紹介凄かったな」

「事実だからな。学園でほとんどいない男なんだ、先に手を打っておいて損はない」

「でも、だからって俺に振らなくてもいいだろ」

「お前、どうせ女子からモテるんだろ？」

「いやいや、ないだろ」

……もしかしたらと思っただが、やはり朴念仁だったようだ。ヒロインの皆さんに同情する。

「すまない、少しいいか」

これから直面するであろうヒロインたちの苦勞に同情していると、そのヒロインの中の1人が声をかけてきた。

「少し、こいつを借りていいか」

「ああいいよ。焼くなり煮るなりお好きにどうぞ」

「酷いな!？」

篠ノ之箒に連れていかれた一夏を見送ると、俺たちの会話を聞いていた本音が何とも言えない表情で聞いてきた。

「ねえしようちゃん、もしかしてオリムって……」

「ああ、天然の朴念仁だ……。ある意味で恐ろしい生き物だな」

「……オリムー見ると、しようちゃんのヘタレはまだましかもつて

思えたよ」

女子から見るとそこまでなのだろうか。

……一夏の朴念仁と比べられて、俺は少し傷ついた。

うん、ちゃんと刀奈に告ろう。

現在、俺は授業を受けている。といつても、すでに家で学習した内容なのでほとんどが復習のようなものだ。

山田先生の授業は分かりやすいのだが、やっぱりすでに知っている内容を聞いていると眠くなっている。しかし、俺の後ろには金棒出席簿を持った鬼織斑千冬が立っている。ここで寝たら、その鈍器が振り下ろされてしまう。

欠伸を噛み殺しながら授業を聞いていると、山田先生が一番前に座る一夏に質問がないかを聞いた。すると、途端に動揺しだす一夏。後ろからなので分からないが、多分顔は真っ青なのだろう。後ろの鬼織斑千冬も、弟の態度に疑問を持ったのかクラスの前へと移動を始める。そして、俺の横を通り過ぎる際に出席簿アタックを喰らった。俺が頭を押さえて唸っていると、「次はないと言ったはずだ」と呟いて行った。……これもバレルのか。

結局、一夏は「ほとんど全部分かりません」という言葉で山田先生を混乱させ、織斑先生からの質問で入学前の参考書を間違っ捨てたことを自白した。当然、出席簿が振り下ろされた。

「後で再発行してやるから、1週間以内に覚えろ」
さすがブリュンヒルデ、1週間も期間を与えてあげるなんてなんて優しいんだろう。

その参考書がどれほどの容量なのかは分からないが、とても1週間で覚えられる量ではないことは分かる。

……昔から思っていたけど、結局一夏は1週間でちゃんと覚えられたんだろうか？

その後、わざわざ後ろまで戻ってきた織斑先生監視の元、俺はひたすら眠たいのを我慢しながら授業を受けた。

……正直俺個人的の話だったら気にせず寝るのだが、ここで寝たら更識家の信用問題、というより楯無である刀奈の信用問題になってしまう。それは駄目だという気持ちだけで、俺は何とか授業を乗り切っ

た。

「ふあああああ」

「しようちゃん眠そうだね。まあ分からないこともないけど」

休み時間に入り、俺は全く隠すことなく大きな欠伸をしていた。

さて、俺の記憶が正しければこの休み時間では一夏が面倒くさいのに巻き込まれるはずである。そして、その巻き込まれる予定の一夏がこちらに向かつてきているということは、必然的に俺も巻き添えを喰らうことになる。

となれば、俺がやるべきことは1つだ。

「本音、ちよつと簪の様子見に行かね？」

「いいよ〜」

戦略的撤退である。

「あ、おい」という一夏と、「ちよつとよろしくて」と一夏に話しかける金髪縦ロール。

それらを聞かなかったことにして、俺と本音は教室から移動した。

1組から廊下に出て、簪が在籍している4組へと向かう。道中、廊下を歩く女子生徒からまるでパンダでも見るかのように、視線を浴びせられる。こそこそ話しているのを聞いてみると、「あれが世界で2番目の男性操縦者？」であったり「自己紹介で好きな人がいるってぶつちやけたらしいよ」などと話している。

……パンダになっているのは自業自得だった。というか噂広まるの早いな。

「お、ここにここに」

4組の前に到着して本音が中を覗き、俺もそれに続く。

突然、世界に2人しかいない男性操縦者の片割の登場に、4組内の女子生徒は困惑する。

「え？何で例の男性操縦者がここに？」

「ていうか、あれってどっち？」

「多分、自己紹介でカミングアウトしたほうだと思うよ」

「なーんだ、じゃあ脈なしじゃん」

「いやいや、奪い取ってこそ本当の恋愛じゃ…」

「あんたは昼ドラの見過ぎよ」

4組の女子生徒たちもまた、こつちを見ながらこそこそと会話していた。

というかこの学園の女子達、こそこそ話すんならせめてこつちに聞こえないようにしようよ、ただ聞こえだよ。そしてやっぱりこつちでも噂は広がってるんだな。というか最後のほう奪い取るとか聞こえたんだが？まああり得ない話だがな。俺が刀奈以外を好きになるなんて、織斑先生が明日から山田先生みたいな性格になるぐらいあり得ない。……想像したらなんか悪寒がした。

「あ、かんちゃん」

本音が簪を見つけて手を振る。

簪はクラスメイトと話をしていた。てつきり一人で読書でもしていると思っていたからちよつと意外だった。今の簪は原作での簪より、少しコミユ力が上がっているような気がする。自分一人で何とかしようとする考えが無くなった好影響なのだろう。兄として嬉しいものだ。

本音の声に気付いた簪が話していた友達に何か一言伝えて、こちらにやってきた。簪と話していた友達は、興奮しながら何かお願いしていた。……嫌な予感しかしない。

「2人ともどうしたの？」

「しようちゃんがかんちゃんの様子を見に行こうって。それにしても、かんちゃんが友達作ってるのが意外だよ」

「本音……失礼よ」

俺も思ったことではあるが、それを直接簪に言うとは……。最近分かったことだが、俺も含めた仲間内で一番毒舌なのは本音なんじゃないだろうか。まあでも相手が本当に傷つくことは言わないか。……あれ？でも俺って結構本音の言葉で傷ついているような……。

「それよりおに、……翔平。自己紹介で好きな人がいるって言ったの

は本当なの?」

「本ただけど、噂広がるの早すぎじゃね」

「それだけのカミングアウトだと思う。というか、何でそれができてお姉ちゃんに告白ができないの?」

「……何でなんだろうな」

簪がお兄ちゃんと言いかけたが、一応学園内では名前でもらうようにしている。簪が俺のことをお兄ちゃんと呼べば、それを聞いた女子たちが詳細を聞きに群がってくるだろう。それは勘弁してもらいたいし、俺が更識に関わっていることは基本的には内密にする方向である。まあ極秘にとまではないかないので、そのうち知る人も出てくるだろうが。

俺への口撃を続けようとする簪だが、俺は時計を見てそろそろ休み時間が終わるということで、退散することにする。

「あ、じゃあ最後に一つ。クラスの子が、翔平の言った好きな子って誰か聞いてきてって言ってるんだけど」

「……プライベートの質問はノーコメントでと伝えてくれ」
「分かった」

聞いて俺が答えるとでも思ったのだろうか?というか教えてもまづ刀奈のことを知らないだろう。

「早く告白しないとダメだからね。もう今日お姉ちゃんに会ったら告白して」

「いや、今日会うかわからない…」

「じゃあ次会ったら」

「2人きりじゃないと無理…」

「次に2人きりになった時に必ず告白して」

「……分かったよ」

「もし今回も後回しにしたら、私にも考えがある」

「え?」

「じゃあ私席に戻るから」

そういつて簪は自分の席に戻っていった。そして、すぐさま4組の女子たちに囲まれている。まるで餌に群がる鯉だ。……というか、

さっきの”考え”つてのがめちやくちや怖い。最近俺に告白させるためには手段を選ばなくなっている簪が、何をしてくるかと考えるのと、とても怖くなった。

1組に戻ると、一夏の席で金髪縦ロール改めセシリア・オルコットが一夏に詰め寄っていた。入試で教官を倒したどうこうの話をしている。ああ俺はあれ倒せなかったんだよな。……相手が織斑先生だったから。

……やっぱり俺、この初期のセシリアの態度って苦手なんだよな。というか嫌い。4組のほうへ逃げたのもそれが理由である。とりあえず、絡まれないように後ろの席からそっと自分の席に帰還する。本音は普通に後ろを付いてきたが。

俺が席に座った瞬間、チャイムがなり休み時間が終了する。セシリアは捨て台詞を吐きながら、自分の席へと戻って行った。

次の授業、織斑先生は授業の前にまずクラス代表を決めなければならないと言った。そういえば、そんなイベントあったな。自推他推問わないと言われた瞬間、瞬く間に俺と一夏が推薦されていく。一夏は「え、俺!？」みたいなリアクションをしているが、俺は別にどうでもいい。どうせ決闘が行われるのだから、その後には上手いこと一夏に丸投げすれば万事解決である。しかし、俺は例のクラス代表決定戦に出てもいいのだろうか？正直なところ、一夏はもちろんセシリアとも試合にならないと思う。

元から転生能力でセンスとか感覚がチートだし、このクラスの中ではISの稼働時間は俺が圧倒的に多いと思う。実戦でも使ってたんだから、経験値からしたらかなりのものだ。そして、何より五十嵐葵と言う名の鬼教官に1年間しごかれてきたんだ。成長しない方がおかしい。国家代表になった刀奈との模擬戦もようやく通算成績は五分だが、最近俺の方が勝ちが多い。そんな俺が、代表候補生に負けたら刀奈に合わせる顔が無いし、何より葵さんの恐怖のお仕置きが待っている。あれだけは何としても回避しなければならぬ。

そんなことを考えていると、セシリアが話に噛み付いた。

そうして始まる一夏とセシリアの醜い言い争い。これは何度見てもいい気はしない。俺は日本もイギリスも好きなんだけどな。前世でイギリスのサッカーとか結構好きだったし。なんならその中のチームの熱狂的なファンだったし、俺。

でも、自分の国を侮辱されるのはいい気がしない。俺たち更識の間が、というか刀奈が必死に支えている国を侮辱されるのは我慢ならない。

故に、ちよつと怒ってしまった。

「おい金髪、あんまり調子に乗ってんじやねえぞ」

俺は静かに、しかしクラス全員に聞こえるように言った。もちろんセシリアに向けての殺気込みで。セシリアは俺の殺気を受けて震えていた。

俺の雰囲気気づいた周りの女子生徒も怯えているのに気づいた織斑先生が止めに入る。

「やめろ、上代」

「……………すみません」

「まあ、お前の怒りも分からなくはない」

織斑先生にまさかのフォローをいただいた。これは意外だ。まあ、織斑先生も日本人だし、セシリアの発言には思うところがあったのだろう。

「お前達、ここはIS学園だぞ？言い争うぐらいならISで勝負を付けたらどうだ？」

織斑先生が一夏とセシリアを煽る。すると、2人とも見事に喰いついた。「決闘ですわ!!!」とか「いいいぜ、やってやろうじゃねえか」とか言ってる、熱いなあ。冷静に実力把握してる俺からしたら、まあ何も言えないな…………。

ここで、一夏からハンデ発言が飛び出す。一夏の言葉にクラスは笑いに包まれるが、俺はどうしようか。

「織斑先生、俺はどうしましようか?」

「……………」

黙って考える織斑先生。そして、何とも言えない顔をする。多分脳内シミュレーションで、俺がセシリアを瞬殺したんだろう。

「オルコット、ハンデはいるか?」

織斑先生は純粹に善意で聞いたんだろう。だが、俺のことを知らないセシリアは馬鹿にされてると思つたようだ。

「な、：ハンデなどありませんわ!!むしろ、その男の方が必要なんじゃない?」

そんなことを言ってくるセシリア。やっぱりうぜえ……。

「分かつた。ならばお互い全力でやるように」

そんな事を言う織斑先生、そして俺の方を見た。その目はこう言つていた。

『構わない、全力で捻り潰せ』

：やっぱり日本に対する侮辱発言で、この人も結構怒つてるみたいだ。俺と織斑先生の入試での模擬戦を見ていた山田先生は、苦笑いしてる。多分セシリアに対する同情も入っているのだろう。

こうして、俺もクラス代表決定戦への参戦が決定した。

入学初日の放課後、俺は生徒会室に向かった。理由は簡単、俺が生徒会に入るからである。刀奈が会長で、虚が会計らしい。俺と一緒に向かっている本音は書記になるらしい。……大丈夫なんだろうか。

簪は、まだ専用機開発が終わっていないので、落ち着いてから参加する予定らしい。そして、俺は空いている副会長の役職に就くことになりそうだ。ちなみに、更識としても俺は一応肩書きを持っている。

更識家実働部隊部隊長補佐兼十七代目楯無補佐兼更識家所属 I S
操縦者

という何とも長ったらしい肩書きとなっている。俺からしたら十七代目楯無補佐だけでいいんだけどな。

普段からこんな肩書き背負ってるので、生徒会副会長も別に抵抗はなかった。むしろこっちからお願いしたい。

というわけで、顔合わせというよりも久しぶりに話をしようという名目で生徒会長様から呼び出しがあった。簪も今日は整備室が使えないらしく、付いてきている。入学前に手続きで理事長室に来ていた時に、ついでにと刀奈に生徒会室も案内されたので、生徒会室までの道を覚えている。この学園はそこそこ広いが、普段から迷路屋敷に住んでいるので迷うことはないだろう。

「ここだな」

生徒会室の前に到着し、ノックをする。すると中から聞き慣れた声が聞こえて来たので入室する。

「3人とも、入学おめでとう」

「おめでとうございませす」

そんな言葉とともに、刀奈と虚が出迎えてくれた。

「「ありがとう」」

それに対して、俺たちも感謝で応じた。

「さ、立ち話もなんだし座りましょう。久しぶりにこの5人が集まっ

たんだから今日はゆっくり話しましょう」

「お嬢様は仕事もしてくださいね」

「…はい」

ああ、これは……。俺が副会長になったら仕事が多そうだな。相変わらず、仕事を溜め込むのは原作通りらしい。

楯無として家にいる頃から、よく刀奈の仕事を手伝わされていた。といっても、俺もブツブツ言いながら、内心喜んで仕事を手伝っていた。刀奈から「ありがとう」などと言われたら、それこそ内心狂喜乱舞である。

仕事を手伝う度に虚から「甘やかさないでください」と言われていたが、そのうち諦めたのか何も言わなくなってきた。最終的には仕事の半分くらいは刀奈を通さずに俺に直接渡してくるようになった。おそらく、この学園でもその状況が成立するのだろうが、全く抵抗はない。ばっちこいである。

虚の淹れてくれた紅茶を飲みつつ、俺たちはたわいない内容をいろいろと話した。やっぱりというか、俺も後半は刀奈の仕事を手伝っていた。まあ、生徒会室に着いてまず副会長になるための書類にサインをしたので、今の俺は副会長である。なので、副会長としての仕事という事で、小言を言ってきた虚に納得してもらった。

「そういえば翔平、あなたクラスの自己紹介でカミングアウトしたらしいわね」

刀奈の言葉に俺は固まった。……誰から聞いた。

「2年生の方にまで、噂が広まってきているわよ」

「ちなみに、3年生でも広まっています」

……いくらなんでも広まるのが早すぎるんじゃないか？もう嫌だ女子校怖い。

「で、それって誰なの？」

刀奈が何食わぬ顔で聞いてきた。いや、言えるわけないでしょ。こんなところで、っていうか本人に対して。ほら、周りの野次馬がニヤニヤしながら見てきているよ。簪と本音はいいよ、もう慣れたから。で

も虚、お前もかよ。

「い、いやそれ答えるのはちよつと」

「なによ、楯無からの質問に答えられないわけ？」

「いや、そーいうわけじゃないけど……」

「なら教えてよ」

「……ま、また今度教えるから」

俺は相変わらずのヘタレでその場から逃げる。途端に周りの3人が溜息をつく。そして、ジト目で睨まれた。

また逃げた。

また逃げたね。

また逃げたんですか。

ジト目を通してそんな事を言われた気がする。いや、お前らいる前で言えるわけじゃないじゃん。

集中砲火を浴びていると、生徒会室の扉がノックされた。この部屋の長である刀奈がそれに応えると、山田先生が入室してきた。

「あ、上代君はここにいたんですね」

「どうしました？山田先生」

「寮の部屋割りが決定したので報告しようと思つて。あと、織斑君を探しているんですけどどこにいるか分かりますか？」

「あいつならまだ教室にいるんじゃないですかね」

たしか今日の授業の内容を復習しているはずだ。教えてくれとか言ってきたがこつちが優先だったので、そわそわしてこつちを見ていた箒に任せてきた。

それにしても、普通に考えたら生徒会室より先に教室を確認しに行くと思うが……。そのことを山田先生に聞いたら、織斑先生から「上代なら生徒会室にいるはずだ」と言われたので先にこつちに來たらしい。

「分かりました。では……あれ？」

ポケットの中を探す山田先生。何かを探しているようだ。

「す、すみません、寮の部屋の鍵を忘れてきてしまいました。取りに戻るので、あとでまた生徒会室に来ますね」

「ああ、いいですよ。俺も教室に向かうんで。一夏と俺とじゃ2度手間になるでしょ」

山田先生しつかりしてくださいよ、とは言わない。この人はこれが本領なのだから。この場にいた他の人達も、どこか小動物を見るような、初めてのお使いに向かっている子供を見るような、そんな目で山田先生を見ていた。…この人、これだから生徒からの人気がでるんだよな。すでに1組では休み時間に山田先生のあだ名を考えようと何人かの生徒が動いていた。

「そ、そうですか？では教室で待っていてください。すぐに取ってくるんで」

そう言いながら、山田先生は小走りで職員室に戻って行った。

それを見届けた俺も、教室に移動しようと立ち上がった。

「それじゃ俺は一旦教室に向かうわ。晩飯どうする？」

「私達も一旦部屋に戻るから、後で食堂で合流でどう？」

「了解。じゃあ後で」

昼も食べたけど、ここの食堂は結構美味しいんだよな。メニューも多いし。

この後何を食べようかと考えながら、俺は生徒会室から外へ出た。その時、虚を除いた3人が、悪だくみを考える子供のように、笑みを浮かべていることに俺は気づかなかった。

教室で一夏と合流した俺は、山田先生から寮の部屋の鍵を受け取った。だが、そこで一つ分かったことがある。

俺と一夏が別々の部屋だった。……それが分かった瞬間、俺は嫌な予感がした。……いや、嫌ってわけでもないか。むしろ嬉しいような。

ひとまず一夏と一緒に寮へと向かい、寮の玄関で別れる。俺は受け取った鍵の部屋番号を頼りに自分の部屋へと向かった。そうしてたどり着いた自室前。扉の向こうからはかすかに気配を感じる。

待ち構えてやがる……

おそらく、扉を開けると水着エプロン姿の刀奈が立っているのだろう。いや、でも今はまだ4月だし、なんだかんだ結構肌寒いし、さすがにこの時期に水着エプロンはないだろう。

そう考え、俺はとりあえずノックを試みるが、返事はない。

……そこまでして俺を驚かせたいか。

一瞬迷ったが、このままこうしていてもらちが明かないので、俺は意を決して扉を開けた。

「お風呂にする？…ご飯にする？…それとも……」

俺は静かに扉を閉める。

4月でも普通に水着エプロンだった。さてどうしようか。

一応想定はしていたのでそこまでの動揺はない。一夏と部屋が違う時点で同室が刀奈ということもある程度は予想していた。

扉を閉めてから俺は、数秒間で状況を整理しこの後どうするかを対応策を決める。

ふうと息を吐いて、俺は再び扉を開けた。

「わたしにします？…わたしにします？…それともわ・た・し？」

……選択肢がなくなつてやがる。

とりあえず、俺は扉を閉めて中に入る。

刀奈の伝説の名言を生で聞いたことに内心狂喜乱舞しながら、外見はいたって冷静に、俺はこう言った。

「じゃあ、刀奈で」

俺を見ている刀奈が固まっている。見事にカウンターが決まった。言った俺も恥ずかしいが、言われた刀奈のほうがもつと恥ずかしいだろう。みるみるうちに顔が赤くなっていく。そのままお互い顔を赤くして何も言わずに数分が経った。

「……………とりあえず、着替えて飯行くか」

「……………そうね」

刀奈は着替えを持って洗面所に向かった。とりあえず、刀奈が出てくるまで俺は置かれていた自分の荷物の荷解きをして待つことにした。

しばらくすると、まだ少し顔の赤い刀奈が出てきた。

「お、おまたせ」

「じゃあ行こうか。あいつらもう行ってるかもしれないし」

俺も着替えようかと思ったが、簪たちを待たすのも悪いので制服のまま行くことにした。

部屋を出てしばらく歩いていると、刀奈も復活してきたので普通に会話をする。

「織斑一夏君はどうだった？」

「朴念仁だった」

「そ、それは……………なんとも言えない評価ね」

「ISに関する知識はほとんどないみたいだな。入学前の参考書捨ててしまったらしいし。稼働時間も当然ほとんど0。多分入試で模擬戦やったときぐらいだろう」

「……彼、大丈夫なの？」

俺の言葉だけ聞いていると、そう思っても仕方がないだろう。とてもこの学園でやっていけるとは思えない。主人公補正とか後ろ盾がなければ、落ちこぼれのレッテル貼られてモルモットへの一直線コースだろう。

一夏つてある意味槍一郎さんに似てるんだよな。自分を助けてくれる人が自然と周りに集まってくるところとかそっくりだ。

「まあ座学の方は授業が分かりやすい山田先生だし、実技の方は嫌でも経験値があがるだろう」

「そういえば、クラス代表を決めるために試合やるようね」

「織斑先生からの指名だな。イギリスの代表候補生が調子に乗ってるからちよつとお灸をすえるさ」

「やりすぎちゃだめよ。そのイギリスの子、立ち直れなくなっちゃう」「分かってるよ」

今刀奈に言われなかったら、本当にそうしていたかもしれない。

だが、俺にとっては他のどんなことよりも刀奈の言葉が一番なので、それに従う。

歩いていたら何やら女子たちが騒いでいた。とりあえずどこかへ向かっている女子の中の1人に声をかける。まず俺を見た第一声が「あ、カミングアウトの人だ」だった。……もう何も言わない。何があつたかを聞いてみると「1025室の部屋の扉が穴だらけになつているから見に行ってみる」と教えてくれた。

……刀奈と2人で何も聞かなかったことにして食堂に向かった。

「あ、2人ともおー!!」

食堂に到着し、中を見渡していると、先に席を取っていた本音が俺たちに気づいて手を振って場所を教えてくれた。そこに移動して、すでに来ていた簪、本音、虚と合流する。

3人ともニヤニヤして俺らを見てくるあたり、俺と刀奈が同室であるということを知っていたのだろう。何もなかったと伝えると、

「やっぱりヘタレ……」

「やっぱりヘタレだねえ……」

「やっぱりヘタレですね……」

と3人が目で伝えてきた。最近ジト目で睨まれたり溜息つかれたりすると何を言いたいのか大体理解できるようになってきている。

そんな視線に耐えつつ、待っていてくれた3人と一緒に食券を買って料理と交換してもらい、席に戻って食べ始める。

さきほどの生徒会室での話の続きを話しつつ食事を進めていると、本音が何かを思い出した。

「そういえばしようちゃん、オリムピーのコーチ引き受けるの?」

「いや、クラス代表決定戦終わるまでは放置だな」

一応、入学後は一夏のIS実技に関しては俺がコーチとなる予定であるが、いくら一夏が初心者とはいえど勝負は勝負。手の内は見せずに確実に倒す。

というか決定戦が終わった後も、箒とかセシリアがいるからコーチはいらない気もするが、自己防衛ぐらいはできるようにしてもらいたいから、ある程度は教えるつもりである。

「お兄ちゃん、鬼畜」

「さすがに、一夏君が可哀想かも」

更識姉妹に非難される。しかし、初めての試合でいい勝負をして調子に乗るよりも、いきなりボロボロにやられておくほうが、後々のことを考えたら良いと思う。一夏は、いかにもそういうのをモチベーションに変えるやつだし。

今日の出来事を話したり、代表決定戦での試合は何秒で決着がつくかを議論したりして食事を続けた。

夕食を食べ終え、刀奈と部屋に戻っていると持っていた携帯にメールが届いた。差出人が簪だった時点で嫌な予感がしたが、メールの内容を確認して、その予感が間違っていないことが分かった。

『お兄ちゃん、せっかくお姉ちゃんと同じ部屋になったんだから、ちゃんと告白してよ。今夜寝るまでに絶対に告白すること!!』

もし、今夜中にしなかったら………

お兄ちゃんの自己紹介のときのカミングアウトの音声データをクラウドに送るから。

じゃあお兄ちゃん、頑張つてね』

そんなことがメールには書かれていた。添付されていた音声データには俺のカミングアウトの音声録音されていた。誰だよこれ録音していたの。……本音本人しかいないな。

それにしても、何て恐ろしい脅しだろうか……。絶対に楠姉妹あたりが弄り倒してくる。ある程度のストレス耐性がある俺でも耐えることはできないだろう。

内心頭を抱えながら部屋に戻ってきた。

「どつちからシャワー使う?」

「ああ、俺まだ荷解き終わってないから俺が後でいい」
「分かったわ。じゃあ先に使わせてもらうわね」

1人になったタイミングで考える。

刀奈のことはもちろん好きなので、告白して恋人になりたいとも思う。刀奈も俺のことを好きなのではと思うこともこれまで何度もあった。しかし、もし違つたら……。今のこの関係性が崩れてしまうのではないかとどうしても考えてしまう。そんな考えでなかなか告白に踏み切れないあたり、やはり俺はヘタレなんだろう。

シャワー室から出てきた刀奈に言われて、俺もシャワーを浴びるた

めにシャワー室に行く。

　　ここら辺で、腹を括る必要があるようだ。シャワーを浴びながら俺は覚悟を決めた。

シャワー室から出た俺に、ペットボトルが投げられてきた。投げたのはもちろん刀奈である。受け取ったペットボトルを見てみると俺がよく飲むスポーツドリンクだった。

「入学祝いよ」

「サンキュー」

ありがたくいただくことにした。貰ったスポドリを飲みつつ、更識家としての話を行い、任務に行っている仁さんからの報告やその他の報告などの情報共有を行う。なるほど、こうして同じ部屋になったことで、外ではなかなかできない話を、心配しないで話すことができる。「今日あった報告ではこんなところね」

「仁さんが葵さんキレさせてボロボロになってることも含めていつも通りだな」

仁さんがまた何かやらかして葵さんが阿修羅化したらしい。

「それで、例の話だけ」

「例の？」

はて、なんの話だろうと考えていると、刀奈がその答えを言った。

「あなたの好きな人の話よ」

「あ、ああその話ね……」

今からその話をしようとしていたんだけど、なんか出鼻をくじかれた感じだ。

「別にあなたが誰を好きになろうと、楯無としてそれにどうこう言うことはできないわ」

話の雲行きが怪しい気がする。

「でも、やっぱり思うところはあるわ。あなたはこれまで私を支えてきてくれた。でも……これからは……」

そういつて悲しそうな表情を浮かべる刀奈。

……これはいけない。

深く考えずに言った俺の言葉が、刀奈を不安にしてしまったようだ。

軽い気持ちでカミングアウトした俺を殴りたい、いや……、これまでよくよ悩んで告白しなかった俺を殴りたい。

「俺はさ」

下を向いていた刀奈は俺の言葉で顔を上げる。その眼には涙が溜まっているが、それでも泣かないようにしていた。昔、楯無襲名の後に責任と不安に押しつぶされそうになっていた時の表情をしていた。……こんな表情をさせるのなら、早く告白してしまえばよかった。

でも、今は後悔するのではない。後でしっかりと反省しよう。

「俺は、これからもずっと、刀奈の隣で、刀奈のことを支えていきたいと思ってる」

刀奈は黙って俺の言葉を聞いているが、その頬には涙が流れている。

「俺が好きなのは、昔からずっと刀奈だけだ。これからもずっと、君を好きでいる」

前世から、10年以上も溜め込んでいた俺の気持ちを、ようやく伝えることができた。

そして刀奈は――

「やっと、……やっと言ってくれた」

泣きながら、そう言ってくれた。

「私も……翔平が好き。ずっと好きだった」

そのまま、刀奈は俺の胸に飛び込んできた。

「あなたがクラスで好きな人がいるって言ったのを聞いたとき、私
だったらいいなって思った」

「うん」

「でも……もし違う人だったらって思うと、不安になった」

「…うん」

「でも…」

一旦俺の胸に当てていた顔を上げ、俺の顔を見ながら言った。

「今、ちゃんと伝えてくれて、本当にうれしい。ありがとう、翔平」

そう言って笑う刀奈は、本当に綺麗だった。

朝、目が覚めると目の前には見知らぬ天井があった。

というのは大げさで、ここがIS学園の寮の自室であるということ
はすぐに思い出した。

そういえば、ついに告白したんだなあと思いながら昨日の夜のこと
を思い出す。

結局あの後、泣きつかれた刀奈はそのまま眠ってしまった。俺も入
学初日ということもあったし、何より緊張したり感動したりと本当に
いろいろとあった1日だったので、簪にきちんと告白した旨のメール
だけ送って俺も寝ることにした。

そして今日が覚めたのだが、1つ気になることがある。
隣で刀奈が寝ているのだ。

おかしい、確かに昨夜俺は眠った刀奈を、刀奈のベッドへと移動さ
せた。

ならば、なぜ今俺のベッドで眠っているのか。

「まあいつか」

考えてもわからないし、何だかんだでこの状況は嬉しいので、受け
入れることにした。

隣を見ると、刀奈が幸せそうな顔で眠っている。

うん、生きててよかった。

しばらく寝顔を堪能していると、刀奈が目を覚ました。

「おはよう翔平」

何で俺のベッドで寝てるの？とかいろいろと聞きたかったが、笑顔でそんなことを言われたらもうどうでもよくなった。

うん、生きててよかった。

「おはよう刀奈」

とりあえず、起き上がり顔を洗う。

顔を洗ったタイミングで刀奈がタオルを渡してくれたりして、それだけで幸せだなあとか思ったり。こうしてみると、同じ部屋で本当に良かった。

「朝はどうするの？軽く体動かす？」

「そうだな、もう日課になってるし」

俺はISを動かせるようになってから、ほぼ毎朝軽いランニングなどをして体を動かしている。身体はチートであるが、きちんと毎日動かしておかないといけない。筋トレも必要である。俺の専用機はただでさえ、身体に負担がかかるのだ。Gに耐えられる身体はキープしなければならぬ。

刀奈も一緒に行くということでも2人とも準備を始める。

俺はその途中、携帯にメールが届いていることに気付いた。差出人は仁さんだった。

任務の報告かなと思ってメールを開いてみると……

『おいおい聞いたぜ、お前クラスの自己紹介で好きなやついるってぶっちゃけたらしいな!!音声データも聞いたぜ。お前そんなこと言えるんだったら、とつとと楯無に告っちまえよ。そしたら俺も思う存分オヤジと話すことができるってのによ』

そんな内容だった。ちなみに、仁さんの言うオヤジとは槍一郎さん

のことである。

……幸せだった俺の頭は急速に冷えていった。俺の様子に気付いた刀奈が「どうしたの?」と聞いてきたので贈られてきたメールを刀奈にも見せる。

メールの文面を読んだ刀奈は苦笑していた。

とりあえず、俺は仁さんに返信を送った。

『そのことは誰から聞いたんですか?音声データも誰からもらいました?素直に教えてくれたら、この前葵さんが大切にとっておいた日本酒を飲んでしまったことは黙っておきますよ』

返信を送って数分後、すぐに返事が返ってきた。

『本音だ。教えたからな、黙っといってくれよ。まじで頼むぞ!!』

……あいつには一度、ちゃんとしたお仕置きが必要なのかもしれない。

2, 3日お菓子抜きにしたらあいつも懲りるだろう。

「じゃあ行こうか」

「あ、待って」

お互い準備もできたので、タオルとか携帯とか必要なものだけ持って外に出ようとしたら刀奈に呼び止められた。

何かと思つて振り返ると、いきなり目の前には刀奈の顔があった。

そして、俺は刀奈にキスされた。

「ふっ、行きましょ」

そう言つて、刀奈は歩いて行った。

本当に、告白できて良かった。

朝練を終えて、部屋に戻りシャワーを浴びて俺たちは食堂に向かった。

「あ、お兄ちゃんとお姉ちゃん。2人ともおめでとう」

「おめでとうございます」

「ありがとうございます」

すでに食堂に来ていた簪と虚から、”おはよう”ではなく”おめでとう”と言われた。虚も簪から聞いたんだろう。

俺と刀奈も少し照れながらそれに応じた。

「簪、本音は？」

「まだ寝てる」

「相変わらずだな…あいつは」

本音が朝が弱いのは本当に改善されない。このメンバーで一番起きるのが遅い人物はいつも本音である。

「あ、ちようどいいや。簪、今日から当分本音はお菓子厳禁にするから」

「どうして？」

「あいつ、俺のカミングアウトの音声データ仁さんに送りやがったんだよ」

「ああ……分かった」

「報酬は最近お前が欲しがってたプラモで」

「絶対に食べさせない、何としても阻止する」

……そんなに欲しかったんだ、あれ。意外と高いけど、まあ刀奈と
のことでいろいろと迷惑かけたし背中押してもらったから、全然買っ
てやるけど。

それから数日間、本音の目は死んでいた。

刀奈と晴れて恋人同士になれた日から1週間が経った。今日はクラス代表決定戦が行われる。

一夏に専用機が与えられること、俺がすでに専用機を所持していることは、入学から2日後にクラスで発表された。一夏もそうだが、俺が専用機を持つていることに対してかなり驚かれた。

まあ普通は驚くだろうな。専用機を持つということがどういふことなのかいまいち理解していない一夏は、クラスの反応を不思議がつっていたが、きちんと勉強している人からすれば、この時期に専用機を持つたなんてありえない話だと分かる。

俺の場合は企業所属のテストパイロットということなので納得してもらった。

代表決定戦の試合順は、

第1試合 一夏 対 セシリア

第2試合 俺 対 セシリア

第3試合 俺 対 一夏

という順番になった。

時間がなくて一夏の白式がまだファースト・シフト一次移行できていなかったのも、俺が先にセシリアとの試合を行えばいいかと思つて織斑先生に提案したが、「お前との試合の後では、オルコットの機体の蓄積ダメージで織斑との試合ができなくなる可能性がある」と言われた。そこまで派手にやるつもりはないが、よくよく考えてみると、一夏と試合をするまではあのふてぶてしい態度のままだったことを思い出し、そのセシリアと試合をすれば確かにやりすぎってしまうかもと思つたので、織斑先生に従うことにした。

ファースト・シフト一次移行もできていない状態で初心者に代表候補生と試合させるのも、それはそれで酷い気がするが、まあ原作でもそうだったし気にしないことにした。

今から第1試合が行われるのでそれを観るために、現在俺は管制室にいる。この場にいるのは俺と織斑先生、山田先生、そして刀奈である。

俺と刀奈が付き合っていることは一部の人は知らない。そもそも1年生はまだ刀奈のことを知らないだろうし。ただ、寮の部屋が同室だったり、よく2人で行動していることからうすうす気づいている人はいるようだ。

ちなみに織斑先生と山田先生は気づいていた。織斑先生からは、「お前たちの関係にいちいち口は出さないが、ここが学園であることを忘れるなよ」と言われ、山田先生からは「おめでとうございませう!!」と言ってもらえた。

あと、仁さんに告白して付き合うことになったことを報告したのだが、瞬く間に更識家全体にその話が広がった。その日のうちに槍一郎さんから電話がかかってきて、いろいろと言われた。まあ別に反対されたわけではなくて、「ようやく告白したらうれしいな」とか「これで俺も心置きなく引退することができるわ」とか「しつかりやれよ」とか言われた。この人療養中だけど、意外と元気なんだよな。まだまだ現役でやれそうな気がする。

楠姉妹からも連絡が来たが、面倒臭かったので無視した。

全体的に、「あ、やつとか」という反応が多かったように特に驚かれることもなく、すんなりと受け入れられた。葵さんから、「今度、京子さんの墓に行つて報告しておけよ」と言われた。更識家では、京子さんの命日の日には関係者は全員集まるというのが決まりごとになっている。昨年からは、楯無である刀奈がIS学園に入学し、今年は俺も含めた5人全員が学園にいることもあり、命日の日の前後の土日が集まることになった。全員で墓参りを行い、その後屋敷に戻つて朝までどんちゃん騒ぎをするのが大抵である。京子さんに失礼かとも思うが、もともと京子さんがそういう宴とかパーティーが好きだったので、大丈夫だろうということになった。この行事は、更識家関係者のほとんどが1年で最も楽しみにしている。正月などにも関係者が集まることはあるが、いろいろと堅苦しい行事となっている。だがこの

行事では堅苦しいのは抜きで、みんな楽しむことができるのだ。俺も刀奈も、この日は毎年楽しみにしている。

いろいろと考えていたら、一夏とセシリアの試合が始まった。

「ねえ、翔平はどっちが勝つと思う？」

「まあ順当にいけばセシリアだろうが……」

最近、原作の知識を大分忘れてきている。この試合で勝つのはセシリアだっていうのは何となく覚えているが、試合の内容はほとんど覚えていない。さすがに転生してきて約8年が経ったので、記憶もあいまいである。

「あら、言い切らないのね」

「一夏って面白いやつだからな。何かやってくれそうって期待してしまっ」

「ふーん、意外と評価高いのね」

「この試合で急落する可能性もあるけどな」

この試合で見るのは、一夏の”可能性”である。経験値なんてものは今のあいつじゃほぼ0だ。ならば、この試合ではあいつのセンスや感覚を見ることができると。

「まあ乗ってる機体があれだけどな」

そう言って織斑先生を見る。微かに反応したが、俺や刀奈でなければ見逃していただろう。

試合に目をやると、セシリアのレーザー攻撃から一夏が逃げ回っていた。

一次移行ファースト・シフトが完了していないので、持つてる武装もただの刀剣の形をした武装のままだ。名前忘れたけど、確かあれバリアー無効化とかできたはず。

「思ったよりは動いているわね」

どうやら刀奈の予想ではもっと酷いのを想像していたらしい。確かにダメージは徐々に喰らっているが、慣れてきているのか少しづつ

避けることができるようになっていた。

セシリアの最初の猛攻を一夏が耐え、2人が一言二言話した後、セシリアがビットを展開した。それを見て思い出したことがあった。「織斑先生、この後の試合なんですけど。俺って本当に全力でやっちゃっていいんですか?」

「ああ構わない」

「ビットも使いますよ?」

そう、俺の専用機にはセシリアのブルー・ティアーズ同様、ビット兵器が搭載されている。ちなみに初めてISを動かした当時の俺の適正は、IS適正もBTシステム適正も“A”だった。さすがにチートすぎる気もしたが、気にしないことにした。

俺の適正を見て、専用機にビット兵器を搭載させることが出雲で決定された。

「あいつにビットの使い方を教えてやれ」

織斑先生の言葉につられて試合を見ると、一夏がビットの攻撃を避けていた。

「なるほど、ビットの制御は集中しなければならぬから必然的にビットでの攻撃中は自身は動けないのか」

「……その時点で、翔平との勝負はついてる気がするわ」

もちろん俺は、移動中でもビットの制御はできるし、どちらかといえばそれが俺のスタンスでもある。

「フレキシブル偏向射撃はどうでしょう?」

「翔平、あなたがそれを使えば10秒で試合が終わってしまうわよ」

俺は偏向射撃も習得している。さすがに使用すれば疲れるが、短時間なら全てのビットを動かしながら戦える。ちなみに俺の専用機には2種類4基の計8基が装備されている。

俺に全力で戦えというのであれば、偏向射撃も使って半ば蹂躪することもできるが……、それをすれば本当にセシリアが立ち直れなくなってしまうだろう。

「さすがに偏向射撃まで使うのはやめておけ。オルコットが可哀想だ」

セシリアに対しての怒りがまだあるようだった織斑先生も、俺がセシリアを瞬殺する姿が想像できたのだろう。自分の教え子が精神的に立ち直れなくなるのはよろしくない判断したのか、俺は偏向射撃の使用は許可されなかった。まあなくても全然勝てるんだけど。

試合は、一夏が無理矢理の特攻でセシリアの懐に入ろうとしていた。

「油断しすぎだろ」

俺がそう言った瞬間、セシリアが残っていた2基のビットからミサイルが発射された。何とか避けようとしているが、追尾型のミサイルを躲しきることはできずに直撃した。

ミサイルが直撃、爆発したことで一時的に一夏の周りは黒煙で視認できなくなった。

「なるほどね。確かに彼、面白いわね」

刀奈が呟く。俺の言っていたことが理解できたようだ。

「まさかここで一次移行だなんて、彼ってパフォーマー向きじゃない？」

「そうかもな」

刀奈の一夏への評価はパフォーマーだった。これはウケる。織斑先生もちよつと笑ってるし。

試合はその後、一夏が小っ恥ずかしい台詞を放って、一次移行で使えるようになった零落白夜（織斑先生が教えてくれた）を使って責め立てた。

「織斑先生、あいつその零落白夜のことをちゃんと理解してるんですか？」

「理解していないから、今ああして突っ込んでいるんだろう」

「……理解してないのね」

ああなるほど。あいつには猪突猛進という言葉をくれてやろう。

俺と刀奈、織斑先生の予想通り、試合は一夏がシールドエネルギーを使い果たしてセシリアの勝利で終わった。

「さて、俺もそろそろ準備始めるかな」

「あ、手伝うわよ」

恐らく30〜40分程度でセシリアの準備は整うだろう。その間に俺はウォーミングアップを行う。俺のISの特性を最大限に引き出すためには、身体の柔軟性が結構重要になってくる。そのため、搭乗前には必ずストレッチを行うようにしている。任務では何度も乗ったことはあるが、公式の試合で、というか人前でISに乗るのは今回が初めてである。緊張はしていないが、気合は入る。

刀奈に手伝ってもらいながらストレッチを行い、着替えてアリーナの搭乗、発進を行うピットに向かう。

そこでは、先ほどまで試合を行っていた一夏と織斑先生、山田先生、それと箒がいた。セシリアは反対側のピットで機体整備を行っているだろう。

ちようど、織斑先生から白式に関する説明を受けているところだった。……試合前に教えておいてやれよ。

山田先生からISの教則本を渡されげんなりしていた一夏が、入ってきた俺と刀奈に気付いた。

「お、翔平。それと……」

「初めまして、織斑一夏君。私はこの学園の生徒会長を務めてる更識楯無よ。よろしくね」

「織斑一夏です。でも、生徒会長さんが何でこんなところに？」

「もちろん、生徒会副会長の応援のためよ」

そう言っただけの方を向いてウインクしてくる。やばい超可愛い。

「え、翔平って副会長なのか!?!」

「そうだけど、言っただけじゃなかったっけ？」

「聞いてねえよ!!あれ、でも入学したばかりの1年生が副会長っていいの？」

「その人物が有能であれば問題ないわよ」

つまり俺は有能って言うことですか、ありがとうございます。

まあ桜才学園でも1年生で生徒会副会長やってたからな。………
なんで覚えてんだろ。

話していると、反対側のピットから連絡がきて山田先生が対応した。

「上代君、オルコットさんの準備が整ったようです」

「分かりました」

さて、いよいよ俺のデビュー戦だ。

「ベンダボール」

そう呟いた瞬間、俺は自分の専用機――ベンダボール *vendaball* を身に纏った。

少し濃いめの緑色を基調に所々のポイントに白色、そして黒のラインが走っている。

「おおそれが翔平の専用機か!! 格好いいな」

「ありがとう」

これは後日、華さんに報告しなければ。ベンダボールのデザインは華さんが作ったものだ。このデザインにはかなりのこだわりがあったらしく、初めてベンダボールを受け取った時は鼻息を荒くしながら「ねえ! どう! このデザインどう!？」と聞いてきた。その異様に高いテンションに若干引いて、「いい、いいと思います」と答えたらかなりの上機嫌になった。

仁さんが「なんかダサくねえか」と言った瞬間、そばに置いていたボールで殴られていた。……その時の華さんの動きは早すぎて見えなかった。

多分、先ほどの一夏の言葉を伝えると飛び跳ねて喜ぶだろう。

「じゃあ行ってくる」

「あ、翔平」

「ん?」

今俺はISに乗っているので、必然的に刀奈よりも目線が高くなる。

「頑張ってるね」

上目遣いの刀奈にそんなことを言われてしまった。

「……おう」

サムズアップして俺は発進口まで移動を開始した。

「更識、あいつを本気にしてどうする」

「え？」

「お前にそんなことを言われたら、あいつさっきまでの会話全て忘れるぞ」

「さすがにそんなことは……」

俺は器用に、ISに乗った状態でスキップしながら発進口まで進んでいった。

「……ちよつと、応援しすぎちゃいましたかね」

「……オルコット、死ぬなよ」

さあ、デビュー戦だ。

俺がピットからアリーナへと出ると、ちょうどセシリアも出てくる
ところだった。

「さあ、始めようか」

「試合を始める前に、少しよろしいでしょうか？」

「ん？」

あ、一夏と試合したから丸くなったのか。

「先日の発言は私の間違いでした。……これまでの私の考えが、間
違っていました。本当に、申し訳ありませんでした」

そう言ってセシリアは頭を下げて来た。

人ってこんな短時間で態度を変えることができるんだな。もうほ
とんど別人じゃね？

「……確かに、これまでの発言でそれを不快に感じた人は多いだろう
な。俺もその中の1人だ」

俺の発言にビクツと反応するセシリア。

「でも、お前は今ちゃんと謝った。なら俺は許すさ」

「あ、……ありがとうございます!!し、翔平さん」

パツと顔を上げて喜ぶセシリア。そして俺の呼び方が名前呼びに
変わった。その反応に可愛いなと思っていると、悪寒を感じた。見え
ないけど、ピットにいる刀奈がこっちを睨んでるのは何となくわか
る。

いや、違うんだよ。女子に対して言った可愛いじゃなくて、どっち
かっていうと小学生ぐらいの妹に対して言うような可愛いだったん
だよ。決してやましい気持ちはありませんでしたから。だから睨む
のやめて、俺試合に集中できないから。俺にとって世界で一番可愛い
のは刀奈だし、世界で一番好きなのも刀奈だから。

すると、感じていた悪寒は消えた。どうやら許してもらえたよう
だ。

許してもらえて一息ついたところで、俺はセシリアを絶望させなけ

ればならない。

「でも、織斑先生が日本人ってことを忘れるなよ。あの人結構怒ってたぞ」

喜んでいたセシリアの顔は一瞬で真っ青になった。自分が一番やらかしたことを理解したのだろう。

「あ、後で必ず謝りに行きますわ」

「それをおすすめする。ところでセシリア、一夏はどうだった？」

「……へっ!?!」

一夏の話になった途端、さっきまで真っ青だった顔は瞬く間に真っ赤に染まった。慌てながらいろいろ言ってる。

ちよろイン、ここに在り。

『お前ら、そろそろ試合を始めろ』

セシリアの反応に呆れていたら、織斑先生から急かされたの試合を始めることにする。

まだ少し顔が赤いセシリアも織斑先生からの通信で、真剣な表情に変わった。

目の前にカウントダウンが表示される。

俺は右手にシロガネ、左手にクロガネという2種類のエネルギーイフルを展開する。

「先に言っておくけど、俺もビット兵器を使うから」

「あら、そうなのですか。ならこの試合はビット兵器同士の戦いということになるのでしょうか」

……そうなれば、いいな。

ビット制御しながら動き回る俺を何とかできるのなら……そうな

るんだらうな。

カウントが3を示す。

「もう一つ言っておくけど」

2

「何ですか?」

1

「俺を見失うなよ?」

0、試合開始

その瞬間、俺はその場から消えた。

「なっ!?!」

消えたと言っても、開始の合図とともに瞬間^{イグニッション・ブースト}加速を行ったただけだ。

ただ、それは相手のセシリアに向けてのものではなく、明後日の方
向へのものだった。

まあ目的としては、とりあえずセシリアの視界から消えることだった
ので方向はどこでもよかったのだ。

セシリアの周りをそこそこ^{ス・ピ・ド}のスピードで旋回しながら、シロガネと
クロガネで狙う。

「このっ!!」

セシリアはシロガネ・クロガネから放たれるレーザーを避けなが
ら、自身の持つレーザーライフルでこちらを狙ってくる。しかし、俺
は簡単に避ける。というよりも、俺の動きに付いてこれなくて狙いが
絞れていない。

「なら!!」

ライフルではどうしようもないと判断したセシリアが予想通り、
ビットを展開してきた。

そのタイミングで俺はシロガネとクロガネを量子化し、右手に
羅刹^{らせつ}、左手に征宗^{まさむね}という2つの刀型の武装を展開する。一応状況に応

じて使い分けているが、基本的には俺は羅刹と征宗を主力武装として
いる。

そして、右肩にあるシールドを”分離”させて”展開”する。これ
が、ベンダボールが搭載しているビットのうちの一つである、シール
ドビットである。

「なっ?!ビットの制御中でも動くことができるんですの?!」

「まあな」

物凄くセシリアが驚いているが、気にしない。

セシリアのビットからのレーザーによる攻撃をシールドビットで
防ぎながら、セシリアに近づいて羅刹と政宗で切り付け、セシリアか
ら離れる。離れたら自力で攻撃を避けながら、今度はシールドビット
の小型のレーザー砲で攻撃する。

これをひたすら続ける。

「クッ!」

確実にセシリアのシールドエネルギーを削っていく。相手に考え
る隙は与えない。

俺のISでのスタイルでは、基本的に動きを止めることがない。

任務で敵地強襲とかやってたし、俺のISの情報を相手に与えたく
ないという理由から、高機動の中でのヒットアンドアウェイが基本的
な戦闘スタイルになっている。相手が動揺しているうちに、とつと方
を付けるのが大抵である。

ビットの扱いも自信を持っているが、俺が一番IS関連で自信を
持っているのが機動技術である。鬼教官監修の元、どんな体勢でも攻
撃を放って、避けることができるようになってる。というか、一対
複数が得意なので、この試合は俺に分がありすぎるのだ。

試合前の会話で、上がっていたテンションが落ち着いていた俺は、
一度動きを止めた。

多分会話がなかったら、刀奈からの”頑張って”でやる気出し過ぎ
て試合を終わらせてしまってただろうな。

「男も捨てたもんじやないだろ」

「ええ……悔しいですがビットの扱いは完全に私の負けのようすわ」

セシリアは素直に認めた。もっと動揺するかと思っていたが、意外と落ち着いている。

まあでもシールドエネルギーは半分を切っているだろう。

ベンダバールの欠点は、高威力の攻撃手段が少ないので、地道に削っていくしかないというところだ。一応、高威力の攻撃をしようと思えばできるが、数秒間動きを止めなくてはいけないし、自分のシールドエネルギーも使うので、俺はあまり使わない。まあそのかわりかなりの威力は出るが。

ひとまず、今は目の前の試合だ。

「次で決める」

「耐えて見せますわ」

どうやらセシリアは、この試合で自分が勝つことは不可能だと分かったようだ。そのうえで、少しでも長く耐えてやろうと言っている。俺としても付き合ってやりたいが、この後の試合もあるしとつと終わらせようと思う。

俺は展開していたシールドビットを右肩に戻す。そして、両足の先にあるクローを展開してエネルギーの刃——エスパードを展開する。両手に持っている羅刹と征宗と合わせて四刀流となる。

「くぐり」

俺は試合開始の時と同様に、瞬時加速で仕掛ける。ただし、今度はセシリアに突っ込んだ。

いきなり突っ込んできた俺に対して、セシリアは残っていたビットからミサイルで迎撃する。俺はそれを空中で宙返りしながら、両足のエスパードでそれぞれ破壊する。

「そんな!？」

至近距離でのミサイルはさすがに直撃すると思っていたのか、驚いているセシリアを四本の刃で切り裂く。

ビットからの攻撃も体を捻ったり宙返りしたりして躲しながら、攻

撃を続ける。

ピットを使っていないので集中できるっていうのもあるが、それにしては我ながらでたらめな機動だと思う。

この動きの正体は、両手両足にある小型のスラスターをそれぞれ動かしながらの機動を行っているからで、それに加えて刀奈と特訓したカポエイラの動きも取り入れているので、相手からしたら予測不能な動きになっているだろう。この前一度刀奈から、「こんなことなら、一人でカポエイラ習えばよかった」と言われてしまった。ちなみに、ピットでスキップした時は足のスラスターを使って微調整した。多分使ってなかったら盛大に倒れていたと思う。

「インターセプター!!」

さつきから何かをしようとしていたセシリアが、急に叫んだ。

ああそういえばこいつ、ほとんど近接武器を使わないから、呼び出すのに時間がかかるんだっけ？

だけど、その隙は命取りだ。

結局俺はその後、接近戦用のショートブレードを取り出したセシリアと一応形だけ刀を合わせたが、そもそも一刀対四刀では勝負にならず、懐に入られ動かないわけにもいかないのでピットも使えず、セシリアは成す術なくシールドエネルギーは0になった。

「お疲れさん」

「完敗ですわ」

試合が終わり、俺はセシリアと握手してピットに戻った。

ピットに戻った俺は、次の対戦相手である一夏の準備が整うまで待機していた。セシリアとの試合は被弾が0で、スラスターやエスパ―

ダの使用に使った程度しかシールドエネルギーの消費がなかったの
で、インターバル無しでの連戦でも良かったのだが、予想以上に俺が速
く試合を終わらせてしまったので一夏の準備がまだできていなかった。
た。なので、待機である。

今は、ピットにあるベンチに座ってドリンクを飲んでいる。隣には
刀奈も座っている。

「一応、ちゃんとした試合にはなったわね」

「公開されている試合なんだから当然だろ。やりすぎたらいろんなこ
ろから睨まれる」

俺がISを動かせることが判明したのは一夏よりも後ということ
になっている。更識繋がりで企業所属となつてからは、出雲に籠つり
きりで訓練したということとで日本を含めた各政府には納得してもら
うようにしているが、あまりやりすぎると怪しまれるのだ。

まだ何の干渉もしてきていないが、あの兎に目を付けられるのも面
倒だし。

織斑先生と山田先生は先ほどピットに訪れたがまたすぐに、管制室
に戻って行った。

その際に、織斑先生が目を輝かせながら「噂には聞いていたが、専
用機だとあそこまでの機動力を発揮するとはな。今度は専用機同士
で模擬戦を試してみたいものだ」と言ってきた。機会があるのなら、俺
もやってみたい。

入試の時の織斑先生との模擬戦では、公平を保つたためということ
お互い訓練機だった。良い勝負は出来たと思うが、地力に差が出たの
で負けてしまった。あれは悔しかった。

山田先生からは「織斑先生と一時間も互角に戦えたのですから、
もっと自信を持ってください!!私なんて……」とフォローされて、な
ぜか落ち込み始めた山田先生を慰めることになってしまった。

「それにしても翔平、またスラスターの使い方上手くなつてない？」

「カポエイラの動きをやるには、スラスターの使い方で何とかするしかないからな」

「……まずISであるの動きをやらうとすること自体がおかしいのよ。私は出来なかったわ」

刀奈に呆れられていると、一夏が準備できたという知らせが届いた。

「じゃあさっさと勝ってくるか」

「うん、頑張ってるね」

……よし、頑張ろう。

クラス代表決定戦最終試合、俺対一夏の試合が始まる。

俺がアリーナに出ると、一夏は既に出ていた。

「待たせたな、さあやろうか」

「俺としては、翔平に勝てる気が全くしないんだけどな……」

そんなこと言われても知らない。俺は今刀奈からのエールで気分がいいんだ。セシリアに比べたらメンタルが強そうな一夏ならそれなりにボコつても大丈夫だろう。何より、これから一夏が調子に乗らないために、俺はここで出鼻を挫いておく。

先ほどの試合とは違って、2人がアリーナに揃ってすぐにカウントダウンが始まる。

「頑張れよ」

「試合する相手にエール送られてもなあ……。まあやってやるさ」

俺はセシリア戦同様、まずはシロガネとクロガネを展開する。

一夏は近接用の武装しか持ってないんだから、遠距離武器だけで充分。シールドビットも必要なし。セシリアみたいに懐に入られると危険だが、俺はそんなことはさせない。

一夏は唯一の武装の雪片式型を展開する。

そして、カウントが0になり試合が開始された。

俺はセシリア戦とは違い、開始と同時に動かなかつた。逆に一夏は俺に突っ込んできている。やはり猪突猛進だ。

俺は突っ込んでくる一夏をギリギリまで引き付ける。そして、最小限の動きで零落白夜を発動させているエネルギー刀を躲す。その時、一時的に展開したエスパーダで攻撃するのを忘れない。

それにしても、いくら躲す自信があると言っても掠っただけでシールドエネルギーがかなり削られるというのは恐ろしい。これと似たようなものを、あの織斑先生が使っていたということに戦慄を覚えた。専用機同士での模擬戦はちよつと遠慮したくなってきたな。

何にしても、これで一夏の背後を取った。一夏が状態を立て直す前に俺は動く。シロガネとクロガネで弾幕を張りつつ、俺は左肩から、シールドビットとは違うもう一つのビット——ライフルビットを展開した。

ライフルビットはシールドビットのように防御に使うことはできないが、その分レーザーの威力はシールドビットよりも高くなっている。

俺は4基のライフルビットと、手に持つシロガネとクロガネで一夏をみるみるうちに追い込んで行く。

一つのレーザーを躲されたら、躲した先を狙い、躲す方向を予想して複数のレーザーで多方向から一気に狙う。やってる本人からしたら楽しいが、相手からしたら地獄だと思う。

「っだああああ」

一夏も雪片式型で弾いたりして、何とか避けようとしているが、正直、動きが読みやすいので余計に狙いやすくなっている。これを耐えるには、キリト君並みの動きが必要となる。弾丸すべてを剣で弾くのはまず無理だと思うけど。

恐らく白式のシールドエネルギーかなり削られただろう。

「そろそろ終わるか」

俺はライフルビットで一夏の動きを止めてるうちに、シロガネとクロガネを連結させた。

連結させたことにより、大きさはセシリアのブルーティアーズのレーザーライフルと同じほどになり、威力はそれ以上になった。

「狙い撃つぜ!!」

そう言いながら、俺はライフルピットからの連続攻撃で一夏の動きを予測し、躲しきれないタイミングで高威力のレーザーを放つ。それが一夏に直撃したことによって、白式のシールドエネルギーは0となった。

何気に言ってみたかったセリフを言えたことに喜びながら、俺は試合終了のアナウンスを聞いた。

結局クラス代表決定戦の最終試合は、ものの数分での決着となった。

試合が終わりピットに戻った俺を出迎えたのは刀奈と、なぜかいたセシリアだった。

「お疲れ様、瞬殺だったわね」

「これであいつも、これからしつかりと成長していつてほしいな」

「さっきのボロ負けで、立ち直れなくなったりしないの?」

「もともとメンタルは強いと思うし、フォローもするつもりだから大丈夫だろう」

俺は刀奈と会話しながら、ベンダボールを待機状態にしてベンチに座り刀奈から受け取ったタオルで汗を拭く。

その一連の動作を見ていたセシリアが口をポカンとして見ていた。

「あ、あの、翔平さんと楯無さんは親しいようですけど、お知り合いなのですか?」

セシリアは刀奈と自己紹介は済ましたようだが、俺との関係などはまだ説明されていなかったようだ。

「まあ幼馴染みたいなものかな。それより、どうしたんだ？」

「その、先ほどの試合を見て、翔平さんをお願いしたいことがあるのですが……」

「ビットの扱いを教えてください？」

「は、はい!!」

一夏の試合も見ていただろうし、教えてほしいと言ってくるのは予想していた。なので、教えてあげてもいいのだが……。

「残念だけど、教えることは出来ないかな」

「何ですかの!?!」

「いやね、教えてあげてもいいと思うんだけど……」

「なら教えてください!!」

さてどうしようかと思っていると、横から刀奈が助け船を出してくれた。

「セシリアちゃん、翔平から教えてもらうのはやめておいたほうがいいわよ」

「どうしてですか?」

「この人、人に教えるのが壊滅的に下手だから」

そうなんだよね。厳密に言えば、人から教わったことを自分の中で分かりやすいように変換しちゃうから、それを人に伝えてもほとんど分からない。それにIS関連になれば、ほとんど感覚やイメージで動かしているのに人に教えることは出来ない。セシリアは理論派だったはずだから余計に伝わりにくいと思う。

そのことをセシリアに伝えると、渋々納得して引き下がってくれた。

「まあでも、ビットの扱いに関しては慣れが大きいと思うぞ」

「慣れですか?」

「何回も練習してるうちに、精度は上がっていくさ」

「……分かりましたわ」

話が終わり、ビットからセシリアが出て行くこうとするのを俺は呼び止めた。

「あ、セシリア」

「何でしょうか？」

「クラス代表についてなんだけど……」

「というわけで、クラス代表は織斑君に決定されました」

「何で!？」

次の日のホームルーム、山田先生の発表に一夏が立ち上がって異議を申し立てる。

「代表決定戦は翔平が全勝だったじゃないですか!!なら翔平がクラス代表じゃないんですか!？」

「上代君は辞退しました」

「じゃあセシリアは!!」

「オルコットさんも辞退しました」

「何で!？」

一夏は頭を抱えている。昨日、セシリアと話して決めたことだ。一夏に経験を積ませるためというところでセシリアにも納得してもらい、一夏をクラス代表にするということにした。

「一夏は俺らの中で一番弱いからな。経験積んでこい」

「そんなこと言って、お前面倒くさいだけだろ」

「当たり前じゃん」

「ふざけんな!!」

一夏が叫ぶが、織斑先生に「静かにしろ」と言われて出席簿アタックを喰らった。さすがに今のは一夏が可哀想だ。

「それに俺は生徒会の方があるからな」

「ならセシリアでも……」

「私は入学初日に、自分勝手な発言で皆さんに不快な思いをさせてしまいました。そんな私がクラス代表に値するとは思いませんわ」

セシリアは先ほどクラス全員にこれまでの態度について謝罪して、

許してもらえた。織斑先生にも俺との試合が終わってすぐに謝罪に行ったらしく、軽めの出席簿アタックで許してもらえたらしい。

結局逃げ道のなくなつた一夏が諦めたことで、正式にクラス代表は一夏に決定となった。

まああのままいつても、最後は織斑先生の言葉で問答無用に決定されていただろうが。

「では、これよりI Sの基本的な飛行操縦を実践してもらおう」

整列している生徒に向けて、織斑先生はそう言った。今はI Sの実技の授業中だ。

「上代、織斑、オルコット。試しに飛んでみる」

「了解です」

「分かりましたわ」

織斑先生に名指しで指名されたので、ベンダボールを展開する。面倒臭いが、それを言ったら殴られるので口には出さない。セシリアもブルー・ティアーズを展開した。が、一夏は白式の展開に苦戦していた。

一夏がようやく展開できたところで、織斑先生からの指示を受けて上空に飛ぶ。

機体のスペックだけを見れば、機動力は白式＜ベンダボール＞ブルー・ティアーズとなるが、一夏はほぼ素人なので俺がこの中では一番早い。少しスピードを落として、セシリアと合わせて飛ぶ。

「代表決定戦でも思いましたが、翔平さんは機動技術も高いのですね」
「俺の中ではこれが一番自信持つてるからな」

2人で話しながら、時折下を見て一夏が付いてこれるように調整する。

一夏がぶつぶつ言いながら飛んでいるが、多分参考書に載っていた内容を思い出しているのだろう。結局はよく分からないと言って諦

めた。

「イメージは所詮イメージ。自分がやりやすい方法を模索するほうが建設的ですよ」

「そうそう、結果的に飛べるようになればその過程はどうでもいいんだよ」

行き詰まっている一夏に、俺とセシリアがアドバイスを送る。

俺も初めはよく分からなかったが、そのうち慣れた。というか、無理矢理慣れさせられたと言うほうが正しいのかもしれない。ある意味優秀な教官だったが、あれは一般的な学校では問題になるレベルの厳しさだと思う。

当時を思い出して震えながら飛んでいると、一夏LOVEとなったセシリアが一夏にアプローチをかけている。青春だなあと思いながら見ていると織斑先生から注文が入った。

「3人とも、急降下と完全停止をやってみる」

「り、了解しました。ではお先に」

セシリアが先陣を切って降下していった。地面に着地したのを確認して、俺も降下する。

「じゃあ俺も行くけど、死ぬなよ」

一夏に一言残して降下を開始、普通にやっても面白くないので着地できるギリギリまでスピードを出し、地面に当たる直前に、両手両足のスラスターを使って1回転して着地した。辺りから拍手が送られる。ちよつと照れくさい。

そして、最後の一夏は期待通りに地面に大穴を開けてくれた。

「それでグラウンドに大穴が空いていたのね」

「顔が地面に埋まったよ、あいつ」

部屋で今日あった出来事を刀奈と話す。

さつきまで生徒会室で仕事をしていたが、今日は仕事が少なかったので早めに解散して帰ってきた。簪は出雲に行っていて学園にいな

い。

「この後は、食堂で一夏君のクラス代表就任パーティーをするのよね」

「ああ、そろそろ行かないといけないな」

時計を見ると、クラスメイトから伝えられた時間が迫っていた。

「例の新聞部の子がいろいろ聞いてくると思うわ」

「ああ、前言ってた刀奈の友達か」

刀奈と仲の良い新聞部副部長の黛薫子^{（ト）}のことは、以前話で聞いていた。インタビューで聞いた話を捏造して記事にするのは相変わらずらしい。

「でも、そいつは俺たちの関係は気づいてるんだろ？」

「ええ。だから、^{更識家}家の話以外はある程度話しちゃってもいいわ」

「まあ変に隠してたって、そのうちバレることだしな」

更識家として、俺達が付き合っていることは周りにバレても大丈夫ということになっている。もちろん更識家に関することは機密事項なのでバレてはいけないし、そもそも知っている人も少ないと思うが、それを除けば大丈夫だろうということが刀奈と槍一郎さん、俺で話し合いで決まった。

刀奈はロシア政府からも公表してもいいという許可をもらったらしい。なんなら世界で2人しかいない男性操縦者のうちの1人である俺が相手ということ、ロシア政府は俺達^{（ト）}の関係を大々的に広めたらしいが、俺も刀奈も必要以上に知られるのは嫌なので、遠慮してもらった。どうせ、IS学園の生徒を經由して世界中に広まっていくのだから……。コソコソ付き合うのも嫌ということで、俺も刀奈も諦めることにした。

「じゃあ行ってくる」

「私も後で薫子ちゃんと一緒に行くわ」

「分かった」

刀奈とキスをしてから、部屋から出て食堂へ向かった。

食堂に到着すると、すでに俺以外のクラスメイト全員が集まっていた。

「あ、上代君!!間に合ったんだ」

「生徒会の仕事があったより少なかつたからな」

「あ、しょうちゃん来たんだ」

「…………お前、手を出すの早いな」

俺に気付いたクラスの女子から声をかけられる。そこに、手にはお菓子を持った本音が近づいてきた。パーティーということで机の上にはお菓子やジュースが置かれているが、すでに本音はそれに手を出していた。

「それじゃあ上代君も来たし時間になったから始めますか」

その一言で、クラスの数人が手にクラツカーを持つ。

「織斑君、クラス代表決定おめでとー」

「二二「おめでとー!!!」」

掛け声とともに複数のクラツカーが鳴りパーティーが始まった。まだぶつぶつ言ってる一夏に対して、脇に座るセシリアが昼間と同じ理由を言つて諦めさせている。

「いやあセシリアは分かつてるねー」

「せっかく男子がいるんだから持ち上げないとねー」

「上代君は生徒会があるから駄目みたいだし」

女子たちから矢継ぎ早に言われて、諦めた一夏。そして、女子にいろいろと言われるのを見て不機嫌になる筈。こういうところは相変わらずだ。まあ別にそれに対して口は出そうとは思わないけど。

「はいはい、新聞部です」

しばらくクラスメイトで話をしていると、シャッター音とともにそんな声が聞こえてきた。

……………出たな

「しようちゃん、今出たなって思ったでしょ」

「……顔出てた？」

「おもいつきり出てたよ」

「これからは気を付けよう。」

「噂の男性操縦者2人にインタビューしたいんだけど、いいかな？」

「俺は大丈夫ですよ」

「あ、敬語はいらないよ。同い年だつて聞いているから」

「じゃあ遠慮なく」

薫子に聞かれ、俺は了承する。俺の返答を聞いた一夏も渋々といった感じで了承した。

「じゃあまず織斑君から、いいかな？」

「はい」

まず一夏のインタビューが開始された。一般的な質問や、かなりプライベートな質問までされている一夏を見ると、いつの間にか食堂に入っていた刀奈が近づいてきた。そういや来るって言ってたっけ。

「流石、仕事熱心な新聞部ね。インタビューに容赦がないわ」

「見てる分にはいいけど、次俺がインタビューされるって考えると……」

「あんなに容赦なく聞かれるのか……。刀奈とのことは話すつもりだけど、ああもぐいぐい聞かれるのも嫌だな。」

「じゃあ次、上代君」

一夏へのインタビューが終わり、俺の番となった。腹は括った、どんな質問でも答えてやる。あ、更識家関連は無理だけど。

「いろいろと噂は聞いているよ、上代君」

「奇遇だな、俺もいろいろと聞いているよ」

2人してハハハと笑うが、目は笑ってない。周りの人たちは少し引いている。

俺は聞いたんだぞ、刀奈との噂を2、3年で広めた出所がお前だつて。

「それじゃあインタビューを始めるけど、とりあえず例のカミングアウトについて聞いておこうかな」

「いきなりだな」

「だって、この学園の生徒全員が気にしてると思うよ。それで、自己紹介で言ったその好きな人とは、ぶっちゃけ今どういう関係なの？」

薫子はその質問をした瞬間、1組のクラスメイトも、たまたま食堂にいた生徒も、片付けが終わって帰ろうとしていた食堂の調理スタッフの人達も、たまたまそこにいた男運の悪いと噂の榊原先生も、その場にいた全員が俺の言葉に注目した。

……こいついきなり突っ込んできたな。

食堂にいる全ての人からの視線を浴びつつ、俺は口を開いた。

「この前から付き合い始めたな」

一瞬の沈黙の後、食堂がどつと湧いた。

「もう付き合ってるんだ」

「カミングアウトの後から付き合い始めたのかな」

「チャンスは完全に無くなったんだね…」

「いやいや、ここからが楽しいんじゃない」

「NTRだね、協力するよ」

「あんたら、そのうち捕まるよ」

食堂の至る所からひそひそと会話が聞こえてくる。榊原先生は調理スタッフの独身女性と一緒に涙を流していた。……というか、今時の女子高生って昼ドラみたいなのドロドロしたやつばっか見てるわけ？やたらとNTRって聞こえてくるんだけど。

「ちなみに、その相手ってこの学園の人なの？」

「そうだけど、誰か分かって聞いているだろ？」

「本人の口から聞かないと、確証はないからね」

「なら、簡単に噂を流すなよな」

「……ごめん、私もあんなに早く広がるとは思わなかった」

女子高生の怖さを感じていたら、薫子がさらに突っ込んで質問してきた。といっても、俺の彼女が刀奈だつてある程度分かつて聞いてきてるのだろう。その上で、俺の口から言わせたいらしい。噂に関しては、まあ俺がそもそもの発端だから許そう。

「俺の彼女はお前の想像通り、この学園の生徒会長の更識楯無だよ」

「その通り、私が翔平の彼女よ」

俺がそう言った瞬間、刀奈が後ろから抱きついてきた。首に回された手に持っている扇子には”恋人”と書かれている。

刀奈のいきなりの登場に呆気にとられる1組メンバー。ちなみに、つい直前まで気配を消してさりげなく1組のクラスメイトに紛れ込んでいた。多分それに気づいたのは俺と本音ぐらいだろう。

薫子はやつぱりかーという顔をしている。そして、最も反応したのはたまたま食堂に来ていた2、3年や榊原先生など、刀奈のことを既に知っている人物だった。

「……ええええええええ?!?!?!」

そりや驚くだろうな。ただでさえ有名な俺の彼女が、生徒会長で学園内でも当然有名な刀奈だったんだから。でもそこまで動揺していない2、3年生もいる。多分これまでで俺と刀奈と一緒に歩いたりしているところを見たことがあるのだろう。というか、さつきより明らかに食堂に人が増えている気がする。何故だ？

「それは、お兄ちゃんが食堂で恋バナするっていう情報が寮で回ってきたから」

「簪……いきなり現れて、さらつと人の心を読まないでくれ」

刀奈に抱きつかれて、背中に感じる胸の感触に気を取られていて簪

の接近に気がつかなかった。そしていきなり心を読まれてしまった。最近はまだ諦めている、この姉妹に心を読まれるのは。

その後、馴れ初めなど刀奈とのエピソードを色々と聞かれ、答えられる範囲で答えた。

「せっかくなつちゃんがいるんだし、彼女さんにも質問していいかな？」

「別にいいけど、そんなに色々聞いて記事にまとめられるの？」

「大丈夫、特別号で出すから」

何と、俺と刀奈の話だけで新聞1つ作るらしい、マジかよ。そこまですれどきされてるのかなあと思ったが、周りの生徒が目を光らせているのを見ると、注目されてるんだなと思う。

「幼馴染みたいな存在だったってさっきの話で聞いたんだけど、たちやんから見ても上代君ってどんな人なの？」

「そうね…」

特別号のため、今度は刀奈に質問した薫子。この質問に対する刀奈の言葉は、俺も興味が出る。俺も含めたその場の全員が刀奈に注目する。

「気遣いもできて頼りになる存在ね。私が落ち込んでたりしたら優しい言葉で励ましてくれたし。イケメンよ」

多分楯無就任の時のことを言っているのだろう。嬉しいけど、とても嬉しいけど、すごく恥ずかしい。女子達はキヤーキヤー言ってる。復活した独身女性陣も混じってキヤーキヤー言ってる……。

「あと私関連で彼を怒らせたなら、大変なことになるわ」

「どういうこと？」

「この前翔平と2人で外出していて、彼が席を外した時にガラの悪い男連中に私がナンパされたのよ。鬱陶しいし、その頃はまだ付き合ってたんだけど私も翔平のことが好きだったから断ってたけど手を掴んできてね。そしたら翔平が戻ってきてその光景を見ちゃったの」

「それで、どうなったの?」

薫子が息を飲んで尋ねる。周りの人たちも興味津々に聞いている。「翔平、私の手を掴んでたその男を見てブチギレちゃって。結局その男達全員病院送りにしちゃったのよ。特に手を掴んでた男は酷かったわね。ほとんど半殺しだったわ」

あの時は冷静じゃなかったと今でも思う。葵さんからは「お前は楯無が絡むと途端に冷静さを失う」と言われ、仁さんからは「お前普段は大人っぽいのに、楯無関連になるとたまに子供っぽくなるよな」と言われてしまった。全くその通りなので何も言い返せなかった。

「基本的にはかっこいいけど、可愛いところもあるわね。普段はしっかりしているように見えて、たまに抜けてるところがあるからそのギャップが可愛いわ」

「ほほお…、例えば?」

「例えばそうねえ…：小学校の時翔平が毎日学校に行くときに挨拶していたおじさんが実はただの案山子だったのは笑ったわね」

これは全く嬉しくない。ただただ恥ずかしいだけだ。

「他には?」

「そうね…」

「もうやめてくれ!!!」

さらに追い打ちをかけられそうになるので必死に抵抗する。これ以上、心を挟らないでほしい。恥ずかしくて死にそうになる。

「じゃあ最後に2ショット写真撮らしてもらってもいいかな?」

ようやく、インタビューは終わりらしい。最後の刀奈への質問でどつと疲れた。

当然のように2人で焼き増しを頼んで写真を撮り、俺と刀奈へのインタビューは終了となった。

その後、専用機持ち3人でも写真を撮ることになったが、何故かクラス全員とさらに刀奈と簪まで入ってきていたが、薫子がOKを出し

たので大丈夫だろう。

翌日、一夏と専用機持ちとしての俺へのインタビューに関する記事が載った通常盤の学内新聞と、俺と刀奈へのインタビューに関する記事が載った特別版の学内新聞がそれぞれ掲示された。

後記の新聞の方が人だかりが倍以上あつたらしい。さらには新聞部への問い合わせが殺到し、結局各クラスに一部ずつ配布することになったと、疲れ果てた薫子が生徒会室にやってきて語った。

ちなみに職員室と食堂スタッフからも一部ずつ発行してほしいと言われたそうだ。

「転校生？」

新聞部からインタビューを受けてから数日が経ち、クラス対抗戦が近づいてきたある日の朝、教室へやってくるとそんな話をクラスメイト達が話していた。

「あ、上代君おはよう」

「おはよう」

1組では、何か話題があると一夏の席の周りに集まるのが恒例となっている。今も一夏を中心に人だかりができています。

ああ、そういやそろそろ鈴が転校してくる時期か。

「専用機持ちは1組と4組だけらしいから、楽勝だよ」

「その情報、古いよ!!」

1組の誰かが言った言葉に誰かが反応し、教室内にいた俺たちは全員、入り口に立つツインテールの小柄な人物に注目した。

原作は、着実に進んでいる。

1組の入り口に立ち、鈴は自分が中国の代表候補生で、さらにはクラス代表に就任したことを高らかに宣言した。そして、それを見ていた一夏の言葉で鈴がキレて、その後教室にやってきた織斑先生に出席簿アタックを喰らった。

最近こういう原作であったイベントを見ると、とても懐かしく感じる。小さなころの体験を思い出してデジジャブを感じるようなものだ。

その後、午前の授業を終えて昼休みになったので昼食を取るために学食へと向かった。

ちなみに今日は学食で食べるが、刀奈が弁当を作ってくれて生徒会室で一緒に食べることもある。基本的に俺の味の好みを熟知している刀奈が作る弁当は本当に美味しいから毎日食べたいが、生徒会長としての仕事や、楯無としての仕事などやることが多いことは知っているので、たまにでいいとは伝えてある。

「お、今日は翔平は学食なんだな。一緒に食べようぜ」

「俺はいいけど、例の中国の代表候補生はいいのかよ」

「みんなと一緒に食べればいいだろ」

そう言っただけで学食へと向かう一夏と、何とも言えない顔で後を付いていく箒とセシリア。

「お前らも大変だな」

「……ああ」

「……そうですわね」

なんだか見えていて可哀想になってくる。相談ぐらいなら乗っけてやろう。力になれるかわからないけど。

「あ、翔平」

食堂に到着して、先に到着していた刀奈と合流した。俺と同じように一夏も鈴と合流したようだ。箒とセシリアはとりあえず様子を見

ることにしたのか、2人から一步下がった位置から付いて行っている。

「あの子が転校してきた中国の代表候補生？」

「みたいだな」

「なんだか小さくて可愛い」

「それ絶対に本人に言うなよ」

ただでさえスタイルの良い刀奈からそんなことを言われたら、鈴は必ずブチギレるだろう。

「そういえば、虚は？」

「今日はクラスの友達と一緒に食べるそうよ」

「なるほど。簪と本音は整備室で食べるらしい」

簪の専用機開発は順調に進んでいるようだ。予定では夏休み前には完成しそうだと言っていた。分からないところは楠姉妹に質問しているようだし、俺や刀奈が手伝えるところは手伝っているので原作よりも早く完成するだろう。

それは嬉しいのだが、最近簪たちと食事をとったり、一緒に行動することが少なくなってきた気がする。そのことについてこの前それとなく聞いてみたところ、「付き合いだしてからお兄ちゃんとお姉ちゃんを見てると、料理が全部甘くなる」と言われた。俺も刀奈も、そこまですで人前でイチャイチャしてないと思うのだが、その時の簪のどこか諦めたような表情を見て何も言い返せなかった。

他愛もない話をしながら食事を続け、2人が食べ終わったので食器を返しに行こうとしたとき近くから「ガタツ」つという音を立てて箸とセシリアが立ち上がった。

ついに我慢できなくなったか。

先ほどから隣のテーブルで、仲良さげに話す一夏と鈴を見て「ぐぬぬぬ…」といった表情を受けながら睨んでいた箸とセシリアが、とうとう我慢の限界に達したらしい。一夏に詰め寄る2人を見て、とりあえず刀奈の方を見て確認した。

——どうする？俺は別にスルーしてもいいんだけど

——折角なんだし、あなたも自己紹介しておけば？

——そうするか 刀奈は？

——私も軽く挨拶しておくわ。どうせ例の新聞のせいで私のことも知ってると思うけど

刀奈と目線だけで会話し、とりあえず鈴に自己紹介することに決めた。

「あの2人、今日だけで会話しなかった？」

「久しぶりに学食でお昼食べてるの見れたからラッキーと思ったけど……」

「このままじゃ私達糖尿病よ」

「…私コーヒー買ってこよ」

「…私も」

「あ、さっき見たけどブラック売り切れだったよ」

「…嘘でしょ」

周りの人達が何か話しているが俺は気にしない。

最近学園内のブラックコーヒーの購入率が倍増しているらしいが、それも俺は気にしない。女子高だったんだし、もともと少なかったんだろう。きつとそうだ。

食器を返して戻ってくると、さつきよりも鬼気迫る雰囲気で箒とセシリアが一夏に詰め寄っていた。何でも誰が一夏にISの操縦を教えるかということと言い争っているらしい。

先日俺が一応教えてみたが、やっぱりというか何というか、一夏は俺の言うことをほぼほぼ理解できなかったの、ある程度の練習メニューだけ渡したただけだ。まあそれも、箒とセシリアの影響でほとんど出来ていないと思うが。

付き合いの長い刀奈や簪だったら俺が言いたいことを何となく理解してくれて、それを脳内で整理して一般的な言葉に直して聞かれるので、ある程度教えることができる。といっても俺が教えることもあまり無いが…。

それが、出会ってからあまり時間が経っていない人だと、やはり俺が勝手に脳内変換した言葉は受け入れてもらえないのだ。一生懸命教えても、「ごめん、意味わかんない」といわれた時は結構悲しくなる。まあ刀奈が慰めてくれるからいいんだけど。

白熱する言い争いを少し離れていた場所から刀奈と傍観していると、ようやく話が落ち着いてきたので一夏達に近づく。すると、俺と刀奈に気付いた一夏が声をかけてきた。

「翔平、ちょうど良かった。紹介するよ」

「お前、俺と一緒に飯食べようって言ったの忘れてただろ」

「あ……悪い」

「まあいいけどさ」

やはり俺の存在を忘れていたようだ。まあ久しぶりの幼馴染との再会だったんだから仕方ないとは思うけど。

一夏に呼ばれたので俺と刀奈はセシリアの横に並ぶ。俺たちを見た鈴の第一声は、「あ、新聞に載ってた人達だ」だった。今日転校してきた生徒にまで知られているのか。まあクラスに配られた例の特別号の新聞は、大半のクラスが掲示しているらしいので目には入るし、クラスメイトに詳細は聞くだろう。

ひとまず、一夏がそれぞれ簡単に紹介する。まあ俺は知ってたんだけど。その後、本人同士で自己紹介した。

「まあいろいろと知ってるだろうけど、1組の上代翔平だ。年齢は1つ上だけどタメ口でいいぞ」

「この学園の生徒会長をしている更識楯無よ。よろしくね」

「2組に転校してきた凰 鈴音よ。あの新聞も見たし、カミングアウト

トのこととかあなた達のことはいろいろと聞いてるわ」

やはり、いろいろと聞いてるようだった。まあでも、尾ひれがついたような噂は今のところ流れてないようなのでいいか。

薫子に頼んで新聞の一部に、俺が刀奈をナンパしようとした連中を病院送りにしたエピソードと、”事実無根な噂を流したらどうなるかわかってるよな?”という脅しを俺のコメントとしてそれとなく記載してもらった。

その影響が今のところは表れているようだ。

俺達が自己紹介を終えたタイミングで予鈴がなったことで、この場は解散となった。

その日の放課後、俺はベンダバールの定期メンテナンスのために出雲へと向かっていた。

出雲に到着して中に入って受付のお姉さんと挨拶をかわす。ニヤニヤしていたのは俺と刀奈の話を聞いたからだろう。刀奈と恋人となつてから出雲を訪れるのは今日が初めてである。

その後も、すれ違う様々な人からニヤニヤされたりおめでとうと言われたりした。……もしかしてこここの職員全員知ってるんじゃないか？

嫌な予感を感じながら、俺は楠姉妹が待つ第一研究室に到着して、端末で一言挨拶してから入室する。

「やあ翔平君」

「こんにちは、華さん、彩さん」

挨拶を済ませて俺はベンダバールを2人に預けた。

この2人もニヤニヤしているが、無視する。いちいち反応していても疲れるだけだと分かっている。

「じゃあメンテナンスするからどっかで時間つぶしといて」

「多分1時間ぐらいで終わると思うから」

「了解」

メンテが終わってからじつくり話聞くからという言葉は聞かなかったことにして、俺は第一研究室から出た。

さて、時間を潰すと言ってもどこでできることなんてたかが知れている。とりあえず、俺は近くにあるラウンジに向かった。

「あ、翔平さん」

ラウンジのニヤニヤしている職員からコーヒーを受け取ったタイミングで後ろから声をかけられた。

「よお豊、久しぶり」

「はい、お久しぶりです」

有川ありかわゆたか豊は俺と同じように非合法な実験などを行っていた施設から保護された経験を持ち、俺が初めて更識の任務を手伝ったときに潰した施設から保護された少年だ。俺の一つ下で、簪や一夏と同じ年の豊は顔が中性的で、楠姉妹曰く美少年だが、美少女にも見える。この意見には正直、俺も賛同する。本人に言ったら怒るけど。

豊は現在出雲が引き取っていて、藤丸さんが実質的な保護者という扱いとなっている。当初は、別の施設に預けるということになっていたのだが、楠姉妹が豊を気に入ったのだ。

一時的に出雲で保護していた時に、豊が暇と言って施設内を散策していた時に第一研究室を訪れた。その際豊は楠姉妹がやっていたISの整備を見て興味を抱いたようで、その事に気を良くした楠姉妹は、簡単ではあるがプログラミングを教えた。そこまでは微笑ましい光景だった。俺や楠姉妹が驚いたのはその後だった。豊は教えられたことを瞬く間に吸収していった。基礎を教えると自分で勝手に応用まで覚えていったのだ。一目見て分かった、豊は天才だ。俺と同じように驚いていた楠姉妹と同じように技術者としての才能があるとすぐに分かった。

結局、「キヤー何この子凄い!!可愛い!!」「この子出雲で引き取りましょう!!」と興奮した楠姉妹が半ば一方的に決めて、藤丸さんにはほ

ほぼ事後報告になった。まあ藤丸さん本人が別にいいと言っていたので大丈夫だったんだろう。

そんな経緯があり、今では豊は楠姉妹の弟子となっている。

「今日はベンダバールのメンテですか？」

「そう。お前の師匠たちにテキトーに時間潰しておけって言われて暇してるんだよ」

俺と同じように、職員から飲み物を受け取った豊と一緒に、近くのソファアに座る。このラウンジでは、施設関係者であればコーヒーといったドリンクが無料でもらえる。

「今日は彼女と一緒にじゃないんですね」

豊の言葉に飲んでいたコーヒーを吹き出しそうになるも、何とか耐えた。

「なあ、ここの職員ってみんな知ってるわけ？」

「翔平さんと楯無さんのことを知っている人ならそうだと思いますよ」

「何でそんな知れ渡ってるんだよ……」

「それは、やっぱりあれじゃないですか？」

豊が指さす方向を見ると、そこには例の特別号の新聞が貼ってあった。

「何でここに貼ってあるんだよ!？」

「師匠たちが貼ってるのを見ましたよ」

「何で奴らが持つてるんだよ!？」

よりによってあの2人が手に入れていたとは……。そりゃ知れ渡るだろう。このラウンジは出雲で働く人の大半が利用する場所なので必然的に多くの人が目にする。まあたまたま訪れたお客さんとかには見られないからまだ良かったけど。

「なあ豊。華さんと彩さんはあの新聞を誰から手に入れたか言っけなかったか？」

「ほんと、本音ちゃんには感謝ねえ」と言っただのは聞きました」

「……………」

あいつ、まだ懲りてなかった。また簪に協力してもらわないと。

そのまま豊と、途中からラウンジに来た藤丸さんと話して時間を潰した。

一時間ほど話した時、携帯に華さんから連絡が来たので豊と一緒に第一研究室へと向かった。

「メンテ終わったよー。あ、豊君も一緒だったんだ」

「あ、翔平君ちよつといい？」

第一研究室に入ると、華さんからメンテが終わったことを伝えられ、彩さんに呼ばれた。

「どうしました？」

「シールドビットなんだけど、言ってた通りに調整しておいたから」

ベンダボールのシールドビットは、相手からの攻撃を防ぐ際、エネルギーシールドを展開して防御する。この動作を行うのに、少量だが自分のシールドエネルギーを使用するので、俺は相手からの攻撃が当たる瞬間のみエネルギーシールドを展開するようにしている。しかし、この前試合をしたセシリアのブルー・ティアーズのようにそこそこの威力のビームなどを受けると、それだけ消費エネルギーも多くなった。

俺が今回彩さんに頼んだのは、これまで全体に展開していたエネルギーシールドを半分にしてもらい、より強力なシールドにしてもらった。これで360。防げていたのが、前方180。のみしか防げなくなった。その分、省エネになったので、俺としてはありがたい。

「デیفエンスモードも調整したから、今度試しといてね」

「分かりました、ありがとうございます」

シールドビットは4基あるが、それらを連結させることができる。4基全てを連結させた状態をデیفエンスモードと呼んでいる。敵の攻撃が強力であれば、デیفエンスモードを使う機会もある。今度のクラス対抗戦で襲撃してくるであろうゴーレム対策として、これは

必要になると考えている。

メンテが終わったベンダブルを受け取ってとっと帰ろうとするも、楠姉妹に捕まった。

「さて、じゃあ楯無ちゃんとの話をゆっくりと聞かせてもらおうかな」

「私たちの連絡無視ったんだから、覚悟してね」

「あ、僕も聞きたいな」

俺が解放されたのはそれから一時間後だった。

楠姉妹と豊からの質問攻めから解放され、俺は精神的な疲れを感じながら学園に戻った。

最後の無駄な1時間のせいで時間が遅くなったため、帰りにどこか寄って夕食を済ませようと思っていたら、藤丸さんに「今日スープカレー作ってるんだけど、食べてくかい？」と言われたので有り難く頂くことにした。

藤丸さんの作るスープカレーは本当に美味しい。出雲で本人の気まぐれで作るが、毎回数量限定で配るので所長室の前にはそのカレーを求めて列ができる。……この人無駄に女子力が高い。それこそ、そこから辺が壊滅的な楠姉妹と比べると雲泥の差がある。

そういえば、さつき本音に連絡して例の新聞を楠姉妹に渡したことに関する弁明を聞いた。曰く、お菓子餅で釣られたらしい。いいネタ提供して報酬をたんまりと受け取ったようだ。ギルティ。

しかしよくよく話を聞いていると、どうやら楠姉妹は本音に話を持ち掛ける前から、すでに俺と刀奈が付き合っていることは知っていたようだ。本音が漏らしたのではないとすると、真犯人は別にいるということになる。……まあ大体の予想はついたが、確認のために楠姉妹に連絡を取って聞いてみた。電話に出た華さんに聞いてみると、意外とあっさり教えてくれた。「さつきいろいろと聞けたから」ということで教えてもらえたのだが、さつき話した内容が出雲内で知れ渡りそうで怖い。一応釘は指しておいたし、藤丸さんに頼んだので何とか食い止めてもらうことを期待しよう。

そうして教えてもらった真犯人、まあ予想通り仁さんだった。なんでもこの前飲んでた時に酔った仁さんが口を滑らしたらしい。理由はどうあれ情報を漏らしたことに違いはないのでギルティ。即刻、葵さんに連絡して例の日本酒を仁さんが勝手に飲んだことを伝えた。多分今頃少しづつ飲んでいたお気に入りのお酒が空になっているのを知った葵さんがブチギレているだろう。

そこまでのタイミングで、俺は学園に帰ってきた。なんだかすっ

きりした気分だ。

学生寮に戻り自室を目指して通路を歩いていると、ちょうど曲がり角の陰から飛び出してきた人物とぶつかり、ぶつかった相手はその衝撃によって倒れてしまった。

いきなり曲がり角から飛び出てきたことに対して、一言二言言つてやろうと思つて倒れた相手を見てみると、それは見知った顔、というか今日自己紹介したばかりの人物だった。

ひとまず手を差し出して相手、鈴を立たせる。

「大丈夫か、鈴？」

「ええ……ありがと」

俺の手に掴まつて立ち上がった鈴だったが、昼間に話した時より元気がなく、そして彼女は泣いていた。一目見ただけで何かがあったとということが分かる。

「とりあえず、俺の部屋に来るか？話ぐらいは聞くぞ？」

「……」

「事情は知らないけど、人に話したほうがスッキリすると思うぞ」

「……分かった」

頷いた鈴を連れて、自室へと向かう。

事情は知らないとは言ったけど、十中八九一夏関連で何かあったのだろう。そういえば原作で何かあったような気がするが、正直あまり覚えていない。

自室までの道中、鈴は一言も喋らなかつた。流していた涙は止まっているが、またすぐにもあふれ出しそうだった。そのまま会話のなのまま自室の前に着いたので、俺は鍵を開けて中に入る。

「まあ、とりあえず中入つて」

「……お邪魔します」

部屋の中に入ると、机に向かって何か作業をしていた刀奈が俺たちに気付いて振り返つた。

「翔平、お帰り。それと、鈴ちゃんだっけ」

「…はい、お邪魔します」

「なに翔平、彼女がいる部屋に堂々と女の子連れ込んだの？」

「頼むからそういう解釈はやめてくれよ!？」

鈴を部屋に連れてきたことで刀奈からジト目を向けられるが、すぐに視線を俺から鈴に向けた。

「とりあえず、顔洗ってらっしゃい。話はそれからよ」

「…はい」

おそらく、刀奈も鈴の表情を見て何かあったと察したのだろう。鈴を洗面所へと向かわせた。

「それで、何があったの？」

「俺もよく分からないけど、さつき廊下の角でぶつかったらあんな感じだったからほっとけなかった」

「まあ、確かにあの状態の鈴ちゃんを帰すのは気が引けるわね」
「だろ?」

察しが良い刀奈は分かってくれたようだ。

刀奈と話していると、顔を洗いに行っていた鈴が戻ってきた。

「コーヒーと紅茶、どっちがいい？」

「あ、コーヒーでお願いします」

「分かったわ、翔平はどうする?」

「俺もコーヒーで」

俺が答えると刀奈はコーヒーを淹れに行った。

俺がコーヒー好きということ、俺たちの部屋にはそこそこ良いコーヒーメーカーが置いてある。元々更識邸で使ってたやつだが、俺が入学する時に持ってきた。紅茶のティーパックもあるが、虚の淹れる紅茶には勝てないのであまり部屋では飲まない。放課後に生徒会室で虚の淹れた紅茶を飲み、部屋ではコーヒーを飲むのが最近のパターンだ。

「あんた達、本当に同じ部屋なのね」

「新聞に載ってただろ?」

「正直半信半疑だったわ。てつきり男2人が同じ部屋だと思ってたか

ら」

「まあ色々と事情があつたんだよ」

「色々ねえ」

鈴にジト目を向けられるが誤魔化す。なんか今日はずっとジト目向けられてる気がする。

そうこうしていたら刀奈が人数分のコーヒーを持って戻ってきたので、とりあえずコーヒーを飲んで鈴の話聞くことにした。

やはり、原因は一夏だった。

何でも、一夏と鈴は元々幼馴染だったらしく、鈴が中国に帰る前に一夏に言った「料理の腕が上達したら毎日酢豚を作る」という遠回しの告白の約束を、一夏が「酢豚を奢ってもらおう」と解釈していたらしい。

「ああ…」

「それは…」

刀奈と2人で何とも言えない表情になる。確かに間違つて解釈していた一夏が悪いとも思うが、一夏の元々の性格を考えると回りくどい言い方をした鈴も鈴で……。

刀奈の方を見ると、目が合った。

——どっちもどっちだよなあ、これ。

——でも、女としては鈴ちゃんの気持ちを考えると一夏君を非難しなくなる気持ちもわかるわ。

——一夏のあの性格はどうしようもないからな。

——一夏君のあの性格をどうにかすることが、学園の平和にも繋がる気がするわ…。

「ねえ、目の前でイチヤイチヤしないでくれない？」

「ああ悪い」

「ごめんね」

俺と刀奈の謝罪を聞いてはあとため息を吐く鈴。

「ま、まあでも、クラス対抗戦で勝負吹っ掛けたんだろ？それに勝てば

いいじゃん」

「当たり前よ!!絶対に勝つわ」

「でも、それだと翔平のクラスが負けることになるわよ」

クラス対抗戦で勝利したクラスには学食デザートの半年フリーパスが配られることになっている。それを聞いたスイーツ大好き女子たちは目を光らしていた。当然、一番喰いついたのは本音だ。まあどっちにしる当分奴の手に甘いものは渡らないが。

「俺は別に甘いものはそれほど好きじゃないからな」

「そうだったわね」

「じゃあ、私そろそろ部屋に戻るわ」

俺たちに話してスッキリして、俺たちの話を聞いて逆にテンションを下げた鈴は、部屋に戻るために立ち上がった。その鈴を刀奈が呼び止めた。

「あ、待って鈴ちゃん」

「何ですか?」

「お姉さんからアドバイスよ。勇気を出して素直になってみるのもいいんじゃない?」

「でも…」

「あなたの性格は何となく分かったわ。それでも、彼が変わらないのなら自分が変わらなくちゃ」

「…分かりました」

「いつでも話聞いてあげるから、また部屋にいらっしやい」

「ありがとうございます」

刀奈にお礼を言っつて、鈴は自室に帰って行った。

「そういえば、翔平はもう夕食食べたの?」

「ああ、出雲で食べてきた。藤丸さんがスープカレー作ったから」

俺がそういつた瞬間、刀奈が目の色を変えた。

「私の分は!?!」

顔を至近距離まで近づけて問いかけてきた。刀奈は藤丸さんのスープカレーが好物なのだ。それこそ、藤丸さんがカレーを作った

時に自分が手に入れることができなかつたら一日テンションが下がる。当然、俺が夕食で藤丸さんのカレーを食べたことを伝えて、刀奈がその話に喰いつくことは予想できた。

「そういうと思って、一食分だけもらってきた」

「ほんとに!? ありがとう翔平!!! 大好き!!!」

俺が荷物の中からカレーの入ったタッパーを取り出すと、刀奈が抱き着いてきた。「どうせ楯無君にも渡さないと後で大変だから、一食分渡しておくね」と言ってもらった藤丸さんには感謝だ。そのせいで、ギリギリ食えることができなかつた最後に列の最前列に並んでいた職員の人には申し訳ないと思う。まあ藤丸さんが次に作った時の優先券渡してたけど。

それにしても、大好きなのは俺なのか、カレーなのか……、まあ両方だろう。

「今のうちに鍋に移し替えておいて、明日の朝食べよ♪」

……両方だと思いたい。キッチンにスキップで向かう刀奈を見て、そう思った。

時は流れて、週が明けた。今日はクラス対抗戦の初日だ。

「これ、お前の作業か?」

トーナメント表を見ながら、俺は隣に立っている刀奈に聞いた。一回戦の第一試合の組み合わせが、『織斑 一夏 対 凰 鈴音』と書いてあったのだ。そして隣に立つ刀奈は一仕事終えたような表情をしている。

「だって、もしも2人が当たる前にどっちかが負けちゃったら約束が台無しじゃない」

「いや、まあそうなんだけどさ」

刀奈の言うことも確かだし、トーナメント表もちょうど一組から順

に右から埋めているので不自然ではないからまあいいか。どうせ、この第一試合しかやらないんだし。

「さて、移動するかな」

「どこに行くの？」

「一夏のピット。まあ一言ぐらい言っついてやろうと思って」

「じゃあ私は鈴ちゃんとのピットに行つてこようかしら」

「あ、俺そのままピットで試合観戦するから」

「あら、そうなの？」

「何かあつた時にすぐに出れるようにな。今日は嫌な予感がする」

例のゴーレムがアリーナに侵入してきた時に、少しでも早くアリーナに出ることが出来るために、ピットで待機しておくことにする。そして、さつき言つた嫌な予感とは、ゴーレムが侵入してくることはない。原作通りに、ゴーレムは一体しか侵入してこないのか、そこに俺は嫌な予感を感じた。俺というイレギュラーをあの手を打ってきそうな気がするのだから、ここに警戒する。

「……翔平の嫌な予感つて当たることが多いからね。分かったわ、私も後でそつちに合流する」

「了解」

さあどう動いてくるよ、狂った兎さん。

一夏のピットに到着すると、そこにはすでに箒とセシリアの姿があった。俺としては、この2人も反対のピットで待機している鈴も後から来るであろう2人も応援してやりたい気持ちはあるんだが、この前話を聞いた影響で少し鈴鼻肩になってる感がある。

まあ俺がどう思ったところで、頑張らなければいけないのは彼女たちだし最終的に決めるのは一夏なので、見守ることしかできない。

……というか、彼女たちの積極的なアプローチによって巻き起こる周りの被害をどうにかして食い止めることが俺には求められているような気がする。この前も、業者から生徒会長の刀奈に『どうして1025室のドアの修理依頼ばかりなのか』と苦情が伝えられた。3人でこれなのだ、これに後2人増えると考えたと、生徒会役員として何かしらの対策が必要なのはと考えてしまう。

まあそれは追々考えて、今は目の前の試合に集中しよう。

俺と箒、セシリアの激励を受けて一夏はアリーナへと出て行った。箒とセシリアは移動したので、今この場は俺一人だ。

しばらく経つと、俺のいるピットに刀奈が移動してきた。それと同じに一夏と鈴の試合が開始された。

試合は序盤から、鈴の専用機―甲龍に搭載されている衝撃砲による攻撃によって一夏が、回避に専念せざるを得ない状況となっていた。「砲身も砲弾も見えない、ね。それにしても一夏君は結構躲せてるわね。前の試合でも思ったんだけど、彼結構動体視力と反射神経が良いわね」

刀奈はそう言いながら手に持つ扇子を開いた。そこには『意外』と書かれている。ずっと昔から思っていることだが、この扇子ってどういう仕組みなのだろうか？一度本人に聞いてみたが、秘密と言われてしまった。京子さんから貰ったということだけは教えてくれたけど。「昔剣道やってたらしいからその時に鍛えられたんだろう」

初の試合となったセシリアとのクラス代表決定戦でも、その経験があったからこそ善戦することができたのだろう。元々身体は鍛えて

いたようだし、運動神経は世間一般の基準と比べても一夏は高いほうだ。あとは、もう少し頭の良さがあれば、セシリア戦でも勝てただろうし、今回の試合でも勝てるかもしれない。

「一夏君、何か仕掛けるつもりかしら？」

試合を見ていた刀奈が、そう呟いた。先ほど、戦闘中だというのに相手の鈴に話しかけるといふ余裕を見せた一夏が、何かを仕掛けようと機をうかがいながら旋回している。今のこの状況で有効となり、かつあいつが現在使える手段となると……。

「多分、瞬時加速だろうな」

「きちんと習得できたのね」

「一応な」

今日の試合に向けて、俺は一夏に瞬時加速を教えようとしたが、当然俺の教えでは一夏は理解できなかった。なので、仕方なく他にコーチを頼もうと思っていたら、その役を織斑先生が引き受けてくれた。あの人が、人に教えることができるのかという疑問は少しあったが、まあ一応教師だし大丈夫だろうと判断して、一夏には瞬時加速の練習法などだけ伝えた。昨日成果を聞いたら、ある程度はモノになったと言っていたので、この試合でもそれを切り札にするのだろう。

そして、そのタイミングが訪れた。旋回する一夏を相手に、鈴が少し体勢を崩した瞬間を一夏が見逃さず、瞬時加速を発動させた。

奇襲は完璧に決まったと思ったその瞬間、何かがアリーナの遮断シールドを貫通し、地面で爆発した。

それは確認するまでもなく、原作に出てきたゴーレムだった。

「ほんと、翔平の嫌な予感って当たるわね」

「当たってほしくはなかったけどな」

ここまででは嫌な予感ではなく、想定通りの展開である。ここから、どうなるかは予測でしかないので対応できるようにしなければならぬ。

「俺は先に出ておくぞ」

「ええ、状況確認と指示が終わったら私も行くわ。ひとまず、アリーナ

にいる一夏君と鈴ちゃんの安全を優先して」
「了解」

織斑先生のアウンスを聞きながら、ベンダボールを身に纏いピツトからアリーナに出る。そこでは、鈴を抱えた一夏が侵入してきたゴーレムから放たれるビーム兵器から逃げていた。

「お前ら、イチャイチャするのは後にしろ」

「翔平!？」

「い、イチャイチャなんてしてないわよ!!」

俺の言葉に、鈴が噛みつく。

「とりあえず一夏、鈴を離せ。それじゃ鈴が動けない」

「あ、ああ悪い」

一夏が鈴を離したことを確認したところで、2人に指示を出そうとしたとき、悪寒が走った。

すぐさまその場から移動した直後、そこに先ほどと同じビーム兵器が通った。

「刀奈の言う通りだな」

嫌な予感が当たってしまった。俺を狙ったビーム兵器は、アリーナの外から放たれたもので、初めと同じようにアリーナの遮断シールドを破ってきた。

そして、そこから新たに2機のゴーレムが侵入してきた。

「なっ!？」

「嘘でしょ!？」

それを見て一夏と鈴が驚愕の声を出す。初めの1機と合わせて、合計3機のゴーレムがアリーナに侵入してきたことになる。

「一夏、鈴!!お前ら、アリーナから脱出しろ」

「お前は どうするんだよ!？」

「俺はあいつらの相手する」

「1人でなんて無茶だ!!俺も残って戦う!!」

「そうよ!!」

俺の指示に一夏と鈴が反発する。まあここで2人がこう言うてくることは予想通りだ。

「なら、俺が後から来た2機を相手にするから、お前ら二人で最初の1機の相手をしてくれ」

3機を相手に出来なくもないが、それは後から来たゴーレムが、原作通りのレベルだとすればである。後から来た2機は、明らかに俺を狙っているのだが…。

俺からの指示を了承した一夏と鈴は、動き出した敵ISに応じて散会、応戦しだした。

それを確認しつつ、後から来た2機から放たれるビームを回避する。

2機のゴーレムは一夏と鈴は気にせず、俺だけを狙って攻撃を仕掛けてきた。やはり、狙いは俺のようだ。と、言うことは、この2機は篠ノ之束の、俺に対するアクションということになる。そう考えたら、気が重くなった。やられるつもりはないが。

シールドビット、ライフルビットを展開する。2機のゴーレムから放たれるビーム攻撃を、出来るだけ躲し防ぎきれないもののみシールドビットで対応する。シールドビットがあるからといってそれに頼りすぎるのはシールドエネルギーが勿体無い。予想外に対処するためには省エネが大切だ。

敵の攻撃をしっかりと防ぎながら、シロガネ・クロガネ、ライフルビットで迎撃する。が、ジリ貧だ。果たして、あのゴーレムにシールドエネルギーという概念が存在するのも分からない以上、チビチビ攻撃していても埒があかない。

幸い、今闘っている感じだとこの2機も無人機のようなので、遠慮はする必要はないのだが。

こういう時、白式の零落白夜は羨ましい。あれだと手っ取り早く終わらせることができる。ああ、でも手数が無くなると考えたら何とも言えないな。

やっぱりバリア無効って反則だよなあと思っていると、ビットから刀奈が専用機―霧纏ミステリアス・レイディの淑女を纏ってアリーナへと出てきた。

「ごめんなさい、遅れたわ」

「大丈夫だ。それよりも、見て分かる通りちよつとばかり面倒な状況だ」

「そのようね」

「こっちは大丈夫だから、先に一夏と鈴が相手しているのを潰してくれ」

「分かったわ。ちなみにあれ、人乗ってるのかしら？」

「やってる感じだと、無人機だろうな」

「謎の無人機が3機侵入してきた、ね……」

「これ終わったら報告書が待ってるな……」

生徒会室の机に積まれるであろう大量の書類を想像したら、やるせない気持ちになった。と、同時にやり場のない怒りが沸き起こってきた。いや、まあ原因は分かっているんだからそこにぶつけたらいいんだろうけど、残念ながらその手段がない。

「じゃあ、私一夏君達の援護にまわるわね」

「とつとこつち手伝ってくれよお、こっちはジリ貧なんだから」

「緊急事態だし、防壁があるから観客席からこっちは見えないから、奥の手使っていいわよ」

「…マジで？」

いや、確かに今この戦闘を見ているのはこの場にいる一夏と鈴と、管制室にいる織斑先生達だけだろうけど……。篠ノ之束がどこからか、見てそうなんだよなあ。いや、でも奴のことだからすでにベンダバールのあれとかあれはもう知られているのかも……。そう考えたら、ここは使ってもいいのかもしれない。刀奈の言う通り緊急事態だし、というか使うの控えるように言われてた刀奈本人から使ってもいいという許可ももらったし。派手にやってスカッとしたいし……。

「やっっちゃうか」

「軽いわね…、まあいいけど」

刀奈は俺とのプライベート・チャンネルをとじて、一夏と鈴と通信しながら2人の援護に向かった。

「さて、こっちも終わらせようか」

そう呟いて、仕掛けようとした瞬間――

「一夏!!」

そんな声が、アリーナに響き渡った。その声の主に視線を向けると、ピットに箒が立っていた。

「あの馬鹿」

アリーナでそんなにも大きな声を出して、注目されないほうがおかしい。俺が相手にしているゴーレム2機は相変わらず俺しか見えないようで、箒の大声にも無反応だが、一夏と鈴が相手にしているゴーレムは違う。ピットの先に立つ箒に向けて腕の発射口からビームを放とうと狙いを定める。

シールドビットをそちらに回そうかとも考えるが、おそらく間に合わない。一夏が何かしようとしているが、それも恐らく間に合わないだろう。が、俺に焦りはなかった。

「生身の女の子を狙うなんて、それはちよつと酷いんじゃない？」

そう言った刀奈が展開した水壁によって、ゴーレムの攻撃は完璧に防がれた。

流石というか何というか、何度見てもあの防御力は凄いと思う。模擬戦するときにはあれを何とかしないといけないのだ。そりゃ勝つのは大変だ。

刀奈の援護あり、あちらは大丈夫と判断して、俺は目の前の敵に集中する。といっても、もう敵の動きは読み切っているし、被弾することもない。油断はしないが、完全に俺のペースだ。

「一夏と鈴が敵に集中している間に、とつと片づけてしまうか」

旋回しながらシロガネとクロガネを連結させて、まずは1機のビームの発射口を狙う。さつきから、片方は威力の低い連射で、もう片方が連射はしてこないが威力の高いビームで、それぞれ俺を攻撃している。俺は先に、連射してくる方を狙って破壊する。これで、弾幕はかなり薄くなった。

その時点で俺は、それぞれのビットを連結させた。シールドビットにディフェンスモードがあるように、ライフルビットにも連結させたモードがある。

「シールドビット、ディフェンスモード。ライフルビット、アサルトモード」

4基あるライフルビットを連結させたアサルトモードでのチャージビーム。打つのに数秒間のチャージが必要となるが、その分かなりの威力を出すことができる。まあベンダバールの中での最高威力ではないんだけど。

威力が高い分、有人機相手だと気を遣うのだが今回の相手は無人機だ。そこら辺は気にしなくてもいい。

「くたばれ」

再び分離させたシログネとクロガネでの攻撃で動きを止めたゴレムを、チャージビームで狙う。もう片方のゴレムが、チャージ中に狙ってくるがディフェンスモードで防いでいるので問題はない。

「まず1機」

チャージビームによって貫かれたゴレムはそのまま地面へと落ちていった。

残る1機も、先ほどと同じようにビームの発射口を破壊して攻撃力をなくす。そして、1機目と同じようにチャージビームで仕留めた。

「ふう」

地面に降りて撃墜した2機を見ると、まだ少し動いた。

羅刹と征宗を展開して起動系統らしきところを片っ端からぶった切ったら、ようやく動きを完全に止めた。

一夏の方も片付いたらしく、油断しきっていた一夏が狙われそうになるも刀奈がそれをしっかりと防いで無力化していた。

これで侵入してきた3体を全て、撃破することができた。

「お疲れ、翔平」

「ああ、お疲れ」

近づいてきた刀奈と、お互いの専用機のごぶしを合わせて労った。

今回の襲撃で分かったことは、篠ノ之東が俺のことを良くは思っていないということだ。一夏達が相手にしていたゴーレムと比べて、俺が相手にしていた2機のゴーレムは攻撃の威力が高かった。しかも、狙いもスラスターであつたり手に持つ武装であつたりと、なかなか嫌な狙い方をしてきた。

一夏がどのくらい白式を使いこなしているかの確認のためのお試しのゴーレムではなく、本気で撃破しようとしてきたゴーレムを見ると、篠ノ之東からしたら俺は邪魔なのかもしれない。

まあ、詳しくは本人に聞いてみないと分からないが。

「ああ……疲れた」

自室のベッドに座って、そう呟いた。現在夜の21時だ。

ゴーレムの侵入を撃退した後、生徒会室で報告書の作成と溜まっている書類整理を行った。その途中、織斑先生から呼び出しがあったので、刀奈と共に学園の地下へと移動した。ここでは織斑先生と山田先生が回収したゴーレム3機の分析を行っていて、簡単に情報共有を行った。山田先生曰く、やはり俺を狙っていた2機の方が武装の攻撃力は高かったらしい。ほんと、勘弁してほしい。

地下から生徒会室に戻る際に、織斑先生から今回の襲撃の首謀者に心当たりがないか聞かれたので、兎の名前をそれとなく出して聞いた。まあ原作と変わってきているところもあるし確証はなかったのでも断言はしなかった。それでも、織斑先生も兎の仕業だろうと思っていたらしく、特にそれに関してさらに聞かれることはなかった。

結局、地下から戻って来たのは夕方、一応は生徒会室に戻って書類を片付けていたが食堂が閉まってしまいう時間になったので、残りは明日に持ち越した。その後、食堂で夕食を食べて自室に刀奈と帰って来たのがついさつきである。

「さすがに今日は疲れたわね」

「最後の書類地獄がいらなかったんだよなあ」

順番にシャワーで汗を流し、部屋着に着替えてコーヒーを淹れて一息つく。

俺たちが疲れてるのはどちらかといえば身体的よりも精神的にある。その原因は明らかに書類が、より詳しくいえば最後に手を付けた書類の内容が、俺たちの頭を悩ませ、疲れさせた。

「フランスの代表候補生ねえ」

「あとドイツの代表候補生」

フランスとドイツの代表候補生がそれぞれ転校してくる。俺たちが最後に手を付けた書類の内容はそんな感じだった。

「2人とも来週から転校してくるんだっけ？」

「ええ。予定通りならそうなるはずよ。手続きの都合上ドイツの……えっと、ボーデヴィツヒさんだったかしら。彼女が1日遅れるらしいわ」

転校してくるのはもちろん、シャルロットとラウラの2人である。生徒会ということで、他の生徒達よりも先にこの情報を知ることができたらしい。俺たちが頭を悩ませているのは、俺が原作を知っているということ差し引いても分かるほど、明らかに問題を持ち込んできそうな存在だということである。

「明らかに訳ありなのよね、二人とも」

「まあ織斑先生が絡んでるから大丈夫だとは思うけど」

「ドイツのボーデヴィツヒさんはドイツ軍にいたみたいだからその頃に、織斑先生と繋がりがあったようね」

「フランスの方も、転校前に織斑先生との面談とかがあるだろう。そのフィルター突破したなら、まあしばらくは様子見だな」

実際にシャルロットはほっとけば勝手にボロを出すのだし。

問題があるとすればラウラの方だけど、そっちもどうしようもないからなあ……。

でもまあ2人が学園の生徒となるのであれば、刀奈は全力で守るだろう。刀奈は学園の生徒を守るということに全力をかけている。なら俺も学園の生徒を守るのは当然だ。

「とりあえず、今日は考えても埒が明かないわ」

「仁さんの報告待ちだな」

仁さんは刀奈からの指令で、現在ヨーロッパに向かった。転校してくる2人、特にデユノアに関する情報収集を行っている。彼女たちが転校してくるころには戻ってきて報告してくれるだろう。

「今日はもう寝ましょう」

「ああ、そうだな」

刀奈に言われてお互い寝る準備をする。

そして俺は布団に入ったのだが、刀奈も自然な動作で俺の布団に入ってきた。

初めの頃は寝るときはまだ自分のベッドで眠っていた刀奈だった

が(朝起きたら結局俺のベッドにいる)、最近寝る時から普通に俺のベッドで寝るようになってる。

「……お前自分のベッド使う気もうないだろ」

「いいじゃない別に。昔はよく一緒に寝たじゃない」

「小学生の頃の話だろ、それ。俺達もう高校生なんだよなあ」

「気にしない気にしない。それとも何、翔平は私と一緒に寝るのは嫌？」

「全然嫌じゃない。むしろ嬉しい」

俺の即答に隣の刀奈は顔を赤くしてそっぽを向いてしまう。そんな反応が可愛いなあと思っつてつい笑みがこぼれてしまう。

「もう…笑わないでよ」

俺が笑っていることに気付いた刀奈がほっぺを掴ってくる。地味に痛い。

「謝るから抓るな。悪かったって」

「じゃあキス、してくれたら許してあげる」

俺たちの関係が恋人同士になってから、刀奈はよく甘えてくるようになった。他に人がいる場ではこれまでと同じだが、二人きりになるとよく甘えてくる。あと、ちよつとキス魔なところがある気がする。いや、まあ嬉しいけどさ。

目を閉じて待っている刀奈の唇にキスをする。すると、刀奈は満足そうな表情を浮かべて許してくれた。

「ほら、寝るぞ」

「ふふっ、お休み、翔平」

「お休み」

ゴーレム襲撃から数日が経ち週が明けた今日、2人のうち先陣を切ってシャルロット——シャルル・デュノアが転校してくる。

昨日、ヨーロッパから仁さんが帰還して報告を受けた。さすが更識というか、さすが仁さんというか……、デュノア社長に実の子供はいないということ調べて結果として報告があった。その報告を受けただうえで、刀奈はシャルル・デュノアはデュノア社長、アルベール・デュノア社長とその愛人の間に生まれた子供ではないかと予測を付けた。これが当たってるんだからすごい。この話を聞かされた時、驚いたことを表情に出してしまった。刀奈はシャルルが愛人の子供ということに驚いたのだと思ってくれたようだったが。

「とりあえず、1日様子を見て頂戴。何かあったら報告して。ないとは思うけど一夏君が危なくなったら実力行使で構わないわ」

「了解」

「じゃ、また放課後に」

刀奈と話しながら寮から移動し、それぞれのクラスへ向かうために別れるタイミングで刀奈から指示を受ける。それを了承して、刀奈は2年生のクラスのほうへと向かった。この時はいつも、寮の部屋が一緒なのは良いが、やっぱりクラスも一緒だったらなあと思ってしまう。

教室に入ると、女子たちが何やら話をしていた。一夏はまだ来てないようだ。

「おはよう」

「あ、上代君。おはよう」

挨拶もそこそこにまた女子たちは会話に戻った。そのことを不思議に思っていると、本音を含む女子3人が教室の隅でうなだれているのに気付いた。

「本音、お前今度は何したんだ？」

「何で私がやったこと前提なのお!？」

「やってないのか？」

「やってないよお!!……多分」

詳しく話を聞いてみると、先日箒が”学年別個人トーナメントで優勝すれば付き合ってもらおう”という約束を一夏と交わしたらしい。それを偶然目の前の3人が聞き、本音がそれを噂で流したらしい。が、どういうわけかクラスで流れている噂は”今月に行われるトーナメント戦に勝つと一夏と付き合うことができる”という噂で、要は誰であろうと優勝すれば一夏と付き合うことができるということになっていた。

「いや、まずお前が噂流したのがそもそもの原因じゃねえか」

「それは……あははは」

「お前いい加減その何でもかんでも言いふらす癖やめろよ。ろくなことにならないんだから」

「そ、そうだね」

2度のお菓子禁止期間を経験して反省したかと思っていたらこれである。まあ今回は俺と関係ないし別にどうもしないけど。こういう時、刀奈との関係を公表しといてよかったと思う。変に巻き込まれないから。

一夏が教室に入ってきた瞬間に、一斉に噂話をやめる女子達を呆れながら見ていると、織斑先生と山田先生が教室に入ってきてホームルームが始まった。

「今日は何と、転校生を紹介します」

ホームルーム冒頭、山田先生がそう切り出した。そして山田先生の言葉の後に、男子用の制服姿のシャルロットが教室に入ってきた。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。皆さんよろしく願います」

シャルロットが自己紹介を終えると、クラスは沈黙に包まれる。その隙に俺は耳栓を装着する。今回は本音も自分で用意したようだ。

「……お、男？」

沈黙の中、クラスの誰かがそう呟いた。

「はい、こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国から……」

誰かのつぶやきにシャルロットが律義に説明したが、最後まで言い切ることは出来なかった。

「二二「キヤアアアア!!!」」」

発動される音響兵器! 耳栓装備の俺と本音は無傷、対策なしの一夏は大ダメージ、そして前に立っていたシャルロットにも少なからずダメージを受けたようだ。

「男子!! 3人目の男子!!!」

「しかもうちのクラス!!」

「美形!! 守ってあげたくなる系の」

クラス内は騒然となる。が、織斑先生の一言ですぐに沈静化された。

その後、前もって言われていた通り今日はこの後すぐに第二グラウンドで2組と合同でIS実習を行うらしい。そのことが改めて織斑先生の口から説明された。

「それから織斑と上代、デユノアの面倒を見てやれ。同じ男子同士だ」「解散!」という織斑先生の言葉で、各々の生徒が準備を始める。今からこのクラスは女子の更衣室となる。つまり男子である俺と一夏や、一応今は男子のシャルロットがここにはいけない。

「翔平行くぞ」

「ああ、俺寄るところあるから先行っててくれ」

別に特に寄るところなんてないが、あの2人と行くと確実に女子生徒の集団に囲まれるので、俺は別行動とする。

前の席で自己紹介をしようとしているシャルロットを一夏が遮って教室から連れ出すのを確認して、俺は一夏達とは別ルートでアリーナまで行くことにした。

「あ、上代君。噂の転校生がどこにいるか知らない?」

「さあ。こつちには来てないと思うぞ」

遠回りした分時間が少し危ういので小走りで更衣室を目指していると、廊下にいた女子生徒に声をかけられた。俺が答えると、「こつちじゃないか、じゃあやつぱり更衣室に行く道で待ち伏せたほうが良かったみたいね、行きましよ」と言っって、何人かの女子生徒を引き連れて走って行った。予想通り、今頃一夏達は囲まれているんだろ。というか、お前ら授業の準備とかしなくていいのかよ。

結局、遠回りした俺と一夏達が更衣室に到着するのは同時だった。

刀奈の想い

最近、私——更識楯無は同じ学園に通う女子生徒から恋愛相談を受ける。翔平と付き合っていることが知れ渡り、そのことが受け容れられてきたころからよく話を聞いてほしいと言われるようになった。

初めは同じクラスの子達からだった。それが同じ学年に広がり、生徒会長として私のことを知っている上級生にも広がり、教師や学食のスタッフまでもが私に相談を持ち掛けるようになった。ちなみにこれまでで最も多く来たのは榊原先生である。

翔平にもその手の相談を持ち掛けられることがあるそうなのだが、話を聞いていると私の方が断然多かった。というか、翔平に関しては一夏君に想いを寄せている専用機持ちの子達のことについてはいっぱいだよ。

いろいろと話を聞いたりしているときによく聞かれるのが、「いつから翔平のことが好きになったのか」という質問だった。

翔平と出会ったのは、小学校3年生の時だった。

ある日、私と簪ちゃんが学校から帰ってきた時、家の門の前で1人の男の子が倒れていた。それを見つけた私達は、すぐに家の中にいたお母さん呼びに行った。

幸い、男の子に目立った怪我は無かったみたいで、来客用の部屋に布団を敷いて寝かせてあげたみたい。お母さんには大丈夫と言われたので、私も簪ちゃんもその日の勉強をお母さんから教えてもらった。

勉強が終わって、夕食までの時間で私と簪ちゃんは倒れていた男の子の様子を見てきてほしいとお母さんに頼まれたので、男の子が眠っ

ている部屋に向かった。

襖を開けて部屋に入つて見ると、男の子は目を覚まして起き上がっていた。身体はもう何とも無さそうだったので私は男の子の名前を聞いてみて、簪ちゃんはどうして倒れていたのかを尋ねた。

すると、男の子は自分の名前が上代翔平だと教えてくれたのだけど、問題は簪ちゃんの質問に対する答えだった。

彼は記憶喪失だった。

次の日、私や簪ちゃん、虚ちゃん、本音ちゃんはいつも通り学校へ行き、上代君はお母さんに連れられて病院に向かった。

学校から帰ってきた時にお母さんから聞いた話だと、上代君の記憶喪失の原因は精神的なものだったみたい。それと、お父さんがうちの力を存分に使つて調べた結果、上代君にとつて家族と呼ばれる人は皆すでにこの世にはいないことが分かった。

そのことを聞いた時、私は不思議と自分のことのように思えて、悲しくなった。だからだろう、お父さんが上代君を再び施設に入れると言い出した時には、お母さんや簪ちゃんと一緒になつて反対した。どうしてそんな酷いことが出来るのだろうか。

後になつて聞いた話だと、お父さんはこの時生きてきてこんなにも恐怖を感じたことはなかったと言つていた。お父さんが悪いんだから仕方ない。

こうして、上代君は私の家の居候となることになった。

上代君と一緒に暮らし始めて、お互いに名前で呼びあうようになった。元々、私と簪ちゃんが姉妹なので名前呼びじゃないとややくしく、ならばと私達も翔平のことを名前で呼んでもいいかとお願ひすると、翔平がそれを了承してくれた。

お父さんによると、翔平は私と同じ小学3年生みたいで、私と同じ学校、同じクラスに通うことになった。

翔平と一緒に学校に通い始めた最初の頃は、驚いてばかりだった。それまで、私が断トツで1位だった成績を、翔平は全て超えてきたのだ。体育の授業でも、いつも私がクラスの中で勝って正直つまらなかつたのだけど、翔平が入ったことによって、毎回好勝負を繰り広げることによって楽しい時間となった。

勉強面でも、もともと私と簪ちゃんは今更識家ということもあって家でお母さんから勉強を教えてもらい、他のクラスメイトよりも数段上の範囲を習得していた。翔平も居候を始めてから同じようにお母さんに教えてもらっていたのだが、ものの数週間で私達と同じ範囲まで習得してしまった。これには私や簪ちゃんはもちろんお母さんも驚いていた。自分たちよりも早くそれまでの範囲を習い終えたことは正直悔しかったが、それでもこれから家でも翔平と一緒に同じ範囲を学んでいけるということが、私は嬉しかった。

翔平が居候として一緒に暮らし始めてから、生活が楽しくなったように思えた。それまでは、更識家の人間として、次期当主という責任感から、勉強も武術の修業も半ば義務的に行い、あまり楽しくない生活を送っていたように思う。それでも、翔平がその生活に入ったことで私は笑顔が増えた気がする。私だけじゃなく、簪ちゃんも虚ちゃんも本音ちゃんも、更識家のみんなが普段を楽しく過ごすことができるようになった気がする。

多分この時には、すでに私は翔平に惹かれ始めていたのだろう。

そんな楽しい時間が続いていた中、更識家の中で大事件が起こった。

ある日、私達が学校から帰ってくると家の中が騒がしかった。何が起きたのかを詳しく聞いてみると、昼間にお母さんが倒れたとのこと

だった。今は病院に運ばれて安定しているということだったので、私達はその時にたまたま帰ってきた仁さんに送つてもつて病院へと向かった。

病室に向かうと、お母さんは眠っていた。そのことで少し不安な気持ちになつたが、先に来ていたお父さんの話ではさつきまで起きていたということ、安心することができた。

それからは、私たちは学校帰りにお母さんのお見舞いに行くことが習慣となつた。といつても、週に何度も行つていたらお母さんに本気で怒られたので、週に一度程度に減らした。お母さんを怒らしてはいけないということは私達、というか更識家とその関係者全員の共通認識だ。お見舞いに行つたときは、主に私と簪ちゃんが学校や家での出来事をお母さんに話して、翔平がそれに一言二言付け足す。お母さんもそれを笑いながら聞いていてくれたが、私はお母さんのその様子に少し違和感を感じていた。

”もしかしたら体調が悪いんじゃないか?”

そう思つたこともあつたし何度か実際にお母さんに聞いてみたこともあつたが、お母さんは「大丈夫よ」と返すだけで、私もその言葉を信じた。後になって思えば、この時のお母さんは無理をしていたように思う。でも、私は自分の抱いた悪い予感を信じたくなかつたし受け容れたくなかつた。

でも、私と翔平が小学校6年生になつた年、私の不安は現実となつてしまった。ある日学校から帰ると、私と簪ちゃん、虚ちゃんと本音ちゃん、それに翔平がお父さんに呼び出された。

そして、そこでお母さんの容態が急変したということを伝えられた。みんな、一体何を言われたのかもよく分からないまま、病院へと連れていかれた。私と翔平だけは何とか冷静だつた気がする。後で翔平に聞いた話だと薄々気づいていたみたいで、前日にお母さん本人の口から言われたようだった。

お父さんに連れられてお母さんの病室に向かうと、既にお母さんは喋るのがやつとという状態だつた。それでも、病室に入つてきた私達を見てお母さんは笑顔を向けてくれる。その時に私は悟つてしまつ

た。もうお母さんはいつ力尽きてもおかしくないのだと。多分、私以外の4人も同じだったと思う。

その後、お母さんは最後に私達にある言葉を残した。

『人は1人では生きていけない。貴方達1人の力なんてちっぽけなものよ。だからこそ周りの人からの助けが必要になる。自分1人じゃどうしようもない時は必ずある。その時は必ず周りに助けてもらう、そして助けを必要とする仲間がいれば必ず助けなさい。それが家族なら尚更ね。これは私からの最後のお願いよ』

お母さんが私たちに最後に残したこの言葉は私にとって、大切な言葉となった。

お母さんはこの言葉を残して、次の日私たちが見ている中で静かに息を引き取った。また、そのことが落ち着いた頃に、お父さんが病気になることが知らされて、私が中学生になるタイミングで17代目楯無を襲名することが決まった。

もちろん不安はあった。それでも、私がやらなくてはいけないという責任感で楯無としての仕事に取り組んだ。

けど、そんなやる気が空回りしてしまったのは楯無襲名式から1週間がたった日だった。

楯無としての責任と重圧に押し潰されそうになった私は、お母さんからの言葉を忘れ、簪ちゃんを傷つけてしまった。翔平のお陰で仲直りできたものの、危うく簪ちゃんと喋ることすら難しい状況がずっと続いてしまっていたかもしれない。

多分、この時だと思う。

私が自分の気持ちに気付いたのは。

翔平に励まされながら彼の胸で泣いた時、私は翔平の事が好きなのだ気付いた。

無事に簪ちゃんと同直りできて、徐々に楯無としての自分に慣れてきた頃、更識家の中で新たな事件が起きた。

翔平が I S を動かしたのだ。

暇だからと言って私と簪ちゃんと共に出雲まで来た翔平が、私達が模擬戦をやっている最中に何処かに行ってしまった。と思ったら出雲の職員に呼ばれて行くと、翔平が I S を動かしていたのだ。

これにはその場にいた全員が驚いた。

女性にしか動かすことができない I S を、男である翔平が動かした。この事実を更識家としてはどうするかということが話し合われた。私とお父さん、そして翔平本人で話し合った結果、翔平が I S を動かすことができるということは更識家に関わる人間以外には極秘とすることに決まった。日本政府にも、更識家と関わる上層部の一部にだけ知らせて、その他には黙ってもらおうようにした。更識の任務として、翔平は I S を使うことになった。

このことが決まったことによって、翔平は任務で I S を使用するためにも、I S を一通り使えるようにならなければならなくなった。

ということ、私と簪ちゃんに I S についてを教えてもらった葵さんが、翔平の I S の教官になった。

それから約一年間、翔平の目は死んでいることが多かったように思う。何度か訓練中の翔平を覗いたことがあるのだが、私から見てもあれは地獄だったと思う。

そうこうしているうちに、翔平の I S の実力は上がっていった。1

年間の最後の方では模擬戦で私が負けることもあったぐらいだ。ロシアの代表候補生として思うところはあったけど、まあ翔平だしと無理矢理納得した。

翔平が任務に就くのに十分な技量を身に付けた頃、私はIS学園に入学することになった。

日本人である篠ノ之東博士がISを開発したため、日本においてIS絡みのトラブルや問題は多くなる。その中でもIS学園では特にそう言える。そのため、更識の長として対策に取り組むために、私は学園に入学することとなった。

寮生活のため、翔平と過ごす時間が極端に減ることは淋しかったが仕方がなかった。

学園に入学するために家から離れる日の前日、簪ちゃんから「お姉ちゃんはお兄ちゃんに告白しないのか？」と聞かれた時は本当に驚いた。

私が翔平のことが好きということは、簪ちゃんにはバレバレだったようだ。

普段一緒に暮らしていて、もしかしたら翔平も私のことが好きなのではと思うこともあった。それでも、もし違ったら、今の関係性が壊れてしまうのが怖くて私は一歩先に進めないでいた。

翔平はモテる。小学校でも中学校でも、何人もの女子から告白を受けていた。でも翔平はその全てを断っていた。なら私のことは…？と考えたことも何度もあったけど、やっぱりその先を聞くことは出来なかった。

結局進展しないまま数か月が経過したころ、世界を揺るがすニュースが報道された。

男がISを動かしたのだ。そのこと自体は、翔平の件ですでに驚いていたのでそこまでの動揺はなかった。翔平が動かしたのだから、他にもISを動かすことができる男性が現れるかもしれないということとは想定されていたし。

結果的に、翔平はIS学園に入学することになった。ISを動かし

た織斑一夏君や生徒の護衛の任務としてだとか理由はいろいろあったけど、正直に言うとながたただ翔平と一緒に学園の生活を送りたかったのが一番の理由。誰にも言わないけど。

何はともあれ、こうして私は再び翔平と一緒に過ごすことができるようになった。

そして、翔平が入学してきた初日。この日を私は一生忘れないだろう。

きつかけは、休み時間に流れてきた噂だった。

”2番目の男性操縦者がクラスの自己紹介で好きな人がいると言った”という噂は学年の壁を越えて私達2年生、さらには3年生にまで瞬く間に広がっていった。まあ広げたのは薫子ちゃんなんだけど。

簪ちゃんにメールを送って確認したところ、噂は本当だということが分かった。そのことが、私の不安を大きくさせた。翔平のことだから、女子からの告白対策として先手を打ったのだろうけど、それでも私はその”好きな人”が誰なのかがどうしようもなく気になった。

生徒会室でそのことを聞いたときはいつもの私だった。でも自室で聞いたときは、いつもの私ならそんなことは聞かなかったと思う。

寮の部屋割りは一更識家としてのやり取りとかいろいろと理由を並べて、寮長の織斑先生に何とか納得してもらって翔平と同室にするこどができた。その時、織斑先生にはいろいろとバレてしまったようど、最後に「まあ、頑張れ」という言葉を頂いた。

そして、放課後となって部屋へと移動する時間となった。何も知らない翔平は山田先生のドジが原因で教室を経由してから部屋へ向かうことになり、私が先に部屋で待機することになった。私はここで悪戯を仕掛けたくなった。この前何かの雑誌で呼んだ、”男性に効果抜群な服装”の記事の中にあつた”裸エプロン”を思い出して、さすがに本当に裸エプロンをするのは恥ずかしいので水着の上にエプロン

を着て、翔平を驚かせようとした。

結果は、見事にカウンターを決められて私が撃沈した。……あれはズルいと思う。

が、翔平にもダメージはあったようで、結局は2人して顔を赤くしながら夕食を取るために食堂へと向かった。

とはいっても、勝手知ったる仲なのですぐにいつも通りに戻った。そのまま簪ちゃんたちと合流して夕食を取り、翔平と部屋に戻った。ここまでは良かった。

問題は、部屋の備え付けのシャワー室で汗を流しているときに、再び翔平の”好きな人”のことを思い出して考え込んでしまったことだった。翔平は荷解きをしていたから気づかなかったようだが、明らかにその日の私のシャワーの時間は長かった。

不安や悪い予感というものは、一度考え始めるとなかなか抜け出せなくなってしまう。結局、私は翔平がシャワー室を使っている間も、その後の更識としての情報交換を行っている間も、頭の一部ですつとそのことを考えてしまっていた。

そして、私は気づいたら翔平にそのことを聞いていた。考えがまとまらず、自分でも何を言ったらいいのかもわからず、溢れそうな涙を何とか堪えながら話して、それでも言葉が出なくなって下を向きながらただただ涙を堪えた。

私の言葉を黙って聞いていた翔平は何も言わなかったが、私が黙ったタイミングでゆっくりと話し始めた。

翔平が話し始めて私は顔を上げて聞いていたのだが、聞いているうちに涙は堪えられなくなった。

『俺が好きな人は、昔からずっと刀奈だけだ。これからもずっと、君を好きでいる』

その言葉を聞いて、その意味を理解した時には、涙は止まらなく

なっていた。

そして、私の思いもようやく伝えることができた。

ずっと、聞きたかった言葉。言ってもらえるかわからずに不安にもなった言葉。それを翔平が言ってくれた。そのことがうれしくて私は彼の胸に飛びついた。

きっと、この瞬間はこれから何年経っても鮮明に覚えているのだろう。

いろいろな質問を様々な人からされるけど、この時の話だけは誰にも言わないようにしている。

あの瞬間は

私と翔平だけが知る

私にとってとても大切なものだから。

本当にあいつは男装を隠す気があるのだろうか？

自己紹介を終えて各々着替え始めたのだが、今は男であるはずのシャルロットは一夏の体を見て顔を赤くしている。確かに一夏は結構鍛えてるけど、これは普通バレるんじゃないだろうか？一夏は全く気付いていないようだけど。

まあでも、見方によつてはホモに見えるから大丈夫なのか……いや、大丈夫じゃないな。学園の一部の学生にとつては大歓迎なのだろうが、普通は受け入れられないはず。

何はともあれ、一応着替えは無事に終えた。『着替え中はあつち向いてて』というシャルロットの懇願を見事にスルーした一夏が普通に振り向いたが、シャルロットの着替えのスピードの速さによつて何とか大惨事は免れた。

いろいろあつたけど無事に授業に遅れることなく集合できた。一夏がデュノア社についてシャルロットにずばずば聞いているときは気まづかった。一夏気づけ、それは地雷だ。いろいろと知っている俺からしたら、明らかにテンションが落ちているシャルロットに同情するしかなかった。

グラウンドに出て、織斑先生の声で授業が始まる。まずは、専用機持ちが実際に戦闘を見せるということになった。織斑先生に選ばれたのは鈴とセシリア、2人とも露骨に嫌そうにしながら前に出て行く。が、次の瞬間には態度をがらりと変えてやる気を見せている。どうせ、一夏を引き合いに出されたのだろう、単純な奴らめ。いや、でも俺も刀奈が絡むと明らかにやる気を出すから他人のことを言えないか。

そして、この2人の代表候補生の模擬戦の相手を務める山田先生が上空から急降下してきて一夏に突っ込んでいった。実際に見るとやっぱりすごいな、一夏のラッキースケベは。あと、鈴とセシリアは

本気で一夏を殺しに行っているからヒヤヒヤする。これでも一夏の護衛を務めているんだからやめてもらいたい。こんなことで一夏を死なせてしまったらいろんな人から怒られるし、何より刀奈の期待を裏切ってしまう。そんなことあってはならないし、そうやってしまつたら俺は立ち直れないだろう。刀奈に嫌われたら、もうこの世界で生きていく意味ないし。

弟が地味に殺されそうになったにもかかわらず、織斑先生がいたつて冷静に山田先生の紹介をして、2対1の模擬戦が始まった。結果は山田先生の勝利となった。

やっぱり経験が違うな。攻撃力とか手数とかは鈴とセシリアが明らかに優位なはずなのに、山田先生は元代表候補生としての経験から、技術や戦い方、読みとかで不利な点を補っている。伊達に学園の教師をやっているわけではない。これでドジっ子属性がなければなあ……。

その後、グループに別れて実習を行うことになったが、やっぱりとつか何というか、案の定男子3人の人が集まった。実際は2人だけだ。

結局織斑先生の指示で出席番号順にグループ分けされることになった。

「じゃあまあ、とつととやっちまおう」

「上代君テキトーすぎない?」

「いやさあ、俺基本的に教えるの苦手だから。まあ何とか伝わるように頑張るさ」

「よろしくね」

とりあえずとつとと一人目から始めていく。

一夏とシャルロットのグループは女子がそれぞれ自己紹介をしながら合コンのような雰囲気になっていた。

「あいつらも大変だな」

「あれじゃお見合いだね」

「こういう時は、彼女いることを公表しといてよかったと思う」

「そうだよ。上代君にアタックしても意味ないってわかってるもん」

「そうそう。ああそうだ、初めにみんなに言っとくけど、次の人に交代するときは絶対に屈んだ態勢で訓練機から降りろよ。間違っても立った状態で降りないように」

「どうして？」

「立った状態で降りたら身長的に次の人が乗り込めなくなるからな。そうなったら他の誰かがIS展開して操縦席まで運ばなくちゃいけなくなる」

「え？じゃあその場合は上代君が運んでくれるの？それなら…」

「俺の彼女の生徒会長に喧嘩売りたいなら俺は止めないぞ」

「…遠慮しておこうかな」

刀奈は意外と独占欲強いんだから遠慮してもらいたい。何かあって刀奈を怒らしたら後が大変なんだよ。

俺の願いが通じたのか、俺のグループの子達は俺の言葉をしっかりと聞いてくれたので良かった。一夏のグループでは、俺が懸念していた事態となつて、結局一夏が箒を運んでいた。その後も、女子生徒たちは立て続けに立った状態のまま訓練機から降りて、そのたびに一夏がお姫様抱つこで運ぶという繰り返しになっていた。

一夏は気づいていないようだが、順番がまだ回ってきていない女子たちからの圧がこっちにまで伝わってきている。そりやあんなプレッシャーの中、律義に屈んだ状態になどできない。全ては事前に注意しなかった一夏が悪い。

俺のグループは何事もなく無事に全員が実習を経験して授業は終了した。

午前の授業が終了して昼休みに入った時、携帯端末に連絡が入った。

相手は刀奈からで、今日の昼は轡木さんと話し合いがあるから先に

食べるといってということだった。多分明日転入してくるラウラに関することだろう。内容は夜にでも聞くとして、了承の旨を返信しておく。

最近はずっと刀奈と2人で昼を食べていたので、たまにはクラスメイトとでも食べるかと思つて一夏に声をかけたら、ちょうど屋上で食べるということに付いて行つた。刀奈にも連絡をいれておく。用事が早く終わればこっちに合流するだろう。

途中で合流した筈が俺とシャルロットの姿を見た瞬間に、表情を固めたのを見て全てを察し、一夏に聞こえないように謝つておいた。でもな筈、きつとこれから何度もこういう事があるんだぞ。

基本的に女子がデートであったり一夏と2人きりで何かを誘つても、団体行動大好きな一夏によつて結局は他のヒロイン達も集まつてしまう。

今もそんな状況だった。筈としては一夏と2人での昼食だと思つていただろう。しかし蓋を開けてみれば、俺やシャルロット、さらには鈴とセシリアもこの場にいる。

「……ねえ翔平、この場に僕たちが来ても良かったのかな」

「気にしたら負けだぞ。筈には悪いが一夏のこれは今に始まつたことじゃないから」

3人が目線で火花を散らしているのを見て、シャルロットが俺に小声で聞いてきた。今は苦笑いしているけどそのうちお前も向こう側なんだぞ。言葉にはしないけど。

ヒロイン達の料理アピールタイムが始まつたので、こっちはこっちで勝手に食べ始める。

「翔平ってお弁当なんだ」

「そうだけど、これ別に俺が作つたんじゃないんだけどな」

「え、そうなの?」

「彼女に作ってもらつたんだよ」

「え!?翔平って彼女いるの!?!」

俺の発言にシャルロットが驚く。

そうだよな、この反応が普通だよな。最近じゃこの学園で俺と刀奈

が付き合ってるということが当たり前になってるからな。

「ああそっか、シャルルは今日転校してきたから知らないよな」

「クラス戻ったら掲示されている新聞見てみなさい。この学園唯一のカップルについて詳しく書いてあるわ」

最近はこんな感じだ。口でいちいち説明するより例の新聞を見てもらった方がいろいろと楽なのだ。最近になって薫子に感謝するようになった。

弁当の蓋を開けて中身を確認する。うん、めちやくちやうまそう。

刀奈は週に数回程度で弁当を作ってくれる。刀奈が忙しいのは分かっているのもつと頻度を減らしてくれもいいのだが、本人から『好きでやっているから気にしなくてもいい』と言われてしまったら、もう有難くいただくしかない。俺は見事に胃袋をつかまれているので、ほんと嬉しい。泣きそうなくらい。

心の中で涙を流しながら刀奈に感謝して弁当のおかずを食べていると、急に悪寒が走った。

ばつと顔を上げて確認すると、セシリアが一夏に作ってきたサンドイッチを取り出すところだった。それを見て俺は思い出した。そうだ、こんなことがあったな。

実戦で培った俺の第六感があれは危険だとアラームを鳴らす。あれはやばい、見た目は普通に美味しそうに見えるところが質が悪いし。

案の定、食べた一夏が死にそうな顔になっている。それを見て、作ったセシリア以外のこの場の全員がすべてを理解した。多分、全員の中であのサンドイッチは劇物認定されただろう。

「翔平さんもお一ついかがですか？」

「あ、ああ…」

やばい、こっちに標的が移った。

「そ、その前にセシリア。それ味見はしたのか？」

「いえ？サンドイッチ程度に味見など必要あるのでしょうか？」

普通は必要ないと思う。でもお前には必要なんだよ。

「とりあえず、一つ食べてみる」

「分かりましたわ」

セシリアは俺の言葉の意図が分からずに首をかしげるも、俺の言われた通りにサンドイッチを口に入れる。そして次の瞬間口を押さえ顔で顔を青褪めて、慌てて飲み物で流し込んだ。

「な、何ですのこれは!?!」

「サンドイッチだろ?」

「それはそうなのですが……」

言葉を詰まらせるセシリア。まあ料理に慣れていないうちは味見をしないとこういう事は起きるからな。見た目悪いけど味はましならまだしも、見た目良いけど味最悪は警戒0で食べてしまうぶん衝撃は半端ないものになる。

「慣れないうちはちゃんと味見したほうがいいぜ」

「これからはそうしますわ……」

「とりあえず、それはしまつとけ」

「では、私の今日の昼食はどうしましょう……」

劇物が食べれなくなつたことによつて、今日のセシリアの昼食が無くなつてしまった。まああれを食べるのなら昼抜きにした方がいいのかもしれないが。

仕方ないので不本意ながら俺の弁当を少し分けてやろうと思つたとき、見知つた声が聞こえた。

「あら、なら私のお弁当食べる?」

後ろを振り向いたら、自分の弁当と別の包みを持っている刀奈が立っていた。

「お疲れ、早かつたな」

「確認程度だったからそんなに時間はかからなかつたわ。それで、セシリアちゃん。お昼ご飯ないのなら私のお弁当あげるわよ」

「で、ですが。それでしたら楯無さんのお昼がなくなるんじゃない?」

「大丈夫よ、私にはこれがあるから」

そういつて持っていた包みの中を取り出す。それは、コンビニやスーパーで売っているようなお弁当だった。ただし中身は豪華で、デパ地下のちよつとお高いお惣菜を詰め込んだ感じだった。

「それどうしたんだ？」

「さつき学食のスタッフに会って、この前恋愛相談で話聞いたお礼にっってもらったのよ」

「あの人達も行ったのかよ…」

俺と刀奈が付き合っていることが広まりそれが当たり前となった今、刀奈のもとには恋愛相談に訪れる人が急増しているらしい。俺のところにもちらほらくるが大体が同級生で、上級生や教師などは刀奈の方に行っている。

あまりにも人数が多いらしいので、今度から学内新聞の一部に”生徒会長の恋愛相談”として載せてもらえるよう交渉している。

俺的には薫子は2つ返事で了承してくれると思っていたが、『これ以上忙しくするって、あんた達鬼か!』と言って渋られている。俺達の間係を載せた新聞を書いてしまったせいでそこからどんどん仕事が生じていってずっと忙しい状態が続いているらしい。自業自得だ。今では校内各所で”新聞部 部員募集”という張り紙が掲示されている。

「せっかくももらったから食べないわけにもいかないからね。だからセシリアちゃんは気にせずに私のお弁当食べていいわよ」

「そういうことでしたら、いただきますわ」

その後、セシリアは刀奈が作った弁当の美味しさに衝撃を受け、さらには先ほどの自分のサンドイッチと比べてしまい涙を流しながら食べていた。

シャルロットが転校してきた日の放課後、俺たちは生徒会室にいた。今日は簪と本音も来ている。なんでも、必要な部品を出雲に取り寄せているので専用機の開発は中断しているらしい。

本音も一応生徒会の一員なんだが、いてもどうせ戦力にはならないので、基本的には簪の手伝いをさせている。

「そういえばお姉ちゃん、招待状は送り終わったの？」

「ええ、昨日ですべて送り終えたわ」

簪が言った招待状とは、京子さんの墓参りとその後の宴会への招待状である。

今年も例年通り参加者全員で京子さんの墓参りを行い、その後全員で宴会を楽しむ。招待状を送ったのは更識家関係者と日本政府の一部のお偉いさん達、あとは京子さんと個人的に所縁のある人達である。基本的に招待状が届いた人は全員参加するが、毎年数人はどうしても外せない用事があって参加できないことがある。大抵その人は参加できないことを本当に残念がる。それほど、みんなこの行事を楽しみにしているのだ。

今朝、去年参加できなかった人が刀奈に参加することを電話で報告してきたらしい。招待状は郵送で、早くても今日の昼に届くはずなのだけど……。

ちなみに、時期的には学年別トーナメントが終わった後で、臨海学校の前に行く予定である。

そういえば、学年別トーナメントといえば……。

「学年別トーナメントは結局どうするのか決めたのか？」

「まだ考えてるところだけど、多分タッグマッチにするかな」

俺の質問に刀奈が答える。

原作を知っているからタッグマッチになることは知っているが、も

しかしたら変化があるかもしれない。

聞くところによると、教師陣と刀奈とで例年通り個人戦にするかタッグマッチに変更するかを話し合い、最終的には刀奈が判断を下すらしい。

俺としては正直、個人戦の方が有難い。なぜかと言うと……。

「俺、誰と出よう……」

タッグマッチの場合、パートナーを探さなければいけないのだ。

これがもし、学年別という条件さえ無ければ迷わずに刀奈と組むのだけど……。ああでも、それだと反則級の強さになってしまいか。

だとすればどうするか……。

俺の知り合いだと大体組み合わせが決まってるんだよなあ。最終的にランダムでラウラと組む筈はある意味決まってるんだけど、俺そんなにあいつと仲良いわけじゃないしな……。

どうせ組むんなら、やっぱり昔からの付き合いがあるここのメンバーがいいよな。

学年別だから刀奈と虚はダメ。となると簪か本音になるんだけど、本音は実戦向きじゃないし……。となるとやっぱり。

「なあ簪、俺と組んでくれない？ 訓練機でいいから」

「え、私？」

「刀奈と組めないってなると、1番やりやすいのは簪なんだよ。どうせ出るなら勝ちたいし。出るつもりなかったかもしれないけど、考えてくれないか？」

正直、俺1人でも勝てるだろうが、2対1の変則マッチだと手加減できずに本気でやってしまいそうで怖い。ただでさえ、これまでの試合で目立ってしまったているんだから、今このタイミングで派手に暴れるのは危険すぎる。いろいろと面倒なことになるだろうし、刀奈に迷惑をかけてしまう。

でも、やっぱり試合に出るのであれば勝ちたいと思うのも当然。ラウラの件で1回戦で終わることは知っているけど、たった1試合でも負けたくはない。何よりも更識の名前に泥を塗りたくはないし。

あれ、でも一夏・シャルロットとラウラ・箒が当たるんなら俺のペアはこのペアと当たるんだろ？さすがに一般生ペア相手だとやる気が出ないぞ…。

まあそのことは後で考えるとして、今はパートナーのことを優先しよう。

簪はしばらく黙って考えていた。多分式式の完成を早められないかとか、無理だとして訓練機で出る場合のこととかいろいろと考えてくれているのだろう。

「……分かった。私もタッグマッチに出る」

簪は意外にあっさり了承してくれた。俺から頼んでおいてあれなんだけど、もう少し考えてその上で出ることを渋ると思っていた。この場にいる他の人たちも俺と同じ考えのようで、驚いた顔をしている。

「確かに、私は代表候補生つてことで、今回の学年別トーナメントの参加は免除されてる。でも、最近式式の開発ばかりで、試合に出てないのもあるから、私は今回のトーナメントは出ておきたいって思ってた。何より……」

一拍置いた簪は、俺と刀奈の顔を順に見て続けた。

「お兄ちゃんがお姉ちゃん以外の知らない女子とタッグ組むのは嫌。それなら私が組む」

「簪ちゃん!!!」

簪の言葉に虚と本音はうんうん頷いて同意する。刀奈は嬉しくて簪に飛びつき、俺はそれを見て笑うしかなかった。ほんと、自慢の妹だよ。義理だけど。

「ありがとう、簪。じゃあ改めてよろしくな」

「よろしくね、お兄ちゃん」

こうして、俺のパートナーが決まった。

俺のパートナーが決まり、今日の分の生徒会の仕事が終了したので、今日は解散となり、一度部屋に戻って再び食堂で合流して夕食となった。生徒会室で仕事して、終われば部屋に戻って、食堂でまた合流して夕食ってのが最近のパターンだ。簪と本音が式式の開発していた日も、夕食は合流する。刀奈と付き合いだして昼は2人で食えることが多くなっただけど、逆に夕食は昔から一緒のこの5人で食えることがほとんどだ。

というか、今日の仕事って言ってもほとんど俺がやって他のメンバーは虚が淹れた紅茶飲みながら話していただけだった。まあ今日はパソコン使った作業がほとんどだったから仕方なかったけど。生徒会室にパソコン1台しかないし。

最近刀奈以外のメンバーも、俺の扱いが雑になってきた気がする。俺に仕事任せて自分たちはお茶してるし……。まあ本当に忙しい時や俺が疲れてる時とかは、働いてくれるから別にいいけど。

今はいつも通り、刀奈といろいろ話しながらコーヒー飲んでまったりしてる。最近じゃこの時間が一番落ち着く。会話を誰かに聞かれるわけでもないし、変に気を使う必要もない。ただコーヒー飲みながら彼女と話すことができる。半分は更識の話なんだけど。

「そういえば、噂の転校生はどうだった？」

「理解できない」

「なかなか厳しい言葉ね」

いろいろと感想はあるが、まあ一言で言うならばそれだった。

「あれで騙し通せると思ってる本人も理解できないし、あれでGOサイン出したデュノア社とフランス政府も理解できない。事前に聞いてなくても、俺ならあれが男装だって見抜いてたぞ」

「まあそこは私も同じ感想よ。仕草とか細かいところがまるで女の子だったわ」

「部屋は一夏と同じにしたんだろ？また思い切ったことをしたな」

「決めたのは私じゃないわ。織斑先生よ」

「ええ……」

織斑先生もちろんシャルロットが男装している女子生徒ということは気づいている。わざわざそんなことをしてまで学園に転校してきたということは、何か目的があるということも推測できる。そんな中で、情報量が山ほどある弟と同室にするとは……。まあシャルロットを見ていて、何かしでかす度胸があるように思えないけど。

「しばらく泳がしておくそうよ」

「……弟を餌にするなよなあ」

「何かあってもお前たちが何とかしてくれるんだろ?」って言われたわ」

「……俺達を認めてはくれてるんだな」

「一応はね」

織斑先生は更識家をそこまで信用はしていないと思っていた。まあ実際そこまで信用していないのだろう。それでも、俺という存在はある程度は有能であるということは思ってもらえてるみたいだ。言い方は悪いけど、「使えるものは使う」ってところだろう。別にその考えは否定しないし、何なら俺だって刀奈からの頼みを実現するためにはその考えに従って行動するので、他人のことは言えない。

「ひとまず、フランスの方は大丈夫そうね」

「ああ。ドイツの方は?」

「予定通りに明日の朝こっちに到着するから、そのままホームルームで紹介ってなるわね」

「了解。面倒なことにならないければいいけど……」

「十中八九、何か起きるでしょうね」

今から考えても、頭を抱えなくなる。シャルロットは裏でゴタゴタするだろうし、ラウラは表で派手にやらかすのだろう。

俺の危惧を察したらしい刀奈が隣に来て頭撫でて励ましてくれた。

うん、元氣出た。

「そういえば、学年別トーナメントだけど」

「ん?」

「簪ちゃんには改めてお礼言わないとね」

「そうだな。最悪一人で出るしかないかと思ってたし」

「私としても、知らない女子生徒が翔平と組むっていうのは思うところがあったからね。簪ちゃんなら安心できるわ」

「明日から式式の開発一旦止めてトーナメントに向けての調整に入ってくれるみたいだからなあ」

学年別トーナメントに専用機の式式は間に合わないようなので、簪は訓練機の打鉄を使うことにした。打鉄の基本武装は刀型近接ブレードなのだが簪は基本的に刀よりも薙刀なので、式式に搭載予定の夢現をパッケージとして訓練機の打鉄に搭載して試合に臨むとのこと。普通はそんなことできないと思うが、簪が彩さんに電話して事情を説明したらオツケーが出たので力業で何とかなった。何であの人たちは簪のお願いは無償で受けるのだろうか。俺が頼んだら絶対に見返り求めてくるのに…。

「でも、よくよく考えてみたら翔平と簪ちゃんのペアってある意味反則よね？1年生の専用機持ちの中では簪ちゃんが実力は一番だろうし」

「確かにな」

原作と比べて、簪のISの実力は上がっているように思う。原作のように式式の開発に追い込まれることがなかったので、開発を行いながらもISの訓練は行い続けていたし。なにより刀奈との仲が悪くなかったというだけで、普段からよく模擬戦とかしていたし、俺が加わってからは悪魔的な強さ（当時の俺と簪から見ても）の刀奈に対して簪と2人で何とか勝てるように四苦八苦してたこともあった。

今思えば、今回はあの頃以来の簪とのコンビになる。当時は何とか刀奈に勝つために簪といろいろな試行錯誤してやってたので、コンビネーションは問題ない。簪が訓練機を使うということ差し引いても…：うん、これはこれで反則だ。

「まあでも、まだ式式じゃなかっただけマシじゃないか？」

「…：確かにそうね」

式式に搭載予定の武装は俺も知っているが、あの6機×8門のミサ

イルと俺の2種類のビットで連携しながら攻撃されたら、さすがに試合にならないだろう。多分、相手からしたら逃げ道なんてないと思う。

「出るからには勝つき。簪ともそう話したし」

「あんまりやりすぎちゃ駄目よ」

「分かってるよ」

どうせなら俺が簪のサポートに入った方が良いかもな。

その後は他愛のない会話を続けて、良い時間になったのでベッドに入って寝た。刀奈も当然俺のベッドだった。もう気にしない。

次の日のホームルーム、一夏がおもいつきりビンタされるのを見て俺は頭を抱えた。

教室に乾いた音が響き渡った。一夏がラウラに平手打ちを喰らったのだ。それはもう、ほんと良い音したよ。

そして俺は頭を抱える。多分この初期のラウラが一番面倒な存在なんだよな。今もいきなり殴られて文句言ってくる一夏に対して逆に罵詈雑言で返してる。

俺が項垂れているのを見て、いろいろと察した本音は苦笑していた。そして最低限聞こえる声で「……どんまい」と言ってきた。あの野郎……。

その後も、流石の一言だった。休み時間とかは話しかけるなオーラを出して人を近づけさせず、誰とも話そうとしなかった。一夏に対しても言いたいことは言えたようで、それ以降は眼中になかった。いや、たまに睨んでたけど。

シャルロットはシャルロットで細かい仕草とかが女子丸出しだし、逆になんで気付かれないのかが不思議なレベルで女の子やってるし……。

色々知ってる俺は、無駄にハラハラしながら1日を過ごした。

放課後、ラウラはさっさとどこかに消えて、一夏達は特訓するとかでアリーナに向かった。俺も誘われたが今日はパスした。昨日連絡したタツグマツチでの簪の訓練機の武装のことで、彩さんがさっそくパッケージを持ってきてくれたので、調整することになった。

本音を言えば、ヒロイン達からの圧が凄いので行きたくないという理由が大きい。一夏達の特訓についていくと、何故か一夏は教え方が上手くない俺にばかり聞いてこようとす。そのたびにヒロイン達が敵意剥き出しで睨んでくるからやりにくくて仕方がない。といってもセシリアは理論的すぎるし鈴はアバウトすぎるから、俺と比べてもどっこいどっこいなんだけど。

その点で言えば、シャルロットの加入は俺の負担を軽減してくれ

た。それに関しては感謝している。

一夏とシャルロットが並んで歩く姿を後ろから睨みつけながら付いていく箒・セシリア・鈴を見送って、俺も簪と合流するために移動した。

移動中に彩さんから学園に着いたとの連絡が来たので、先に彩さんを拾うことにした。昨日連絡したときに、学園に付いたら正門のところで待つておくように伝えた。IS学園の敷地面積はかなり広く、建物も校舎や寮、アリーナなど様々にあり、始めて学園を訪れた人が気軽に立ち入ると即座に迷う可能性が高い。

なので、俺は彩さんに伝えたのだ、正門で待機してほしいと。しかし、俺が校舎を出て正門へと向かおうとしたのだが、なぜかそこには彩さんが立っていた。そして、隣には疲れ果てた豊の姿もあった。

「昨日、正門で待つててくださいって言いましたよね？」

「いやあ、大丈夫かなと思って」

「結果は？」

「見事に迷いました☆」

だろうよ。この人ちよつと方向音痴なところあるから、学園が広いの抜きにしても絶対迷うと思っただよ。

けど、迷ったのならどうしてここまで辿り着けたのだろうか？

そう疑問に思った俺に、豊が代わりに答えてくれた。

「彩さんが歩いてた学生に声をかけて道を聞いたんですよ。まあ話したのはほとんど僕でしたけど」

「うん、豊お疲れ。あとドンマイ」

華さんと彩さんは、さすが研究者というか何というか、話が噛み合わないことがよくある。ある意味でコミュ障だ。さすがに篠ノ之束ほど酷くはないが、初対面の人がコミュニケーションを取るのとはなか

なか難しいことが多い。俺も初めて会ったときは苦労した。

そして、豊は極度の人見知りである。コミュニケーションは取れるのだが、初対面の人と話すことを極力避けるようにしている。あと、本人は初対面の人、特に女性と会話をすると極度に疲れるらしい。現に今、豊は疲れ果てている。恐らく、彩さんの手伝いということでも渋々連れてこられたのだろうが、本人からしたら来たくはなかっただろう。同年代の女子で豊が普通に話せる相手なんて簪と本音ぐらいだ。刀奈と虚ですらまだちよつと避けてるところがある。

整備室の途中にあった自販機で豊にジュースを買ってやり、二人を連れて簪の元へと向かった。

整備室に入ると、そこには簪に本音、あと刀奈の姿があった。本音はいるだろうと思っただけど、刀奈がいるのは予想外だった。

「あれ、刀奈は生徒会のほうじゃなかったのか？」

「昨日翔平が今日の分もやってくれたおかげで量が少なかったの。虚ちゃんがやってくれるから私はこっちに行つていいって言ってくれて」

「なるほどね」

原作と比べて刀奈のサボリグセはかなり解消されている。俺が仕事を手伝ってるのもあって、途中で逃走したりすることはなかった。なので、虚も1日ぐらいはサボっても見逃すようになってる。

「というか、俺がいない時点で作業効率はかなり落ちる。虚もこの前そう言っていた。」

「さて、じゃあばつぱとやっちゃおうか」

彩さんの一言でそれぞれが作業に取り組む。と言っても、俺と刀奈と本音は蚊帳の外だ。ところどころのサポートはするが、ほとんどは彩さんと簪の2人でセッティングを行なっていた。時折タッグを組む俺との意見交換も交えつつ、パッケージのインストールは無事に終わった。最後の方は本音はやる事がなくて暇になったようで、どこからか持ってきたお菓子を食べながらやる気のない声援を簪に送っ

ていた。

「よし、これで終了ね。そのタッグマッチが終われば式式に組み込むよう設定し直すから」

「い、いえ!!それぐらい自分でやるので」

「いーよいーよ。さっき私のやりやすいように設定しちゃったからちよつと面倒臭いと思うから私がやるよ。最近ちよつと暇してるからちよつといいや」

「そうなんですか……。ありがとうございます」

程なくしてセッティングが終了した。流石に彩さんがいると作業が早い。もつと時間がかかるかと思っていたが、あつという間に終わってしまった。そのため、この後やる事が無くなってしまった。ここ最近生徒会の方が忙しくバタバタしていたのだが、その分仕事もきっちり処理していたために、久しぶりの放課後の空き時間となった。生徒会室に行つて虚を手伝おうと思ったら、さっき虚から連絡があつて今日の仕事は終わったのでこつちと合流するらしい。あと本音はどこかに消えた。暇すぎてクラスの女子のところにも遊びに行つたんだろう。従者が主人ほつといでどこかに行くこと自体おかしいのだろうが、今に始まった事じゃないのもう気にしない。

どうするか……。と考えていたところ、彩さんが手を挙げて口を開いた。

「私この学園の中を見て回りたくないな」

「ひええ!?!」

彩さんの言葉に豊が驚きの声、というよりほとんど悲鳴をあげた。そりやそうだろう。学園内を見て回るといふことは必然的に学園内を歩き回るといふことになる。といふことは学園の女子生徒に会うことも当然あり得ること、学園内では珍しい男が歩いていれば当然女子生徒が興味を持って話しかけてくるだろう。豊にとっては間違いない地獄だ。

「彩さん、流石に豊が可哀想です」

俺と同じ考えに至つたであろう簪が、豊に同情の視線を向けながら

彩さんに言った。今この整備室は俺たち関係者しかいないが、豊としてはここから出たらならばすぐさま出雲に帰りたはずだ。

「じゃあ、豊君は先帰っていいよ。私は残って案内してもらおうから」
すでに案内してもらうことは決定事項らしい。まあ構わないけど。

となると誰が彩さんを案内し、誰が豊を駅まで送り届けるかを決めなくてはならない。彩さんは「豊君1人で大丈夫でしょ」と言っていたが豊は即行で首を横に振っていた。豊1人で駅まで歩いたら、話しかけてくる女子から逃げて学園内で迷う姿が容易に想像できた。

結局彩さんの「じゃあそのバカカップル、案内して。簪ちゃんも豊君をお願い」という言葉で、俺と刀奈、後から合流する虚が彩さんを案内して、簪が豊を駅まで送り届けることになった。

「彩さん、わざとあの2人だけにしたでしょ？」

「あ、やっぱり分かった？」

簪と豊が歩いて行くのを見送り、俺は気になってたことを彩さんに聞いた。隣の刀奈もうんうん頷いている。彩さんの返答からして、俺たちの予想通りだったらしい。

「だってさー、あの2人もちやっちやと引っ付いちゃえばいいと思うんだよねー」

「まあそれに関しては同意します」

簪と豊は、まあいわゆるお似合いのカップルに見えるというやつだ。俺と刀奈の話で最近はやむやみになってるが、あの2人も早く付き合えばいいのに”という気持ちは、更識・出雲の共通認識だ。

側から見ると、どう考えても両想いなのだ。お互い人見知りなのだが他の人に対しての時と比べて2人の距離は近いように思える。何かと2人でもいることも多いし。というか、今の豊を見ていると付き合うとしたら簪としかあり得ないと思う。

「先に言っとくけど、君は人の事言えないからね」

「あ、はい」

彩さんに突っ込まれた。もういいじゃん。今は刀奈と付き合ってるんだからさ。告白までかなり時間がかかったことは認めるけど…。

現在更識・出雲では「あの2人がくっ付いたんだから、簪と豊も引っ付けてしまおう」と一部の人が考えているらしい。主に動いてるのは目の前の天才科学者^アとその双子の姉^ホなんだが。

「で、豊はどんな感じなんですか？」

「全然ダメ。あの子自己評価低すぎるのよ」

「やっぱりですか…」

「昔の簪ちゃんも低かったけど、豊君は簪ちゃん以上なのよね」

原作と比べて姉と自分を比べることが少なくなり、マシになったとは言えやはり簪の自己評価は低い。だが、それ以上に酷いのが豊だ。原作の簪より酷い。だから恐らく簪と自分が付き合えるとは思えないのだろう。最近、俺が話を聞いたところ簪が好きだということは自覚しているようだ。けど、そこからどうすれば良いのか全く分かってなかった。俺が「告白しろよ」って言ったら即答で「無理です」と言われた。ついでに「翔平さんに言われたくないです」とも言われた。うん、何も言い返せませんでした。

結局は、簪が告白しちゃうのが一番手っ取り早いのもかもしれない。豊はそもそも簪が自分のことが好きははずないって思ってるみたいだし。

さらっただけ学園内を彩さんに案内して、合流した虚も入れた4人でどうすればあの2人を引っ付けることができるかを話し合った。

シャルロットとラウラが転校してきてから数日が経った。この数日は、シャルロットが女とバレルこともなく、ラウラが何かやらかすこともなく無事に過ぎてくれた。今日の放課後にアリーナで一夏、シャルロットとラウラが一触即発だったらしいが、前もって注意してもらおうように伝えておいたアリーナ担当の教師の迅速な対応によつて事なきを得た。このイベントが起きたということは、明日か明後日にはセシリアと鈴がボコられるのでそちらの対応はできるようにしておきたい。

俺は簪と組んでタッグマッチに出るが、一夏・シャルロットとラウラ・箒が当たることを考えたら、あとは一般生徒だけになつてしまふ。さすがに一般生徒相手だとやる気が出ないので、何とかして原作ではボコられて出場できなかったあのペアをタッグマッチに出させたい。そのうえで刀奈に頼んで1回戦で俺たちと当たるようにしてもらおう。生徒会長権限で何とかなるだろう。

タッグマッチに向けて、俺と簪は特にこれと言って何か準備をしているわけでもない。精々簪が当日に使う訓練機の調整ぐらいだ。俺がこれまでタッグを組んだことがあるのは、実は刀奈じゃなくて簪のほうが多い。最近では、ようやく俺の実力も刀奈と同じほどになつてきてはいるが、それまでは当然刀奈のほうが単純に強かった。当時は、俺からしたら化け物みたいなものだった刀奈にどうすれば勝てるか、よく簪と話し合つて挑んだものだ。たまには勝てたけど、それでも2対1で負け越していた刀奈は本当に強かつたと思う。3対1でも勝てなかつた葵さんは、悪魔にしか見えなかつた……。あの人ほんとに怪我で引退したのだろうか？現役でも全然いけると思うんだけど。

そんなわけで、俺と簪とでは今更チームワークも何もないので、試合前に軽く流せばそれで本番はばっちりだ。余裕で優勝できるだろう。1回戦しかないんだろうけど。

「今日も問題なし、と」

今は部屋で刀奈とコーヒーを飲みながら今日の報告などを行なっている。ちよūdと俺が今日あった出来事を報告し終えたところである。ラウラが不安要素ということは刀奈にも伝えているし、伝える前から刀奈もそのことは感じ取っていた。

「明日からは私か翔平がアリーナで待機しておいた方が良さそうね」
「そうだなあ。何かあってからは遅いし」

実際に数日後には何かあるんだし。

「フランスの方はどうだったんだ？」

確か今日、再びフランスで情報収集と調査を行なっていた仁さんからの報告が届く予定だったはずだ。

「デュノア社は真つ黒、フランス政府はグレーってところかしら」
「とぅとぅ？」

実は俺、このシャルロットの問題が実際どうだったのかということ俺はほとんど覚えてないのだ。フランス政府にも、シャルロットの男装を見抜いた人物がいはいはずがない。にもかかわらず、代表候補生という肩書きが与えられたのは、どういう背景があったのか…。

仁さんからの報告を刀奈から聞いて、まあ色々と納得した。聞いてみたら簡単な話だった。

第3世代機の開発が上手くいっていないデュノア社は、経営がかなり危うい状況となっているらしい。そんな中で、どうにかして打開策を講じなければと社長含む上層部の一部の人間が焦っていたところにシャルロットの存在が知らされた。

そこからはもう暴走と言っているのだろう。何を血迷ったか、俺と一夏という男性操縦者の発見というニュースを見て、シャルロットを世界で3番目の男性操縦者という形で学園に紛れ込ませて、俺や一夏のデータを盗むように指示した。普通は最低でも1年は男装の訓練が必要だと思うが、それを数ヶ月で切り上げて学園に送り込んできたところを見ると、相当切羽詰まっているのだろう。

一方でフランス政府は、デュノア社のそれらの状況を全て理解した

上で、利用しようとしているようだ。そもそも上手くいくとは思っておらず、成功したのならデータは横流ししてもらい、失敗したのならデュノア社の暴走として政府は無関係を主張するつもりなのだろう。要は成功したらラッキー程度にしか考えておらず、既にデュノア社は捨て駒なのだ。

それだけ聞けばデュノア社に対して同情の気持ちも少しは感じるが、元は自業自得なので仕方がない。

「しばらくは様子見だな。彼女自身の気持ちが動かないと俺達は何もできない」

「そうね。彼女が今の状況から助かりたいという意味を示さないと私たちは何もできないわ」

卒業後の話は別として、学園に在学中の生徒は本人の同意がない場合は原則として外部の組織からの影響や干渉を一切受けない。したがって、俺や刀奈の力で外部から守ることができる。しかし、その生徒本人がスパイとしての立場を取るのであれば、学園側としても見逃すことは出来ない。学園を守る立場として、それ相応の対応を求められる。結局は、シャルロットがこのままスパイとして一夏や俺の情報をデュノア社に渡すのか、今のこの状況から助かりたいと願うのかで、こっちの対応も変わってくる。

「どっちにしても、男装がバレるのは時間の問題だろうな」

「そうね…」

あと数日もすれば一夏にバレるんだけどね。刀奈もそう予想しているようで、苦笑いを浮かべている。逆に一夏はよく同じ部屋で生活してて、数日間とはいえ気付かずにいられるもんだ。ラッキースケベ体質だったら確実にアウトだったな。鈍感だけど。

「そういうえば、今日簪は豊と夕食食べにいつてるんだっけ？」

「そうよ。この前豊君が学園に来た時に約束してたみたい」

「豊が？珍しいな」

「お膳立ては楠姉妹だけどね」

「ああ、なるほど」

大方、どこかのレストランのチケットでも用意して豊に簪を誘うように押し付けたのだろう。その料金を払ったのが藤丸さんというのとまで想像できた。これで二人の仲が進展したら楠姉妹と藤丸さんのフラインプレーだ。

「今日で何か進展すると思うか？」

「どうかしら……、するかどうかはともかくとしてほしいっていう思いはあるわね」

それは確かに思う。あんまり考えられないけど……。

いつそのこと、俺が学園に入学してきた時に簪が俺に送ってきたように、告白するように簪にメール送ってやろうかな。よしそうしよう。

刀奈にそのことを伝えてメールを打ち始める。ちなみに簪からのメールのことは、あれからしばらく経ってからいつものメンバーで昼食を食べているときに刀奈に伝えた。聞いた刀奈は呆れてたけど。

メールを送信し終えたとき、刀奈が何かを思いついたように「そういえば」と言ってきた。

「ねえ翔平、私達って付き合ってからまだデートした事ないわよね」

「確かに、言われてみればそうだな」

休みで授業がない日とかでも、お互い忙しいからデートらしいデートなんて出来ないでいる。といっても、同じ部屋だからほとんど同棲みたいなもんだし、不満というわけじゃないけど。

「だから、学年別トーナメントが終わったらデートしない？」

即答で了承しました。

翌日、俺は終始機嫌良く授業を受けた。

元々は俺も学年別トーナメント後、というよりもシャルロットとラウラの問題が片付いた後に刀奈をデートに誘うつもりでいた。このタイミングを逃したら、その後は京子さんの墓参りがあつて臨海学校と、イベントが立て続けに迫って来る。立場的にその準備は忙しくなるのは当然なので、自由な時間を過ごせるのはこのタイミングしかないのだ。

だからこそデートしたいと思つたのだが、同じことを刀奈も考えていたということが嬉しくてたまらなかつた。単純にデートの予定が入つたことも嬉しい。

今日は朝から出会う知り合い全員に「何か良いことあつたのか？」つて聞かれてしまった。その度に刀奈とデートする予定が決まつたということを伝えると、全員冷めた目で「あつそ、良かったね」と言われたけど、今日の俺はそんなこと気にしないほど機嫌が良くテンションが高かつた。

「お兄ちゃんつて本当にお姉ちゃんのことになつたら単純になるよね」

「デートの予定が決まつただけであのハイテンションはね……」

「ちよつと舞い上がりすぎたと反省しています」

流石に男子高校生が鼻歌を口ずさみながら廊下をスキップは見苦しいものだったらしい。昼に刀奈から「少し落ち着きなさい」つて言われたし。というか午前中の段階で2年のクラスにも俺が馬鹿みたいにハイテンションだったということが知れ渡つていたことに、この学園の噂が流れるスピードの異常さを改めて感じたよ。本当におかしいと思う。

今はそのことをネタに簪と本音から弄られながら、俺は生徒会室に、簪と本音は整備室に向けて移動している。このまま弄られ続けるのも嫌なので、こちらからも反撃することにする。

「そっういや簪、結局昨日は告白したのか？」

「……………」

反応から察するに、結局告白できずに帰ってきたようだ。

別に俺は昨日送ったメールでは、以前簪から送られてきたメールのように「もし今日告白できなかつたら…」みたいな脅し文句は書かなかつた。俺としても中々告白に踏み切れないというのはよく分かるので、あまり強く言えない。といっても、このまま簪がズルズルいくのであればそれ相応の対応はするつもりだけど。というか……………」

「かんちゃん今日から三日間アニメ禁止ね」

「そんな……………」

俺がしなくても、本音が勝手に罰を与えたようだ。簪にとって三日間アニメを見れないということはそこそこの罰になってると思う。一週間なら発狂するだろうけど。本音にとってはお菓子禁止の恨みを晴らした結果なのだろう。本音のお菓子禁止は自業自得なんだけどさ。

項垂れる簪を励ましながら移動し、途中整備室に向かう2人と別れた。

2人と別れ、生徒会室へ向かう。その途中、曲がり角の先から見知った声が聞こえてきた。

「お願いです教官!!ドイツに戻ってきてください」

「昼にも言ったはずだ、私には私の役目がある」

聞いてみると、織斑先生とラウラの2人だった。ラウラが織斑先生にドイツ軍に戻ってきてほしいと懇願しているんだろう。織斑先生は聞く耳持たずって感じだけど。

「今から会議がある、話がそれだけなら私は行くぞ」

織斑先生のその言葉でラウラは去っていった。

そして、織斑先生がこっちを見ていることに気付いた。

「今日はよく盗み聞きされるな。この学園の男子生徒は盗み聞きが趣味なのか？」

「そ、そういうわけではないですよ。俺はたまたまです、織斑先生」

その言い方だと一夏も立ち聞きしたみたいだな。

さつき昼って言ってたからあいつがトイレに行ってた時にでも聞いたんだろう。というか、ラウラはその時にも追い返されて、さつきもまた頼みに来たのか。その執念にはちよつと賞賛するよ。

「お前達の事だ、あいつの事も少なからず調べてるんだろう?」

「そこそこは、と言っておきます。といっても相手はドイツ軍ですからね…」

「お前が更識に頼まれたらドイツ軍相手でも、片っ端から調べそうだがな」

「それは当然です」

「お前あれだな、更識の犬だな」

あ、呆れた顔された。まあ呆れられるんだろうけど、仕方ないじゃん。俺にとつて刀奈からの頼みごと以上に重要な事なんてないんだし。

「この後はアリーナで待機してくれるのだろうか?」

「その予定です」

「何かあれば担当の教員に言って私を呼び出せ、私も向かう」

「何もない事が一番なんですけどね」

織斑先生もさつきのラウラの反応から、何かやらかしそうだと感じてるようだ。実際そうなのだから、織斑先生の洞察力は凄い。

改めて「よろしく頼む」と言わせて、織斑先生は歩いて行った。

織斑先生に言ったように、この後はラウラのセシリア・鈴襲撃を警戒するためにアリーナの管制室で待機する。

先に生徒会室で軽く連絡事項を報告し合った俺と刀奈はすぐにアリーナの管制室に向かう事になっている。IS学園にはアリーナやグラウンドといった施設は複数存在しているが、今の段階では1年生にはアリーナは2箇所しか使用許可が出ていない。2学期からは全ての施設が使用可能となるが、入学してあまり日が経っていないこの時期は一部の施設に限定されている。

なので、ラウラが2人を襲撃するアリーナは1年生に開放されてい

るアリーナのどちらかということになる。そこで、それぞれのアリーナに俺と刀奈がスタンバイして、何か起きた時に即対応できるようにしようということだ。

原作をきちんと覚えていたら、どのアリーナでセシリアと鈴が特訓するか分かったかもしれないが、生憎覚えていない。可能性があるアアリーナが2箇所で助かった。

生徒会室で軽く話し合い、今日の分の書類仕事を虚に任せて俺と刀奈はアリーナへと向かった。

アリーナの管制室に到着した俺はまず、今日の担当だった山田先生に挨拶した。

「お疲れ様です、山田先生。今日担当だったんですね」

「あ、上代君。今日は別の先生が担当だったんですけど、急用が入ったらしくて私が変わりました」

アリーナの担当は、1日ごとに教師達で交代で回していることは事前に聞いていた。知らない先生だったらいちいち自己紹介とかからしなくちゃいけなかったから、山田先生が担当で良かった。

「話は聞いています。ボーデヴィツヒさんのことですよね」

「はい、今日から数日は俺と楯無とで待機しておきます」

俺と刀奈がアリーナの監視につくことは刀奈が事前に教師達にも伝えて貰っていたようだ。いろいろと説明しなくて済む。

「もし何かあった場合は至急織斑先生に連絡してください」

「分かりました」

正直俺や刀奈の言葉は今のラウラは素直に聞くとは思えない。教師の言葉も、一応聞くとは思いますがそこまでの効果はないだろう。やはりラウラに最も効果的なのは織斑先生だ。なので問題が起きた場合は織斑先生に丸投げすることにする。俺たちがやるのはそれまでの時間稼ぎだ。

別に俺や刀奈もやろうと思えばラウラを無力化させることはできるだろうが、立場上一人の生徒にやりすぎてしまうのはいただけないので、そういう意味でも織斑先生に任せるしかないのだ。

ちなみに俺が思うに、俺とラウラの相性は俺にかなり有利だろう。ベンダバル本体に加えて複数のビットが個々に攻撃するのだから、AICで停止させる対象を絞ることができないはずだ。本体を停止させようものなら他のビットに滅多打ちにあう。反対も然り。ラウラには悪いが対一では俺に負ける要素がない。油断はしないけど。

「今日は更識さんとは一緒じゃないんですね」

やることなくして生徒会の書類仕事を少し持ち込めば良かったと思っていたら、暇していることを察してくれた山田先生が話しかけてくれた。

「生徒会は人手はあまり足りてませんからね。さすがに別行動になりました」

「あ、そうなんですか？何だかいつも一緒に行動している気がします」
「き、気のせいじゃないですかね？」

確かに同じ部屋に住んでるけど、学年違うんだしき……。まあ今更なに言ったところで根付いた印象は変わらないんだろうけど。

「ほんと、羨ましいです。私も出逢いが……」

ボソツと言つて溜息をつく山田先生。出逢いさえあれば山田先生なら彼氏の1人くらいすぐ作れそうだけどな。やっぱここで教師やってたら出逢いなんて無いんだ。

暗い表情になる山田先生を見て、これからは山田先生にそういう話題を振るのはやめようと考えていると、アリーナ内に見知った顔が入ってきた。

「……お」

「あれは、オルコットさんと凰さんですね」

あの2人が来たということはこっちが当たりだったようだ。

「今日は織斑君は一緒じゃないみたいですね」

「デュノアがいるからそっちといるんじゃないですかね」

「やっぱり男子生徒同士で行動してるんですね」

あれ？山田先生はシャルロットの正体知らないの？てつきり織斑先生から話いつてるんだと思つてたけど。デュノア呼びしといて良かった。

てか、今日一日あいつらの様子見ていたけど、どうもシャルロットの正体が一夏にバレたらしい。早すぎるんじゃないだろうか。シャルロットの普段の様子見ていたらバレて当たり前だとは思うけどさ……。後で刀奈に報告しとかないと。

さて、あのセシリアと鈴が来たということは……と考えた瞬間、2人の元に突如砲弾が飛来した。ラウラのご登場だ。

「ボーデヴィツヒさん、危ないですね」

「不意打ちでしたからね」

普通に考えて、学園のアーリーナで他の生徒に不意打ちで攻撃を仕掛けるのは問題行為だ。いくら軍所属で相手は代表候補生といってもここは学園、やっていいことではない。

そんな問題児は、会話は聞こえないが明らかにセシリアと鈴を煽っていて、2人がラウラが放った言葉でブチギレたのが分かった。ああ、一夏をネタに煽られたか。あいつら本当に一夏が話に絡むと単純だよな。…人の事言えないけど。

そして始まった2対1の戦闘が始まった。

「山田先生、織斑先生に連絡を」

「分かりました。上代君はどうしますか？」

「とりあえず、セシリアと鈴にもプライドがあるでしょうからしばらくは様子見します」

2対1であるのに明らかにラウラの方が優勢になると予想する俺の物言いに、山田先生も疑いなく頷いた。どうやらラウラの実力は山田先生も把握しているらしい。

織斑先生への連絡を山田先生に任せて俺は管制室からアーリーナのピットへと移動する。移動中に刀奈にラウラがこっちのアーリーナに来たこと、セシリア・鈴と戦闘を始めたことをメールで報告しておく。

ピットに到着して、ISスーツに着替える時間が勿体無いので制服のままベンタボールを展開し、管制室にある山田先生と連絡を取る。

「山田先生聞こえますか」

『はい、聞こえます』

「織斑先生とは連絡つながりましたか？」

『繋がりました。今こちらに向かっています。ボーデヴィツヒさんの対応については上代君に任せるとのことです』

「分かりました。ではセシリアと鈴のISのダメージレベルがBに

なったら教えてください」

『了解しました』

ダメージレベルがBであれば、学年別トーナメントにも間に合うだろう。多分今止めに入ったところなのであの2人は納得しないだろうから、このまましばらくは戦わせることにする。

そうして始まった2対1の戦いは、原作通りラウラ優勢で進んだ。セシリアも鈴も弱いわけではないが、ラウラの方が頭1つ抜けている。やはり単純な力量では簪を除けば1年の代表候補生の中ではラウラが1番か。原作だったら1番だったんだろうけど、ここでは簪がヤバいくらいに実力つけてるからな。姉妹で仲直りしてこうまで変わるとは思わなかった。

しばらく手を出さずに見物していると、ピットとは別の一般の出入口から騒ぎを聞きつけたらしい一夏とシャルロットがアリーナに入ってくるのが見えた。

そのタイミングでセシリアの至近距離でのピットのミサイル使用という結構無茶な特攻を行った。が、ラウラは上手く避けて最小限のダメージだけに済ましていた。ああいうところの咄嗟の判断と回避能力は実戦じゃないと身に付かない。流星は軍の部隊長といったところか。

「さて、そろそろ止めるか」

2人のダメージもかなり溜まってきているだろう。何より一夏が今にも割って入りそうで怖い。あいつが介入したら面倒臭いことになりそうなので、その前に止めに入ろう。

そう考えていると、ちょうど山田先生から通信が入った。

『上代君、2人のダメージレベルがBを超えました』

「分かりました。じゃあ止めに入ります」

『織斑先生もあと少しで到着するそうなので、それまでをお願いします』

「了解です」

山田先生との通信を切り、シロガネとクロガネを展開する。そのままピットからアリーナに入り、セシリアと鈴を袋叩きにしようとして

いるラウラに牽制の意味合いを込めて直撃しないように、シロガネとクロガネで銃撃する。途端にラウラのヘイトが俺に向けられる。めっちゃ睨まれたよ。

目の前に格好の獲物が転がっていて、それを今からリンチしようとしていて邪魔されたからまあ当然か。

「貴様、邪魔をするな」

「生徒会として、流石にそれ以上は見逃せない」

「ふん、なら貴様から先に潰してやる」

そう言ったと同時に、俺は身動きが取れなくなった。これがA I Cかあと呑気に思いながらも、前もって展開しておいたライフルビットでラウラを牽制して、A I Cの支配下から逃れる。今は織斑先生が到着するまでの時間稼ぎなので、ラウラに攻撃を当てる必要もない。立場的に俺が一般生徒攻撃しちゃうのはあまりよろしくない。

けど、そんな事情など関係ないラウラは俺があえて攻撃を外していることに大層ご立腹のようだ。

「貴様!!なぜ攻撃を当てない!」

「別に、俺がここでお前とやり合う理由も無いからな」

「ふざけるな!!」

俺が攻撃を外していることから俺に舐められていると判断したらしいラウラは冷静さを失いながら闇雲に攻撃してきた。レールカノンから放たれる砲弾を避けつつ、A I Cに干渉されない間合いを保ちながら時折牽制しつつ旋回を続ける。ラウラの専用機のシユヴァルツエア・レーゲンが相手なら、間合いさえ保てばA I Cとプラズマ手刀にやられることはない。もし瞬時加速で接近してこようとしても、先程までのセシリア・鈴との戦闘を見ているので、モーシヨンで大体分かる。来ると分かれば対処は容易だ。

ラウラからの攻撃を捌きながら、俺は床から立ち上がったセシリアと鈴に通信を繋げる。

「お前ら動けるか?」

『翔平さん!!』

『ちよつと、邪魔しないですよ!!』

やっぱりというかなんとというか、通信が繋がった瞬間に2人から非難の声があがる。

「2人ともISのダメージレベルがBを超えてる。これ以上やったら月末の学年別トーナメントに影響が出るぞ」

2人は「でも」とか「しかし」とか言っただけでなかなか引き下がらない。強情な奴らめ。

「トーナメントには国の人も来るんだろ？代表候補生が私闘が影響でトーナメントに不参加はマズインじゃないのか？」

『…分かりましたわ』

『…分かったわよ』

「じゃあさっさと動け。アリーナの端に一夏とデユノアがいるからそつちまで退避してくれ。あと一夏がアリーナのバリアー勝手に破壊しないように見張っててくれ」

ここまで言っただけでようやく2人は引き下がった。渋々といった様子でアリーナの端、一夏とシャルロットの方へと退避していった。

さて、だいぶ時間も稼いだし、そろそろ織斑先生も到着する頃だろう。正直、ラウラの攻撃はこのままずっと捌いていられるが、このままいったらVTシステムが作動しそうで怖い。俺がラウラに攻撃しなかった理由の1つにVTシステムの存在がある。捌きつつ攻撃して、シールドエネルギーを減らしてしまえば、VTシステムが作動する可能性がある。流石にかなりのダメージを与えなければ作動はしないだろうが、何が起きるか分からない以上、警戒するに越したことはない。少なくとも頭に血が上ってる今のあいつなら、精神状態だけなら作動しそうだし。

レールカノンの砲弾を避けてワイヤーブレードを捌き、瞬時加速のモーションに入ったので、俺も瞬時加速でその場を離脱。その後牽制で少し銃撃しようとしたところで、アリーナにスピーカーも何も使われない地声が響き渡った。

「そこまでだ!!」

声の主を見ると、そこにはIS用の近接ブレードを素手で持っている織斑先生が立っていた。うわ、この人マジで近接ブレード素手で

持つてるよ。人間じゃないだろ絶対。

そんな風に考えていたら織斑先生に睨まれた。やべえまじで怖え……。蛇に睨まれたカエルの気持ちがあった。

「模擬戦をやるのは構わんがやり過ぎだ。他の一般生徒を巻き込みかねない状況を教師としては見過ごせない。この続きは学年別トーナメントでやれ」

「教官がそう仰るなら」

目論見通り、ラウラはすんなり織斑先生の言うことを聞いてくれた。一応周りにいる一般生徒はみんな退避しているけどそこら辺の細かいところはラウラは気にしなかった。

「お前らもそれでいいな」

そう言つて、織斑先生はアリーナの端に待機していた4人にも同意を求める。その言い方だと、はいつて返すしかないだろ。誰がここで嫌と言えるだろうか。

「では、学年別トーナメントまで私闘の一切を禁止する。解散！」

言葉とともにパン！という織斑先生の手の音が響き渡った。

アリーナでの一件が織斑先生の言葉で片付いた後、俺は織斑先生と共に管制室に移動して、ちようどそのタイミングでこちらに到着した刀奈に事の顛末を報告した。

織斑先生には、「アリーナの被害をもう少し抑えて欲しかった」と言われた。いや、被害って言ってもほとんどバリアーが防いでたから精々地面が所々抉れたぐらいじゃん。

そもそもレールカノンでバンバン撃ってくるんだから仕方なかったって。介入したはいいものの立場的に真っ向からやり合うわけにもいかず、かといって直撃を受けるわけにもいかず……。

どうしろってんだ……と思つて織斑先生を見てたら、フツと笑つて「冗談だ」と言われた。この人って冗談言えたんだ。その瞬間振り下ろされる出席簿。……痛い。

「アリーナでの件も含めてだ」つて言われたけど、人外呼ばわりしたことをまだ怒つてたらしい。事情を知らない刀奈が首を傾げながらも出席簿で殴られた頭を撫でてくれた。すごく嬉しい、嬉しいんだけどやめて刀奈、意外と恋愛面の話と無縁な事を気にしてる織斑先生がめつちや睨んでるから。これまた後日に仕返しされるやつだから。

事後報告だけさっさと済まして刀奈と一緒に管制室から逃げ出す。出て行く時に織斑先生に「今回は助かった」つて言われたけど、相変わらず睨まれたままだった。多分刀奈の手を掴んで出たのが悪かったんだらうな。

どうしてこう、この学園の大人はみんな恋愛に飢えてるんだらうか。学園がもし共学だったら男子生徒が何人か喰われてるんじゃないか。

時は流れ、学年別トーナメント当日となった。

昨日教師達によつてトーナメントの組み合わせ抽選が行われたらしいが、俺はそれには関わることはできなかった。まあ当然そうなる

よね、選手として出るんだから。

ロシア代表として、刀奈は出場を免除されていた。俺もそうして貰えば良かった…。昨日の夜、部屋で刀奈に1回戦の俺達の相手と同じ専用機持ちにしてもらえないか頼んだんだけど、「勝ち進めば当たるんだからいいんじゃない？」という至極真つ当な正論を返されてしまった。言えないよね、このトーナメントは1回戦しか行われなんだ、なんてさ……。

ということで、俺と簪のペアの1回戦の相手は一般生徒ペアとなった。ちなみに一夏・シャルロットペアとラウラ・箒ペアは普通にくじ引きで1試合目での対戦に決まったらしい。外的要因なしにそういう組み合わせになる一夏は流石としか言えない。

そういえば、この前生徒会室で書類仕事してる時に知ったんだけど、学園に在籍している1年生の国家代表候補生で俺の知らない人が何人かいたんだよな。タイとかオランダとかカナダとかギリシャとか、刀奈と同じロシアもいたな。カナダは双子だったっけか？

一応、専用機は開発中でまだ持っていないようだけど夏休みから二期以降を目処にそれぞれ完成していくらしい。

専用機持ちじゃなくても、その代表候補生達の誰かと当たれば良いなど思ってた俺の願いは叶うことはなかった…。

さて、いよいよ始まる学年別トーナメントなのだが、1年生の1試合目はさっき言った通り一夏達の試合で、まあ当然注目の試合となる。

生徒会として元々組み合わせを知っていた俺は簪、本音とともに他の生徒達が組み合わせを確認している間にアリーナの座席を確保することに成功した。トーナメントに参加しない生徒会として、トーナメントの運営をサポートしている刀奈と虚の座席も確保しておく。刀奈と虚は運営のサポートといっても、あくまでサポートな訳で、実際には開催までの準備を手伝っただけでこれから行われる試合自体は教師陣のみで執り行われるらしい。なので刀奈達ももうしばらくすれば、こちらに合流するらしい。

「1回戦から派手な組み合わせだよな」

「片方は世界に3人しかいない男性操縦者のうちの2人…」

「もう片方はドイツの代表候補生とIS開発者の妹…」

「二「派手だねえ…」」

簪、本音と声を合わせる。さっき本人に聞いたら、『グダグダ考えずに済むからラツキー』とか言ってたけど、あの前向きな考え方は尊敬するよ。まあ俺や一夏の試合ってなったら試合順なんか関係なく注目されるんだろうから、気にしたところで意味が無いんだろうな。

仕事を終えて合流した刀奈と虚にあらかじめ確保していた座席を譲り、5人で並んで座る。最近では一夏とかクラスの人と行動することも増えてきたが、やっぱり何だかんだ言ってもこの5人で行動することが多いんだよな。座り順は虚、刀奈、俺、簪、本音と、これも昔から変わらない。

「翔平はどつちが勝つと思う?」

アリーナの観客席も人で埋まり、選手である一夏達がアリーナへと出てきて歓声が上がる中、隣の刀奈が俺に聞いてきた。他の3人も興味があるようで俺の方を向いている。

「そりゃ、一夏とデユノアだろ」

「即答ね」

「いくらボーデヴィツヒの実力があってもこれはタッグ戦だ。あいつのパートナーが同じレベルならまだしも箒は一般の学生レベルだからな」

「なるほどね」

「性格的にボーデヴィツヒも一夏も真っ先に1対1に持ち込むだろう。そうなたら後の2人も1対1になって、デユノアが負けるはずがない。この試合は2対1になる事が確実なんだよ」

俺の解説に4人は納得したようだ。

ちなみに、シャルロットとラウラに関してはまだ名前で呼んでいない。シャルロットに関しては名前では呼ばないと本人が嫌がるから、本

人に対してのみシャルルと呼んでいる。それ以外はふとした時について、本名で言ってしまうようなので、デユノア呼びにしている。どうせ、このトーナメントが終われば男装も終わるんだし。

ラウラは単純にまだ仲良くなっていないからボーデヴィツヒで呼んでる。

注目の中開始された第1試合は、俺の予想通りの展開となった。

「やっぱり一夏は突っ込んで行ったな」

「試合が始まる前に何か話していたようだったけど」

「大方、織斑先生をネタに煽られたんだろうよ」

それにしても、一夏は煽り耐性なさすぎじゃないだろうか。ヒロインは鈴とかを中心に短気な奴が多いけど、一夏も負けず劣らず短気なんだよなあ。

俺がもし一夏と試合でもするなら、まずは言葉で煽ってキレさせるな。冷静じゃない相手の対応ほど楽なものはない。

そのことを言ったら、周りに引かれた。

「翔平君、それは…」

普段あまり他人にジト目など向けない虚も、少し身を引いて俺を見ってくる。いや、相手の弱味を突くのは闘いの基本だろ？何もそこまでドン引きしなくてもいいじゃんか。

周りの反応に俺が落ち込んでいたら、突っ込んでいった一夏がAICに捕まるも、シャルロットの援護で事なきを得たところだった。

「あれが、AIC…」

隣に座っている簪が目を輝かしている。自分のISを開発しているためか、元々興味があったのかは分からないけど、最近の簪は初めて見るISの武装、特に今のAICと言った特殊兵装を見ると目を輝かせて見ている。原作と違って、比較的気楽に自身のISの開発を進めている中で、開発関連に興味を持ち始めているようだ。

「一夏君はパートナーがデユノアちゃんで助かったわね」

「今のもデユノアがいなかったら至近距離からの砲撃喰らってたから

な」

今もシャルロットは箒の相手をしつづ的確に一夏のサポートをしている。ああいう万能型がパートナーだとやりやすいだろう。

そんな風に思っていたら、隣に座る簪が何かを思い出したらしく声をあげた。

「そういえばお兄ちゃん、試合は前衛後衛どうする？」

「ああ…俺が後衛でいいんじゃないかな」

「分かった」

基本的に俺と簪のペアは1対1という状況はあまり想定しない。

タッグ戦なのだからある程度は相手が固定されるかもしれないが、前衛が相手の1人を攻撃し、反撃を受けそうになったら後衛が援護。援護を受けた前衛は相手を切り替えて攻撃し、また反撃を受ける前に後衛が援護……。これを繰り返す予定だ。

このやり方だと前衛が目立ってしまうので、立場的にあまり派手にやり過ぎてはいけない俺は今回はあまり前衛向きではない。

その事を分かってくれている簪もすぐに了承し、すんなりと前衛を引き受けてくれた。

「相手の一般生徒が可哀想…」

虚の眩きを、俺も簪も聞かなかったことにした。

試合はその後、時折一夏の援護もしながら様子を見ていたシャルロットが、箒への攻撃に集中するためにラウラ、一夏から距離を取ったことにより、純粹にラウラと一夏の1対1の状況となった。そして、すぐさまフルボッコにされ始めた。

「ここだな」

「一夏君がこの攻撃を耐えきることができれば、一夏君達の圧倒的優位になり」

「一夏が撃破されたら、ボーデヴィツヒの優位になる」

「「ふむふむ」」

いつものまにか俺たちの周りに座っている生徒達が、俺と刀奈の会話を解説代わりに聴いていた。実況席でもあれば、俺たちが解説として呼ばれるかもな。

ラウラのワイヤーブレードを使った攻撃に為すすべもなかった一夏だが、ギリギリのところまで箒を倒したシャルロットが間に合い、何とか2対1の状況に持ち込むことができた。

「一夏は今のでかなりシールドエネルギーを削られたな。零落白夜を使うにはキツイ状況だ」

「使うのにシールドエネルギーを消費するんだっけ？」

簪の問いに頷いて肯定する。俺が思うにあれを使うのはかなりリスクだと思う。確かに決まれば強力だが、当たらなければそれまでだし、逆にシールドエネルギーを消費して自分の首を締めることになる。攻撃を当てる瞬間のみ零落白夜を使えるのであれば関係ないのだが、そんな器用な芸当が一夏にできるはずがない。

それが分かっているのかどうかは分からないが、2対1と優勢な状況となった中で、一夏はすぐさま零落白夜を使うことはなかった。

「2対1になっても互角にやりあってるわね」

「まあこんなところだろう。一夏とデュノアのコンビネーションもまだまだだし」

俺の評価に周りから疑問の声があがる。

確かに一見、コンビネーションを取りながら上手く戦えてるように見えるが、あれはシャルロットが合わせてるだけだ。一夏は大して連携の役にたっていない。

その事を解説したら苦笑ともに、「上代君って織斑君に結構厳しいよね」と言われた。仕方ないじゃん、あいつがまだまだなのは事実なんだし。クラス代表にはちゃんと成長してもらわないと。

互角の状況が続いた中、一夏の性格的にそろそろかな？と思った辺りで一夏は零落白夜を展開した。恐らく、このままじゃ埒があかない

と思ったんだろう。

一撃必殺の零落白夜を展開した一夏だったが、それでもラウラはそれを回避しつつ、シャルロットからの攻撃も捌きつつ、2人に攻撃を仕掛けていた。一夏の動きを読みやすいことを差し引いても、ラウラの実力は流石としか言いようがない。

しかし、ここでようやく数の有利が出てきた。一夏をA I Cで捉えたラウラだったが、シャルロットに至近距離までの接近を許して、ショットガンによってレールカノンを破壊された。ここで一夏が決めれば試合終了だったのだが、ここぞと言う時にエネルギー切れで零落白夜が消滅した。

絶好のチャンスが一転、最大のピンチになってしまった。やはりここが零落白夜を使うリスクだと思ふ。

援護に入ろうとしたシャルロットがラウラからの攻撃で被弾し、それに気を取られた一夏の間隙をラウラが見逃すはずもなく、一夏は地面に叩き落とされた。

ラウラの勝利かと思われた瞬間、シャルロットが瞬時加速でラウラに接近した。これには俺や刀奈も驚いた。これまで使ったところを見ていないので、隠していたのか、この試合中に覚えたのだろうか。あいつの器用さを一夏に分けてやってほしい。いや、本当にそう思う。

接近を許したラウラだが、A I Cでシャルロットを拘束する。しかし、それは長く続かなかった。地面に落ちたはずの一夏がシャルロットが使っていたアサルトライフルで援護したため、A I Cは解除された。アサルトライフルにしては絶望的な命中率だったが奇襲だったこともあり、ラウラを驚愕させるには十分だった。

そしてその隙をシャルロットは見逃さず、これまで隠していた奥の手を出現させた。

「最後の最後まで隠していたのね、奥の手を」
「決まれば必殺だからな、あれは」

またとないチャンスにシャルロットは、隠していたパイルバンカー、シールド・ピアース盾殺しをラウラに叩き込んだ。

第2世代最強と謳われたその威力は流石のものだった。それに加えて連射が可能という点もあり、この武装を凶悪なものとしている。シャルロットも当然一撃で終わるはずがなく、続けて3発をラウラへと打ち込んだ。

「あああああっ!!!」

この試合の勝敗は決まった。誰しもがそう思った瞬間、ラウラの絶叫と共に異変が起きた。

さて、ここからは俺の仕事だ。

ラウラに異変が起きた瞬間、俺と刀奈はすぐさま動いた。

俺はアリーナへと向かい、刀奈は上級生の一部に指示を出し、来賓・生徒の避難誘導を開始する。

俺達が迅速に行動を開始出来たのは、予めこうなる可能性を予測していたからだ。

ヨーロッパでの仁さんからの調査報告の中で、ドイツ軍のごく一部において”VTシステム”というワードがあり、詳しいところまでは流石に調べられなかったが、何かしらの関与の可能性があるとなると仁さんは報告していた。

というか、そこまで調べる仁さんって凄いと思う。多分バレたら国際問題にまで発展しかけない。これまでも、際どい調査を何度もしてきた仁さんだが、失敗したことはない。ほんと、頼りなる存在だ。

仁さんからの調査報告のお陰で、俺と刀奈はラウラのISにVTシステムが忍び込ませてある可能性があるかと判断し、何か異変が起きた場合はすぐに動けるように予め対策していた。

俺は観客席からピットに移動し、元々制服の下に着ていたISスーツ姿となってベンダボールを展開してアリーナ内へと移動した。

比較的ピットが近い席に座っていたとはいえ、結構距離があつてそこその時間が掛かってしまった。

アリーナに出ると、一夏と箒が何かを言い合いながら揉めていた。

雰囲気から察するに、興奮してVTシステムによってISの形状が変化したラウラに突貫しようとした一夏を箒が止めているようだ。ほとんどガス欠状態で突っ込んで何ができるといのか。

俺が呆れていると、箒の平手打ちが炸裂した。それにより一夏も少しは落ち着いたようだったが、1人で倒そうという意思は変わっていないようだ。エネルギーがほとんど残っていない今の状態でどうしようと思っているのか。

こちらに近づいて来ているシャルロットがその解決策を持ってい

ることは俺も分かっているが、その事を差し引いても、実力差は歴然としている。

俺は自身の持つ解決策を一夏に提案しようとするシャルロットに目配せして止める。幸い、察しの良いシャルロットは俺が言いたいことをすぐに理解してくれたようで、頷いて一夏と少し距離をとって止まってくれた。

「ガス欠状態の今のお前で何ができる?」

「翔平!?お前いつのまに…」

「ついさつきだよ。で、エネルギーがほとんど残ってない今のお前に一体何ができる?」

「それは…」

「俺達は何もやらなくても、この後教員達で編成された部隊が突入してくる。ここでそんな状態のお前がわざわざあのボーデヴィツヒを相手にする必要はない」

「俺が『やらなくちゃいけない』じゃない、俺が『やりたいからやる』んだ」

俺の言葉に、一夏は一瞬言葉を詰まらせるも俺の目を真っ直ぐに見て言ってきた。

正直、今のこいつを説得するのは難しい。一夏は自分がこうだと決めたら絶対にそれを曲げようとしなない。それは原作でもそうだったし今も変わらない。

…仕方ない。正直ラウラの状態も気になるから教師部隊を待つのも気が引けるし、零落白夜を使うのが1番手取り早くラウラを救出できる。

「分かったよ。デュノア、頼む」

頭を掻きながら溜息を一つついて、俺はシャルロットを呼んだ。

シャルロットのリヴァイブならコア・バイパスを繋げればエネルギーを移せるようになっていたはずだ。

一夏への説明と準備をシャルロットに任せて、俺はラウラの状態を観察する。

普通に考えれば、話し合いを行う俺らを律儀に待つ必要は相手には

無い。しかし、相手はまるで俺たちの準備が整うのを待っているかのよう、その場で静止していた。

形状は先ほどまでのシュヴァルツェア・レーゲンとは大きく違い、最小限のアーマーを残した黒い全身装甲となっていた。

その形状のISは見たことはないが、手に持つ唯一の武器は見覚えはあった。

あれは織斑先生が現役のころに使ってた雪片と瓜二つだった。恐らく一夏が興奮しているのもこれのせいだろう。大方、姉を侮辱されているとでも感じて頭に血が上って突っ込んでいったのか。

まあその気持ちは正直分からなくはない。俺もVTシステムで刀奈のミステリアス・レイディをトレースされたら少なからず取り乱すと思う。

さて、あれが雪片なのだと思えば、あの刀身に触れられればかなりのエネルギーを持っていかれるのだろう。俺に引き付けて、不意打ちで一夏が一撃で決めるのが理想か……。

俺に観察されていることに気づいた相手は、突如として俺の方に襲いかかってきた。俺はそれを回避しつつ、冷静に分析を行う。

やはりあの武装は雪片と考えた方がいいだろう。流石に現役時代の織斑先生の動きまではトレースしきれしていないのか、思ったよりも速くはなかった。それでも手加減はしない。

俺はライフルビットを展開する。あの刀が雪片だとすれば、シールドビットは意味がない。エネルギーシールドごと真つ二つにきかれて、精々壁にしかできない。したがって銃撃のみ、相手の攻撃は全て自力で避ける。

まを絞らせないようにシロガネ、クロガネ、ライフルビットで迎撃しながら、準備中の一夏に今からの動きを説明する。

「いいか一夏、奴の隙は俺が作る。お前は一撃を当てる事だけに集中しろ」

「分かった!!」

「気合い入れるのはいいけどあまり深く斬るなよ、中のボーデヴィツ

ヒまで傷つける」

「な、それつてめちやくちや難しくないか？」

「浅すぎても深すぎても駄目だ。それぐらいやれるだろ？」

少し煽り気味に言葉をかける。

「やってやるさ!!」

すると一夏は気合いを入れて集中する。こういうところは単純なんだよなあ……。煽り耐性があるのか無いのか分からなくなる。

シユヴァルツエア・レーゲンだった黒いISは、四方八方から来るレーザーを避けながらも、俺に攻撃を仕掛けて来る。

俺はそれを避けながら、一夏が黒いISの真後ろに来るように誘導する。

一夏は零落白夜を展開したが、その形状はこれまでとは異なり、日本刀程度の大きさに縮小されている。

さすが、織斑先生に鍛えられていただけのことはある。今の状況を考えれば、あれがベストだろう。というか、零落白夜つて刀身の形状を変えれたんだな。

一夏の準備も整ったので、こちらから仕掛けることにする。

瞬時加速で黒いISの視線を外し、シロガネクロガネを連結させ、間髪置かずに強レーザーを撃つ。

黒いISは回避できないと判断し、刀で弾いた。しかし、衝撃までは防げなかったようで大きくバランスを崩した。

「一夏、今だ!!」

「おう!!」

掛け声とともに一夏が背後から斬りかかる。

完璧に隙を突いた不意打ちでの一撃だったが、黒いISはすぐさま体勢を整えて、一夏に上段から刀を振り下ろした。一夏はその斬撃を雪片式型で弾き、すぐさま頭上に構えて黒いISを断ち切った。

モーシヨンが大きいから一瞬ヒヤリとしたが、注文通り浅すぎず深すぎずに丁度ラウラを中から救出できる程度の切り込みを入れてくれた。

ラウラの状態はどうかと確認すれば、一夏と目が合っていたようだったがその後意識を失った。

それを確認して黒いISに近づき、中からラウラを抜き出すために俺は機体に触れた。

次の瞬間、俺の視界は突如として真っ黒になった。

そして、状況を把握する間も無く今度は真っ白になった。

何もなく、360度どこを見ても真っ白な世界。

どこかに立っているということもなく、何もない空間に俺は浮いている。いや、浮いているという表現すら正しいのか分からない。

一瞬前まで展開していたベンダボールも何故か量子化され、さつきまで着ていた制服姿になっている。

これはどういう状況だ……。

あんまりの状況に頭の理解が追いつかない。

どうするかと考えていたら、後ろからクスクスという笑い声が聞こえてきた。

振り向くときさつきまで何もなかった空間に、誰かがいた。

男にも女にも見える中性的なその顔は俺を見ながら微笑んでいた。

「やあ翔平、ようやく会えたね」

「まず自己紹介からしてくれないか？じやないと反応に困る」

「それもそうか。僕はね、君の専用機…ベンダボールのコアさ」

「……………今なんて言った??ベンダボールのコアって言った?」

「悪い……………自己紹介してもらっても、反応に困った」

「まあそうだろうね。ほら翔平が今いる世界に来る前に貰える能力の中に”ISのコアと会話したい”って入れてたじゃん。あれの効果だよ」

「……………俺そんなこと入れたっけ?」

「うん」

全く覚えていない。

正直、転生したのって8年前だからその時のやり取りなんかいちいち覚えてるわけがない。

けど興味本位でコアとの会話をしてみたいって思ったことはあり得るし、実際今の状況を考えたら俺はきつとそう願ったんだろう。

「じゃあ何で急に、こんな状況になったんだ？てかこれってお前の仕事？」

「僕の仕業って訳じゃないかな。元々僕と翔平がこうして会話することとは可能だったんだけど、そのきっかけがなかったんだよ」

「さっきあの黒いISに触れたのがきつかけだったって言うのか？」

「僕も驚いたさ。確かにVTシステムで不安定だったISに触れて、そのコアに影響されたっていうのはあるだろうけど、それでこんな簡単に繋がるとは思わなかった」

「神様の力は何でもありか……」

「そういうことだね」

何でもありなんだな。もっと他にいろいろ頼めば良かった。

「今回は挨拶だけしておこうと思ってさ。一度繋がればこれからはいつでも会話できると思うし」

「専用機は常に着けているしな」

常に見られてと考えると考えたら恥ずかしいとも思うけど……。

「これからもよろしくね」

「よろしくな」

手を差し出し握手を求められたので俺もそれに応えて握手をした。

手を離れた瞬間、ベンダボールのコアは光に包まれて消えていった。そして一瞬視界が光に包まれたと思ったら、目の前にはさつきまで闘っていた黒いISがいた。

「どうした翔平?? ボーツとして」

「……いや、なんでもない」

一夏は既にラウラを回収して抱きかかえていた。

あの世界で体感した時間は、現実では一瞬だったのか。

ほんの一瞬だったが、かなり濃い経験を味わった気がする。多分コアと会話した経験なんか俺が初めてだろうし。いや、ISを開発した兎なら有り得るか…。

突入してきた教師部隊に残った黒いISの処理を任せ、一夏は意識を失っているラウラを引き渡し、俺たちはアリーナから引き上げた。

この後事情聴取されるのだけど……。

ベンダバールのコアの呼び方も考えなきやなあ。”ベンダバールのコア”なんて呼びにくくて仕方ないし。

うーん……略して”ベル”とかでいいか。

——テキトーだね、まあいいけど

「なっ!?!」

「何か言ったか翔平??」

「い、いや、何でもない」

びつくりしたあ……。

え、今の声ってベンダバールのコア、改めベルだよな??

——そうだよ

こいつ、直接脳内に!?!

——逆に翔平以外に僕の声を伝える方法は無いからね、必然的にこうなるよ

なんか気持ち悪いけど慣れるしかないか。
というか、これって俺が頭の中で考えること全部ベルに筒抜けって
ことか。……プライバシーもクソもないな。

——I S コアにプライバシーなんて関係ないよ

それもそうなんだけど、釈然としないな。

……まあ気にしても仕方ないか。ともかく、これからもよろしく
な。

——うん、よろしくね

V Tシステムによるラウラの暴走がひと段落した後、俺はラウラが運ばれた医務室に向かった。

医務室に到着し中に入ると、そこには既に織斑先生の姿があった。

「……上代か」

「お疲れ様です」

織斑先生に一言挨拶し、まだ眠っているラウラを見る。見た感じだと体調に問題は無いように見えるし、考えていることを察した織斑先生から大丈夫だという言葉を受けた。

「ドイツ軍には調査が入っているようだが、どこもかしこも知らないの一点張りだそうだ」

「まあ当然でしょうね」

「お前達は何か掴んでいるんじゃないのか？」

まるで試すように、織斑先生はニヤリとしながら俺の顔を見て言ってくる。実際に仁さんの調査ではそこそここのところまで調べているが、別に俺達はそれでどうこうする気はない。

「他国のごごたごたに介入しようとは思いませんよ」

「だがこいつが再び巻き込まれそうになれば助けるのどろ？」

そう言って、眠っているラウラの頭を撫でながら織斑先生は言ってくる。起きないところを見ると、ラウラはよほど深い眠りについているのどろろ。

「I S学園じこくの学生であるのなら、全力で対処するでしょうね」

生徒会長として、更識の長として、刀奈は学園の生徒は必ず守る。

その意思は固いし俺も勿論協力していくつもりだ。

「頼もしいな」

「そう言っていただけなのなら何よりです。それじゃあ俺は行きますね」

ここに来たのは、ラウラの状態の確認なのでまだ眠っているのならさっさと退散しよう。

医務室を出ようとしたところで織斑先生に呼び止められる。

「上代」

「はい？」

「もう1人の方もよろしく頼む。何かあれば私に言うように」

「……了解です」

もう1人、つまりはシャルロットのことだろう。

実は学年別トーナメントが行われた数日前から、明らかに一夏のシャルロットに対する扱いが変わった。細かいところの口調や心配りから察するに、シャルロットが女であることがバレたのだろう。そりやあんな完成度で一緒に暮らしていたらバレるのは当たり前だし、ラッキースケベ体質が少し入ってる一夏が何かやらかした可能性も高い。

というわけで、一夏はシャルロットが女という事を知っていて、恐らくシャルロットは自身の事情も説明しているのだろう。

俺の見立てでは今日あたりに俺と刀奈に泣きついてくると思っている。

医務室を後にした俺は生徒会室へと移動して、刀奈と合流して一度自室に戻るために移動した。

その道中刀奈と共に寮の通路を歩いていると、偶然出会った山田先生に話しかけられた。

「あ、上代君!! 良いところに」

「どうしました?」

「何とですね、今日から男子も大浴場が解禁になりました!!」

お、まじか。確かにそろそろ部屋のシャワーだけじゃ物足りなくなってきたんだよな。シャワーだけでも良いっちゃ良いけどたまには湯船に浸かりたいだよな。

山田先生の話では今日はボイラー点検で学生の使用は禁止になっていたが、それが早く終わったために男子生徒3人が使っても良いとのことだった。

……さてよ……。

「山田先生、一夏達にもそれって伝えたんですか？」

「はい、先ほどお伝えして、今はもう大浴場に向かっているはずですがそれを聞いて固まる俺と刀奈。」

いや、まさか一緒に入るなんてないよな？あれ、でも原作では何だかんだ入ってたような……。

……嫌な予感しかない。

「今日は遠慮しておきます。生徒会の仕事も自室でやる分が残っているので」

「そうなんですか、残念ですね……」

仕方がないということで、明日以降の男子の大浴場の詳しい使用時間はまた明日連絡するということで山田先生とは別れた。

誰が好き好んでいかにもトラブルが起きそうなところに行くか。

「上手く断ったわね」

自室に着いてから刀奈がさっきの事について言ってきた。

「そりゃあそうだろう」

「翔平ってお風呂好きなんじゃなかった？」

刀奈が言う通り、比較的俺は風呂が好きだ。一夏ほどじゃないが、ずっとシャワーだけという生活は辛いものがある。

「俺は風呂に入って疲れを取りたいんだ。余計に疲れそうな風呂には入りたくない」

「ああ……それもそうね」

俺が毎日報告しているせいである程度の一夏の性格を知っている刀奈は、納得したように呟いた。

「まあでも、そろそろ俺に相談に来るだろう」

「そうね、正体バレたのならこれまでの経緯も説明してるでしょうし」

世界に2人しかいない男性操縦者であろうと、国の代表候補生であろうと、この問題はただの学生には解決出来るようなものじゃない。更識家のように特別な力でもない限り、解決は難しいだろう。

というか、俺たちが解決しようとしたところで、国際問題に発展し

かねないから危険であることは間違いないんだけど。

それでも、学園の生徒が助けを求めるのであれば俺達は助ける。それが俺と刀奈の考え方だ。

いつものメンバーで夕食を済ませて、刀奈と2人で順番にシャワーを使う。

山田先生には咄嗟にああ言ったものの、実は今日はもうやらなければいけない仕事はない。いや、やることはあるにはあるんだけど明日に回せばいいか、ということになった。

刀奈とコーヒーを飲みながらまつたりしていると、部屋の扉がノックされた。

こんな時間に誰だ？

と思ったけど、时期的に十中八九シャルロットだろう。風呂入って決心でもついたか。

刀奈に了承を得てから扉を開けると、そこには予想通りシャルロットと、ついでに一夏の姿もあった。

ひとまずシャルロットを部屋の中に入れ、適当に座ってもらう。と言ってもそこまで座るところがある訳でもないので、シャルロットを俺の椅子に座らせて俺は自分のベッドに、刀奈は自分の椅子に座った。一夏に関しては部屋に戻ってもらった。これからの対策とかも話し合うかもしれないから、あいつには悪いけど聞かせる事は出来ない。

悪いようにはしないと伝えると、渋々戻ってくれた。

「さて、あなたが私達の部屋に来たということは、覚悟が決まったという事でいいのかしら？……シャルロット・デユノアさん」

「っ!？」

刀奈の言葉に明らかに動揺するシャルロット。

本当に気付かれてないと思ってたんだな……。

シャルロットはどういう事だと言わんばかりに俺の方を向いてくる。

「俺も知ってたぞ」

さも当然かのように俺が言うと、シャルロットは頭を抱えた。ある程度の自信があっただな、あれでも。

「はい。私はシャルロット・デュノアです。これまで男装をして学園で生活していました」

しばらくフリーズしてたシャルロットだが、意を決したように顔を上げて生徒会長の刀奈に名乗った。

そして、彼女は男装をしていたと言った。していた、つまりは過去形だ。ということは、これからは女子生徒としてこの学園で生活したいのだろう。

そこから、シャルロットはこれまでの経緯を俺と刀奈に説明した。既にそのところの話は知っていたが、あえてその事は言わずに話を聞いた。

内容的には仁さんの調べた結果と一致している。ただ、一部だけシャルロットが話した内容に間違いがあった。というか、俺と刀奈もつい最近まで知らなかったことだ。

デュノア社がシャルロット関連でやらかした事は仁さんの調べで分かったので、仁さんには任務完了という事で帰国してもらおうと思っ
いその事を伝えた。

しかし、仁さんはまだ気になることがあると言ってヨーロッパに残った。そしてつい先日、仁さんから新たな報告が刀奈に届けられた。

「貴方はこれからどうしたいの？」

話し終えたシャルロットに、刀奈は聞いた。

自分がどうしたいのか。

「私達にどうしてほしいの？」

俺たちにどうしてほしいのか。

その問いに対するシャルロットの答えは、

「助けて、ほしいです…」

涙を流しながら、助けを求めるものだった。

恐らくは、自分でもう一度口に出して説明して、自分がどうしようもない立場に立たされていることが分かったのだろう。

今の状況を受け入れるのではなく、自ら助かりたいという気持ちがある芽生えた。

そして、自分の前には、自分の力ではどうしようもない障害がある事に気付いた。

能天気な一夏のことだから、この学園にいるうちは学園の特記事項で大丈夫だとも言っただろうが、頭の良いシャルロットは理解しているのだろうか。

学園を卒業すれば、自分に未来などないことを。

その事実は、助かりたいと願う今のシャルロットに絶望を与えるのは簡単だった。

涙を流しながらも、こんな状況に追い詰められていることが悔しいのか、唇を噛み締めながら俯いていた。

さて、何て声をかけようかと悩んでいると、刀奈が立ち上がり、座って俯くシャルロットに近づいていった。

そして、何も言わずにシャルロットをそっと抱きしめた。

「大丈夫よ」

刀奈は優しく、シャルロットの頭を撫でる。

「学園の生徒を守るのは生徒会長の役目よ」

抱きしめるシャルロットを一度離し、シャルロットの目を見ながら刀奈は最後に言った。

「I.S学園生徒会長として、私は貴方を助けるわ」

微笑みながら刀奈に言われたその言葉に、シャルロットは泣き崩れた。声をあげて泣くシャルロットに刀奈は苦笑しつつも、シャルロットの頭をもう一度抱きしめた。

その光景は昔、楯無の重圧に押しつぶされそうになって泣いていた

刀奈と、どこか似ているところがあつた。

あの時の事を言うと、恥ずかしいのか刀奈は怒るので口にはしないが、意外とこの2人は似ているのかもと思った。

「すみません、もう大丈夫です」

しばらく泣いていたシャルロットだが、落ち着き恥ずかしくなったのか顔を赤くしながら刀奈から離れた。

「じゃあ、これからの事を話そうと思うけど、その前に一つ訂正しておくわ」

「訂正？」

赤くさせた目を瞬かせながら聞き返すシャルロット。

「貴方の父親、アルベール・デュノア社長についてよ」

シャルロットの父親、デュノア社のトップ、アルベール・デュノア これまで俺たちはデュノア社長の指示で、シャルロットが男装をして学園に来ることになったと思っていた。シャルロット本人もさつきそう言っていた。

だが、事実は少し違っていたようだ。

「貴方をこんな状況に追い込んだのはデュノア社長よ。それはさつき貴方が言った通り」

顔を歪めるシャルロット。まあ実の父親にこんな事されたんじや当然か。けど、だからこそシャルロットは本当の事実を知っておかなくてはいけない。

「デュノア社長は、貴方を男として学園に送る事は最後まで反対していたそうよ」

「えっ!？」

「今回の事を発案したのも、デュノア社長の反対を押し切って強行したのも全てデュノア社長夫人、ロゼンダ・デュノアが裏から操っていたのよ」

追加で送られてきた仁さんからの報告はこの事だった。調査を行なっている中で、デュノア社長の動きに不自然な点があったらしい。調査を続けたところ、デュノア社の中におけるデュノア社長の影響力

はほとんど失われていて、実質はロゼンダ・デュノアがほぼデュノア社を支配している事が分かった。

そんな中でデュノア社の経営は悪化したことから、ロゼンダ社長夫人は焦ったのだろう。何とかして、他社よりも数段上のレベルのIS機体を開発しなければならぬ。

そこで、今回の案を思いついたのだろう。ロゼンダ社長夫人からすれば邪魔な存在でしかないシャルロットを家から追い出すことができ、かつデュノア社の経営を改善することができるとでも踏んだのだろう。

明らかにバレるであろう男装でシャルロットを送り出そうとする、ロゼンダ社長夫人をデュノア社長は止めようとしたそうだが、発言権が殆ど残っていないデュノア社長ではどうしようもなかったのだろう。

シャルロットは父親であるデュノア社長とはロクに会話をしたことがないと言っていたが、実際は話すことが出来なかったようだ。

「じゃあ僕は、あの女のせいだ……」

「デュノア社長は最後まで貴方にこんな事をさせないように動いていたそうよ」

「そんな……」

これまで憎んでいた父親が、実は自分を助けようとしていた。

そんな事を急に言われて、混乱しないほうが難しいだろう。

「一度、ゆっくり話してみたらいいわ」

結局は、自分の事を相手に分かってもらうには話すことが一番なのだ。

シャルロットは戸惑いながらも、頷いた。

「さて、という事でシャルロットちゃんには、早速お父さんと話してもらおうかしら」

「……え？」

「翔平、連絡は??」

「今来たところ。準備出来たそうだ」

「いや、ちよつと……え？」

混乱するシャルロットを尻目に、刀奈の指示で俺はヨーロッパにいる仁さんに電話を繋げた。

そして、電話の向こうでは仁さん、そしてアルベール・デュノア社長：シャルロットの父親がスタンバイしていた。

実は、シャルロットが部屋に来たタイミングで俺は仁さんにメッセージを飛ばして、アルベール社長とコンタクトを取ってもらっていた。

ここ2、3日のうちにシャルロットが相談を持ちかけてくる事は予想できていたので、仁さんに前もって常にアルベール社長を捕まえるようにしてもらっていたのだ。

方法はどうやったかは知らないが、結果的に電話の向こうにはアルベール社長がいるようなので問題はない。

電話をアルベール社長に変わってもらい、俺もシャルロットに変わる。そこから、親子の会話が始まった。

今回のシャルロットの問題、解決策として俺たちは2通り用意している。

1つ目はシャルロットをデュノア社から出雲に引取るということ。その上で、今回の事も含むデュノア社の黒い噂をリークする。そうする事で、シャルロットを移籍させやすくする。フランスの代表候補生は降りてもらおう事になるが、男装での転入を黙秘したことがあるのでフランスからは、何も言わせない。デュノア社は間違いなく、倒産かその一歩手前までには状況が悪くなるだろう。

2つ目はデュノア社において、今回の黒幕でもあるロゼンダ社長夫

人を含む幹部複数人の解雇を執り行い、アルベール社長の社長としての実権と影響力を取り戻してもらおう。シャルロットの一件は、世に知れ渡る為デュノア社が負うダメージは大きい、アルベール社長には一から頑張ってもらうしかない。こちらとしては出雲との技術協力を提案する予定ではあるが。

つまりは、シャルロットの選択によってどちらの策を取るかを選ぶ。

デュノア社に残るかどうか、デュノア社を見捨てるかどうか、そして父親と和解するかどうか……。

そこを選ぶのはシャルロットであり、俺達ではない。

しかし、デュノア社におけるアルベール社長の立場は日に日に危なくなっているという事は、仁さんからの報告で分かっていた。アルベール社長を擁護・助けようとする人は次々に解雇され、所謂”社長夫人派”が社内を増殖しているらしい。

したがって、動くなら早い方がいい。なので、急ではあるが今ここでデュノア親子には、電話越しではあるが会話してもらっている。

シャルロットがどちらを選ぶにしても、アルベール社長には了承を得ている。シャルロットが自分を見捨てるのは当然だ、というのがアルベール社長の言い分だった。初めから娘の為ならば自分と、自分の会社を切り捨てて構わないと言っていたし。そこは仁さんが説得してシャルロットの答えを待つという事に落ち着いたが。

結局のところ、今回の策が成り立っているのはアルベール社長の、自らが立ち上げたデュノア社にメスを入れるという決断を下してくれたことが大きいのだ。

俺としてはシャルロットとアルベール社長は和解してほしいが。

「シャルロットちゃんの再転入手続きは終わってるの？」

「刀奈のサインは貰ってるから、あとは学園長のサインだけで完了する」

少し距離を置いて、俺と刀奈はシャルロットに聞こえないよう小声

で会話する。

「じゃあ明日の朝一で学園長にサインしてもらいましょう。先に連絡だけしておくわ」

「織斑先生にも連絡しておくか。十中八九、面倒ごとは山田先生に押し付けるだろうけど」

「部屋割りもあるものね」

流石に女と公言する以上、一夏との同室は解消しなければならぬ。

「一夏は暫くは一人部屋だな」

「そうなるわね」

原作では刀奈と一夏が同室になってた時期もあったはずだが、この世界でそんな事はさせない。刀奈との同室は俺の権利だ。

まあ俺の我儘なだけどさ。男の嫉妬は醜いとか言うけど、嫌なもの嫌なのだから仕方がない。

一夏を鍛える為ならせめて俺があいつと同室になる。それで解決だ。

……いや、やっぱ刀奈と離れるのは嫌だわ。

暫く待っていると、シャルロットは通話を終えて俺に携帯端末を返してきた。

その顔は、やはり複雑なものとなっている。まあ当然か。

「やっぱり、すぐには受け入れられないか?」

「……うん」

シャルロットの答えに、俺と刀奈はやっぱりか…と顔を見合わせる。仁さんからの情報と計算、俺と刀奈の予想から総合的に判断して、今日中に動かなければならない、というほどには事態は緊迫しているわけではない。

「どうするか、一晩ゆっくりと考えなさい。明日の朝、女子用の制服を部屋に持って行くから、その時に答えを聞かせて」

「……はい」

「ごめんなさいね。本当はもう少しゆっくり考えて欲しかったんだけど、こちらとしても動き出しを遅くしたくはないの」

「いい、いえ!大丈夫です。ここまでしてもらっただけで充分です。私だけじゃ解決出来なかったはずですし……」

刀奈が申し訳無さそうに言うのと、シャルロットは慌てて首を振って言い返した。

「本当に、ありがとうございます」

そう言つて、刀奈に深々と頭を下げた。

「頭を上げてシャルロットちゃん。私達は私達の仕事をしたまですよ」

「それでも……」

引き下がらないシャルロットに、刀奈は苦笑しつつシャルロットの頭に手を置いて言った。

「なら、お姉さんからのお願いよ」

「はい」

「お父さんのこと、後悔がないようにしっかりと考えなさい」

「……はい」

シャルロットは頷き、刀奈も笑顔で頷いた。

「じゃあ、もうこんな時間だし、貴方は部屋に戻りなさい。明日の朝、改めて貴方の部屋に行くから」

「分かりました」

シャルロットは立ち上がり部屋の扉へと向かう。

「本当に、ありがとうございます。お休みなさい」

「お休みなさい」

「お休み」

もう一度頭を下げて、シャルロットは部屋から出て行った。

「シャルロットは明日は休みだろうな」

「でしょうね。生徒会長権限で特別に許すわ」

どうせシャルロットは今晚眠れないだろう。そんな状態で、明日授業に出たところで、効率が悪いだけでしんどいだけだ。シャルロットは頭良いから1日ぐらい大丈夫だろう。

こちら側の要求のせいでそんな事になるのだろうか、織斑先生にはこちらから事情を話して欠席を伝えておこう。

「俺達も寝るか」

「そうね」

生徒会、更識家としての事務的な仕事を済ませて、俺達も寝る態勢に入る。

さっきのシャルロットの件で記憶から飛んでいたが、今日はラウラの暴走事件などもあったので、結構疲れている。半分以上はいつもの書類地獄のせいだけど……。

そういう訳で、ベッドに入ると直ぐに眠気が襲ってきた。

「お休み、刀奈」

「お休み、翔平」

刀奈に抱き枕にされながら、いつものように眠りについた。

次の日の朝、いつもの朝のトレーニングを早めに切り上げて一夏とシャルロットの部屋へと向かう。

「おはようございます」

「おはよう」

刀奈がノックして出てきたシャルロットは、予想通り眠れなかったのか目の下にクマを作っていた。

だが彼女の目には不安な気持ちは消えていて、覚悟を決めたような目をしていた。

「答えは出たようね」

「はい」

刀奈の問いかけに、シャルロットは力強く答えた。

「私は、デュノア社に残ろうと思います」

シャルロットが出した答えに、俺は内心ホツとした。顔に出さないようにはしたけど。

「差し支えなければ、理由を聞いてもいいかしらっ?」

「…正直父との事はまだ整理がついていません。だけど、昨日父と電話で話して、それでも父を一方的に憎む事はできない。これからものと、父と話さなければいけないと思ったんです。それに……」

一度口を閉じ、自分の専用機のネックレスに触れる。

「この専用機の開発を行った技術者の人達は凄くいい人達だったんです。私が社内では除け者にされてた時も、あの人達だけは優しくしてくれました」

ネックレスから手を離して顔を上げ、シャルロットは再び刀奈と目を合わせる。

「個人の気持ちだけで、あの人達に迷惑を掛けたくない。だから、私はデユノア社に残ります」

シャルロットは刀奈に対して、はつきりと宣言した。

それを聞いた刀奈は笑顔で頷いた。

「分かったわ。じゃあそういう事で話を進めるから、後のことは決まり次第また連絡するわね」

「はい、ありがとうございます」

「あと、これ。女子生徒用の制服よ。明日からはこれを着なさい」

「はい……明日?」

明日という言葉にシャルロットが聞き返す。今日は平日でいつも通り授業があるのだから、疑問に思ったのも納得できる。シャルロットの事だから、寝不足など関係なしに登校するつもりだったのだろう。

「今日は授業は休みなさい」

「え、でも……」

「ほとんど眠れなかったんじゃない? 授業に出るのはその目の下のクマが無くなってからにいなさい」

「……分かりました」

「公欠扱いしておくから、今日はゆっくりと休みなさい」

「ありがとうございます」

昨夜同様深々と頭を下げるシャルロットに苦笑し、部屋の奥にいた

一夏にも一言声をかけてから、俺と刀奈は2人の部屋を後にした。

「あなたも休んでくださいよ、アルベール社長」

『ああ…ありがとう』

自分達の部屋に戻りながら、俺は手に持っていた端末に話しかける。

シャルロットの部屋を訪れる前から、俺は昨日教えてもらったアルベール社長の個人の電話番号に電話をかけ、シャルロットと刀奈の会話をアルベール社長にも聞いてもらっていた。

電話越しに聞こえてきた言葉から察するに、アルベール社長も安堵しているようだった。

言葉ではシャルロットの判断に任せたものの、やはり社長として自分の会社を潰したくはなかったんだろう。これからデュノア社を立て直すのは大変だとは思いますが、シャルロットや話にあつた技術者達のためにも頑張ってもらおう。

一言二言アルベール社長と言葉を交わして通話を終了する。

その後自室に戻り、仁さんへの報告や指示等を刀奈に任せ、俺は先に部屋を出て職員室に向かう。

「おはようございます、織斑先生」

「ああ、おはよう。どうした？」

職員室に入ると、織斑先生が自分のデスクにいたので、挨拶をする。

「昨夜にメールしたデュノアに関する事で報告があります」

「待て、場所を移そう」

織斑先生に促され、職員室を出て人通りの無い通路へと移動する。

「それで、奴はどうするかを決めたのか？」

「はい。デュノア社に残るとのことです」

「そうか」

昨夜シャルロットが自室に戻った後、織斑先生にもメールでこの事を知らせておいた。

「それでメールにも書いてたんですが、やはりデュノアが殆ど眠れないようなので、お伝えした通り今日は休みという事で」

「ああ、分かった。生徒会長権限で公欠扱いにするんだったな」

「そうですね」

「なら更識のサインが必要な書類がある。放課後にでもお前に渡すから、明日までに提出してくれ」

「分かりました」

織斑先生に挨拶し、教室へと向かう。

これでようやく、溜まっていた問題を一先ずはクリアできたか。

ということは、週末は刀奈とデートか。

俺は鼻歌を歌いながら教室へと向かった。

「ではホームルームを開始します……が、その前に転校生の紹介をします……と言いますか、既に転校していたというか……」

「シャルロット・デュノアです。よろしくお願いします」

次の日のホームルーム。山田先生の何とも言えない紹介から、シャルロットが2回目の、正真正銘の自己紹介を行った。

クラス中は当然驚きの声に包まれた。

「さて行くか」

「そうね」

迎えた週末、刀奈とのデートの日。

俺と刀奈は準備を整え、部屋から出た。

別にわざわざ時間をずらして待ち合わせて行くわけでもなく普段と同じように2人揃って出発した。強いて違う点を上げるとしたら制服じゃなくて私服ってところか。

今日の刀奈は白のブラウスに水色のカーディガンにデニムのパンツというコーディネート、俺が白のTシャツにグレーのジャケットにネイビーのパンツというコーディネートだ。

刀奈は普段はスカートとかワンピースを着ることも多いのだが、今日は訳あって控えている。

その訳というのが、今日のデートの移動はバイクを使うことを予定しているからだ。

俺がいつバイクの免許を取ったのかというと、16歳の誕生日を迎えて速攻で取った。

といっても、その前から更識の任務で乗ってたのもあって試験は簡単に通った。前世で普通車免許持ってたから学科試験もある程度復習すれば余裕だったし。

別に免許を取る必要は無かったんだけど、任務でバイク乗ってるうちにプライベートでも乗りたいたいと思い始めたから取ることにした。

まあ一番の理由は葵さんが、息抜きにでもと言って免許の取得費用を出してくれたことかな。

さらに藤丸さんがバイク買ってくれたし。バカ姉妹がそのバイクを魔改造しようとしたのには焦ったけど……。

最高速300キロのバイクなんて何に使うんだよ。俺に死ねって言うのか??

そんな訳で無事に免許を取得してバイクも手に入れて、プライバー

トでちよくちよく乗ってただけど、それを影で羨ましそうに見てたのが刀奈だった。影、というのは俺が知らなくて簪が教えてくれたからだ。

俺がバイク乗ってるのを見て興味が湧いたらしいが、残念ながら時間が無くて免許を取る余裕がないらしい。

そんな中で、先月俺が免許を取って1年が経ったので2人乗りが可能になった。

それからは日用品を買いに出かけたりするときは、刀奈が後ろに乗って出かけるようになった。

「やっぱり気持ちいいわね。私も免許欲しい」

バイクでの移動中、後ろから刀奈が話しかけてくる。

ちなみに走行中でも話ができるのは、お互いのヘルメットにインカムを取り付けているからだ。

「夏休みに何とか時間作って合宿で取るか?」

「スケジュールを考えると難しいわね……」

「まあ、そうだよなあ……」

楯無としての仕事量を考えると、そう何日も時間は作れない。こればっかしは仕方ないか。

実は俺も大型二輪を取ろうかと模索しているが、難しいだろう。

そのうち刀奈と2人で取りに行くかな。

「まあ私は今はこのままでもいいわ」

「そうか?」

「だってこうして翔平の後ろに乗るのは好きだもの」

そう言つて胸を俺の背中に押し付けてくる。

こいつ、分かっててやってるんだよな。ご馳走様です。

「…そうかよ」

「あ、照れてる?」

「うっせ」

「やっぱ照れてるじゃない、可愛い」

顔を手で覆いたいが、運転中のため適わない。後ろの刀奈に見られないだけマシか。

原作より頻度は少なくなってるものの、時折こうやってからかってくるのは相変わらずだ。

とは言っても相手が本当に嫌がることはしないのでそこは助かる。今も抱きつかれたら俺が運転がしづらいことが分かっているので抱きついてきたのは一瞬だった。

そんなこんなで、割と時間かけて学園からそこそこ距離の離れた大型商業施設へとやってきた。

学園に近いレゾナンスでも良かったけど、あそこだと十中八九学園の生徒に見つかるので、タンデムを楽しむついでにこっちの施設にやってきたのだ。

目的としては夏物の服と水着を買うためだ。

今度俺が臨海学校に行く、という事で俺が水着を持っていないことが判明し、今日買いに来たのだ。

最近色々と立て込んでゆっくり買い物も出来ていなかったの、ひとしきり色々と片付いた今に、デートついでに買っておこうという事になった。ちなみに、今日買った商品は更識の本家に郵送してもらおう予定だ。

「さて、何から行こうか」

「ひとまず水着から見ちやいましょう」

「了解」

刀奈に言われ、2人で水着売り場へと移動する。

「刀奈も水着買うのか？」

「考え中。一応去年買ったやつがあるけど、気になるのがあれば買おうかしら」

2人で話しながら歩く。

今日来ているのがかなり規模の大きい商業施設だけあって、他の

客も多いのだが、すれ違う人達からの視線が凄い。主に男から放たれる鋭い視線が。

『リア充死ね』という顔をしている。

まあ隣の刀奈が手を繋ぐ通り越して腕組んできてるのが原因なのは分かりきった事だけど。

俺だってもし彼女いなくて目の前にこんなカップル現れたら間違いないくムカつくし睨むだろう。

ちなみに、今日は俺は一応の変装はしている。普段の眼鏡がサングラスになってるだけだけど。

ベンダバールの待機形態は普段は見た目普通の眼鏡なのだが、変装用としてサングラス状にもできる無駄な機能を持っている。いや、更識の立場的に物凄く助かってるんだけどさ。

今日はそのサングラス形態にしている。

一夏よりはマシンだが、俺も一応世間から見れば2番目の男性操縦者な訳で、当然世界のニュースで俺の顔も放送された。

連日報道されていた一夏よりかは知名度は低いが、俺も変装も何もなしに歩いていると、結構騒ぎになったりする。

今日はデートなのだからそれは嫌、というわけで気持ちだけの変装をしている。意外とサングラス1つでバレないものなのだ。

周りの人からの羨ましそうな視線と、一部男からの殺意が困った視線を受けながらも、俺と刀奈は無事に水着売り場へと到着した。

「さて、じゃあ早速選びましょうか」

「そうだな。でも、ただ自分のを選ぶのもつまらないような……」

「じゃあ、私が翔平の水着を選ぶから翔平は私の水着を選んでよ」

「OK、そうしようか」

刀奈の提案を受け入れる。

「ついさっき言った、”気になるやつがあれば買う”という考えは既に消えたらしい。」

ってというか俺が入学した日も水着持ってたじゃん。あれじゃダメなわけ？

「じゃあ私翔平の水着探してくるから、後で合流ね」

そう言つて男性用の水着売り場の方へ行こうとする刀奈。

当然男性用と女性用は売り場が別なわけで、別行動で水着を探すとすると俺は1人で女性物の水着売り場へと入らなくちゃいけないわけ……。

「いやいやいやいや」

俺は慌てて刀奈を引き止める。

男1人で女性物の水着売り場とかハードル高すぎる。絶対変な目で見られるだろ。

「俺1人で女性物の水着売り場に入れって言うのか!？」

「ふふっ、冗談よ」

舌を出して悪びれる様子もなく言ってくる。くそっ、可愛いじゃないか。

それにしても、今日の刀奈はやけに機嫌がいい。

今みたいにからかつてくる事が多い時は大抵機嫌がいいが、その中でも今日は相当だ。

「今日はご機嫌だな」

「だって、私達付き合い出してちゃんとしたデートは初めてよ」

「確かに。生活品買いに行ったりしたプチデートは何回かあったけど」

かれこれ付き合い始めて2ヶ月以上経っているが、休日に1日時間を取って出掛けることが出来たのはこれが初めてだ。

というよりも、1日休日を作れたのが今日が初めてだ……。

「どこのブラック企業だよ。仕方ないけどさ。」

「虚に感謝しないとね。お土産買って帰らないと」

「簪にもな。本音は……どうせ何もやってないだろうから別にいいだろう」

今日俺たちがデートに来たのは虚や簪が気を遣ってくれたらだ。生徒会の刀奈や俺にしか出来ない仕事は、昨日までと明日以降に割り振って何とかしたのだが、今日も処理しないといけない仕事はある。それを今日は虚と簪と、もしかしたら本音がやってくれている。ほんと、有難い。

「刀奈の水着から選ぶか」

「お願い」

まずは刀奈の水着を選ぶために、女性物の水着売り場に2人で入る。

施設の規模が大きいので水着売り場も広く、時期が時期だけに店頭には様々な水着が並んでいた。

色々並ぶ水着を適当に見ていく。こういうのは見ている中で目に付いた物を選ぶのが1番だ。

と言っても、初めから見ているのはビキニだけなんだけど。

その中で、1組目に付いた水着があった。

「これかな」

「あら、いいじゃない」

水色をベースに白のラインが入っている、シンプルな水着だった。

やっぱり刀奈といえば、水色とかの青系のイメージだな。本人も好きな色って言うてたし。

「凄いシンプルなデザイン選んだけど良いのか？」

「翔平が選んでくれたから良いんじゃない。それに、派手な水着は私も着たくはないわ」

「そういうものか」

「そういうものよ。あ、これパレオもセットで付いてるのね」

「どうやら気に入って貰えたようだ。」

「じゃあ買ってくる」

「よろしくね」

刀奈から水着を受け取り、俺はレジへと向かう。

俺と刀奈が付き合い始めた頃、会計になるといつもお互いが自分が払うと言つて埒が開かなかつた。

それからはその日その日でどっちが払うかを順番にしていこう、という事になった。今日みたいに買う物が多かつた場合は午前午後で分けたりする。

ちなみに、2人とも更識で肩書きを背負つてることもあつてそこそこの貯金がある。そもそも、更識家自体が結構な金持ちなのだ。

更識邸も自分達の生活スペースは自分達で掃除していたが、それ以外は基本的には雇つていた家政婦さん達がやってくれていた。

更識家の財政面の管理は以前は京子さんが担当だったが、今は葵さんが行なっている。刀奈は楯無を襲名したものの歳が歳なので、流石にまだ任されてはいない。ただ、学園を卒業する辺りで刀奈に任せるか、または虚に任せるか、と言つた話が浮上している。恐らくは虚がやる事になるかな。

ちなみに、槍一郎さんはそつちの扱いは全くだ。京子さんが見兼ねて担当になつたつて話を昔聞いた。

会計を済ませて戻ると、刀奈は水着売り場の脇にある2体のマネキンを見ていた。

「何見てるんだ?」

「翔平、これ買わない?」

そこには、『カップルにオススメ!!パールックラッシュュガード』と書かれていて、男性マネキンと女性マネキンがそれぞれ同じ柄とラッシュュガードを着ていた。

「いいなこれ」

「でしょ?まだパールック買ったことなかつたし」

「だな。じゃあこれも買つてくるよ」

「お願い」

お互いのサイズのラッシュュガードを持って、俺は再度レジへと向かつた。

初のペアリングに俺も刀奈もご機嫌だった。

刀奈の水着を買い終えた後、俺の水着、2人の夏用の衣服を買ったところで、昼食を食べるのにはいい時間となった。

刀奈に選んでもらった水着は黒と濃い緑で、シンプルなデザインが入ったサーフパンツだ。

最初に刀奈が手に取ったブーメランは丁重にお断りした。

その後も2人でそれぞれの服を見て回り気になったものを何着か購入した。

そして現在は昼食のために施設内にあるフードコートへと移動中で、刀奈がトイレに行っているのを待っている。

スマホを取り出して業務メールをチェックする。楯無である刀奈の方が断然多いが、俺個人にも更識としてのメールが届くこともあるので定期的なメールチェックは必要だ。

まあ仁さんからの愚痴や、槍一郎さんからの暇潰しメールとかが多いんだけどさ。

メールをチェックしながら、ふと周りを見てみる。

休日の大型商業施設なので、当然人の数は増える。そして、当然様々な人がいる。

その中で時折感じるのが、女尊男卑の思想だ。全員がそうって言う訳ではないのだが、明らかに女尊男卑の考えに染まっている人を見かけるのも事実だ。

まるで奴隷のように男性を使う女性もいれば、女性にペコペコ頭を下げて付き従う男性もいたりする。

この世界に転生してそこそこの年月が経って、この女尊男卑の社会にも慣れてきたものの、やはり男として気持ちがいいものではない。そして俺は今、様々な人が訪れている商業施設内で男1人で立っている。

つまり何が言いたいかというと。

「ちよつとそこの男、私の荷物を運びなさい」

……こういう面倒臭いのに目をつけられる可能性が高いというこ

とだ。

とりあえずスマホを弄りながら、聞こえていないふりをしてやり過ぎしてみる。

「聞こえないの!?!そのスマホをいじってる男よ!!」

まあ当然やり過ぎせないよね。

俺に声をかけてきた女性はズカズカとこちらに近づいてくる。後ろには取り巻きの女性を2人従えているようだ。

後ろの2人は両手にここで購入したと思われる紙袋を持っている。前の女性は持つていないのを見るに、恐らく後ろの2人が持たされているのだろう。いや、もしかしたら全て前の女性が買ったものかもしれない。

前の女性は鼻息を荒くしながら俺の前へとやって来た。

すると、俺のスマホを奪い取ろうとしてきたので慌てて回避する。

「さっきからあんたに言ってるのよ!!」

「……何か御用でしょうか?」

「だから!!この荷物を持ちなさい!!」

そう言って後ろの2人の持つ大量の荷物を指差す。

もしかしなくても、あの大量の紙袋を俺1人で持つて言うのか?

2人で持つのもキツそうだったのに?

というか、重さ関係なしに物理的に全部持てないだろ。

「お断りします」

俺は当然断る。

何で見ず知らずの人間の荷物持ちしなくちやいけないんだよ。

こっちは今デート中だぞ、邪魔するんじゃないやねえよ。

しかし、俺の返答が気に入らなかつたのか顔を真っ赤にして喚き始めた。

「何ですって!?!私が持ちなさいって言ったら持つのよ!!男の分際で逆らってるんじゃないわよ!!!」

一気にまくし立ててくる。

うげっ!?! 唾飛んできたし、汚ねえ……。

いい加減面倒臭いなあと思いつつ、後ろの2人を見てみる。

2人は手に持っていた荷物を地面に下ろして、前の女性に同調してああだこうだと言ってきている。

荷物持たせられて可哀想と思つた俺が馬鹿だつた。一生荷物持ちやらされてろ。

でもこいつらどうするかなあ……。今の状態じゃ俺が何言つても火に油注ぐだけだろうし、俺が何とか出来るとしたら荷物持ちしますと言うしか納得しないだろう。それでも小言を延々と言つてきそうだけ。

となると、刀奈に何とかしてもらうしかないか。彼女に頼るっていうのは彼氏としてあれだけど、こればっかしは仕方ない。こんな連中に貴重なデートの時間を奪われたくないし。

という訳で、早く刀奈戻つてこないかなあ。

「どうしたの翔平?」

後ろから声をかけられ振り向いたら、ちょうど刀奈が戻ってきていた。

「おかえり」

「ただいま。で、この人達は?」

「男の俺に荷物持ちをやれつてさ」

「ふーん」

俺から事情を聞いて、女性3人に目を向ける刀奈。

突然の刀奈の登場に黙っていた連中だったが、次の瞬間にはまた喚き始めた。

「何よあんだ!?!」

「彼の恋人ですけど、何か?」

「今からその男は私達の荷物持ちをやるのよ!! 貴方は帰りなさい!!」

「断ります。何故見ず知らずの貴方の言うことを聞かなければいけないのですか?」

刀奈は冷静に正論を返す。

普通ならこの正論で引き下がるはずなのだが、目の前の連中は引き

下がらなかった。

何故か俺達に向かつて勝ち誇った顔を向けてくる。

「私はね、衆議院議員の副島和佳奈の友人よ!!逆らわない方がいいわよ!!」

ドヤ顔でそんな事を言ってくる。

後ろの2人のうち片方も勝ち誇った顔をしているが、もう1人は何か引つかかるのか、刀奈の顔を見て何かを思い出そうと考えてる。

多分ロシア国家代表としての刀奈をテレビか何かで見たことがあるのだろう。

「これ以上私に逆らったら、後で痛い目を見るわよ」

自分がやっている事の重大さにも気付かずそんな事を言ってくる。

それに対して刀奈は、

「へえ、貴方も和佳奈さんとお知り合いなんですか」

「……え?」

さも当然かのように言葉を返した。

副島和佳奈――若くして衆議院議員まで登りつめ、その後も着実に力をつけていった。今一番勢いのある政治家と言われている。若者から年配者まで幅広い層からの支持を受けていて、老若男女問わず人気がある。そのカリスマ性から、早くも次期総理大臣との噂もたっているほどだ。更識家としても、個人的にも、日本政府の中で最も信頼できる人物だ。そして……、

「じゃあ今から電話するので、ちよつと待っていてください」

「え、いや、ちよつと!?!」

和佳奈さんは京子さんの大親友でもあった。

「もしもし、楯無です。はい、お久しぶりです」

電話が繋がったように話し始める刀奈。それを見て顔が青ざめていく女性達。

「思い出した!!この人ロシアの国家代表の更識楯無よ!!」

後ろでずつと考えていた女性がようやく思い出したらしい。

それを聞いて動揺する残り2人。

「なっ!?ロシアって、どう見ても日本人じゃない」

「理由は知らないけど国籍選択の権利があるって前にテレビでやってました……」

「出ました。本当にロシアの国家代表みたいです」

後ろの1人がスマホで検索した結果を見せる。

前の女性は青通り越して顔が白くなってきている。

「すみません、和佳奈さんが代わってほしいと」

スマホを差し出されて言われた刀奈の言葉がトドメとなった。

電話を代わった女性は涙目になりながらひたすら謝っていた。聞こえてくる言葉から察するに、知り合いは知り合いだけど特に親しい訳でもなかったようだ。

それで和佳奈さんの名前使ってあれだけのドヤ顔をできるのもある意味凄いなと思うけど……。

結局スマホを刀奈に返して一言謝罪して、一目散に逃げて行った。これで懲りただろう。

「え、今ですか?はい、翔平もいます」

スマホを受け取った刀奈だが、まだ通話は終了していなかったらしく和佳奈さんとまだ話している。

「翔平、和佳奈さんが貴方にも代わってほしいって」

そう言つて、今度は俺にスマホを差し出す。

何だろう、嫌な予感がしなくもないんだけど……。

恐る恐る刀奈からスマホを受け取り電話に出る。

「変わりました、上代です」

『久し振りね、翔平君』

「お久しぶりです、和佳奈さん」

『ごめんなさいね、私の方の問題に巻き込んでしまったみたいで』

「大丈夫です。まあああいう考え方の人間は居なくなっしてほしいですけど」

『それには同意するわね。彼女達は私の方で処罰しておくわ』

和佳奈さんは女尊男卑の思想には反対的な事で有名でもある。そのため、世の女尊男卑主義の女性達から良く思われていない時期もあったが、あれよあれよという間に力をつけて政府の中でも影響力が上がるにつれ、不満の声は消えていった。

というか、さっきの女尊男卑の連中は何で反女尊男卑の和佳奈さんの名前を使ったんだろうか？バレたら大変なことになるぐらい分かるだろうに。

『ところで、今は楯無ちゃんとデートかしら？』

「ええ、まあそうですね」

『あら、否定しないのね。もしかして、貴方達ようやく引っ付いた？』
この人確証を持った上で聞いてきてるんだろうな。まあ別に隠す理由も無いから正直に言うけどさ。

「そうですね。4月から付き合ってます」

『そうなんだー。おめでとう!!』

「ありがとうございます。あ、この事あんまり周りに言わないでくださいよ。一応来週集まる人にはその時に発表する予定なんです」

来週、というのは京子さんの墓参りの日である。和佳奈さんも当然参加する予定だ。というかこの人どんなに忙しくても参加するからな。

『残念だけど、もう既に知っている人は何人かいるわよ』

「ええ……………」

『ちなみに私も知ってたわ』

「おい」

いや、まあ別に口止めしてるって訳でも無いから学園の関係者から漏れてても不思議じゃないけどさ。

テレビからの取材の申し込みとか今断ってるけど、これ受けたら一気に全国から注目されるんだろうな。いや、全世界からか…………。

『じゃあ、私は仕事に戻るわ』

「はい、ではまた来週に」

『ええ、詳しい話はその時に聞いわ』

「……勘弁してください」

楽しみにしてるわね、と言い残して和佳奈さんは通話を切った。
楽しみにされても困るんだけどなあ……。

「和佳奈さん何だった？」

「来週に俺達のこと詳しく聞くんてさ」

「……そう」

刀奈も何とも言えない顔をする。

十中八九、来週和佳奈さんは酒を飲むだろう。

本人には言わないが、正直酔った和佳奈さんは性格がおっさんになるからな。あの状態の和佳奈さんに絡まれることを想像し、俺と刀奈は表情を曇らせた。

刀奈と共にフードコートへと移動すると、そこには大勢の人でごった返していた。

「流石に凄い人だな」

「どうする？普通にお店に入る？」

大型商業施設なので、当然フードコート以外にも飲食店が入っている。

「いや、さつきちらつと聞いたけど、どこの店も結構並んでるらしい」

「まあ仕方ないわね、休日のお昼だし」

「とりあえず、空いてる席を探そう」

フードコート内の空席を探して歩いてみると、運良く食べ終わって席を離れる人達がいたので、入れ違いに俺達がその席に座る。

その後は俺と刀奈で交互に料理を頼み、受け取りに行った。メニューは俺がラーメンで刀奈がオムライスだ。

「そういえば、昨日は簪ちゃんも豊君が出掛けてたみたいね」

「みたいだな」

本音によると、昨日は式式の制作を中断して豊と出掛けていたらしい。まあデートだな。

それにしても……。

「あの2人、ようやく付き合いだしたんだよなあ」

「ほんと、良かったわよね」

簪と豊は、ついこの前から付き合い始めている。先日、2人で夕食に行った時の帰りに簪が告白したらしい。

その事は、簪から送られてきたメールで知った。ちなみに、メールが送られたのは俺、刀奈、虚のみらしい。まさかの従者が知らされてない。

簪曰く「情報が漏れる可能性があるところには送っていない」そうだ。そう言われて俺も刀奈も納得した。

豊の方も楠姉妹がいるから大丈夫なのかと思ってメールを送ってみたが、まだ大丈夫だそう。藤丸さんにだけ伝えたらしい。

このカップル、俺達の経験から学習して、危ないところはきっちり抑えてやがる。

「従者なのに教えてもらえない本音がちよつと可哀想に思うけどな」
「確かにね。でも、これまでの事を考えたら仕方ないとも思うわね」

全ては自業自得だ。

といつても、いつかは公表しなければいけない時がくるんだ。そこはあの2人も分かっているだろう。

ちようど来週京子さんの墓参りで人が集まるんだし、俺達の報告のついでに、あの2人も発表してしまつていいかもしれない。

「そのラーメン、美味しそうね。一口貰つていい?」

「いいぞ」

自分の器を差し出す。刀奈が俺のラーメンを食べるのを見てると俺も刀奈のオムライスが欲しくなつてきた。

基本的に俺と刀奈は味の好みが似ているから、お互い頼んだものを一口分けてもらう事は昔からよくやっている。

「ありがと、翔平も食べる?」

「ああ、貰つていいか?」

オムライスの器に手を伸ばそうとしたら、それを刀奈に制された。

刀奈は自分のスプーンで一口分のオムライスを掬い、それを俺の方へと差し出してきた。

所謂”あーん”つてやつだ。

見れば刀奈はニコニコしながら俺を見ている。

……少し躊躇したが、俺は観念して差し出されたオムライスを口にした。

「美味しい?」

「……旨いよ」

「なら良かった♪」

「お前。 Pastaからオムライスに変えたのはこれのためか!」

「気分が変わつたのよ」

「目を逸らしながら言ってるじゃねえよ」

俺と目を合わせず言う刀奈。

俺のラーメンみて「私 Pasta にしよ」って言って席離れたのに、戻ってきたらオムライスだったからおかしいと思っただよ。

麺類だどこっちは仕返して”あーん”をやる事が出来ない。始めに俺の好きなラーメンチエーンがあるのを知らせたのは、この状況にするための布石か!? クソツ、やられた!!

「私の勝ちね」

「いまいち何の勝負なのかよくわからないけど、まあ俺の負けだな」

刀奈は人を指揮するのも上手いが、人を操るのも上手い。

今のように、俺も手のひらで転がされることがたまにある。

けど、やられっぱなしってのも気に入らないな。今も刀奈は終始ご機嫌でオムライス食べてる。

……ん?

「刀奈、ちよつとじつとしいて」

「？」

ちよこんと首を傾げる刀奈の反応に、内心可愛いなああと思いつつ刀奈の顔に手を伸ばす。

そして頬に付いていたチキンライスを取り、自分の口に入れた。

途端に顔を赤くする刀奈。チキンライスを頬に付けてしまったことと、それを俺に取りられて食べられた事で余計に恥ずかしいのだから。

米系はこれがあるんだよな。

刀奈がそれをやる事はほとんどないけど、”あーん攻撃”が成功して気を抜いてたな。

「……油断してたわ」

「詰めが甘いな」

これで1勝1敗のドロ、ってところか。

……いや、だから何の勝負なのだろうか??

その後は何事もなく、他愛もない話をしつつ食事を進めた。

「さて、これからどうしましょうか」

「そうだなあ」

食べ終わった器を返却口へと返して、フードコートから移動する。今日のデートで、具体的に予定を決めていたのは午前中だけだ。今からの時間に関しては、全くのノープランなのだ。

男として、きっちりデートプランを考えておいてエスコートするべきなのだろうが、別に刀奈とはそこまで気を使うこともないし、あらかじめ、昼からはその場でテキトーに決めようということを決まっていた。

「そういえば、ここのすぐ近くに結構大きいバッテリーングセンターがあったな」

「あ、それなら私もさつき張り紙を見たわ」

「食後の運動も兼ねてちよつと体動かすか」

「いいわね」

ということ、バッテリーングセンターへの向かうことになった。

「…ん」

「ふふつ、ありがとう」

左手を差し出して、刀奈と手を繋いで移動する。この時期だと、昼間に外で腕組みは暑い。

刀奈は腕組みの方が好きらしいけど、暑いのは俺と一緒になので外では手を繋いで歩く。まあ店の中とかだと腕組んでくるけどね。俺としてはどっちも嬉しいから万々歳なんだけどさ。

移動を開始して、少し歩いたところに目的地のバッテリーングセンターはあった。確かに近かったな。

中に入ると、そこそこの人数の客で賑わっていた。

最近のこういう施設は、やっぱり女尊男卑の影響を受けて女性向けが多い。

ここも同じように女性向けの球速が遅いゲージが多いが、店の規模

が比較的大きいので球速が速いゲージも結構ある。170打てるゲージあるし。

「バッティングセンターなんて何年ぶりだろ」

「小学生の時にみんなで行ったことあったわよね」

「……あー!! あったあつた」

クラスの数人で近くにあつたところに行つたんだよな。

「さて折角来たし、打とうかな」

「私も」

自動の販売機で一枚で何度か遊べるカードを購入する。

「お、ゲージによっては決められた本数以上のホームランを打てばもう一回ただになるらしいぞ」

「へえ、狙ってみる?」

「そうだな」

結構条件厳しいけど、やってみるか。

「いやあ打った打った」

「流星にやり過ぎたわね」

バッティングセンターに来てから約1時間後、俺達は満足したのでバッティングセンターを後にした。

俺も刀奈も、手始めに140km/hで2回遊び、慣れて来たので150、160、170と順番に1回ずつ打っていった。

ちなみに、例の1ゲームボーナスの条件は、

140km/h:7/10回

150km/h:6/10回

160km/h:5/10回

170km/h：4／10回
というものだった。

ホームラン判定されるのも結構小さかったので条件はキツかった。が、俺は140km/hの2回目と150km/hで、刀奈は150km/hでクリアした。

気持ちいいぐらいにポンポン打つ俺達を見て、周りの客は呆然としていた。俺達みたいにカップルで来ていて、彼女に俺を指差してあれぐらいやって見せてと言われていた彼氏が気の毒だったな。

1枚で5ゲームできるカードを購入してボーナスが追加されたのだが、2人とも5ゲームやって満足したので、余った分はまた次来た時に使うことにした。幸い期限とかは無いらしいし。

「意外と打てるものなんだな」

「……他の人にとっては普通では無いと思うけどね」

俺も刀奈は野球を普段やるわけでは無い。むしろほとんど初心者だ。

でも、ISに乗っていると嫌でも動体視力は鍛えられる。

それに加えて身体能力が化け物と言われる2人だ、打つぐらいなら慣れれば割といける。

剣道やってて身体能力もある一夏は、球技全然ダメだけど。

俺はどっちかというサッカーの方が好きで、この前気晴らしにと一夏誘って軽くボール蹴ったんだが、全然だった。

後日セシリアに誘われてテニスもやってたけど、そっちも散々だったから、根本的に球技がダメなんだろう。

「それにしても、IS以外で久しぶりに勝負したわね」

「確かにそうだな」

「結局、また私が負けた訳だけど」

最後の170km/hのゲームでは、刀奈の提案で勝負することに

なった。それまでの打撃で、俺と刀奈の周りには結構なギャラリーが集まっただけで、ラストの勝負ということで盛り上がった。

内容としてはシンプルで、ホームランの的に多く当てた方が勝ちというルールだった。

結果は10球中俺が2回、刀奈が1回で俺の勝ちになった。

「食後の運動も済んだし、どこに行く?」

「夕食まで結構時間あるしなあ」

今日の夜は、更識と繋がりのあるレストランを予約してある。

今日のデートは、2人とも自衛が出来るという事で護衛をつけていない。お互い立場が立場なので護衛をつけるべきなのだが、デートをジロジロ見られるのも嫌なので、今日は誰もつけていない。

そのかわり、2人ともデートを楽しみつつも常に周りに注意を向けている。

けど最後の食事ぐらいはゆっくり食べたいので、安心出来る場所を選んだ。

「確かこの近くに海があったわよね」

「ああ……あったな。バイクで10分ぐらいだろ」

「じゃあそこに行きましょう」

刀奈の提案で、俺たちはバイクに乗り海へと移動した。

浜辺近くの駐輪場にバイクを停めて、刀奈と並んで手を繋ぎながら浜辺を歩く。

海開きもまだなので、浜辺はほとんど人がいなかった。

「翔平、ありがとう」

特にテーマも決めず、日常の事とかを話しながら歩いていると、隣を歩いていて刀奈が突然感謝の言葉を伝えてきた。

「どうした、急に?」

「……特に理由はないわ。何となく、今伝えたくなったの」

足は止めずに話し続ける刀奈の言葉を聞きながらついて行く。

「私はね、今がとても充実してる。楯無として大変な事も多いけど、それ以上に毎日が楽しいと思ってる。それは翔平のおかげよ」

刀奈の手が、少し強く俺の手を握る。

「翔平のおかげで、”刀奈”としての自分を残してられる。きっと翔平が居てくれなかったら、”刀奈”としての私は”楯無”としての私に潰されていたわ。……だから」

刀奈が立ち止まって俺の方を向く。

「翔平、ありがとう」

笑顔で言う刀奈は、あの時見せてくれたように、とても綺麗だった。

「そう言ってくれるのなら、俺としても嬉しいよ。それに、俺も刀奈には感謝してる」

え？という顔をする刀奈。

刀奈が、最近悩んでいることは分かった。その理由も薄々感づいていた。恐らく、自分だけ色んなものを貰って、支えてもらっているのだろうか、という気持ち。

確かに昔から今まで、俺は刀奈のお願いも我儘も、俺ができる範囲でほとんど叶えてきた。けど、それは刀奈の為であるのと同時に自分の為でもある。

俺は刀奈が笑顔でいてほしい。その為に自分を頼ってほしい。

それが俺の願いなのだから。

刀奈が笑顔でいてくれると、俺だって幸せに感じられる。

「俺だって今の生活が充実してるし、幸せと感じられてる。それは刀

奈から色んなものを貰ってるからだ」

俺の言葉を聞く刀奈の頬に涙が流れる。そんな刀奈の頭を撫でる。

「俺は刀奈が笑顔でいてほしい。ただそれだけだ」

それだけで、俺は幸せに感じられる。だからこれからも笑顔でいてほしい。

これまでも、刀奈は俺の側で笑ってくれた。それは俺の心を支えてくれた。きつと刀奈は気づいていないだろうけど。

だからこそ、伝える言葉はこれしかない。

「ありがとう、刀奈。愛してる」

流れる涙は止まらないが、それ以上に俺の言葉に嬉しそうに笑顔になっってくれる。

「私も、愛してるわ」

ああ、やっぱり俺は、この笑顔があるから頑張ることが出来る。

だからこれからも、この笑顔を守る為に俺は全力を尽くす。

それが今の俺の生き方だから。

人気の少ない浜辺で、俺たちはキスをした。

刀奈とのデートから1週間後、俺たちはとある墓地に来ていた。

今日は以前より準備していた京子さんの墓参りの日だ。

楯無である刀奈の仕切りのもと、全員で手を合わせる。

今この場には多くの権力者や有名人が来ている。和佳奈さんをはじめとする政治家の人達に投資家、警察のお偉いさんに大学病院のお偉いさん。あとはIS学園の学園長である轡木さんも来ている。

更識関係者も当然来ている。

色んな人が来ているが、共通する点はこの国の中心となっていることだろう。

そして、京子さんの死を悲しんだ人達だ。

「では皆さん、更識の本家に移動しましょう」

墓参りがひと段落し、刀奈の言葉で各々移動を開始する。

ちなみに俺たちが今いる墓地は、地図には載っていない。更識の関係者が管理している墓地だ。

これだけの有名人が集まるのだから、セキュリティはしっかりしている。メディアへの情報流出も規制しているし、今も現地警備は仁さんを中心に行なっている。

この後は、例年通り本家で宴会が始まる。

いい歳したおっさん達が嬉しそうに移動してる。

名目上は京子さんを含める、歴代の楯無やその側近、更識の関係者・協力者の墓参りなのだが……。

宴会と墓参り、どちらがメインイベントなのか分からない。

たしかに堅苦しい話は抜きだし、色々と隠さなくてもいいという点では、単純に宴会を楽しむことができる。そのせいで毎年どんちゃん騒ぎになるんだけど……。

このイベントに参加している人達は、全員信頼できる人物だ。歴代の楯無達が築いてきた人脈の賜物だと思う。

そして、その人達から絶大な信頼を得ていた京子さんは凄いの一言だ。槍一郎さんが自分よりも京子さんへの信頼が厚かったという事実をちよつと気にしているけど。

それぞれが自由に会話しながら歩いている中で俺が1人で歩いていると、和佳奈さんが近づいてきた。

「翔平君」

「あ、和佳奈さん。この前はありがとうございました」

「いいのよ。元は私の方の問題だったから。それよりも、楯無ちゃんとの話を聞かせなさいよ」

周りには聞こえない声で聞いてくる。この後公表するけど、一応今はオフレコなので周りには聞こえないよう小声で聞いてきてくれる辺り、この人は良い人だ。

「……この後全体に公表するからそれまで待つてくださいいよ」

「そしたらおっさん共に囲まれて詳しく聞けなくなるじゃない」

「まあ、確かに……」

「楯無ちゃんからは後から聞くとして、翔平君はここで洗いざらい吐いちゃいなさい」

「何でそんな取り調べみたいなんですか」

「いいじゃない。教えてくれたら、今度また何かあった時に融通利かせてあげるわよ」

「……仕方ないですね」

結局、俺が折れて色々聞き出されてしまった。

和佳奈さんに貸しを作るのは後々物凄く役に立つのだ。本当に、融通が利くから。

そういうチャンスは作っておかないと。

本家の大広間に移動して始まった宴会。まずは楯無である刀奈が軽く挨拶をした。

そして、刀奈俺と交際していることを発表した。当然会場が騒めく。

初耳の人は驚きつつも「やっとか」って顔してるし、既に知ってた人はニヤニヤしてるし。

そして、続けて簪も豊と交際を始めたことを発表した。これに最も反応したのは本音だった。まあ当然か。

簪はその後、交際していることはここにいる人だけの秘密で、オフレコにしてほしいと頼み、全員がそれを了承した。本音には何度も釘を刺してたけど。まああいつもこれまでで痛い目を見てるから流石にやらかさないだろう。豊は学園とは関係ない人物だし。

その後刀奈の音頭で乾杯し、宴会が始まった。

開始してからは、刀奈は虚を引き連れて挨拶周りを開始した。刀奈は手にグラスを持っているが、その中はアルコールではない。楯無として形式上、乾杯の時にアルコールを持っていたがそれ以降はソフトドリンクに変更している。

刀奈は体質的にアルコールが全然飲めないのだ。京子さんもアルコールはダメだったので、やっぱり親子だなと思う。槍一郎さんはめちゃくちゃ飲むけど。

ちなみに、京子さんはアルコール飲んでなくても宴会になるといつもテンションが上がって、酔っ払いと騒いでいた。まあ酔っては無かったから、その後は普通に酔い潰れたおっさん共を介抱してたけど。

そういう訳で、現楯無である刀奈は酒が飲めない。けど今日来ているおっさん達と付き合いで、飲むのに付き合う必要がある。なので……

「あら翔平君、グラス空いてるわよ」

「……………いただきます」

「おう、飲め飲め!!」

俺が刀奈の代わりに酔っ払いの相手をする事になる。

更識の普段の宴会ではいつも座る席順が固定され、ある程度のマナーは守って大人しく飲み食いするのだが、今日のこの宴会に限っては、マナーもへったくれも無くなる。無法地帯だ。

俺も未成年なのだから普段はアルコールは避けるが、この日に限っては「今日は無礼講じゃああああ」と言われて捕まる。

まあ17代続いでる楯無達の中にも10代で襲名した人は何人かいたらしく、その人達はこういった席では酒を飲んでいたらしい。

刀奈の代わりという事で俺も特例で許されている。

……言つとくけど普段は飲んでないから。これでも転生前は20歳超えてたんだから、飲みたいのは飲みたいけど最近は学園にいる事で我慢できている。

「さあ翔平君!!楯無ちゃんとの事を吐いてもらおうわよ!!」

「二「そうだそうだ」」

「何て告白したの?というか、どこまでいったの!」

「二「酒飲んで吐いちまえ!!」」

「ああ鬱陶しい……。というか和佳奈さんは昼間に色々話したでしようが!」

「もう一度聞かせなさい」

「二「俺達は聞いてないぞおお!」」

「……うぜええ」

しつこい酔っ払いをあしらいつつ周りを見る。

簪と豊は2人であるが、楠姉妹や本音に詰め寄られている。それ以外にも何人かはその周りで話を聞いている。恐らく俺と刀奈の関係を既に知っていた人達はそっちの話が気になるのだろう。

刀奈の方を見ると、挨拶周りは終わったのか虚と休んでいた。ちやうど刀奈もこつちを見ていたので、必然的に目が合う。

——ごめんね翔平

——いや、大丈夫

手を合わせて謝るポーズを取る刀奈。
俺は片手を挙げてそれに応える。

「話聞かずにイチャついてんじゃねえぞー」

「羨ましいな畜生!!」

「あんたら全員既婚者でしょうに……」

「とつくに冷めきってんだよ!!!」

結局、酔っ払いのおっさん達を引き連れた和佳奈さんからの質問責めから抜け出せず、俺はたらふく酒を飲まされた。

「ああああ……気持ち悪い、頭痛い」

「大丈夫翔平？水飲む？」

酔っ払いのおっさん達が酔い潰れた頃、俺はようやく解放された。刀奈から水を飲んで落ち着く。

俺は比較的酒に強い。といっても、人より酒が強くても酔うことは酔うのだ。全く影響が出ないわけがない。

これ以上飲まされたら間違いなく吐く。

「だらしないわね」

「和佳奈さん、俺まだ未成年なんですけど」

和佳奈さんだけは、酔い潰れることもなく未だに酒を飲み続けている。飲むペースも最も早く、飲んだ量も最も多かったはずなのだけ……。

この人が参加するせいで、毎年宴会用に用意する酒の量が倍増しているらしい。まあ本人からある程度は代金を払ってもらってるらしいけど。

「ごめんなさい翔平、助けに行こうと思ったんだけど……」

「いや、ほんと近づかなくて良かったよ」

さつきまでの場の状況じゃ、べろんべろんになったおっさんに刀奈が酒を飲まされてたかもしれない。そうならなくて良かった。

「大丈夫？お兄ちゃん」

「大丈夫ですか？」

こつちも解放されたらしい簪と豊がこつちに移動してきた。

「何とかな……、2人もお疲れ」

「お疲れ」

「お疲れ様です」

2人とも顔が少しやつれている。まあ軽く2時間ぐらいは楠姉妹を中心とした質問責めにあつてたからな。そりゃ疲れるわ。

「お嬢様、一先ず自力で帰れる人は皆さんお帰りになりました」

「ありがとう虚」

本来なら刀奈も見送りに向かうのだが、今日は俺の方に付いておけると言われたらしい。曰く、「旦那が潰れそうなんだから介抱してやりなさい」と言っていたらしい。

ほんと、そこら辺で寝転がってる人達も見習ってほしい。

「和佳奈さんも今日は泊まっていかれるんですよね??」

「ええ、そのつもりよ。まだ飲み足りないし」

「……まだ飲むんですか」

「当然」

虚の問いかけに平然と返す和佳奈さん。酒豪って、こういう人の事をいうんだろうな。

「翔平」

水を飲みながら落ち着いてきていると、一升瓶を抱えた槍一郎さんがやってきた。

この人も和佳奈さんに負けず劣らず酒豪なんだよな。最近は療養中だから控えてたはずだけど、今日は結構飲んでた。

「明日の夕方に学園に戻るんだったかな?」

「ええそのつもりです」

「なら、今から時間あるな」

……………ん？

嫌な予感がする。

「今夜は徹夜で麻雀だ」

「…え、俺結構疲れてるんですけど」

「和佳奈君もやるかね？」

「いいわね、やりましょう!!」

「なら、あと1人だな」

あ、俺に拒否権は無いんだ。勝手に面子入れられてるし。

「藤丸には逃げられたし」

「葵か仁君でいいんじゃない？」

「そうだな、私が探してこよう。では30分後に私の部屋で」

そう言つて、槍一郎さんは去つて行った。

「俺、死ぬかも」

結局、朝まで付き合わされました。

刀奈の想い2―前編―

翔平と晴れて恋人同士になってから、早2ヶ月以上経った。

彼や一夏君達が入学してきてから、学園では様々な事があった。1年1組のクラス代表決定戦から始まり、クラス代表選と無人機の襲撃、問題しかない転校生2人の転入と、タッグマッチでのラウラちゃんとのVTSによる暴走、男装してたシャルロットちゃんの国際問題に発展しかねなかった問題と……。

今考えても、問題が起こり過ぎだと思う。イベント単位で何かしらの問題が発生するってどうなんだろうか。

翔平は代表戦での無人機は十中八九篠ノ之束の仕業だろうと言っていた。

曰く、「大方一夏に専用機を与えて、それをどれほど使いこなせているかを確認したかったんだろう」だそうだ。

その結果として、自分の妹が危うく命を落とすところだったのだ。理解に苦しむ。

翔平はさらに、「あのクソ兎が自分の妹だけが専用機を持っていない状況を許すはずがない。次の臨海学校で何かしら仕掛けて来るだろうなあ……」と言っていた。

篠ノ之束は、妹である篠ノ之箒を溺愛しているという情報は更識家も掴んでいるので、翔平の予測は信憑性がある。何より翔平の悪い予測は大抵が当たるのだ。

世界が注目する天才科学者を”クソ兎”と言う翔平は流石だと思うが、無人機襲来の時のことを考えると、まあ当然か。

私としては、臨海学校は翔平の方が心配なんだけど、本人は大丈夫と言っている。

……やっぱり私も何とかして行こうかな。

先に控える問題を考えて気が重くなるが、その考えを頭を振って消し、楽しみな明日に気持ちを切り替える。

明日はタッグマッチ前に約束していた、翔平とのデートの日であ

る。

付き合い始めてからはじめてのデート、楽しみじゃないわけがない。

これまで、何度か日用品を買ったりするのに2人で出かけて、プチデートのようなことは何度かあったけど、1日時間を取って出掛けるのはこれが初めてである。

今は翔平と部屋で明日のことを話している。

明日の目的としては翔平の水着と、お互いの夏物の衣服の購入。

私も良いものがあれば水着を買おうと思っている。時間があれば、夏休みに翔平と海やプールに行きたいし。

ただ買うだけならレゾナンスで良いだろうけど、今回はデートなのだ。2人で話し合った結果、レゾナンスは避けて少し遠い所にあるシヨッピングモールに行く事にした。

レゾナンスなら確実に学園の生徒に見られるし、知り合いにばったり会う可能性が高い。せっかくのデートなのだからそういうのは避けて、2人で楽しみたい。

少し遠いと言っても、少し早く出発すれば問題ない。それに、目的地には翔平のバイクで移動する。これが、私にとっては楽しみなのだ。

これまで何度か乗せてもらったことはあるが、バイクでの遠出は今回が初めて。

前まではバイクの免許を私も取りたいと思っていたけど、最近では別に免許は要らないかもと思いはじめている。翔平の後ろに乗るだけで十分満足している。

そうは言っても実際に乗っていると自分も運転したいという気持ちもまだ残ってはいる。翔平の後ろに乗るのもいいが、翔平とツーリングに行くのもそれはそれで楽しそう。

しかしまあ、私には免許を取りに行く時間なんてないのだろうけど。

次の日、日課となっている朝のトレーニングを早めに切り上げて、

シャワーを浴びて食堂で朝食をとった。

朝食を食べる際に、虚と簪ちゃんに今日の生徒会の執務を改めてお願いした。

元々、今日翔平とデートに行けるのは2人が私達の仕事を代わりにやってもらう事を了承してくれたからだ。今度お返ししないと。

簪ちゃんは来週に豊君とデートに行くらしい。

私と翔平の肩を押してくれた簪ちゃんも、つい先日から豊君と付き合い始めた。簪ちゃんが告白したらしい。

2人が付き合い始めた次の日の朝に、簪ちゃんからその話を私達は聞かされた。ちなみに、本音ちゃんは朝の食事は基本的に寝坊でほとんど参加せず、その日もその場に居なかつたから聞かされなかつたようだ。

簪ちゃん曰く、「本音には絶対に言わない」だそうだ。結局、今日まで本音は教えてもらえてないらしい。まあこれまでの行いを考えれば当然か。

食事を終えて部屋に戻り身支度を整えて、私達は部屋を出た。

学園にある駐輪場に移動し、停めてあつた翔平のバイクに乗る。ヘルメットに取り付けてあるインカムを調整して、私達は出発した。

それからは暫く、タンDEMデートを楽しんだ。

やっぱり、バイクに乗ってしまうと私も免許が欲しいと思ってしまうのが正直な気持ちだけど、それ以上にこうして翔平の後ろでバイクに乗るこの時間を幸せに感じる。

そんな気持ちを正直に翔平に伝えるのが恥ずかしくて、その恥ずかしさがバレないように、胸を翔平の背中に押し付けて言ってみた。

すると翔平からは素っ気ない返事が返ってきたけど、これは翔平が照れてる証拠なので私はそれをからかった。バイクに乗っているから見えないけど、きっと彼の顔は真っ赤だろう。そう言う私も真っ赤になっていると思うけど。

何気ないこんなやり取りも私にとっては幸せに感じてる辺り、私は

もう翔平の事が好きすぎて仕方がないのだろう。

もし翔平が居なかつたから、きつと今のこんな幸せな気持ちも感じられずに、ただただ楯無としての自分の役目に追われていたのだろう。

本当に、翔平には感謝している。

今日のデートのどこかで、この気持ちを彼に伝えよう。翔平の背中を見ながら、私はそう決めた。

ちなみに翔平の背中に胸を押し付けた体勢はすぐにやめた。バイクの運転手は後ろから抱きつかれては運転がしづらいということは聞いていたので、翔平が本当に嫌がる行動はとりたくなかった。

一般的な女性の場合、バランスを崩して落下するのが危ないので運転手に抱きつく場合もあるらしいが、ロシア国家代表の私にそんな危険性があるわけがない。ISでの姿勢制御と比べたら造作も無い。

目的地のショッピングモールに到着し、駐輪場にバイクを停めて屋内に入った。

まずは午前中に目的を果たしてしまおうということになり、2人で水着売り場へと移動した。

外は暑いけど、屋内は冷房が効いているので快適な温度になっている。なので私は思う存分翔平に引つつく事ができるので、彼の腕に抱きついた。翔平も予想していたのか、左肘を少し曲げてスペースを作ってくれていたことも嬉しい。

私は単に手を繋ぐよりも、こうして腕を組む方が好きだ。翔平を近くで感じられる。

流石にこの時期に外で腕を組むと暑いので自重しているけど。

腕を組んで歩き始めると、途端に周りからの視線が集まる。中には殺意が混ざったものもあるけど、私達がそれに動じるわけがない。見せつけるようにさらに密着したら、男性数人が泣きながら走っていった。いい出合いがあればいいわね。

女性は女性で翔平に見惚れている人が何人かいる。今日の翔平はベンダバールの待機形態をサンングラス状にしている。バイクに乗る

ときは普段からサングラスにしているが、今日は変装も兼ねてこのままでいるらしい。

無事に水着売り場に辿り着いた私達は、早速水着を選ぶことにした。

翔平が、ただ選ぶだけじゃつまらないと言った時、私は良いことを思い付いた。お互い、相手の水着を選ぶのだ。

この時、良いものがあれば水着を買おうとしか思っていなかった私の考えは一瞬で消え去った。好きな人に水着を選んでもらうなんて最高じゃない。

翔平の了承も得て、お互いの水着を選ぶことになった。なので、私はさも当然のようにお互い別れて水着を選ぶことを提案し、1人で男性用の水着売り場へと移動しようとする。

1つ間を置いて、翔平が慌てて止めてきた。何だか今日の翔平をからかうのは面白いわね。それだけ私もテンション上がっているということなのだろう。

結局、先に私の水着を選ぶことになって女性用の水着売り場に移動した。

さて、翔平はどんな水着を選んでくれるのかしら。

翔平は店内をブラブラ歩きながら、数多くある水着を見て回っている。……見ているのは全部ビキニのようだけだ。

翔平は買い物などで商品を選ぶ時は、こうしてしばらく見て回って目に付いた商品を即決で購入する。2、3種類まで絞り込んでからなかなか決められない簪ちゃんとは真逆のタイプだ。

ブラブラしながらも、目だけは真剣に水着を選ぶ翔平の後ろをついて行っていると、不意に翔平が1組の水着を手を取った。どうやらこの水着が目についたようだ。

水色を基調に白のラインが入っただけのシンプルなデザインの水着だった。私も派手なデザインの水着はあんまりなので、翔平のこのチョイスは嬉しい。まあ翔平が選んだのなら、例え自分の趣味じゃな

くても着るだろうけど。

今日の午前中は翔平がお会計の担当なので、翔平が水着の支払いに行っている間に私はもう少し店内の水着を見て回った。

その中で1つ、目に付いたものがあつた。水着じゃないんだけど、2体のマネキンが着ているラッシュユガードだ。

といっても、私が気になったのはラッシュユガードそのものではない。その商品を紹介している”カップルにオススメ”という言葉に興味を持った。

支払いを終えて戻ってきた翔平と話して、このパールツクのラッシュユガードも購入した。

私の水着は買い終えたので、今度は私が翔平の水着を選ぶ。

男性物の水着売り場に移動して、店内を歩きながら翔平に似合いそうな水着を探す。

中々決まらずに悩んでいると、翔平が「俺みたいに目に付いたやつでいいじゃん」と言ってきたので、目に付いたブーメラン型の水着を渡してみた。謝りながら返された。

元あつた場所に戻しながら、ふとブーメランをはいた翔平を想像してみた。翔平は普段から、任務やI Sの操縦の為に体を鍛えている。そんな翔平がブーメランをはくと、よりその肉体が目立ち……………。

……想像したらちよつと興奮した。

そんな煩惱は頭を振って消し去り、翔平の水着選びに戻った。

その時、さつき手に取つたブーメランの近くにあつた濃い緑を基調に黒のデザインが入つた水着が目についた。

ベンダバールの機体の色とよく似ているその水着は、翔平にピッタリだと思つたので、即決でその水着に決めた。

翔平も喜んでくれたので、折角なのでいつものセオリーは無視して、ここは私が購入した。お互いプレゼントするみたいな感じにしたかつたのだ。

無事に2人の水着が購入できたあとは、さらに2人の夏物の洋服を

見て回って気になるものをいくつか購入した。

購入したものを更識の自家まで郵送してもらおうように手続きしたところで、お昼を食べるのいい時間となった。

翔平とフードコートへ移動する途中、私は翔平に一言言って御手洗いに向かった。

その後元いた場所に戻って見ると、翔平が3人組の女性に何か言われていた。というよりも明らかに絡まれていた。

翔平から話を聞くと、どうやらこの3人は女尊男卑思想の人達らしく、男という理由だけで翔平に荷物を持たせようとしていたらしい。

それを聞いただけでかなりの怒りが込み上げてきたが、それを表情に出さないようにして、翔平は私とデート中であることを伝えた。

これで引き下がるだろうと思っていたのだが、リーダー格の女性はそんな事は関係ないと言わんばかりに、私には帰るように言った。

翔平を馬鹿にされて、もう既にかなり頭に来ていた私は1発殴って張り倒しそうになったけど、翔平に無言で手を握られて思いとどまった。

すると、目の前のムカつく女は勝ち誇った顔を見せた。

何かと思えば、ここでまさかの和佳奈さんの名前が飛び出してきた。曰く、和佳奈さんの友達らしい。

：何だかこの人に怒ることも馬鹿らしく思えてきて、一気に冷静になった。

友達だと言うならば、直接話してもらおう。そう思い、私は和佳奈さんに電話した。

すると目の前の女はみるみる顔が青くなっていく。自分の置かれている状況に気づいたのだろう。

和佳奈さんと電話が繋がりに、逃げられるといけないので簡潔に状況を説明した。状況を理解した和佳奈さんから、その人と代わってほしいと言われたので、目の前で顔を真っ青にしている女に一言伝えて携帯を差し出した。

電話越しにただただ謝った女は、話が終わって私に携帯を返して、

慌てて後の2人を連れて逃げて行った。恐らく彼女の人生は、終わらないにしてもドン底に落ちただろう。

電話に出ると、まだ通話は繋がっていたので和佳奈さんと一言二言話した。

すると、今は翔平と2人で居るのか聞かれて、「そうです」と答えたら翔平に代わってほしいと言われた。

翔平にその事を伝えると、露骨に嫌そうな顔をした。まあ十中八九、私達の関係の事を聞かれるのだろう。

電話で和佳奈さんと話している翔平の言葉を聞いていると、その予想は当たっていたようだ。

通話を終えた翔平は何とも言えない表情で携帯を返してきた。

何を言われたのかを聞いてみたら、来週のお母さんの御墓参りの時に色々と聞かれるそうだ。

恐らく、お酒が入った和佳奈さんに絡まれるのだろう。それを考えると、少し気が重くなって翔平とともに溜息をついた。

刀奈の想い2―後編―

ちょっとしたトラブルはあったものの、私と翔平は気を取り直して昼食を食べるためにフードコートへとやってきた。

休日のお昼時だけあって、フードコート内は人でごった返していた。

別の飲食店の方へと行くことも考えたが、翔平がそっちも人が多くて並んでいるというのを聞いていたので断念した。

しばらく翔平と空席が無いかを探しながら歩いていると、運良く食べ終わった2人組が席から離れたので、私達はその席に座った。

2人とも席を離れる訳にはいかなないので、順番に料理を購入しに行くことになった。

まずは翔平が行くことになったので、私はさつき見つけた翔平が好きなラーメンチェーン店があることを教ええると、翔平は即決でそのお店のラーメンを購入しに行った。

やっぱり、あの即決できる性格は羨ましい。私や簪ちゃんは大体は悩んでしまう。3人で外食した時は私と簪ちゃんが頼む料理を悩む中、翔平はものの数秒で決めてしまい、私達を待つということがほとんどだ。

さて、私は何をしようかなとフードコート内を見渡す。規模が大きいシヨツピングモール内のフードコートだけあって、店舗数も豊富に揃っている。翔平が向かったラーメンも気になるけど、どうせ翔平が頼んだものを一口貰うだろうから別にしよう。

そう考えていた中で、有名なパスタのチェーン店が目についた。翔平がラーメンなら私はパスタにしようかな。

翔平がブザーを受け取って戻ってきたので、入れ違いに私が注文しに移動する。

そして、目的の Pasta 店の前に到着したのだが、隣に有名なオムライスチェーン店があった。

それを見た私は、新たないたずらのネタを思い付いた。

私達が外食する時は、大抵の場合お互いの料理を一口ずつ貰う。

もしも、私がここでオムライスにした場合、翔平が一口欲しいと言ってきた場合は、所謂「あーん」をする事ができる。そして、翔平が選んだラーメンは麺類なので「あーん」はできない。

つまり、翔平にだけ恥ずかしい思いをさせることができる!!

顔を赤くする翔平を想像して、私は料理をオムライスに変更した。その後2人とも頼んだ料理を受け取り、昼食を食べ始めた。

そして、私の目論見通り顔を真っ赤にした翔平は私が差し出したオムライスを食べ、自分はラーメンを選んだためにやり返せずに翔平はこっちに文句を言ってきた。

ここまで上手くいくとは思っていなかった私は、上機嫌に残りのオムライスを食べた。

ちなみに、使っているスプーンは翔平にあーんをしたので必然的に間接キスになるのだが、今更そんな事をいちいち気にする仲間じゃない。

翔平の事が好きだと自覚した頃に、意図せず間接キスとなつてしまった時は、恥ずかしくて内心どうにかなりそうだった。表には出さないようにしたけど。

最近翔平に聞いたら、翔平もそうだったらしい。多分、普段ならお互い隠そうとしてもバレていただろうが、その時は2人とも余裕が無かったようだ。

そんな昔の事を思い出していたためだろうか、目論見が成功したためだろうか、はたまたその両方か。

とにかく、私は油断していた。そして油断していた私は、翔平の「じつと」として「という言葉に素直に従い、顔に向かって伸びて来る翔平の手に反応出来なかった。

私の頬に付いていた米粒を取り、それをそのまま食べた翔平と固まる私。

何が起きたか理解した瞬間には、私の顔は真っ赤になっただろう。見れば翔平はニヤニヤしながらこっちを見ている。

……やり返された。

翔平に「詰めが甘い」と言われて、ホントにその通りだと思った。

昼食を食べ終えた私達は、その後の予定を予め決めていなかったの
で、その場でどうするかを話し合った。

その結果として、たまたま2人が別の場所で近くのバッティングセ
ンターのチラシを見ていたので、食後の運動でそこに行く事にした。
バッティングセンターに到着して店内に入ると、私達と同じように
チラシを見た人もいるのか、思っていたより多くの人が訪れていた。

近年の女尊男卑の思考の影響で、こういった施設は女性向けの設定
がされているものが多く男性向けは少ない傾向だが、今日訪れたバッ
ティングセンターは女性向けが多いものの、男性向けの球速設定にし
てあるレーンもしっかりと設けられていた。といっても、私は女性だ
けど使うのは男性向けレーンだけだ。

折角来たので、2人で交代で打ち始めた。

私も翔平も野球を特にやったことがある訳ではないのだけど、持ち
前の身体能力と動体視力で、ポンポン打っていった。近くで見ている
彼女連れの男性が彼女に、翔平を指差して「貴方もあれぐらいやって
見せて」と言われていたのは、ちよつと可哀想だった。

小学生の頃、クラスメイトと一緒にバッティングセンターに行った
事がある。もちろん翔平も一緒だった。

私も翔平もバットを握ったことも無かったけど、1ゲーム目である
程度目が慣れてからは、私達は周りが唾然とする中打ちまくった。

そのあと、野球のクラブに入っていたクラスメイトの1人から熱烈
に勧誘された事が懐かしい。私も翔平も断ったけど。

一度、そのクラスメイトの話を聞いたチームの監督の人が家にまで
勧誘しに来たみたいだけど、更識本家の外観に圧倒されて怖くなって
逃げたらしい。

まあ翔平がチームに加われれば日本一も難しくなかつただろうから、

勧誘する気持ちも分からなくはないけど。

翔平は元々身体能力が高いのもあって、こういうスポーツも得意としている。多分、その気になれば何でも出来るんじゃないかしら。

本人はサッカーが好きだって前に言っていたけど。この前、一夏君に付き合ってもらって何処からか持ってきたボールを蹴っていたけど、その時の翔平はとても楽しそうだった。

……一夏君の球技のセンスが絶望的すぎて私も翔平も困惑したけど。

恥ずかしさと情け無さでメンタルがボロボロになった一夏君に代わって私が付き合ったけど、あれはあれで楽しかった。

普通にボールを蹴る私を見て一夏君が、さらに落ち込んでたけど。

そういえば昔、翔平が一人でブツブツ言いながらボールを蹴っていた事があった。

”えたーなるぶりぎーど”とか言いながら、色々と四苦八苦していた。近づいた私が、それがどういうものなのか聞いてみると、口に出た事に気付いていなくて、私に聞かれてとても恥ずかしそうだった。

顔を赤くしている翔平に改めて聞いてみると、”空中に体を3〜4回転させながら飛び上がり、そのままボールを蹴る技”らしい。ボールをその場で凍らせる事が出来たら100点だとか。

……そんな事できる人間は人間をやめていると思う。でも翔平なら1、2回転なら出来そうな気もする。

2人で満足するまで打って、バッティングセンターを後にした。

最後に久しぶりに翔平と勝負したのだが、やっぱり今回も勝てなかった。これまで、私の全敗という訳ではないけど、私が大きく負け越しているということは事実。

悔しいけど、この事を嫌と思うことは無い。

私は、翔平が現れるまでは何をやっても1番だった。努力をした結果なのだから、嬉しくない訳ではない。でも、どこかつまらないと感じていたのも確かだった。

そんな中で翔平が私の前に現れ、そして私は彼に負けた。とても悔しかった。けど、それ以上に嬉しかった。

それからは、どんな内容でもどんな結果でも、翔平と勝負する事が凄く楽しかった。それは今でも変わらない。好きな人と何かをするという事は、楽しくて堪らなく嬉しいのだ。

バツテイングセンターを出た私達は、夕食の時間までに時間があつたので翔平のバイクで近くの海に向かった。

シーズンではないので人はあまりいなかったが、直前に迫る海開きに向けて海の家を営む人達が、その準備をしていた。

別に海に入る事が目的で来たわけではないので、他愛もない話をしながら翔平と並んで浜辺を歩く。

その途中、話していた内容が途切れてほんの少しの空白の時間が生まれる。横目で翔平を見ると、次の話の内容を考えているようだ。

翔平はコミュニケーション能力が高いし、気配りもできる。なので彼といると話が途切れることはない。私から話を振ることももちろんあるし。

なのでほんの少しとは言え、会話が途切れることは珍しい。別にそれをとやかく言う訳ではないけど。

波の音を聞きながら、歩く。

恐らく、すぐに彼は何か新しい会話のテーマを見つけられるだろう。

私が退屈と感じないように、彼は私を楽しませてくれる。

繋いだ左手越しに、彼の暖かさを感じる

気づいた時には、翔平に感謝の言葉を伝えていた。

確かに伝えようとは朝から考えていたけど、それを抜きにして、本当に無意識に出て来た言葉だった。

突然言われた翔平は、キョトンとした顔で聞き返してくる。

当然だろう。このタイミングでは、説明しないとなにに対する感謝

なのかが分からない。

なので私は翔平に伝えた。

今日のデートで感じた、これまでに感じた感謝の想いを翔平に伝えた。

貴方が居てくれたから、貴方が私の隣に立っていてくれたから、私は私とすることができた。

その気持ちを、彼に伝えた。

私の話を聞いた翔平は、恥ずかしいのか目線を外しながら嬉しいと言ってくれた。

さらには、驚いた事に翔平も私に感謝の言葉を伝えた。

曰く、自分も私から多くのものを貰っている、と。

昔からずっと考えていた。

翔平と一緒にいて、私ばかり沢山のものを貰ってしまったのではないかということ。

私の小さな我儘を嫌な顔をせず聞いてくれて、大事な時には側にいて支えてくれる。

翔平は私の力になってくれている。それは紛れも無い事実だ。では逆に、私は彼の力になれているのだろうか……。

そんな疑問が最近の私の中にはあった。

だからこそ、翔平に感謝の言葉が出て来たことに私は驚いた。そして、たまらなく嬉しかった。

2人であることが翔平にとっても幸せと感じて貰えていることに、私は嬉しくて、気づいたら目から涙が流れていた。

翔平が私の頭を撫でる。そして、

ありがとう、愛してる

翔平はこう言ってくれた。

翔平は私が笑顔で自分の隣に居てくれることが嬉しくて、それを望

んでいるらしい。

ならば、私は笑顔で言葉を返さなければいけない。

私も、愛しているわ

気づいたら周りに人は居なくて、浜辺には私たち2人だけだった。

そこで翔平としたキスは、これまでで最も幸せなものだった。

「お願いします!!」

「……お前、本当に更識の事になったら何でもやるな」

臨海学校が目前に迫ったある日の放課後、俺は廊下で織斑先生に土下座する勢いで頭を下げていた。

というか、俺の土下座で頼みを聞いてもらえるのなら幾らでもやる。

俺が頼んでいることは1つだけだ。

刀奈の臨海学校同行

学園の行事とはいえ、泊まりで海に行くのに刀奈が居ないとか何の嫌がらせだろうか。一夏に八つ当たりして半殺しにしてしまいそうだ。

「いや、本当にお願いますって」

「無理なものは無理だ」

「そこはどうか!!」

ついに俺は土下座を始める。いやもう必死だよね。

頭を下げてる状況から目線だけを上に上げて織斑先生の様子を確認する。ちらつと見ると、呆れた顔をしていた。

『うわっ、こいつ本当にやりやがった』みたいな事を言いたげな目で俺を見ている織斑先生。

ここは職員室の前の廊下なので周りにも学園の生徒だったり他の教員が通るのだけど、俺と織斑先生のやりとりを見ても特に反応する事なく、『またやってる』みたいな反応しかされない。

それもそのはず、こうして織斑先生に頼み込んでるのは今日で3日目だ。流石に土下座を見た人は『マジか!』って顔してるけど。

「上代、流石にここで土下座はやめる。私が虐めているみたいじゃないか」

「じゃあ楯無の同行の許可を下さい」

「いや、しかしだな…」

言い淀む織斑先生。その姿を見て俺は内心で喜ぶ。

これはチャンスだ。ここで決めよう。

「更識は去年も臨海学校に参加している。1人だけ2年連続での参加を許すわけには……」

「教員は毎年参加しているじゃないですか」

「更識は生徒だろう」

「なら教員扱いとしての参加なら問題ないのでは？」

刀奈は現役の国家代表だ。その技量に疑いの余地はない。それに生徒会長という、ある意味学園の生徒の中ではトップの存在だ。臨時講師として、臨海学校に参加するということは、何ら問題ないはず。………」

俺の言葉に悩む織斑先生。じわじわと逃げ道を無くして追い込んでいく。

今日この日まで、この頼みを聞いてもらうために結構織斑先生には協力してきた。問題児の多い今年の1年で、影で色々手を回して問題を先読みして解決してきたことは織斑先生も知っているし、何なら織斑先生から直に頼まれたこともある。結構面倒臭かった。

全ては、刀奈と一緒に海に行くためだ。

「いや、しかしだな……」

クソツツ!! これでも折れないか。流石は織斑先生、手強い。

しかし、後一步ところまではきている。

「追加の教員を補充する理由が無い」

「一夏もいるし、何か問題が起こるかもしれないですよ」

「お前がいるじゃないか」

おっと、これは普通に嬉しい。意外と信用してくれてるんだ、俺の事。

でも、それとこれとは話が違う。臨海学校も目前に迫っているし、そろそろ認めてもらおう。

俺は土下座をやめて立ち上がる。少し、雰囲気を変えながら。

恐らく一般の学生や教員から見たら何も変化してないように見えるだろうが、目の前の織斑先生はその変化に気づいた。

「俺が対応出来なかったら、どうするんですか？」

「何？」

「俺が対応しきれない状況が生まれる可能性があります。この臨海学校で」

「……どういう事だ？」

「ここではちよつと」

そう言つて視線だけを周りの学生や教員に向ける。

周りに人がいては出来ない話、つまり内密にする必要がある話。

そして話の流れで、それは臨海学校で何かが起こる可能性がある。

この事を理解してくれたであろう織斑先生は、僅かに目を細めた。

「……場所を変えよう」

勝ったな。

「え!?!私の臨海学校参加を織斑先生に認めさせたの!?!」

「臨時講師としてだけどな」

「……まさか本当にやるとは思わなかったわ」

その日の夜、俺は自室で刀奈に臨海学校参加の許可が出たことを報告した。

織斑先生に頼んでいることは元々言ってたけど、本当に許可が貰えるとは思っていなかったらしい。凄く驚いている。

虚からは、「私利私欲に走らないでください」って怒られたけど、個性豊かな今年の1年で、何か起きた時に俺だけだと不安だということ、何とか許してもらった。まあ私利私欲が大きいんだけど。

「でも、どうやって認めてもらったの?」

「その事なんだけどさ」

織斑先生に話した内容は刀奈にはまだ話していないので、ちゃんと伝えておく。

「この臨海学校で、篠ノ之束が仕掛けて来る可能性が高い」

「っ!?!」

驚く刀奈。なんかさつきから驚かしてばっかだな。内容が内容なので、部屋の空気が重くなる。

「その根拠はあるの?」

「篠ノ之束に専用機が与えられる。姉お手製のな」

「ええっ!?!」

何度目か分からない刀奈の驚く顔。ここまでリアクション返してくれると、話すのも楽しくなってくる。

織斑先生も、この話には珍しく驚いた表情を浮かべていた。珍しいものが見れて、個人的に満足している。すぐにいつものクールな表情に戻ってたけど。

箒に紅椿が与えられるという事を俺は知っている。けど、それは前世の知識であって、今のこの世界で得た情報ではない。

なので今日放課後、織斑先生に直談判しに行く前に、箒を捕まえて軽く探りを入れてみた。

「軽く探るだけのつもりだったんだけど、すんなりと話してきたよ」

”専用機に興味はあるのか?”

この質問に対して、箒は明らかに動揺した。そして、誰にも話すなよという一言付きで、色々と話してくれた。

一夏の周りには俺を含めて専用機持ちばかりいる。そんな中で、自分だけ専用機を持っていないことに、焦りを覚え始めた。

一夏の隣に立つ事にこだわりを持っている筈にとって、専用機という存在はある意味必須アイテムに思ったんだろう。思考が短絡的だけど。

「その考えは分からなくはないけど、少し短絡的すぎるんじゃない？」
刀奈も同じ考えのようだ。

世の中、力が全てではない。あいつの隣に立つにしても他に方法はいくらだってあるはずだ。

だが、今の筈にはそうも言ってもらえないようだ。
今学期で起きた二度の事件。

無人機の襲撃と、ラウラの専用機暴走。そのどちらでも筈は何もできなかつた。無人機襲撃の際は、何もできないどころか結果的に足を引っ張ってしまった。

一夏はその事件の中心にいて、自分は何もできないどころか足を引っ張った。

プライドが高い筈にとっては耐え難い事実だろう。

「無人機の時は、何であんな危ない事をしたのか疑問だったけど、そういう理由だったのね」

「あいつなりに何かしたいと思った結果なんだろう」

俺が思うに、あの事件での行動とその結果が、今回の専用機が欲しいという欲求に繋がったのだと思う。

「それで姉に専用機の製作を頼み、妹を溺愛している姉は二つ返事でそれを了承したと」

「でも、筈ちゃんに専用機を作っただけなら、特に何か起きる事は無いんじゃない？」

普通ならそう考えるだろう。だけど今回作るのは、あの籐ノ之束だ。

「籐ノ之束が妹に専用機を渡して、それで終わりだと思うか？」
「……嫌な予感がするわね」

一夏や織斑先生、筈と話してから聞いた、”籐ノ之束は妹の籐ノ之束を溺愛している”という情報は、当然刀奈とも共有している。

そんな篠ノ之束が、妹に専用機を製作して受け渡したとして、何も
しないとは考えられない。

妹と同様にプライドが高いあの兔の事だ、スキルが無い筈が使つて
も何ら問題がないと思っっているだろう。

「恐らく、妹に作る専用機のスペックは現存の機体の中で最高のもの
だろう。そのスペックを証明するために篠ノ之束が何かアクション
を起こす可能性は高い」

「…頭が痛いわ」

いくらスペックが高くても、それを使うのは人間だ。当然、その人
間にはスキルが求められる。ただ高スペックな機体に乗っても、機体
に振り回されるだけだ。

そして専用機が手に入る事が分かり、どこか浮かれている筈にとつ
て、そんな事は頭にならないだろう。

「加えて俺を毛嫌いしてる可能性が高い奴のことだ。俺個人に何かし
てくる可能性も高い……と」

「……頭が痛いわ」

話していて俺も頭痛くなってきた。2人揃って頭を抱える。

刀奈に頼むのは気が引けるが、今回は俺にどれくらい仕掛けてくる
か分からない以上、原作イベントの対応は刀奈に任せるしかないだろ
う。

その事を伝えた途端、刀奈の表情が曇った。

「そんな事言わないで翔平…。自分の身を優先して。私を頼ったつて
いいのよ」

隣に座っていた刀奈が俺の正面に移動し、両頬が刀奈の掌に包まれ
る。そのまま俺の額に刀奈の額が触れる。至近距離に刀奈の顔が来
て内心ドキドキしてしまう。

「貴方が傷ついて欲しくはない。だから、貴方は自分の身を全力で
守って」

” 貴方が居なくなったら、私は立ち直れなくなるわ”

その言葉は至近距離じゃないと聞き取れない程、小さなものだった

た。

そつとキスされて、刀奈の顔が離れていく。

その表情はさつきと打って変わって、笑顔になっていた。

「私としては、翔平が頼ってくれる事が嬉しいわ」

ニツと笑う刀奈。ヤバい可愛い。

でも確かに言われてみれば、こうして刀奈に更識として何か頼む事って珍しいと思う。

普段の個人的な小さい頼みとは別で、更識の仕事は内容関係なく刀奈の頼みで俺は動いて来た。

こうして、俺から刀奈に頼むのは何だか新鮮だ。

「それに、何はともあれ翔平と海に行けるのは嬉しいわ。ありがとう翔平」

そう言って貰えただけで、頑張って織斑先生に頼み込んで良かったと思えた。

「そうと決まれば、私も準備しないと。明日バイク出してくれない？ 必要なものを買に行くから」

「了解」

プチデートも決まったし、臨海学校が楽しみだ。

一先ず俺は目先の問題には目を瞑り、刀奈と臨海学校の準備を楽しむことにした。

楽しそうに準備を始める刀奈の隣に向かいながら、俺はそう思う事にした。

次の日、『織斑先生、愛の力の前に敗れる!!』という号外が配られた。

俺が織斑先生の説得を成功させたのは愛の力のお陰らしい。

うん、間違っではないね。

一部、刀奈だけ2年連続参加する事に不満の声が出たそうだが、臨

時講師としての刀奈の仕事量を聞いて誰も何も言わなくなったらしい。

刀奈の不安が心配だが、まあ刀奈はハイスペックだし、本人も大丈夫と言ったから大丈夫か。俺もサポートするし。「私が疲れたら翔平が癒してくれるんでしょ？」といい笑顔で言われたら何も言えない。

俺がどうしたら刀奈の癒しになるのかいまいち分からないが、まあ本人の希望を聞く事にしよう。

号外の事を聞かれた織斑先生は、箒の専用機の話を他言するわけにもいかず、曖昧に返すしか無かったそうさ。

ちなみに、箒の専用機の話は誰にも話すなという約束で聞いた話なので、織斑先生と刀奈には他言無用にしてもらっている。

この2人に話したのは内容が内容だったので、箒には許して貰いたい。本人には言っていないけど。

「海だ!!」

誰かが言った言葉に、バスに乗る多くの人が反応した。

各々が海が見えた感想を言っつていくのを聞きつつ、俺は目を覚ました。

隣を見ると俺の肩に寄りかかるようにして、刀奈が眠っていた。可愛い。

今日は臨海学校初日で、今は移動のバス。

なぜ刀奈が俺の横に座っているのかというと、今回の臨海学校において、刀奈は主に山田先生のサポートということになったからだ。

昨日は夜中まで、俺は生徒会と更識の、刀奈は臨時講師関連の書類仕事をやっていたので、バスに乗るなり爆睡してしまった。朝は朝で早かったし。

ちなみに、刀奈が1組のバスに乗車が決まった後、刀奈の座席は自然に俺の隣となった。別に刀奈が圧を掛けたとかではなく、本当に自然にそうなった。クラスメイト曰く、「彼女さんの前で、上代君の隣には座れないかなあ……」。後が怖くて」とのことだった。別にバスで席が隣になるぐらい大したことじゃないと思うんだけどな。まあこつちとしては嬉しいから有り難く座らしてもらおうけど。

俺の隣に座ろうとしていた一夏の隣が空席となり、ヒロイン達の争奪戦が始まったが、織斑先生の「それ以上揉めるのなら出席番号順にするぞ」という一言で、ヒロイン達は大人しくじゃんけんを始めた。

「起きたか」

バスの通路を挟んで隣に座る織斑先生が声をかけてきた。

その隣に座る山田先生はニコニコしながらこつちを見てきている。

「もうすぐ到着だ。そろそろ更識を起こせ」

「こんなに気持ち良さそうに眠ってるのにはですか？着いてからでもいいんじゃない？」

「生徒ならまだしもこの臨海学校では更識は臨時とはいえ講師だ。着

いてからも仕事があるから早めに起こしておけ」

「まあ…それなら仕方ないですね」

もう少し刀奈の寝顔を堪能したかったが、仕方がない。

渋々、俺は俺にもたれかかっている肩と反対の肩を揺すって刀奈を起こした。

「楯無、そろそろ到着だから起きろ」

「……んっ」

色っぽい声を出しつつ、刀奈は目を覚ました。可愛いんだけど、…心臓に悪い。山田先生が微妙に顔赤くしてるし。

「おはよ」

「おはよう、翔平。肩ありがとう」

入学当初は寝顔を俺に見られて恥ずかしそうにしてい刀奈だが、最近ではもうそんな事はない。毎日同じベッドで寝ているんだから、俺も刀奈ももう慣れた。今更寝顔1つで俺も刀奈も動揺しない。

…寝起きの刀奈がやたらと色っぽいのは、慣れないけど。

刀奈が起きたのを確認した織斑先生は、クラス全体にも降車の準備をするよう伝達した。

後ろの方の、主に一夏の席辺りが騒がしいが、座席が離れている俺達には状況は分からない。

ある意味、俺達がぐっすり眠れた要因は、あの連中から離れて座れたからかもしれない。

目的地である花月荘に到着した後、バスから降車して旅館の前に整列した。

織斑先生の監視下なので、みんな動きが早い。ものの数分で整列が完了した。

「3日間お世話になる花月荘だ。従業員の方々に迷惑をかけないように！お前達、挨拶しろ」

「よろしくお願いします」

織斑先生の言葉と共に学生達が挨拶する。

「今年の1年生もみんな元気ね。花月荘の女将をやっています、清洲景子です」

従業員が並ぶ中心に立っていた女性が、従業員を代表して軽く挨拶をした。

…まあ俺、景子さんと初対面じゃないんだけどね。花月荘って更識がよく使う旅館だし。京子さんがここ、凄い気に入ってたから。

後で挨拶しておこう。

と思っていたら挨拶を終えた景子さんと目が合った。そして、凄い穏やかな目で微笑まれた。

…うん、これ直感で分かったよ。俺と刀奈が付き合っているの知ってるな、あの人。

それで刀奈が帯同しているのを見てあの顔なんだろう。面倒臭そうなので、あの人には出来るだけ近づかないようにしよう。絶対根掘り葉掘り聞かれる。

その後、教師陣からの諸注意や今後の流れが説明されて、この場は解散となった。

この後は各自、自分の部屋に荷物を置いて、夕食まで自由時間となる。まあ刀奈は講師として任せられてる仕事があるし、俺もそれに付き合うつもりだから自由時間はもう少し後になるのだけど。

「ねえ上代君、上代君と織斑君の部屋が書いてないけど」

「上代君は聞いている?」

部屋割りに俺と一夏の名前がない事に気付いたクラスメイトの女子数人が話しかけてきた。

「俺と一夏の部屋はまだ発表されてないんだよ。俺も今から聞きに行く」

「え、なんで?」

「バレたら女子生徒が押し寄せるだろ。旅館側に迷惑だ」

「……あー、そっか」

俺と一夏の部屋の前に多くの女子生徒が集まる光景を想像したの
だろう、クラスメイトが苦笑いを浮かべた。

「じゃあ上代君は織斑君と同じ部屋なの？」

「いや、俺らは別々の部屋だ」

「え、じゃあ上代君は誰と同じ部屋なの？」

「楯無」

「成る程」

俺の回答にすぐさま納得といった表情になった。普通だったら、異
性で同じ部屋にする事は問題だと思うけど、俺と刀奈は普段から同室
で生活してるから特に問題にならない。

「上代」

話していたら織斑先生に呼ばれたのでそつちに向かう。その場
には織斑先生の他に、刀奈と山田先生、一夏、それと景子さんがいた。

「久しぶりね、翔平君。3年ぶりくらいかしら」

「お久しぶりです、景子さん。それぐらいになりますね」

久しぶりに話す景子さんと握手する。

「そうか。更識と面識があるのだから、お前も当然面識があるか」

「ええ、まあ」

織斑先生は去年の臨海学校も参加していたそうだから、その時も刀
奈と景子さんと似たような光景があったのだろう。

事情を知らない山田先生と一夏が不思議そうにしている。後で教
えておこう。

「すみません、直前に部屋を追加してほしいと頼んでしまい」

「いえ、空き部屋はあったのでこちらとしましては問題ありませんで
した」

刀奈が急遽、この臨海学校に参加することになって、部屋が一室追
加が必要となったが、無事に用意してもらえたようで良かった。

「この2人が使う部屋みたいですし、後で色々と聞かせていただきま
す」

並んで立つ俺と刀奈を見ながら、そんな事を言ってくる景子さん。
俺と刀奈は目を逸らした。

「でも、良かったんですか？異性の学生を同室にしても」

「大丈夫です、学園でもこの2人は同室で生活をしていますので。節度を持った行動をしてくれるはずですよ」

そう言っただけで俺たちを一瞥する織斑先生。それに内心動揺するも絶対に顔には出さないようにした。

……言えない。実は付き合ってから学園の自室でもうやる事やっています、なんて言えない。

その後軽く話して景子さんは仕事に戻った。

俺達も一度部屋に移動して荷物を置き、任されている仕事を行うことにした。

「翔平は生徒だから遊んできてもいいのよ」

「いや、付き合うよ。俺も館内設備と非常経路は確認しておきたいから」

「やっぱり心配？」

「……まあな」

あの篠ノ之束が仕掛けてくるのだ。

恐らく仕掛けてくるのは海上だと思いが、警戒するに越した事は無いだろう。

「まあ、今からうだうだ考えてもどうしようもないし、出来ることだけやっておくか」

「それもそうね」

「学園の行事なんて1回限りだからな」

「私は2回目だけどね」

「俺と一緒にするのは1回目だろ？」

ニツ、っと笑って見せると照れた刀奈に、何も言わずに肩を叩かれた。

こういう時は、刀奈はまだ照れるんだよな。

照れたからって物理攻撃はやめてほしいんだけど。

まあ軽くなので痛くないし、可愛いだけなだけだね。

その後は、2人で色々話しながらも仕事はしっかりとこなした。

館内設備と非常経路の確認が終わった俺たちは、別の教員の仕事を手伝おうと織斑先生に報告したところ、もうほとんど仕事は終わっていて、俺達も刀奈も自由時間に入っているとのことだった。

「上代、お前は既に自由時間のはずだが？」

「そうですよ。だから自由に時間を使っています」

「フツ、成る程」

あ、今鼻で笑われた。自由時間に彼女と行動したいと思うのは当然だと思うんだ。

「上代は浜辺にでも出て更識以外の学生とも交流しておけ」

「…了解です」

「更識も、臨時講師と言っても最低限の業務をこなしていれば後は自由にしていい」

「分かりました、ありがとうございます」

「私と山田先生も後で向かう」

そう言っつて、織斑先生は業務に戻った。と言っても、あの言い方だとそれもあと少しで終わるのだろう。

というか、この臨海学校つて一応は課外学習のはずなんだけど、丸1日自由時間つて大丈夫なんだろうか。

織斑先生と別れた俺達は一度部屋に戻った。

「織斑先生にもああ言われた事だし、俺達も海の方行くか」

「折角だしね」

というわけで、お互いこの前のデートで買った水着を持って海へと向かった。流石にペアルックのラッシュガードは持って来るのを自重したけど。

旅館の外へ出て隣接している海水浴場に向かう。

その道中で簪と本音に出会った。

今回の臨海学校は、簪も参加している。原作では確か、式式の開発に専念するために臨海学校は不参加だったはず。

しかし現在の式式の開発は順調に進んでいるため、簪も特に臨海学

校を不参加にする理由も無くなったので、こうして参加している。

「お兄ちゃん達も自由時間？」

「おう、お前達もまだ中に居たんだな」

「うん。移動疲れあつたし、人多そうだったから…」

「よく言うよかんちゃん。ゆうくと電話してただけなのに」

「本音!!」

あつさり主人を裏切る従者。仲が良いのは良い事だとして、主人が黙っておきたい事をさらつと言ってしまうのはどうなんだろう？

「上手くいつてるみたいね」

「お兄ちゃんとお姉ちゃんには負けるけどね」

繋いでいる俺と刀奈の手を見ながら簪がボヤいた。

「かんちゃん、お嬢様が臨海学校の参加が決まって凄い羨ましがってたもんね」

「~~~~っ!?!」

またも従者にカミングアウトされる簪。そろそろ怒って良いと思うぞ。

そんな事を思っているとき、俺は1つの案を思いついた。

「じゃあさ、夏に4人でどっか行くか？」

「それってダブルデートってこと？」

刀奈の問いに俺は頷く。

俺達4人は面識があるし、そう言う事も一回ぐらいはやってみても良いと思う。まあ豊がオツケーかどうかになるだろうけど。

「いいわね、それ」

どうやら刀奈も賛同してくれるらしい。

「簪はどうだ？」

「うん、私もやってみたい。後で豊にも聞いてみる」

更識姉妹の了承が取れたので、後は豊次第か。

「いいなあ、かんちゃん。楽しそうなイベント決まって」

「そう言うのなら貴方も恋人作れば？」

「出会いがないから困ってるんじゃない」

確かに、今の本音の周りにいる男って一夏ぐらいか。

学園がほぼ女子校だから仕方がないけど。

俺と刀奈も簪と豊も、更識関係で自然に知り合ったからなあ。俺は半分無理矢理だけど。

「そのうちお前にも出会いがあるだろう」

「…しようちゃん他人事だね」

「他人事だからな」

他愛の話をしつつ、俺達は浜辺へと向かった。

今の、この平和で幸せに感じられる時間を大切にしたいな。

浜辺にへとやって来た俺達は更衣室で一度別れた。

先に着替え終わった俺は更衣室の出口で刀奈達を待っていると、ちょうど一夏がやってきた。その顔には疲労の色が見える。

「よお一夏、お疲れだな」

「あ、翔平。そりゃ、海に男1人っていうのはキツイぜ」

「まあそうだろうな」

俺だって同じ状況なら逃げ出すだろう。

「部屋に戻るのか？」

「いや、ちよつとここら辺を散歩してただけだ。翔平も来たし、浜辺に戻る」

よく1人で散歩なんか出来たな。絶対ヒロイン達の誰かしらが付いてきそうなのに。タイミングが良かったのか？

「翔平はこの時間まで何してたんだ？」

「館内設備の点検だな」

「…それ絶対楯無さんの仕事手伝ってただろ？」

「当たり前じゃん」

俺の返答に、恐らくは一夏は呆れた反応か鼻で笑われると思ってた。

が、一夏の反応は俺の予想とは違い、何か思い悩んでるようだ。

なんか怖いんだけど。

「なあ翔平…1つ聞いていいか」

「俺に答えられることなら」

やけに改まった様子で聞いてくる一夏。言葉の通り答えられる範囲で答えてやろう。

「人を好きになるって、どんな気持ちなんだ？」

「……………ん？」

その瞬間、時が止まった気がした。

あの一夏が、鈍感で有名なあの一夏が、まさかこんな事を聞いてくるとは思わなかった。

一夏は恥ずかしいのか顔を赤くして俯いてるし。

しばらく唾然としていると、空気に耐えきれなくなった一夏が口を開いた。

「何か言ってくれよ!？」

「あ、ああ……悪い」

いや、うん……あの一夏がこんな質問をしてきたんだ。こつちも真面目に答えよう。色々詳しく聞きたいけど。

「人を好きになる気持ちがどんなものか……だっけ？」

「……おう」

改めて考えると、中々難しい質問だな。

誰かを好きになる気持ちなんて、人それぞれだろうし。俺の価値観を一夏に押し付けるわけにもいかない。というか、俺の場合かなり特殊だろうし。

「やっぱりそれは、人によって違ってくると思う」

「そういうものなのか」

「俺には俺の価値観とか考え方があって、お前にはお前の考えがある」「翔平の場合はどうなんだ？」

怖いぐらいにグイグイくるな、今日のこいつは。

でも、そうだな。俺の場合だと……

「俺の場合は……」

「お待たせ翔平」

俺が言おうとしたところで、刀奈の声がそれを遮った。声の方を見てみると、着替え終わった女性陣が更衣室から出てくるところだった。

「この話はまた夜な」

「お、おう」

恋バナを女性陣に聞かれたことが恥ずかしかったのか、一夏は海の方へと行ってしまった。

「何話してたの?」

「恋バナ」

「え!?!あのオリムーが!?!」

「明日は、雪でも降るんじゃない？」

「簪ちゃん、それは言い過ぎよ」

よっぼど一夏の恋バナに驚いたのか、簪と本音は2人で話を盛り上げつつ一夏と同じように歩いて行った。

俺と刀奈も、2人並んでそれについて行く。

「翔平と一夏君の恋バナね。私もちよつと興味あるわね」

「刀奈でも、流石にこの話は喋れないぞ」

「分かってるわよ。というか、どっちからその話が出たの？」

「一夏」

「…本当に驚きね、それは。けど、いい傾向じゃない？」

「まあな」

恋愛とは無縁だった一夏が、恋愛に興味を持ち始めてるんだからな。いい傾向であることに間違いはない。ただ…

「あいつ、考えたら考えたで、難しくしすぎると思うんだよな」

「ああ…それはちよつと分かるかも」

意識をしたらしたで、周りには女子がわんさかいるんだ。根が真面目な一夏の事だから、そこから1人を選ぶという事は難しいかもしれない。

「けど、その中から1人選べるのなら、それだけ好きになれるってことじゃない？」

「まあそれもそうか」

「私としては、一夏君が誰を選ぶかっていうのは結構興味があるわね」

それは、俺も興味がある。

「けど、誰かと引つ付いたら引つ付いたで、周りの女子が黙ってないだろうけど」

「特にあの5人が凄そうね」

5人、というのは箒、セシリア、鈴、シャルロット、ラウラの事だろう。

シャルロットなんて、一気にヤンデレ化しそうで怖い。

話しながら歩いていると、道がだんだん開けてきて、浜辺が近づい

てきた。それと同時に、なにやら盛り上がってる声が聞こえてきた。

「なんか盛り上がってるな」

「なにしてるのかしら？」

盛り上がっている方へと向かうと、人だかりが出来ていた。簪と本音もその中に入っている。というか、周りの人に手を掴まれて中心部に吸い込まれて行った。

「何やってんの？」

「あ、上代君!!」

この状況が何なのか気になったので、ちょうど近くにいた1組のクラスメイトに声をかけてみた。

「今ビーチバレーをやってるんだけど、あの2人が強すぎてさ」

「あの2人？」

「デュノアさんとボーデヴィツヒさん」

「ああ……」

刀奈と2人で人混みの中心部が見える位置に移動すると、セシリアと鈴をフルボッコにして、仁王立ちしながら高らかに笑っているラウラと、ラウラ程ではないが嬉しそうにしているシャルロットの姿が確認できた。

まあ確かにあの2人、元がハイスペックだし、仲が良いからコンビネーションも抜群なのだろう。セシリアと鈴はコンビネーションの差で負けたんだろうし。

「何ゲームかしてるんだけど、あの2人だけがまだ無敗なんだよ」

「…圧倒的ね」

「ラウラは手加減とかしなさそうだからな」

丸くなったとはいえ、戦闘狂な気が未だに残っているラウラはタッグマッチ以降でも、たまに俺に模擬戦を申し込んでくる。

ちなみに、一夏の呼び方は原作通り「嫁」だったが、俺への呼び方は「兄者」となった。…おい、誰かクラリッサ呼んでこい。今の時代、せいぜい「兄様」とかだぞ。流石に「兄者」は違う。

「舞い上がってるな」

「でも、本当にあの2人強いんだよね」

「学年最強じゃない？」

「いや、もしかしたら学園最強かも…」

「……………」

「「あ」」

周りの女子生徒達が俺と刀奈を見た。もうこの後言われるだろう言葉が分かったよ…。

「上代君!!」

「更識先輩!!」

俺も刀奈もガシツと肩を掴まれる。ちよつと怖いんだけど。

「2人ともビーチバレーでできるよね!!」

「いや、まあやったことはあるけど…」

「わ、私も、昔ちよつとやったことはあるかな」

「私達の仇を取ってください!!」

「ビーチバレーで大袈裟すぎるだろ、お前ら」

仇つて、たかがビーチバレーで何があっただよ…。

あまりの勢いに2人して引いていると、後ろから肩を掴まれた。

「翔平さん？やってくくださいますわよね？」

「楯無さん、お願いします」

振り向くと、俺の肩をセシリアが、刀奈の肩を鈴が掴んでいた。

「お前らまで、なんでそんなに必死な訳？」

「あの2人が強すぎるんですの!!」

「ムカつくほどにね!!」

興奮気味に言われたけど、よほど悔しかったんだろうか。

というかこれ、やる以外の選択肢ない気がする。

隣の刀奈も、俺の同じように察したらしい。

「どうする？」

「まあちよつとくらいいいんじゃない？みんな私達がやるのを期待しているみたいだし」

「それもそうか…。分かったよ」

俺の刀奈がビーチバレーへの参加を了承した瞬間、周りから歓声が起こった。

すぐさま中央のコートへの誘導されて、ネット越しに絶好調ペアと向かい合った。

「む、次の敵は兄者か」

「絶好調らしいじゃないか。お手柔らかに頼む」

「兄者相手に手加減なんてできる訳ない」

好戦的な表情で俺を見るラウラ。一方で遠慮はしつつも、シャルロットも刀奈に対して宣戦布告している。

そこまで言うのなら、こっちも真剣に相手してやろう。

——ゲーム開始

「ラウラ!!」

「ハアツ!!」

「…ほい」

ラウラの渾身のスパイクを難なく拾う俺。

「オツケー」

ボールの落下地点でトスを上げる態勢を取る刀奈を確認し、俺もスパイクに向けて助走を取る。問題なのは右に上げるか、左に上げるか。

…右

…と見せかけて左だな

完全に裏をかかれたラウラとシャルロットは俺のスパイクを呆然と見送った。

「ねえ、今の2人サイン交換とかしてた?」

「多分、してなかったと思う」

「サインなしで普通に連携できるってどうなの?」

「でも、あの2人だし…」

ハイタッチする俺と刀奈を見て、周りの女子生徒達が何か言ってる気がしない。

刀奈とのコンビでサインなど要らない。お互いの考えが分かるしこれぐらいなら合わせるのは簡単だ。というか、合わされているっていう感覚じゃないんだけどさ。

その後も、俺と刀奈の連携にそれぞれの身体能力が合わさり、ラウとシャルロットの得点をほとんど許さずに圧勝した。

「やつぱり、あの2人が最強だね…」

「デュノアさんとボーデビツヒさんも頑張ってたけど…」

「相手が悪かったよ…」

俺たちのコンビに勝とうと思ったなら織斑先生でも連れてこないと…

「面白そうなことをしているじゃないか、お前達」

来ちゃったよ。

突然の織斑先生の登場に、この場の生徒達が騒然となる。織斑先生の水着姿を見て鼻血を出す女子生徒もいる。

…いや、BLとかNTRを押し付けてくるより、自分達の問題にまとめてくれるんなら、俺は特に何も言わないさ。

「どれ、私達も混ざろうか、山田先生」

「そうですね。折角ですし」

一部の女子生徒に呆れていたなら、いつのまにか織斑先生、山田先生ペアが参戦する流れになっていた。

いつになくやる気だし、織斑先生…。ちょっと怖いんだけど。

「更識、上代。お前達もいいな」

「大丈夫ですけど…」

「いつにも無くやる気ですね、織斑先生」

刀奈もやる気全開の織斑先生に困惑しているらしい。引き攣った笑みを浮かべている。

これは逃げられないな。周りも俺たちの勝負を見たいのか歓声が上がってるし。

まあ、たまにはこういうのもいいか。

「分かりました。やりましょうか、織斑先生」

「言っておくが上代、やるからには全力でこいよ?」

「当然ですよ」

「一度お前達のコンビとは勝負してみたかったんだ。ビーチバレーだが、まあいいだろう」

俺と織斑先生の間でバチバチと火花が散る。

俺は俺で相手が織斑先生だろうが、刀奈とペアを組む以上負けたくはない。織斑先生も織斑先生で己のプライドから負けたくはないだろう。

……ただの負けず嫌いだ。付き合わされる山田先生が可哀想だ。

と思っただけど、案外山田先生も乗り気だからいいか。

俺と織斑先生がバチバチやってる隣で、刀奈と山田先生は談笑していた。温度差が凄いな。

こうして、俺の刀奈ペアと織斑先生と山田先生ペアのガチのビーチバレー勝負が始まった。

「ハアッ!!」

ズドオオオオオオオオオン

砂浜にビーチバレーとは到底思えない音が響き渡り、俺と刀奈はそれを呆然と見送った。

「これで1-0だ」

音の正体は織斑先生のスパイクで、スパイクを決めた織斑先生は挑発するように俺と刀奈にスコアを言ってきた。

いや、人間のスパイクで出てる音じゃないだろ、今の。軽く砂浜挟れてるし。

スパイクを受け挟れた地面を刀奈とならしながら、相手のコートに立つ織斑先生と山田先生を見る。

山田先生は苦笑いだが、織斑先生はドヤ顔でこつちを見ている。

「…これは中々骨が折れそうね」

「…織斑先生ガチになっちゃってるしな」

さて、どうやってあの化け物に勝とうか…。

何とかして織斑先生の体勢を崩して、山田先生にスパイクを打たせるようにしたいけど、山田先生は多分サポートに徹するだろうし…。

結局はあの化け物スパイクを拾うしかないのか…。あれモロに喰らったら骨折れるんじゃないやね？

いや、筋肉あるし何とかなるか…。少なくとも刀奈にあんなものを受けさせるわけにはいかない。

山田先生のサーブでゲームが再開される。

ボールを上げる山田先生の手元を注視していると、ボールを包むよう持ちつつ、回転を加えながら上に上げた。

そのまま、回転のかかったドライブサーブが、俺たちのコートに決まった。

「ドライブサーブかよ…」

「山田先生って、本当に器用ね…」

パワーの織斑先生に、テクニツクの山田先生ね…。この人達良いコンビだよな。

なんて、関心してる場合じゃない!!

再び山田先生がサーブを放つ。こつちに考える隙を与えてくれない。

山田先生のサーブは再びドライブサーブ、しかも俺と刀奈の斜め前、2人のちようど真ん中を狙ってきた。

「おら!!」

手では間に合わないと判断した俺は、足で何とか上にあげた。

サッカーやってたから、手より足の方がやりやすかったりする。

トスを上げるため、俺があげたボールの落下地へと刀奈が移動する。

あの2人の反応速度を超えるには普通に打つても簡単に決まらないよな…。どうするか…。

…よし、やっぱ足でいこう。女子用だったからネット低いし。

あとはトスだけど…刀奈と目線があった。

——足でいく

——了解

刀奈のあげたトスを、セパタクローの要領で打ったスパイクは、コートギリギリに決まった。

「ねえ、今上代君手使わなかったよね…?」

「1タッチ目はまだしも、スパイクの時の動きが…」

「上代君も大概人間やめてるよね…」

あれ、凄いとかわれると思ったら、周りから引かれてる。そこそこの身体能力あれば誰でも出来ると思うんだけどな。

その後は、お返しとばかりに刀奈がドライブサーブを出したり、織斑先生の人外サーブを俺が何とか足で上げたり、人外サーブと思つたことが織斑先生にバレて球威がさらに上がったエゲツないスパイク

が俺の顔面に飛んできたり(何とか避けたらアウトになった)、刀奈とのハイタッチを見た独身2人の顔から笑顔が消えたり、何だかんだあった。

——やあ、何だか楽しそうな事をしているね。

なんだベル、起きたのか。

——翔平の命に危機が迫ってる、みたいな予感がしたんだよ。

ISコアであるベルが、こうして突然話しかけてくる事にもようやく慣れてきた。

といつても、普段はほとんど寝ているらしく、俺からの呼びかけにもほとんど反応がない。時々こうして、突然話しかけてくるのだ。

ちなみに、ベルの存在についてはごく僅かな人間にだけ伝えていく。

出雲の楠姉妹に藤丸さん、槍一郎さんに葵さん、そして刀奈だ。

内容が内容なので、他の人には伝えていない。学園では無く、あくまで更識家の話として、最低限の人にのみ伝えた。

…楠姉妹の興奮が凄まじかったけど。

——生命に危機を感じるビーチバレーってどうなんだい？

俺に言われてもなあ…。

——刀奈ちゃんとかハグでもしてみたら？

火に油注いでどうするんだよ。俺マジで死ぬぞ？

——大丈夫。死なない程度に絶対防御で守ってあげるよ。

そこはしっかり守ってくれよ。ビーチバレーで怪我はしたくないから。

自由時間のビーチバレーで負傷など、いろいろなところで問題になる。

——じゃあ僕はまた寝るよ

お前ほんとよく寝るよな。

——そもそも待機形態が眠っているようなものだからね。じゃあお休み、死なないでね。

さらつと恐ろしい事を言い残して、ベルからの反応は無くなった。相変わらず自由な奴だ。

さて、ビーチバレーに集中しよう。

大人気なさの詰まった一進一退のビーチバレー対決は、現在14—14のデュースとなっている。

このゲームは15点先取の1ゲームマッチなので、先に2点取れば勝ちとなる。正直この2人に連続得点は無理な気がするけど…。

山田先生のサーブでゲーム再開。

ボールを上げる山田先生だが、さつきまでとフォームが少し違っているのを、俺も刀奈も見逃さなかった。

ここにきてさらに奥の手かよ!?

山田先生から放たれたサーブは、やはり先ほどまでのドライブサーブとは異なり、不規則に揺れる軌道で刀奈を襲った。

やっぱりフローターサーブか。

山田先生がこのタイミングで出してきた、これまでとは全く違うサーブを、刀奈が流石の反応でなんとか拾う。

しかし、相手にチャンスボールが渡ってしまい、織斑先生にあっさり決められてしまった。

「山田先生って…」

「本当に器用ね…」

ハイタッチする教師2人を見ながら、俺と刀奈は呟いた。

”器用貧乏”という言葉が頭に浮かんだよ。

試合は結局、そのままの勢いで1点を決めた教師ペアの勝利で終わった。

なんか最後の方は気迫が凄まじかったな。俺も刀奈も完全に引いてたし。

時折ボソツと、「独身の底力を見せてやる」とか「リア充には負けられません」とか聞こえてきたし。

山田先生の口からリア充という単語が出てくるとは思わなかった。怖いよ。

ビーチバレー対決が終わった後は、周りを固めていたギャラリーも含めて解散となった。

それぞれ、泳ぎに行ったり部屋に戻ったりとしているが、みんな口々に「凄かったね」とか「ちよつと怖かった…」とか言っている。やはりさっきの織斑先生と山田先生は、外から見ても怖かったのか。

…怖いよ。

ビーチバレー対決から時間が経ち、夕食の時間となった。

「翔平、席はどっちにする？」

当然刀奈と一緒に食べるのだが、この夕食では座敷席かテーブル席を選べるようになってる。

さすが女子校か、座敷席では正座で座るのがマナーになっている。教養を育むっていう観点からするといいんだろうけど、あくまで日本の文化だからなあ。

別に俺は正座が苦手っていう訳でもないが、刀奈と相談し夕食は静かに食べたいのでテーブル席を選択した。

一夏は座敷の方にいったから、そっちはどうせ騒がしくなるだろ。

刀奈と一緒にテーブル席に移ると、簪と本音の姿もあった。

俺達と同じく夕食は静かに食べたいので、比較的人数の少ないテーブル席を選んだようだ。

テーブル席を選択したことによって、俺たちはゆっくりと絶品の料理を楽しむことができた。

更識家がここを気に入ってるのは、料理が格別っていうのが大きいんだよな。

「やっぱりこの料理は美味しいわね」

「ほんと、最高だよ」

「豊も、話だけは聞いてるみたいだから、食べてみたいって言った」

簪は豊とうまくやってるようだ。

更識家の粋を使って、また今度2人で来れるように調整してやるか。

いつものように、豊との話をネタに本音が簪を弄ってるのを見つづ、本音にも早く良い相手が見つつかれば良いのになあと思う。

といっても、学園で他にいる男といえば一夏ぐらいか。あとは、轡木さん……、うん犯罪臭しかしいな。

そういえば、一夏の恋愛相談はどうするかなあ。昼間もちよくちよく様子を見てみたけど、表面上はいつものようにしつつ、内心あーだこーだ考えてるようだった。

恋愛については思う存分悩んでもらって構わないんだが、このままの状態だと明日起きるであろう福音戦が心配で仕方ない。

食べ終わった後も自由時間だし、風呂入るときにでも話聞いてやろう。どうせ団体行動大好きな一夏のことだ、風呂行くときは誘ってくるだろう。

夕食を終えて、自由時間となった。

友人と集まって駄弁ったり、旅館の設備にある卓球台を利用したり、売店で土産を選んだり、各々好きな事をしている。

そんな中俺は、刀奈と共に館内を巡回していた。

学年の中では、どうか学園の中ではかなり顔も知れ渡っている事もあり、俺たちに気づいた生徒達は、声をかけてくれる。

「あ、上代君と楯無会長だ」

「上代君、また自由時間に楯無会長の見回り手伝ってるの？」

「ラブラブだね〜……コーヒー飲みたい」

「お疲れ様〜」

「ビーチバレー見たよ!!凄かったね」

「さすがに学園最強夫婦も織斑先生には勝てなかったか」

「山田先生も凄かったよね」

「山ちゃん器用貧乏……」

話を聞いていると、どうも昼間のビーチバレーを観ていた人が多いみたいだ。

器用貧乏は言っちゃいけない。俺も確かに思ったけど、山田先生は意外と気にしてるから。

話かけてくる生徒達と話しつつ巡回を続けていると、景子さんに出会った。俺達を見つけた瞬間、ニヤニヤしながら近づいてきたので無視して逃げたかったが、急な話にも関わらず部屋を増やしてもらった件もあるので、渋々諦めて話すことにした。

「こんばんは、翔平君、楯無ちゃん」

「どうも」

「こんばんは」

事もなく話しかけてくる景子さんに対して、応答する俺と刀奈。どうせ昼間言ってた”後で色々聞かせてもらう”の件だろう。

「自由時間なのに楯無ちゃんの仕事に付き合ってるという話は本当だったのですね」

”自由”時間ですのぞ」

「話は本当だった、というのは？」

当たり前のように言い返す俺と、景子さんの言葉を聞き返す刀奈。

「IS学園の生徒さん達がお話ししてるのを、たまたま耳にしました。お二人共、有名人ですね」

「ああ、なるほど…」

噂話がすぐ広がるのは、学園の外でも変わらないらしい。

「改めて、おめでとうございます。翔平くん、楯無さん」

「ありがとうございます」

景子さんの祝福の言葉に、俺と刀奈は揃って感謝の言葉を返した。

何に対する祝福かなど、言わずもなだろう。

「貴方達もようやくお付き合いを始めたのですね。昔から貴方達のことを知る者としては、色々と思うところがあります」

「た、例えば？」

「ようやくですか…とかですね。散々言われてるとは思いますが」

仰る通り、これまで散々言われてきましたよ…多方面から。

更識家関係者やら政界の方々やら和佳奈さんやら…。

「色々と聞きたい話がありますが…とりたいところですが、実は和佳奈から既に話は聞いています」

「いや、まあそんな気はしてましたが」

景子さんと和佳奈さんはプライベートで仲が良い。もう大親友と言えるレベルだろう。

もつと言えば生前の京子さんともとても仲が良かった。

それぞれ立場や仕事があるのでそこまでの頻度では無かったが、それでも定期的に食事や、休暇を合わせて旅行に行ったりしていた。

何年経っても変わらない、同性の親友って良いものだと思う。

なのでこの3人は、1人が知っていることは3人とも知っている

思っておいた方がいい。流石に仕事の話は話せない内容もあるが、プライベートの話だとまず確実に共有されている。

この3人を前に、プライベートや個人情報など関係ない。まあ3人の共通の知人の話に限るが。

「新婚旅行はうちを使っているんですよ?」

「話が飛躍しすぎじゃありません?」

「あ、やはり海外の方を考えてますか?」

「そういう話ではないです」

まだ付き合っただけなりなんですが。婚約はしてるけどさ。俺達まだ高校生ですよ?」

ほら見ろ、隣の刀奈が顔真っ赤にしてるじゃんか。可愛いなちくしよう。

「でも、ゆくゆくは結婚されるのでしょうか?」

「そりゃ勿論」

むしろ刀奈以外と結婚するなんて考えられない。というか刀奈と別れるとか考えられない。

もし仮に別れを切り出されたら首吊って死ぬまである。

即答で結婚する気であることを答えると、刀奈がより顔を赤くしながら、俺の脇腹を抓ってきた。

照れ隠しだと分かるので微笑ましいが、抓る力が割と強いから普通に痛い。

「楯無さんも、結婚されるおつもりなのでしょうか?」

「え!? いや、はい…それは、勿論…:そうです、けど…」

俺の方に攻撃が集中していたので、急に振られるとは思ってなかったのだろう。刀奈があたふたしながら返した。

結婚されるおつもりなんですね、めちゃくちゃ嬉しいです。

心の中でガッツポーズしてはしゃぐ俺と恥ずかしさが頂点に達したのかさらに顔を赤くして俯いてしまった刀奈を見て、景子さんはふっと笑っていた。

この人、揶揄い癖が凄いな。

「しかし、こうしてみると貴方達もやはり子供ですね。更識としての

普段のお二人を見てみると、凛々しい姿が目立ちますので」

「実際子供ですからね。立場がある以上甘えるわけにはいかないですが」

復活した刀奈が応えると、一度景子さんから視線を俺に移した。

「支えてくれる人が隣にいるので、頑張ることができます」

俺に対してニコツと笑みを浮かべる刀奈と、今度はこっちが顔を赤くしてしまう俺。

それを見て満足そうに頷く景子さん。

「元より心配していませんでしたが、その様子なら大丈夫そうですね。あとごちそうさまです」

惚気に対するその一言はこっちが恥ずかしいからやめてほしい。今はそれ以上に刀奈の言葉で舞い上がってるので大丈夫だけど。

「では私は仕事に戻ります。お二人共、忙しいでしょうけど、時間が有ればまたプライベートでいらしてください。特別に景色が最高の部屋を用意しますよ」

「ありがとうございます」

「その際は連絡させてもらいます」

最後に会釈して、景子さんは仕事に戻っていった。

その後を見回りを続け、刀奈が担当の範囲、時間帯の見回りが完了した。

「一旦部屋に戻って風呂行くか」

「そうね」

普段は寮で、風呂の男性陣の利用時間が決められているが、今日はそもそも男湯と女湯が分かれているので、時間を気にせず利用できる。

女子は人数が多いのでクラス別である程度利用時間を区切っているが、刀奈は教員枠なのでどの時間でもOKらしい。

刀奈と話しながら部屋に戻ってくると、そこには異様な光景が広がっていた。俺たちの隣の部屋、織斑姉弟の部屋の前だが。

「お前ら何やってんだ」

「「「「ツツ?!?!?!」」」」

織斑姉弟の部屋の扉に耳を押し当てて、部屋の中の音を聞き取ろう

と必死になっているヒロインズ5人に声をかけると、全員ビクツとして慌ててこちらに振り返った。

「ちよっ!! 静かにして!!」

「気づかれるだろう!!」

すごい小声で言ってくる鈴と箒。

おい、距離が近い。後ろに刀奈いるからやめて、お願いだから。

とりあえずなんでこんな馬鹿なことしているのか聞いてみると、曰く部屋の中から織斑先生の甘い声が聞こえてくるとか。

促されて俺も扉に耳を押し当て聞いてみると、微かにだが織斑先生の声が聞こえた。けどこれ、確かに似てるけど喘ぎ声ではないか？

…あ、分かった。

「上代です。入っていいですか？」

扉から耳を離し、躊躇なくノックして中に声をかけた。

後ろの5人が俺の行動に驚いてパニックってるが知らん。

どうせ一夏がマッサージでもしてるんだろう。前にマッサージが得意で織斑先生にも家でよくしていたって言ってたし。

第一こんな時間から、自室とはいえ他の学生もいる施設で、しかも姉弟でおっ始める訳ないだろう。

…姉弟だけど大丈夫だよな？

『ああ、問題ない』

ほら、普通に中から織斑先生の返答があった。

致してると思い込んでるヒロインズが、普通に返答があったことでギョツとしている中、俺は一言声をかけて扉を開いた。

「お疲れ様です。マッサージ中でしたか」

「ああ。一夏にマッサージしてもらった機会も久々だったからな。お前もどうだ？腕は保証するぞ」

「今から風呂行くんで、その後時間が有れば頼もうかなと思います」

え、マッサージ？という顔をしているヒロインズを尻目に俺と刀奈は部屋の中に入る。

ヒロインズの反応とマッサージをしていたという状況から、こいつらが何を勘違いしていたかある程度察したらしい刀奈は苦笑している。

可哀想だから話は広げないけど。多分完全オフモードの織斑先生が揶揄ってくるだろうし。

正直、刀奈と寮で色々やってるから、あんまりその手の話は振られたくない。ボロが出るとまずい。

「それで、何か用か？」

「今から風呂行くけど一夏はどうするかと思ひまして。一夏、どうする？」

「俺も行くよ」

という訳で野郎2人は必要なものを持って、大浴場へと向かうことになった。：男2人で大浴場使わしてもらえるのって凄い贅沢だな。

「楯無はどうする？」

「私もお風呂行こうかしら」

「まあ待て更織」

俺が風呂に行くということ、刀奈もそれに合わせようとしたところ、織斑先生から待ったが入った。

「折角の機会だ。彼氏持ちのお前からこの小娘どもに話でも聞かせてやれ」

そう言いながら、ごく自然な動作で冷蔵庫から缶ビールを取り出し、それを口にした。

：いや、教員が普通にアルコール飲んでいいのかよ。

「織斑先生、生徒の前でお酒は流石に：」

「今回お前の同行を特例で認めてやったんだ。これくらい大目に見てくれ」

刀奈の言葉にも平然と返す織斑先生。この人お酒好きなんだな。

織斑先生の言動に呆気にとられたヒロインズだったが、いろんな意味で先輩である刀奈からアドバイスが貰えると思って、キラキラした瞳で刀奈を見ている。

「……少しだけなら」

最終的には、刀奈が折れて了承した。

一夏は終始、ヒロインズがそこまで懇願の眼差しを向けている理由が分からないのか、首を傾げて不思議そうにしていた。お前に関する話なんだけどな。

女性連中は恋バナするそうだし、野郎2人も昼間の話の続きでもしますかね。

「ふいいいいいい」

冒頭から何とも気の抜けた声が出てしまったが、まあ仕方ない。良い旅館の良い温泉、その大浴場を今は俺と一夏の2人で貸切状態。

昨日まで、この臨海学校に向けて爆速で生徒会、更織の仕事を処理していたので疲れも溜まっている。昼間のビーチバレーが原因の一端になってるけど。

とまあ身体的疲労がそこそ溜まっている状態でこの温泉だ。湯船に浸かった瞬間にだらしない声を出しても仕方ないだろう。

隣で俺と同じように気の抜けた表情になっている一夏しか聞いていないわけだし。

「これだけ広い温泉を貸切で使わせてもらうのも申し訳ないな」

「去年の臨海学校までは、女子学生しかいなかったから一時的に男湯が無くなってたらしいしな」

昨年までは、元は男湯と女湯、2種の大浴場を選べたそうだ。

IS学園の臨海学校が行われるこの2泊3日は貸切だし、学生も教員も女性だけだからこそできたこと。

今回に関しては俺ら2人の男がいる。

部屋風呂でも良かったが、大浴場を使っていると言われてたからそのご厚意に甘えさせてもらった。ここの大浴場は昔から気に入ってるし。

女子生徒達が使える大浴場が片側だけになったことで、クラス毎の入浴時間など、色々調整してもらった教員の方々にも感謝を…。

「そういえば一夏、お前昼間は何してたんだ？」

「俺か？翔平達のビーチバレーが終わった後、クラスのみんなとビーチバレーとかしてたぞ」

俺と刀奈、ビーチバレーが終わった後は部屋に戻ったんだよな。いろんな意味で疲れたから…。

簪と本音も合流して駄弁ってた。

一夏達は俺達とは違ってしばらくは浜辺に残っていたらしい。
ビーチバレーと言ったが、ペア戦ならこいつのペアは誰になったの
かだろうか…。

……ペア決めで一悶着あったであろうことは容易に想像できた。

「それでさ翔平、昼間の話の続きなんだけど」

「ああ、『人を好きになる気持ちとは』だっけか？」

無言で頷く一夏。

正直、昼間にこの話を聞いて時間は経ったが、未だに驚いている。
あの一夏の口からそんな言葉が出てくるなんて、誰が想像できよう
か。

ただ、刀奈が言ってた通り、良い傾向なんだとは思う。

「そもそも、なんでまた急にそんな話が出てきたんだ？」

昼間に本人から話を聞いてから疑問に思っていた。

原作の一夏であつたり、これまでの一夏だつたりを見ると、愛
やら恋やらなんて言葉は出てきそうにもない。

何かしらきっかけがあつて、あれこれ考えだしたんだろうけど、そ
のきっかけが俺には分からなかった。

「翔平と楯無さんを見ててさ…」

おや、どうやら俺達の影響のようです。

「俺はさ、これまで人を好きになるとか、恋人を作るとか、そこら辺が
よく分からなかったんだけど。だけど、普段の翔平と楯無さんを見て
ると、凄く楽しそうに見えて」

「それで、実際に人を好きになるとはどういうことなのか、考えるよう
になったと」

またも、無言で頷く一夏。

「俺には友達と仲良くするのが、翔平と楯無さんみたいにするのと、違
いが分からないんだ。でも、翔平と楯無さんのやり取りとかを見て
て、友達同士のやり取りとは違うっていうのは何となく分かった」
「それで、実際の当事者になる俺に聞いてきたと」

まあ学内でこうも目立ってるんだし、一夏がそれで疑問に思うのも分からなくはない。

「人によって考え方も価値観も違うって話は、昼間に話したよな？」
「おお」

「まず前提がそこにあるんだが、『人を好きになる気持ち』なんてものは正直言葉で説明するのは難しい」

「そうなのか……」

「おいおい、そう落ち込まないでくれ。なんだか申し訳なくなっただけだよ。」

「この話に関しては、多分他人がどうのこうの説明してもあんまり効果はないと思うぞ」

「そういうものなのか？」

「俺には俺の価値観があつて、一夏には一夏の価値観がある。恋人に求めるものも異なれば、女性の好みだって違ってくる。俺が楯無を好きになった話を説明したところで、それはあくまで俺の話であつて、一夏に当てはまるかはわからない」

「転生する前から好きでした、なんて言ってもまず伝わらないだろうしな。」

「結局のところ、好きっていう感情は一夏自身が気づく必要があるんだ」

「それがよく分からないから相談してるんだが」
「焦る必要はないと思うぞ」

「いつか、自分はこの人が好きなんだ、という事に気づく日がくるかもしれない。多分、それで見つけた自分の感情は、嘘偽りの無い真実だろうから。」

「たった1人、この人だけは他とは違うと。自分の全てを捧げて、ずっと一緒にいたいと、そう思えるような人が見つければ、それはきつと好きっていうことだと思う」

「翔平にとってそう思ったのが楯無さんだったのか？」

「昔から、そしてこれからも、俺にとっては楯無だけだよ」

「なんか無性に刀奈に会いたくなってきた。風呂からあがれば会え

るんだけど。

その後、それでももつと具体的な話を教えてくれとせがまれたので、とことん惚気話を聞かせてやったら、温泉からあがるころには一夏はフラフラになっていた。

「翔平と楯無さんの話を、一人で聞くんじゃないかなかった…」

「お前が聞いてきたんだろうが」

風呂あがりのビールが飲めるはずもなく、一夏とコーヒー牛乳を飲んでから2人で部屋まで戻った。

部屋に戻ると、顔を真っ赤にしている刀奈とニヤニヤしてる織斑先生、尊敬の眼差しで刀奈を見ているヒロインズと、なんとも言えない雰囲気となっていた。

あれやこれや聞かれたんだろうな…。

「お、旦那が帰ってきたぞ」

「織斑先生、もう許してください…」

ああ、これは恥ずかしすぎて許容量オーバーしてるやつだ。頭から湯気見えるもん。

俺たちが帰ってきたことで、今度は女性陣が温泉に向かうことになった。刀奈は1人で行くとしたようだが、ヒロインズに捕まっ一緒に行くらしい。

あんまり揶揄わないであげてね？あとで俺に返ってくるから。

「翔平は今からどうする?..」

「俺は自分の部屋に戻る。ちよつとやる事あるし」

「分かった」

一夏と織斑先生に一言伝え、俺は自分の部屋に戻った。

ちらつと見たけど、ビールの空き缶が既に4、5缶あったんだけど。織斑先生ごんだけ酒持ち込んでるんだよ。

まあ業務に影響無いのであれば問題ないと思うけど。ちよつと

顔赤いけど酔ってるふうには見えないし。ニヤニヤしてたけど。

……あの人酒強いんだ。

部屋に戻って、俺は自分のスマホとは別の、更織としての専用のスマホを取り出した。

「お疲れ様です、仁さん」

『お疲れさん』

通話をかけた先は仁さん。今刀奈から依頼されている任務について状況確認をしたくて、一足先に部屋に戻ってきた。

「状況はどうですか？」

『予定通り、銀の福音の試験運用が明日行われるようだ』

『場所と時間は？』

『ハワイ沖だ。時間はそっちの時間で朝8時からだな』

今回の仁さんの任務は、アメリカとイスラエルが共同で開発したIS、銀の福音に関する調査任務。

軍用ISということで、その機体性能含めて、更織家としてある程度情報を掴んでおこうということで、仁さんが現地に派遣された。

そして、原作通りであれば、明日の試験運用中に暴走することになる。

何かの因果で、原作とは異なり試験中止になってくれたらと思ったが、現実はその甘くは無かった。

『今のところは、特におかしなところはないな。2国間の共同開発ってことだから、通常よりも張り切ってるようにも見えるが』

「まあ今回やらかしたら影響が大きすぎますからね」

実際、どうしようもない天災の影響で、大いに影響を受けることになるわけだが。

『現時点での情報はまとめてメールで送付済みだ』

「了解です。あとで刀奈と確認しておきます」

ふうと一息ついて、電話口からジツポーでタバコに火をつける音が聞こえた。あ、やばいな面倒なやつだ。

『それで、一足早い新婚旅行はどうよ』

「ただの学校行事です、じやお休みなさい」

「待てよ」という仁さんの言葉を無視して通話を強制的に切った。

仁さんといい、双子の馬鹿どもといい、療養中の元氣親父といい、この手の話になると面倒臭くなる連中が更織家関連には多すぎる。

もういつそレポート形式で定期的に報告書作ってやろうか。

…やる事増えるから普通に嫌だな。

俺と刀奈の話になると脳内お花畑になる連中がどうにかならないかなと考えつつ仁さんから届いたメールの内容に目を通していると、刀奈が温泉から帰ってきた。

…なんでこう、風呂あがりって色気が出るんだろうか。

頭にタオルを巻いてるあたり、温泉の方のドライヤーは使わずに部屋に戻ってきたらしい。

「疲れたわ…」

「お疲れさん」

「あの子達、恋愛話にガツガツしすぎでしょ」

相当質問攻めにあつたようで、刀奈はお疲れのようだった。

まあ単純に人数が5人だからな。一夏1人の話を聞いていた俺とは訳が違う。

部屋に備え付けのドライヤーを取り出して、刀奈の髪の毛を乾かしながら、先ほどの仁さんからの報告内容を伝えた。

「特殊射撃による広域殲滅を目的とした機体、軍用ISだから当然だけど、中々に物騒ね」

「そんなもの出番が無いことが1番なんだけどな」

ISという存在がある以上、自衛のための軍事力というのは必要なのだろう。ただし、ISの本来の目的がそこにあるのかは疑問だが。

「翔平は明日の試験運用で、何かあると思う？」

「…：篠ノ之束が、今日の時点で妹の筈に専用機を受け渡してない以上、明日のタイミングで受け渡す可能性は高い」

「それで、ただ受け渡して終わりとはいかないだろうと」

「終わってくれるに越したことはないんだけどな。同じタイミングに、わりと距離が近いハワイ沖で軍用ISの試験運用なんて聞いた

ら、何かあるのかと思ってしまう」

「篠ノ之博士が遠隔操作すると?」

「そこまではしないと思うが、相手がI Sの開発者な時点で、何をやってきてもおかしくないんだよな」

はああ、と2人でため息をつく。

あくまで憶測の話なので、アメリカ、イスラエルに試験運用の中止を依頼することもできず、対策のしようがない。

一応、仁さんからの報告で開発時点での銀の福男の機体情報は、俺も刀奈も把握している。

……さらつと言ったけど、国の開発データ取ってくる仁さんって、やっぱりおかしいと思う。

「まあ、今から悩んでもどうしようもないし、心づもりだけしておこう」

「そうね。あ、さつき仁さんからチャットで『お前の旦那は冷たいな』って連絡来てたんだけど、何かあったの?」

「電話で報告終わった後に面倒な質問されたからブチ切りした」
「なるほど」

普段の仁さんと俺のやりとりを見ている刀奈は、それだけである程度察したらしい。

苦笑いしながら仁さんに返信を送ったようだ。

『私には優しいですよ?』って返しておいたわ」
「ちよつと仁さんが可哀想と思った」

本人に言ったら調子に乗るから言わないけど。

「そう言えば、一夏君の恋愛相談はどうだった?」

「悩んでたけど、そこまで焦る必要もないとは伝えたよ」

「そもそも、どうして急に考え始めたのかしら」

「俺と刀奈を見ていて思ったんだとき」

それを聞いて刀奈は納得したようで、苦笑していた。

「…良い影響を与えた、と考えておきましょう」

「そうだな」

そのあとは、たわいも無い話をして、明日朝からの刀奈の予定を再確認して、2人で布団に入った。

2つの布団の位置が異様に近かったのは、景子さんの仕業だろうな。

枕の下にあった四角い袋をゴミ箱に捨てて俺達は眠った。

ゴミ箱に捨てるときに刀奈がちよつと残念そうな顔をしていたのは見なかったことにした。隣の部屋に織斑先生いるからね？

番外編／短編

平凡な日常

どこにでもある平凡な日常。

俺と刀奈の日常は他の人とは少し違うのかもしれない。

AM 5:30

朝目が覚めると、隣で刀奈が眠っている。

もう同じベッドで眠ることが当たり前になっているので特に疑問は無い。

ただ、隣で眠る彼女の寝顔を、1日の初めに眺めることができるというのは、中々に幸せなものなんだろう。

「……んっ」

しばらく寝顔を眺めていると、刀奈が目を覚ます。俺達が普段起きる時間帯は同じだ。どちらが先に目を覚ますかは日によってまちまちだけど、後に目が覚める側もそう時間が掛からないうちに目を覚ます。

「おはよう、刀奈」

「ん……、おはよう翔平」

俺の彼女さんは寝起きのタイミングが非常に無防備になる。

更織関係の時は寝起きでもすぐに仕事モードに入るの、そんなことは全く思われないのだろうが、こうしたプライベートの時間ではふにやふにやの状態になっている。

本人曰く、”最も信頼できる人の隣で眠っているから”だそうだ。

：面と向かって言われると恥ずかしいが、嬉しいものは嬉しい。

この状態の寝起き刀奈を見たことがあるのは、俺と虚、あとは両親ぐらいだろうか。妹の前では背伸びしようとする刀奈は、簪の前でもこの姿は見せないようにしているようだ。

以前、いつもの5人で話していた際、俺と虚の証言から簪がすごく興味を持っていた。普段凛々しい姿が多い姉の、イメージとは正反対

の姿は想像できないのだろう。

俺と刀奈の部屋に、朝こっさり侵入してみようかと考えたそうだが、朝からバカツプルがイチャイチャ寝ているところは見たく無い、とのことで断念していた。

A M 6 : 0 0

起きてから30分、顔を洗うなどして目を覚ました後は、プロテインを飲みつつ2人で今日の予定の確認を行う。更織関係で何かトラブルがある場合はもう少し長引くが、基本的には30分程度だ。

その後、2人とも着替えて外に出る。

朝に30分程度体を動かすのもう日課になっている。

メニューはランニングが基本だが、日によつては2人で組手を行ったり、カポエイラのトレーニングを行ったりする。

A M 6 : 4 5

トレーニング後は部屋に戻り、順番にシャワーを浴びる。極々稀に2人で入ったりするが、あくまで時間が無かったりしたときが理由であつて他意はない。

シャワー後は、先に浴び終わつた方が、後からシャワーを浴びた側の髪をドライヤーで乾かしたりもする。

A M 7 : 3 0

制服に着替え身支度を整えて、食堂に移動して朝食を食べる。

俺も刀奈も朝はご飯派だけど、たまにパンを食べたいと思う時もある。

ちなみに、俺は朝からお前それどころの野球部だよ、と言われそうな量を食べる。昔から体作りはしていたし、任務によつては昼食べれないなんてこともあつたので、朝からがつり食べることが習慣になつてしまった。体を動かした後なので普通に食べれる。

食堂スタッフの皆様には入学当初かなり驚かれたが、今では俺用に特盛の朝食を用意しておいてもらえるので有難い。

AM 8:00

朝食後、部屋に戻って授業の準備を行うのと同時に、部屋の掃除をパパッと行う。俺が掃除を行う間に、刀奈は2人分の弁当を用意してくれる。大体は前日の夜に準備してくれているのでそこまで時間がかからない。

刀奈の弁当の準備が整ったタイミングで、2人で教室に移動する。ここまでは、平日の基本的な朝のルーティンだ。

PM 12:00

午前中の授業を終えて、刀奈と合流して昼食となる。食べる場所はその日によって変わるが、大体は生徒会室で食べている。食堂で食べてもいいのだが、更織関係の情報共有を行ったりすることもあって、生徒会室がうってつけなのだ。

この時は簪や本音、虚も一緒に食べることもあるが、ほぼ毎日弁当の俺らと違って、他3人は学食を使うこともあるので、2人きりになることの方が多い。

稀に一夏と一緒に食べないかと誘われることもあるが、ヒロインズの皆さんの圧があるので、生徒会とかを理由に出して丁重にお断りしている。

セシリアだったり鈴は、刀奈に懐いていると言えればいいか、仲が良いようにたまに生徒会室まで来て食べている時もある。刀奈は織斑先生レベルとまではいかないが、同性にそこそこモテるようだ。

ガールズトークをするからと生徒会室から追い出されたときは、泣きながら1人で弁当を食べた。

PM 4:00

鈍ってはいけけないので、日によってはアリーナの使用許可をもらって、刀奈と模擬戦をやったりもするが、基本的には放課後は生徒会の仕事で潰れる。ひたすら俺と虚が事務作業を行なって、刀奈は生徒会

長判を押して回るようになる。

PCが1台しか無いので、もう1台追加したいなと思っているが、予算的にまだ先になるようだ。

ただ、俺には最近非常に強力な助っ人が誕生した。

よしベル、この会計報告が問題ないか確認しておいてくれ

——ISコアに事務作業させるってどうなのさ？

会計報告の確認など、単純な数字の部分はベル様に手伝ってもらえることができるようになった。

なんだかんだで手伝ってくれる俺の相棒は、非常に頼りになっている。

ベルが確認しておいてくれる間に俺は別の作業を行えるので、以前と比べて遥かに効率的になった。

PM7:00

生徒会の仕事が一と段落した後、一旦部屋に戻ってから食堂に移動して夕食をとる。この時は昔から変わらず、いつもの5人で揃って食べることになる。全員が食べ終わった後も、しばらく駄弁っていることが多い。

昔から変わらないこの時間は、心を落ち着かせれる貴重な時間だ。

食堂もいつまでも開いているわけではないし、スタツフの皆さんも片付けがあるので、遅くならないうちに解散となる。

PM9:00

部屋に戻った後は、今度は更織の仕事となる。秘匿情報が多いので紙で印刷するわけにもいかず、俺と刀奈は各々PCで作業となる。

仁さんや葵さん、藤丸さんとオンラインで打ち合わせを行う時もある。

メールのやり取りより電話の方が手っ取り早いし、複数人で共有する場合はオンラインでの打ち合わせが手っ取り早い。

ちなみに打合せ時のネットワーク回線は、藤丸さん監修の基でガチガチにセキュリティが固められている。

国防並みのファイアウォールガチガチ環境でありながら、学園からでもアクセスできるようにしてもらえた出雲社には頭が上がらない。

このクオリティって製品化したら一儲け出来そうだよなあと思うが、藤丸さんはそんなこと微塵も考えてないようだ。

更織の仕事は2〜3時間かかることが普通なので、俺も刀奈も授業での課題は免除されている。その分試験等では結果が求められるが。

AM0:00

更織の仕事を終えた後は、俺は筋トレをしたり、刀奈は翌日の弁当の準備をしたりする。2人それぞれのタイミングを見計らってシャワーを浴び(朝と同様にたまりに2人で)、髪を乾かしながら2人でしばらく談笑する。ここでは極力更織だったり生徒会の話は出さず、気を抜いて2人で話せるテーマに限っている。寝る前に重苦しい話もしたくないし。

AM1:30

2人一緒にベッドに入り、恒例となつたおやすみのキスをして就寝となる。昼間忙しすぎて基本的にすぐ眠れる。